筑波大学博士（言語学）学位請求論文

フランス語の罵倒表現に関する言語学的研究

楊　鶴

2020 年度

目次

序章 1

第 1 章　フランス語における罵倒表現の多様性 6

1.1　Edouard（1967）における罵倒表現の区分 6

1.1.1　第 1 区分「人類」 9

I　人体に関する罵倒 9

a　肛門と腸 9

b　泌尿生殖器 11

c　頭・鼻・目 12

II　身体的外見 13

a　一般的外見 13

b　25 歳以下 15

c　25 歳から 35 歳 16

d　35 歳以上 16

III　病気と身体障害 17

a　男性的特徴の欠陥 17

b　各種疾患 17

IV　精神疾患 17

a　精神異常 18

b　知的能力の衰退 18

1.1.2　第 2 区分「自然」 19

I　動物に関する罵倒 20

a　脊椎動物 20

b　無脊椎動物 23

c　太古の動物相 25
d　神話の動物相 25
II　植物に関する罵倒 26
III　鉱物に関する罵倒 28
IV　液体に関する罵倒 29
V　ガスに関する罵倒 29
1.1.3　第 3 区分「社会」 29
I　家族に関する罵倒 30
II　貴族に関する罵倒 30
III　美食に関する罵倒 31
IV　農業に関する罵倒 33
V　家事に関する罵倒 34
VI　呼称に関する罵倒 35
VII　宗教に関する罵倒 36
VIII　職業に関する罵倒 37
1.1.4　第 4 区分「風習・公衆道徳」 40
I　7 つの大罪 40
II　汚名に関する罵倒 42
1.2　Edouard（1967）の記述の特徴 47

第 2 章　フランス語における罵倒表現の形式と表現類型 51
2.1　Edouard（1967） 51
2.1.1　Injure（罵倒）の意味解釈 51
2.1.2　Injure（罵倒）の表現形式 54
2.2.　Guiraud（1976） 58
2.2.1　Gros mots（下品な言葉） 59
2.2.2　Injure（罵倒） 61

2.2.3　Juron（ののしり） 65
2.3　Rouayrenc（1998） 69
2.3.1　神に関する表現 69
2.3.1.1　Dieu（神）を伴う表現 69
2.3.1.2　Dieu（神）の婉曲表現 72
2.3.2　性に関する表現 75
2.3.2.1　女性器 75
2.3.2.2　男性器 76
2.3.2.3　性行為 78
2.3.2.4　同性愛者と売春婦 80
2.3.3　排泄物に関する表現 80
2.3.4　Rouayrenc（1998）における罵倒表現の表現形式 83
2.3.5　Rouayrenc（1998）における罵倒表現のタイプ 86
2.4　Larguèche（1983） 91
2.4.1　罵倒表現の伝達過程 92
2.4.2　3 つの伝達パターンにおける罵倒効果 95
2.5　Lagorgette（1994, 2003, 2006） 105
2.5.2　Lagorgette（2003）：« conditions de félicité »（適切性条件） 107
2.5.3　Lagorgette（1994）：« cohésion du groupe »（集団の結束性） 110
2.5.4　Lagorgette（2006）：insulte の特徴とタイプ 114
2.6 まとめ 119

第 3 章　フランス語における各罵倒タイプの特徴と関係性 122
3.1　「罵倒」を表す語彙 122
3.2　Injure（罵倒）と insulte（侮辱） 122
3.2.1　Injure（罵倒） 122
3.2.2　Insulte（侮辱） 124

3.2.3　Injure（罵倒）と insulte（侮辱）の関係性 125
3.2.4　Anscombre（2009）における罵倒タイプ 127
3.2.4.1　Injure（罵倒）と insulte（侮辱）の相違点（1） 128
3.2.4.2　Injure（罵倒）と insulte（侮辱）の相違点（2） 132
3.2.5　Rouayrenc（1998）における injure（罵倒）の考察 134
3.3　Juron（ののしり）と blasphème（冒涜） 137
3.3.1　Juron（ののしり） 137
3.3.2　Blasphème（冒涜） 139
3.3.3　Juron（ののしり）と blasphème（冒涜）の関係性 140
3.3.4　Larguèche（1997）における juron（ののしり）の考察 141
3.4　Gros mots（下品な言葉） 144
3.5　罵倒表現の伝達過程の再検討 148

第 4 章　話し言葉における merde の意味機能 152
4.1　はじめに 152
4.2　先行研究 153
4.2.1　Edouard（1967）における merde の考察 154
4.2.1.1　merde-exclamation（感嘆詞的 merde） 156
4.2.1.2　merde-substantif（名詞的 merde） 161
4.2.2　Guiraud（1976）における merde の考察 164
4.3.　merde の意味考察 166
4.3.1　merde の名詞的用法 167
4.3.1.1　「糞」を意味する merde 168
4.3.1.2　比喩的に用いられる merde 169
4.3.1.3　侮辱的に用いられる merde 170
4.3.1.4　成句で用いられる merde 171
4.3.2　merde の間投詞的用法 174

4.3.2.1　間投詞としての merde の意味機能分析 175
4.3.2.2　評価を表す merde 180
4.3.2.3　会話構築における merde 182
4.3.2.4　苛立ち場面に用いられる merde 184
4.3.3　祈願として用いられる merde 186
4.4　まとめ 189

第 5 章　話し言葉における putain の意味機能 190
5.1　はじめに 190
5.2　先行研究 191
5.2.1　Edouard（1967）における putain の考察 191
5.2.2　Rouayrenc（1998）における putain の考察 193
5.3　putain の意味考察 196
5.3.1　「売春婦」を意味する putain 196
5.3.2　比喩的に用いられる putain 197
5.3.3　成句で用いられる putain 198
5.4.4　putain の出現位置 201
5.4.5　間投詞としての putain の意味機能分析 204
5.4.5.1　話し手に関わる putain 205
5.4.5.2　事態に関わる putain 209
5.4.5.3　評価に関わる putain 212
5.5　putain と merde の比較 215
5.5.1　putain と merde の共通点 216
5.5.2　putain と merde の相違点 220
5.6　まとめ 224

第 6 章　罵倒表現 « Espèce de N ! » の意味機能 226
6.1　はじめに 226

6.2　先行研究 227
6.2.1　Edouard（1967）における « Espèce de N ! » の考察 227
6.2.2　Rouayrenc（1998）における « Espèce de N ! » の考察 229
6.2.3　Anscombre（2009）における « Espèce de N ! » の考察 233
6.3　« Espèce de N ! » の意味考察 236
6.3.1　「種」を意味する espèce 237
6.3.2　近似表現 une espèce de N の特徴 239
6.3.2.1　une espèce de が N にもたらす「変な」性質 248
6.3.2.2　une espèce de N における修飾限定 249
6.3.3　« Espèce de N ! » の意味機能分析 250
6.3.3.1　N が罵倒表現の場合 251
6.3.3.2　N が普通名詞の場合 256
6.3.3.3　N を伴わない « Espèce de ! » 259
6.4　まとめ 261

結論 263

参考文献 267

コーパス 271

参考資料 273

序章

本論文では、フランス語に見られる「罵倒表現」を取り上げ、その種類やタイプを観察し、また、罵倒表現が持つ意味的特徴と発話機能を考察することを目的とする。

一口に「罵倒表現」といってもさまざまな種類の罵倒が挙げられる。まず、日本語においての罵倒を挙げてみたい。川崎（1997：3）の記述によれば、日本語の罵倒には、「あざけり、罵り、脅し、毒づき、からかい、けなし、そしり、冷やかし、当てこすり、皮肉、批判、囃し、なぶり、嫌み、憎まれ口、しゃれ、まぜっ返し、あげ足取り、啖呵、軽蔑、陰口、卑下、自嘲、卑しめ、さげすみ、差別語、捨てぜりふ」など、が挙げられる。本論文では、これらの用語の総称を「罵倒表現」と呼ぶことにする。

では、フランス語ではどうだろうか。フランス語においても、「罵倒表現」を表す用語が多く見られる。代表的なものには、injure（罵倒）、insulte（侮辱）、juron（ののしり）が挙げられ、他には、invective（罵言）、apostrophe（乱暴で荒々しい呼びかけ）、vanne（嫌み）、blasphème（冒涜的な言葉）、gros mots（下品な言葉）、incivilité（無礼な言葉）、outrage（侮辱）、violence verbale（暴力的な言葉）、menace（脅迫）、reproche（非難）、médisante（陰口）などの表現が挙げられる。また、invocation（祈り）、imprécation（呪い）に関しても、他人の不幸を願うという点においては「罵倒表現」の一種として捉えられる。これらの用語には多種多様な罵倒語彙や表現、成句などが含まれている。

フランス語の罵倒表現は非常に豊かである。罵倒表現に用いられる語彙や表現としては、排泄物（糞、尿）に言及する「下品な言葉」、性器や性交に言及する「卑猥な言葉」を始め、宗教に言及し神に対する「冒涜的な表現」（神聖的ものに対する侮辱）などが挙げられる。また、家族、人間の身体部位、動物の名称、病気、道徳などに言及する言葉も、発話状況によっては罵倒表現として機能することができる。このように、

罵倒表現に用いられる語彙には、排泄物のように、語彙自体が下品な意味を持つ場合と身体部位や動物の名称のように、語彙自体に下品さ、猥褻さといった意味を持たない名詞が用いられる場合がある。さらに、罵倒は下品な言葉を使用せずとも相手を侮辱することができ、また、普段罵倒として捉えられない身ぶりや顔の表情なども、時には相手に対する罵倒行為として捉えることができる（Larguèche 1983：2）。

Lagorgette & Larrivée（2004：4）によれば、フランス語の罵倒表現研究は、1960年代から徐々に研究され始め、コミュニケーション研究、社会学、心理学、精神分析学、文学、人類学、法学、歴史学などの分野において、広範囲にわたって研究されてきた。Lagorgette & Larrivée（2004：4）は続けて、罵倒語彙に関する初期の言語学的研究は、学会誌 *faits de langue*（1995）n°6 « L'exclamation » と *Cahiers de Praxématique*（2000）n°34 « L'interjection en français » において確認できるとしている。2000 年以降、より多くの罵倒表現研究（Lagorgette et Larrivée 2004, Desmons & Paveau 2008, Lagorgette 2009, Bravo 2015）が行われるようになった。しかし、これらの罵倒表現研究では、語彙の意味に注目した辞書的記述、または中世フランスの罵倒表現を扱った研究が多く、罵倒表現の発話機能や意味特徴に関する考察は十分に行われているとはいえない。

話し手は、日常的に耳にした罵倒表現に中で、自身のイメージに最もふさわしい罵倒表現を選択して発話することができる。このように考えれば、話し手は、相手の行動や言動をもとに、その相手に最もふさわしい罵倒表現を探し出す才能を持ち備えているのである。また、フランス語に見られる数多くの罵倒表現を用いて、話し手は想像力を働かせ、発話時の気分によってあらゆる言葉を自身の好みで組み合わせ、罵倒表現を無限に作り出すことさえできるのである。言い換えれば、発話状況や話し手の心情、聞き手の特徴を適切に表現できる「オリジナル」な罵倒表現を作り上げることができるのである。

このように、罵倒表現を研究する際は、罵倒語彙の意味だけではなく、発話状況や

会話者同士の関係を考慮し、誰が誰に向かって罵倒を行っているのか、どのように罵倒をしているのか、また聞き手にどんな効果をもたらすのか、など文脈を取り入れた考察が必要である。

本論文は、6 章構成である。1 章～3 章では、まず、フランス語の罵倒表現の多様性を示し、次に、先行研究をもとに罵倒のタイプを検討する。次に、それぞれの罵倒タイプが持つ意味的特徴を考察し、各タイプが互いにどのように関わっているのかを考察する。第 4 章～第 6 章においては、特定の語彙と表現に焦点を当て、実例をもとに、どのような発話場面に用いられるのか、また、どのような意味機能を持つのかを分析する。分析対象としたフランス語の罵倒表現は、merde（くそ）、putain（ちくしょう）、espèce de N（この～）の 3 つである。

Edouard（1967）*Dictionnaire des injures* [1]『罵倒表現辞書』はフランス語の罵倒語研究を代表する文献であり、多種多様な罵倒表現を収録している。本論文の第 1 章では、Edouard（1967）に記載されている分類に従って罵倒語彙を提示し、フランス語の罵倒表現が非常に多様であることを示す。

フランス語の罵倒タイプを表すそれぞれの用語が持つ特徴を明確に区分し、定義することは容易ではない。第 2 章では、5 つの先行研究を取り上げ、罵倒表現研究の移り変わりを観察しつつ、罵倒のタイプを検討する。研究者によって定義の細部において異なるものの、多くの先行研究[2]において、injure（罵倒）、insulte（侮辱）、juron（ののしり）blasphème（冒涜）の 4 つのタイプを区別していることを提示する。

---

[1] Nous avons recueilli plus de 9000 injures, locutions injurieuses, et ripostes traditionnelles ou conseillées. (Edouard 1967：12) （この辞書では、9000 例以上の罵倒語彙、罵倒的に用いる成句、伝統的に用いられる言い返しまたは推薦される反論を収集している。）

[2] Edouard (1967), Guiraud (1976), Rouayrenc (1998), Larguèche (1983, 1997, 2009), Lagorgette & Larrivée (2004), Lagorgette (2003, 2006, 2012), Anscombre (2009)

第 3 章では、第 2 章で提示した 4 つのタイプに、gros mots（下品な言葉）を加えて考察していく。これら 5 つの罵倒タイプが持つ意味的特徴を観察し、タイプ間の関係性を明らかにし、図式化を試みる。

第 4 章以降では、特定の語彙を用いて意味特徴の分析を行う。第 4 章では、フランス語の話し言葉において頻繁に用いられる « merde »（糞）を取り上げる。merde は名詞的には「糞」を意味する語彙であるが、多くの場合、事態に対する反応を表す「間投詞」として用いられることを提示する。第 4 章では、主に merde（くそ）の間投詞的用法を考察対象とする。

第 5 章では、同じくフランス語において頻用される表現である « putain »（売春婦）を取り上げる。putain は、merde と同様、下品な言葉とされており、フランス語の話し言葉において、多くの場合、間投詞的に用いられいる。第 5 章では、まず putain の基本的用法を記述し、次に putain の間投詞的用法を考察する。最後に、putain と merde の意味的特徴をさらに明確にするため、両語彙の間投詞的用法を比較する。

第 6 章では、聞き手に向かって発話される « Espèce de connard ! »（うすのろ！）の形を取る « Espèce de N (GN) ! » タイプの罵倒表現を取り上げる。この表現において、N (GN) の部分には「罵倒語彙」、「卑劣的意味を持たない名詞」、「N の欠落」の 3 つのパターンが見られる。第 6 章では、この 3 つのパターンを考察対象とする。まず、N が罵倒語彙の場合において、N が強調され、より強い罵倒行為となると仮定し、espèce de の有無によって聞き手に与える罵倒効果がどのように変化するのかを考察する。次に、N が卑劣的な意味を持たない名詞である場合、espèce de に後続する名詞 N が、なぜ常にマイナスの意味価値を伴い、聞き手を蔑んだ発話となるのかを考察する。

本論文で取り上げる、merde と putain は主に事態に対する反応を表す間投詞であり、juron として捉えられる。それに対して、« Espèce de N (GN) ! » は聞き手を前に直接的に発話される injure として捉えられる。したがって、本論文では injure と

juron に含まれる罵倒語彙を主に取り上げ、考察を行うことになる。

本論文では、用例を示すために、いくつかのコーパスを使用している。使用したコーパスの種類は各章ごとに、その都度に提示する。また、本論文で提示する用例には、誤字脱字及び文法間違いなどが見られる場合がある。これに関しては訂正をせず、コーパスの記載通りに提示する。

最後に、本論文で取り扱っているフランス語の罵倒語彙、表現、成句などに対して一定の日本語訳を付けるのは難しく、文脈によって、さまざまな日本語訳を使い分けなければならない。そのため、同様の罵倒表現に対して当てられている日本語訳に差異が見られる場合がある。本論文では、その都度ふさわしいと思われる訳を付けるように心掛けている。

第 1 章

フランス語における罵倒表現の多様性

本章では、フランス語の罵倒表現に見られる語彙、表現、成句などを取り上げる。フランス語の罵倒表現は非常に豊かであり、さまざまな表現が用いられている。本章では、フランス語の罵倒表現を数多く扱っている、Edouard（1967）*Dictionnaire des injures* 『罵倒表現辞書』を用いて、フランス語に見られる罵倒表現の多様性を提示する。

1.1　Edouard（1967）における罵倒表現の区分

Edouard（1967）*Dictionnaire des injures* 『罵倒表現辞書』は第 1 部、第 2 部、辞書の部、の 3 部構成[3]となっている。第 1 部では、injure（罵倒）の定義、罵倒の種類、罵倒の手法、また罵倒に対する反応の仕方などに関して考察されている。また古代ヨーロッパにさかのぼって、罵倒表現の歴史的変遷に関しても詳しく記述されている。第 2 部では、フランス語の罵倒表現を社会的分類に沿って区分し、それぞれの区分において、数多くの罵倒表現が挙げられている。第 3 部では、罵倒語彙を検索でき

[3] Première partie：Connaissance de l'injure (Edouard 1967：7-299)
（第 1 部：罵倒の知識）
Seconde partie：Répertoire analogique des injures françaises (Edouard 1967：301-333)
（第 2 部：フランス語の罵倒表現の類語目録）
Dictionnaire encyclopédique des injures françaises (Edouard 1967：335-610)
（辞書の部：フランス語罵倒表現の百科事典）

る辞書となっている。本章では、Edouard（1967）の第 2 部に記載されているフランス語の罵倒表現の区分に沿って提示する。

Edouard（1967：305-332）は、表 1 に示すように、フランス語の罵倒表現を「人類」、「自然」、「社会」、「風習・公衆道徳」の 4 つの大区分に分けて記述している。それぞれの大区分には中区分が設けられており、またそれぞれの中区分には、必要に応じてさらにいくつかの小区分が設けられている。

第 1 の大区分である「人類」（Edouard 1967：305-310）では、「I 人体に関する罵倒」、「II 身体的外見」、「III 病気と身体障害」、「IV 精神疾患」の 4 つの中区分に分けられている。それぞれの中区分において、「I 人体に関する罵倒」では、「a 肛門と腸」、「b 泌尿生殖器」、「c 頭、鼻、目」の 3 つの小区分に分けられている。「II 身体的外見」では、「a 身体的外見」、「b 25 歳以下」、「c 25 歳～35 歳」、「d 35 歳以上」の 4 つの小区分に分けられている。「III 病気と身体障害」では、「a 男性的特徴の障害」、「b 各種疾患」の 2 つの小区分に分けられている。「IV 精神疾患」では、「a 精神異常」、「b 知的能力の衰退」の 2 つの小区分に分けられている。

第 2 の大区分である「自然」（Edouard 1967：311-317）では、「I 動物に関する罵倒」、「II 植物に関する罵倒」、「III 鉱物に関する罵倒」、「IV 液体に関する罵倒」、「V ガスに関する罵倒」の 5 つの中区分に分けられている。中でも、「I 動物に関する罵倒」のみにおいて、「a 脊椎動物」、「b 無脊椎動物」、「c 太古の動物相」、「d 神話の動物相」の 4 つの小区分に分けられている。

第 3 の大区分である「社会」（Edouard 1967：319-326）では、「I 家族」、「II 貴族」、「III 美食」、「IV 農業」、「V 家事」、「VI 呼称」、「VII 宗教」、「VIII 職業」の 8 つの中区分に分けられている。

第 4 の大区分である「風習・公衆道徳」（Edouard 1967：327-332）では、「I 7 つの大罪」と「II 汚名に関する罵倒」の 2 つの中区分に分けられている。

表 1　Edouard（1967：305-332）によるフランス語罵倒表現の区分

大区分	中区分	小区分
1. L'homme （人類）	I. Injures anatomiques （人体に関する罵倒）	a. Anales et intestinales（肛門と腸）
		b. Génito-Urinaires（泌尿生殖器）
		c. Céphalo-Rhino-Ophtalmologiques （頭・鼻・目）
	II. Apparence physique （身体的外見）	a. Aspect général（一般的外見）
		b. Au-dessous de 25 ans（25 歳以下）
		c. De 25 à 35 ans（25 歳から 35 歳）
		d. Au-dessus de 35 ans（35 歳以上）
	II. Maladies et infirmités （病気と身体障害）	a. Troubles de la virilité（男性的特徴障害）
		b. Affections diverses（各種疾患）
	IV. Tares psychiques （精神疾患）	a. Aliénation mentale（精神異常）
		b. Atrophie des facultés intellectuelles （知的能力の衰退）
2. La nature （自然）	I. Injures zoologiques （動物に関する罵倒）	a. Vertébrés（脊椎動物）
		b. Invertébrés（無脊椎動物）
		c. Faune antédiluvienne（太古の動物相）
		d. Faune mythique（神話の動物相）
	II. Injures végétales（植物に関する罵倒）	
	III. Injures minérales（鉱物に関する罵倒）	
	IV. Injures liquides（液体に関する罵倒）	
	V. Injures gazeuses（ガスに関する罵倒）	
3. La société （社会）	I. Injures familiales（家族に関する罵倒）	
	II. Injures nobiliaires（貴族に関する罵倒）	
	III. Injures gastronomiques（美食に関する罵倒）	
	IV. Injures agricoles（農業に関する罵倒）	
	V. Injures ménagères（家事に関する罵倒）	
	VI. Injures nominatives（呼称に関する罵倒）	
	VII. Injures religieuses（宗教に関する罵倒）	
	VIII. Injures professionnelles（職業に関する罵倒）	
4. Les mœurs La morale publique （風習・公衆道徳）	I. Les péchés capitaux（7 つの大罪）	
	II. Injures stigmatisantes（汚名に関する罵倒）	

本章では、Edouard（1967：305-332）が記述している 4 つの大区分に沿ってフランス語の罵倒表現を紹介する。罵倒表現の用例を提示する際は、先にフランス語を提示し、括弧の中に日本語訳を提示する。フランス語の罵倒表現において、字義的意味と実際の意味解釈が異なる場合、日本語訳では先に字義的意味を提示し、矢印（→）に続けて言外的意味を提示する。

1.1.1　第 1 区分「人類」

Edouard（1967）では、罵倒表現の第 1 の大区分として「人類」（Edouard 1967：305-310）が挙げられており、その中区分として、「I 人体に関する罵倒」、「II 身体的外見」、「III 病気と身体障害に関する罵倒」、「IV 精神的疾患に関する罵倒」の 4 つの中区分が挙げられている。これらの中区分において、さらにいくつかの小区分に分けられている。それぞれの区分に沿って罵倒表現を提示する[4]。

I　人体に関する罵倒

「人類」の第 1 の中区分である「人体に関する罵倒」（Edouard 1967：305-307）は、「a 肛門と腸」、「b 泌尿生殖器」、「c 頭・鼻・目」の 3 つの小区分に分けられている。

a　肛門と腸

「人体に関する罵倒」の第 1 の小区分である「a 肛門と腸」（Edouard 1967：305-306）は、さらに「肛門」、「排泄物」、「発散物」、「臀部」、「腹部」に分けられている。

- 肛門に関する表現（Edouard 1967：305）では、cul（尻・ケツ）を伴う表現が多く挙げられている。例えば、t’as pas de couilles au cul（お前はお尻に睾丸を持

[4] 参考資料 1 参照

っていない→意気地なし)、va donc, éh, cul pourri（あっち行け、えい、腐ったケツ野郎)、tu es un vrai casse cul（お前は本当のお尻割りだ→お前は本当にめんどくさい奴だ）などが見られる。また、cul の婉曲表現として derrière（後ろ）があり、お尻を意味する popotin（お尻)、pétard（尻)、croupion（人のお尻）などが挙げられている。

- 排泄物に関する表現（Edouard 1967：305）では、caca（幼児語：うんこ）を用いて、tire-toi, éh, caca！（あっち行け、えい、うんこ！)、chier（くそをたれる→うんざりする）を用いて、viens pas me faire chier（くそを垂らしに来るな→私をうんざりさせるな)、crotte（糞）を用いて、n'être que de la crotte（くそでしかない！）などが挙げられている。下痢に関する表現では、une gueule à foutre la colique（下痢をしそうな顔をしている→厄介事を引き起こしそうな顔をしている)、foutre la chiasse（糞をする→面倒なことをする）などが挙げられており、便秘に関する表現では、espèce de constipé, va te faire déboucher le trou du cul！（この便秘野郎、お尻の穴の栓を抜いてこい！）が挙げられている。さらに、糞を意味する merde に関しては多くの派生語彙が挙げられている[5]。merde に関しては第 4 章で詳しく考察する。

- 発散物に関する表現（Edouard 196：305）では、pet（屁）を用いて ça ne vaut pas un pet！（屁の価値にも及ばない！→無価値なものである！）が挙げられており、他には、bourge de pétasse（この売春婦め！)、va donc, éh, pétochard（あっち行け、えい、臆病者)、avoir la pétoche（恐怖を持つ→怖がる）などが挙げられている。

- 臀部に関する表現（Edouard 1967：306）では、peau de fesse（お尻の皮→高価な物)、occupe-toi de tes fesses（君は自分のお尻だけ心配していればいい→大きなお世話)、serrer les fesses（お尻を締める→びくびく怖がる）などが挙げられてい

[5] merde から派生した語彙：démerdable, démerdage, démerder, démerdeur, démerdouiller, emmerdable, emmerdage, emmerdant, emmerder, emmerdoyer, merdaille, merder, merdeux, merdissime, merdouille (Edouard 1967：305)

る。

- 腹部に関する表現（Edouard 1967：306）では、ventru（お腹が出た）、pansu（太鼓腹の人）、sac à merde（うんち袋）、tas de graisse（脂肪の山）、bouillon gras（脂っこいブイヨン）など、「お腹が出ている人」を指す表現が挙げられている。

b　泌尿生殖器

「人体に関する罵倒」の第 2 の小区分である「b 泌尿生殖器」（Edouard 1967：306-307）は、さらに「女性器」、「男性器」、「尿道」に分けられている。

- 女性器に関する表現（Edouard 1967：306）では、con（女性器→バカ）、conard（バカ）、conasse（バカな女）、connerie（バカげたこと）、déconner（ふざける）、déconneur（ふざけるのが好きな人）などが挙げられている。

- 男性器に関する表現（Edouard 1967：306）では、pénis（ペニス）、bite（ペニス）、un vrai casse-bite（ペニスつぶし→ひどくうんざりな奴）、pine（陰茎）、se casser la nénette（陰茎をつぶす→頭を悩ませる）などが挙げられている。睾丸に関する表現では、testicules（睾丸）、couilles（睾丸）、ce que tu peux être casse couilles（なんて君は睾丸つぶしなんだ→なんて君は厄介なんだ）、couille molle（柔らかい睾丸→意気地なし）などが挙げられており、また les olives（オリーブ）、les prunes（プラム）、les noisettes（ヘーゼルナッツ）などは、比喩的に睾丸を意味する語彙として挙げられている。さらに、sperme（精液）、foutre（精液）、va te faire foutre（あっちへ行っちまえ）、espèce de jean-foutre !（ろくでなしめ！）、c'est une belle foutaise !（なんてくだらない！）、être foutu（もうだめだ）などが挙げられている。

- 尿道に関する表現（Edouard 1967：306-307）では、vessie（膀胱）を用いて、faire prendre des vessies pour des lanternes（膀胱をちょうちんと間違える→とんでもない間違いをする）という慣用句が挙げられており、prostate（前立腺）に関しては、occupe-toi de ta prostate（お前は自分の前立腺のことだけを心配していればい

い→大きなお世話）が挙げられている。また、pisse（排尿）を用いて、pisse-froid（冷たい尿→陰気で冷たい男）、chaude-pisse（淋病）を用いて、viens pas me foutre ta chaude-pisse！（淋病をまき散らしに来ないで！→ほっといてくれ！）などが挙げられている。さらに、espèce de pisseuse！（おしっこ娘→この小娘め！）、幼児語である pipi（おしっこ）に関しては、petit pipi / pipi des près（少量のおしっこ→物事や人物が重要ではないことを示す）などが挙げられている。

c　頭・鼻・目

「人体に関する罵倒」の第 3 の小区分である「c 頭・鼻・目」（Edouard 1967：307）は、さらに「頭」、「鼻」、「目」、「顔」に分けられている。

- 頭に関する表現（Edouard 1967：307）では、crâne d'œuf（卵頭→禿げ頭）、他には、le cassis（カシス）、le citron（レモン）、la calebasse（ひょうたん）、le ciboulot（かぼちゃ）、le coco（ココナッツ）といった、丸みを帯びた物が比喩的に「頭」という意味で用いることができる。例えば、en avoir plein le cassis（カシス（頭）の中がいっぱい→もううんざりだ）、avoir reçu un coup sur le citron（レモン（頭）に一撃を受ける）などが挙げられている。また、caillou（石）を頭に見立てて、ne plus avoir un poil sur le caillou（石（頭）に毛が一本もなくなった→禿げている）も挙げられている。

- 鼻に関する表現（Edouard 1967：307）では、foutre son nez partout（鼻をいたる所に置く→自分に関係ないのことに対して口出しする）、puer au nez（鼻が臭い→気に入らない）などが挙げられており、また鼻を意味する俗語には、le tarin, le mufle, le groin, le museau などがあり、avoir un drôle blair（滑稽な鼻を持つ→臭覚が敏感な人）のような用例が挙げられている。

- 目に関する表現（Edouard 1967：307）では、s'enforcer le doigt dans l'œil（目に指を突っ込む→とんでもない間違いをする）、l'avoir l'œil（目を持つ→誰かを

見張る)、rouler une paire de pruneaux（プルーンを丸める→斜視する）などが挙げられている。

- 顔に関する表現（Edouard 1967：307）では、頻繁に用いられる表現として、gueule（顔)、face（顔)、tête（顔）などが挙げられている。他には、façade（顔)、hure（猪または豚の頭、または顔)、binette（おかしな顔、または面)、tronche（頭、顔）が顔を意味する。さらに、figure（顔）を用いて、figure à la con（バカな顔)、bille de clown（ピエロのビー玉→滑稽な顔）が挙げられている。

II　身体的外見

「人類」の第 2 の中区分である「身体的外見」（Edouard 1967：307-308）は、「a 一般的外見」、「b 25 歳以下」、「c 25 歳～35 歳」、「d 35 歳以上」の 4 つ小区分に分けられている。

a　一般的外見

「身体的外見」の第 1 の小区分である「a 一般的外見」（Edouard 1967：307）は、さらに「大きさ」、「小ささ」、「太さ」、「細さ」、「身だしなみの良さ」、「だらしなさ」、「美しさ」、「醜さ」、「奇形」の 9 つに分けられている。

- 大きさに関する表現（Edouard 1967：307）では、grand perche（高い棹→ひょろ長い人、のっぽ)、grand échalas（高い添え木→背が高くて痩せている人）のように、身長が高いことを示す表現が挙げられている。また、admire un peu cet obélisque（あの立派なオベリスクを見て)、admire un peu cette tour Eiffel（ほらあのエッフェル塔を見て）のように高い建物に喩えて言及する表現も挙げられている。他には、dis, mon gras, tu ne t'ennuies pas, tout seul là-haut ?（やあ、君、一人で上にいるのは退屈ではないのかい？)、encore un qui se pousse du col（また一人、首から伸びているよ）などが挙げられている。

● 小ささに関する表現（Edouard 1967：307）では、petit riquiqui（ちっぽけな人）、petit avorton（未熟児→ちび）、petit nabot（ちび）、homoncule（小人）、escarbille（煤）、globule（小さな球）など、身長が低いことを表す用例が挙げられている。他には、demi-portion（半人前）、sous-développé（発展中）、moucheron（コバエ→小僧）、mauviette（虚弱な人）、fœtus（胎児）、foutriquet（ちび）など、物事や人物が小さい、または弱いことを意味する表現も挙げられている。

● 太さに関する表現（Edouard 1967：308）では、gros joufflu（ほっぺたが丸々とした肥大漢）、gros patapouf（太っちょ）、gros pépère（太っちょのおやじさん）、grosse dondon（太った女）、espèce de citrouilles（かぼちゃ野郎）、espèce de d'énormité（巨人め）、espèce de plein lune（満月野郎）などが挙げられており、他には、va te faire dégraisser（脂肪を取り除いて来い）、tu vas crever, t'es trop gonflé !（あんた死ぬよ、膨れすぎだよ！）、c'est de la bonne pâte, ça, madame !（これはいい生地だよ、奥さん）のように比喩的に用いられる表現も挙げられている。

● 細さに関する表現（Edouard 1967：308）では、maigre comme un clou（釘のように細い）、espèce de déterré（死人め→痩せているため墓から掘り出された死人のような顔をしている人）、espèce de décharné（やせ細った奴め）、espèce de mal nourri（栄養不良野郎）、espèce de cadavre ambulant（血の気のない人）、espèce de squelette endimanché（着こんだ骸骨）などが挙げられている。

● 身だしなみの良さに関する表現（Edouard 1967：308）では、gommeux（きざな青年）、snobinard（ちょっとお高くとまった人）、crâneur（虚勢を張る人）、mirliflore（気取った）、gandin（きざな若者）など、生意気なさまを表現する用例が挙げられている。

● だらしなさに関する表現（Edouard 1967：308）では、espèce de mal torché（雑で身なりの悪い奴め）、espèce de mal foutu（出来の悪い奴め）、détritus（くず、廃物）、immondice（ごみ、汚物）、goret（汚い男、子豚）、pouilleux（乞食）などが

挙げられている。

- 美しさに関する表現（Edouard 1967：308）では、une gueule de gigolo（ひも男の顔）、une gueule de maquereau（淫売屋の主人の顔）などが挙げられている。他には、「若い男とある程度年を取った女性が恋愛関係にある」ことを指して、encore un neveux qui cherche sa tante（また甥が叔母を探しているよ）のような用例が挙げられている。

- 醜さに関する表現（Edouard 1967：308）では、laid comme un pou（シラミのように醜い→ひどく醜い）、va te cacher, éh, laideron !（隠れろ、えい、ブス！）、ce que tu peux être moche !（お前はどこまで醜いんだ！）、espèce d'abomination !（嫌われ者め！）、un vrai repoussoir（ひどく醜い女）、va demander à ta mère de te refaire !（母親に生み直してもらうように言って来い！）などが挙げられている。

- 奇形に関する表現（Edouard 1967：308）では、va donc, eh, cagneux（あっち行け、X 脚め）、va donc, eh, tordu（あっち行け、ブス）、espèce de bancal（がに股野郎）、espèce de monstre（怪物め）、espèce de guignol（指人形野郎）など、身体部位の歪みに関する表現が挙げられている。

b　25 歳以下

「身体的外見」の第 2 の小区分である「b 25 歳以下」（Edouard 1967：308）は、さらに「純粋」と「生意気」に分けられている。

- 純粋に関する表現（Edouard 1967：308）では、apprenti（見習い生）、grand dadais（間抜けな若者）、sale morpion（毛虱め→ガキ）、petit merdeux（くそがき）、bougre de morveux（洟たれ小僧）、espèce de petit péteux（臆病者め）、sale moufflet（汚い子供→くそがき）、puceau（童貞）などが挙げられている。。

- 生意気に関する表現（Edouard 1967：308）では、petit chenapan（わんぱく小僧）、espèce d'effronté（厚かましい奴め）、espèce de zigotte（偉そうな奴め）、bougre

de galapiat（ろくでなし、ちんぴら）、sale galopin（いたずらっ子）、maraud（ろくでなし）、petit voyou（卑劣な奴）、mauvais sujet（素行の悪い人）などが挙げられている。

c　25 歳から 35 歳

「身体的外見」の第 3 の小区分である「c 25 歳から 35 歳」に関する表現（Edouard 1967：308）は、特にこれといった罵倒表現はなく、「罵倒表現の目録全体を参照する」よう記述されている。

d　35 歳以上

「身体的外見」の第 4 の小区分である「d 35 歳以上」（Edouard 1967：308）は、さらに「時代遅れ」と「老衰」に分けられている。

- 時代遅れに関する表現（Edouard 1967：308）では、antiquaille（古代人→老人）、antiquité（大昔の人）、dévalué（価値が下がった人）、périmé（期限切れ→使えない人）、tu n'es plus dans la course, pépé, laisse courir（コースから外れているよ、じじぃ、そのまま走れ→時代の移り変わり、または新しい事について来られないお年寄りに用いる表現）などが挙げられている。
- 老衰に関する表現（Edouard 1967：308）では、ancêtre（祖先→老人）、vieillard cacochyme（虚弱な老人）、vieille croûte（時代遅れの人間）、espèce de décrépit（よぼよぼの老人め）、défraîchi（色褪せた→老い衰えた）、déplumé（羽が抜けた→頭が禿げた人）、espèce de vieux gâteux（ぼけ老人め）、pièce de Musée（美術館の展示品→老いぼれた人）、chassieux（目やにの出ている人）、roupieux（鼻水をたらした人）、P.P.H (Passera pas l'hiver)（冬を越せない→老いぼれているため冬の寒さに耐えられない老人）、P.P.W (passera pas le week-end)（週末を超えられない→長く生きられない人）、vieux radoteur（くどくど同じことを言う老人）などが挙げられている。

III　病気と身体障害

「人類」の第 3 の中区分である「病気と身体障害」（Edouard 1967：309）は、「a 男性的特徴の欠陥」と「b 各種疾患」の 2 つの小区分に分けられている。

a　男性的特徴の欠陥

「病気と身体障害」の第 1 の小区分である「a 男性的特徴の欠陥」（Edouard 1967：309）は、さらに「性的欠陥」と「性的無力」に分けられている。

- 性的欠陥に関する表現（Edouard 1967：309）では、peine à jouir（性的快感障害）、vérolé（梅毒病者）、hérédo（先天性梅毒病者）、tu n'es même plus capable d'en foutre un coup（お前はもう性行為さえできなくなった）などが挙げられている。
- 性的無力に関する表現（Edouard 1967：309）では、asexué（無性器）、diminué（性的能力が衰えた人）、incomplet（性的不完全）、sans-couilles（睾丸がない人）などが挙げられている。

b　各種疾患

「病気と身体障害」の第 2 の小区分である「b 各種疾患」（Edouard 1967：309）は、さらに「病み上がり」と「瀕死」に分けられている。

- 病み上がりに関する表現（Edouard 1967：309）では、espèce de Choléra（コレラ→疫病神め）、sale petite peste（おてんば娘）、c'est pire qu'une épidémie（流行病より酷い奴だ）などが挙げられている。
- 瀕死に関する表現（Edouard 1967：309）では、incurable（不治の病人）、irrécupérable（復帰できない人）などが挙げられている。

IV　精神疾患

「人類」の第 4 の中区分である「精神疾患」（Edouard 1967：309）は、「a 精神異

常」と「b 知的能力の衰退」の 2 つの小区分に分けられている。

a　精神異常

「精神疾患」の第 1 の小区分である「a 精神異常」（Edouard 1967：309）は、さらに「早発痴呆」と「老年痴呆」に分けられている。

- 早発痴呆に関する表現（Edouard 1967：309）では、主に精神異常に言及する表現が多く挙げられている。例えば、agité（激越性躁病者）、être mûr pour l'asile（施設に入るのにちょうどよい時機→施設行き）、être cinglé（ちょっと頭のおかしい人）、être un peu craqué（精神的に参った人）、être complètement dingue（まったくどうかしている）、déconner（バカなことを言う）、dérailler（脱線する→調子がおかしい）、avoir besoin d'un électrochoc（電気ショックを必要とする人）、avoir le crâne un peu fêlé（頭蓋骨に少々ひびが入っている→頭がおかしくて気が変になる人）などが挙げられている。他には、névrosé（ノイローゼ）、psychopathe（精神病者）、neurasthénique（精神衰弱）、paranoïaque（妄想症）、être un mythomane（虚言症）、être un obsédé（強迫観念）、être un exhibitionniste（露出狂）、être un amnésique（健忘症）、être un pervers（性倒錯者、変質者）、être un narcissiste（自己陶酔者）、un kleptomane（窃盗狂）などの病名も罵倒表現として挙げられている。
- 老年痴呆に関する表現（Edouard 1967：309）では、décervelé（知的機能喪失）、tu retombes en enfance（子供時代に戻る→耄碌）、vieux radoteur（同じことを言う人）、cerveau ramolli（ボケた人）、vieillard sénile（老年痴呆）などが挙げられている。

b　知的能力の衰退

「精神疾患」の第 2 の小区分である「b 知的能力の衰退」（Edouard 1967：309）は、さらに「愚かさ」と「先天性愚鈍」に分けられている。

● 愚かさに関する表現（Edouard 1967：309）では、être un ahuri（愚か者）、être bouché à l'émeri（頭が鈍い人）、être une triple buse（とんでもない大バカ）、espèce de navet（カブ野郎→間抜け野郎）、espèce de nouille（ヌードル野郎→間抜け野郎）、espèce de moule（ムール貝野郎→間抜け野郎）、gueule d'enflé（間抜け顔）、ce que tu peux être lourd（お前はどこまでめんどくさい人なんだ）などが挙げられている。

● 先天性愚鈍に関する表現（Edouard 1967：310）では、être une andouille（アンドゥイユ→間抜け）、être un anormal（異常児）、être un arriéré（知能発達遅れ）、espèce de couillon（間抜け野郎）、espèce de crétin（白痴）、espèce de cruche（水差し→とんま野郎）、godiche（不器用な人）、espèce de niais（世間知らず）、espèce de tourte（パイ→バカ野郎）、espèce d'imbécile（バカ者め）、espèce de débile（愚か者め）、s'amener la gueule enfarinée（自分の顔を白い粉で真っ白にする→愚かで物事を信じ切った顔をしている人）、ne pas avoir inventé la poudre（粉を作り出せない→少し頭が抜けている）などが挙げられている。

1.1.2 第 2 区分「自然」

Edouard（1967）では、罵倒表現の第 2 の大区分として 「自然」（Edouard 1967：311-317）が挙げられており、その中区分として、「I 動物に関する罵倒」、「II 植物に関する罵倒」、「III 鉱物に関する罵倒」、「IV 液体に関する罵倒」、「V ガスに関する罵倒」の 5 つが挙げられている。中でも、「I 動物に関する罵倒」は、さらにいくつかの小区分に分けられている。それぞれの区分に沿って罵倒表現を提示する[6]。

[6] 参考資料 2 参照

I　動物に関する罵倒

「自然」の第 1 の中区分である「動物に関する罵倒」（Edouard 1967：311-317）は、「a 脊椎動物」、「b 無脊椎動物」、「c 太古の動物相」、「d 神話の動物相」の 4 つの小区分に分けられている。

a　脊椎動物

「動物に関する罵倒」の第 1 の小区分である「a. 脊椎動物」（Edouard 1967：311-313）は、さらに「哺乳類」、「鳥類」、「爬虫類」、「両生類」、「魚類」に分けられている。

- 哺乳類に関する表現（Edouard 1967：311-312）を以下に示す。

サル目では、espèce de vieux babouin（老いぼれヒヒめ）、sale petit ouistiti（汚いキヌザル→変な奴め）、avoir tout de l'orang-outan（オランウータンのすべての特徴の持つ人→粗野な人）などが挙げられいる。

齧歯目では、avoir des yeux de rat mort（死んだネズミのような眼をしている人）、marmotte（マーモット→よく寝ている人）、être un chaud lapin（暑いウサギ→好色者）、campagnol（ハタネズミ→毛深くて畑に住んでおり、あまり恋愛経験のない農民）などが挙げられている。

貧歯目では、grand paresseux（酷いナマケモノ）、vieux hérisson（老いぼれたハリネズミ→怒りっぽい人）、vieille taupe（老いぼれたモグラ→目先のことだけを考える人）などが挙げられている。

肉食動物では、chien（犬）女性形 chienne を用いて、chauve-souris（コウモリ→髪の毛が抜ける女の人）、blaireau（アナグマ→髭剃りを失敗した男）、renard（きつね→いじわるな人）、une vraie panthère（豹→嫉妬深い女）、phoque（アザラシ→喘息持ちの人、または口ひげを生やした人）、otarie（アシカ→泳ぎがうまい人）などが挙げられている。

厚皮動物では、gracieuse comme un éléphant（象のように可愛らしい→少し体重が重い人）、豚に関する表現では、cochon（豚）、coche（雄豚）、truie（雌豚）、porc（豚）、pourceau（豚）、vous n'êtes qu'un cochon（君は豚でしかない）、vous êtes qu'une truie（お前（ら）は豚以外のなんでもない）などが挙げられている。他には、âne（ロバ→うすのろ）、mauvais cheval（悪い馬→見込みのない奴）などが挙げられている。

反芻動物では、chameau（ラクダ→意地の悪い人、売女）、daim（ダマジカ→間抜け）、biche（雌鹿→娼婦）、grande girafe（大きいキリン→身長が高くてひょろ長い人）、vieille bique（雌ヤギ→老いぼれた女）、brebis galeuse（汚い雌羊→嫌われ者）、mérinos（メリノ羊→カール髪の人）、taureau（闘牛→勢いがあることから赤信号ギリギリで交差点を突っ切る運転手）、peau de vache（雌牛の皮→いじわるな人）などが挙げられている。

クジラ目では、baleine（クジラ→太っている女）、有袋目では、kangourou（カンガルー→高く飛べる人）が挙げられている。

単孔目に属する生物は嘴を持ち、歯を持たない。そのため、une vieille personne édentée（歯を失った老人）を指し示すことができる。また、カモの嘴のような鼻を持つ人のことを ornithorynque（カモノハシ）として取り上げ、罵ることができるとしている。

- 鳥類に関する表現（Edouard 1967：312-313）を以下に示す。

猛禽目では、condor（コンドルは pute de luxe（華やかな売春婦）を意味する）、また、gerfaut（シロヤブサ→遠くまで飛べることから、しばらく家族から離れ遠くへ行く人を指す）などが挙げられている。

スズメ目では、espèce d'étourneau（ムクドリめ→軽率な若者）、tête de linotte（ムネアカヒワ頭→慌て者）、bavarde comme une pie（カササギのようにおしゃべり→ぺちゃくちゃよくしゃべる人）、corbeau（カラス→黒いスータンを着ている神父、

または全身黒い服を着ている人）などが挙げられている。

攀禽目では、tu la boucles, eh perruche（黙れ、インコ→黙れ、おしゃべり）、cacatoès（オウム→人を苛立たせるクソがき）などが挙げられている。

キジ目では、petite dinde（七面鳥→愚かな女）、une vraie pintade（ホロホロ鳥→ひどく傲慢な人）、poule faisane（雌キジ→尻軽女）などが挙げられている。

ハト目では、ramier（モリバト→ぐうたら者）、pigeon（ハト→純粋な人）が挙げられている。

渉禽目では、autruche, butor, cigogne（ダチョウ、サンカノゴイ、コウノトリ→首が長い人）、grue, héron（つる、サギ→飲んだくれ）などが挙げられている。

遊禽目では、bête comme une oie（ガチョウのようにバカな人）、pélican（ペリカン→鼻が大きい人、または二重あごの人）などが挙げられている。

- 爬虫類に関する表現（Edouard 1967：313）を以下に示す。

カメ目では、tortue（亀→排気量が小さい車を持つ人、または運転速度が遅い人）などが挙げられている。

トカゲ目では、crocodile（ワニ→訳もなく泣いて、他人の同情を得た上で裏切る人）、lézard（トカゲ→まじめに仕事をしない人）、caméléon（カメレオン→意見をコロコロ変える人）などが挙げられている。

ヘビ目では、cobra（コブラ、または serpent à lunettes（眼鏡ヘビ）→無遠慮で望遠鏡で隣人を覗く人）、naja（コブラ属の猛毒ヘビ→水泳をしなくなった人が頻繁にプールに行き、魅力的な女性水浴客を物色する人）、langue de vipère（クサリヘビの舌→毒舌家）などが挙げられている。。

- 両生類に関する表現（Edouard 1967：313）では、grenouille de bénitier（聖水フォントのカエル→信心で凝り固まった人）、salamandre（サンショウウオ→24 時間起きている人）、triton（イモリ→イモリは平らなしっぽを持っているため、きついパンツを履いている男の人を指す）などが挙げられている。

● 魚類に関する表現（Edouard 1967：313）では、anguille（うなぎ→うなぎは滑りがよいため、なかなか捕まらない人を指す）、barbeau, maquereau（バーベル、サバ→ひも男）、daurade, morue, merluche（タイ、タラ、干鱈→品行が良くない女性）、plate comme une limande（マコガレイのように扁平である→胸の薄い女性）、rouget（体色の赤い魚の通称で、特にヒメジ→顔が真っ赤な人）などが挙げられている。

b　無脊椎動物

「動物に関する罵倒」の第 2 の小区分である「b 無脊椎動物」（Edouard 1967：314-315）は、さらに「昆虫類」、「節足動物」、「多足類」、「甲殻類」、「環形動物」、「軟体動物」、「原生動物」に分けられている。

● 昆虫類に関する表現（Edouard 1967：314）を以下に示す。

甲虫目では、luciole（蛍→蛍は光を点滅させるため、人に喩えた場合、お世辞で間抜けな人がたまには良いアイディア（光）を出すことを意味する）、papillon（蝶→浮気の心を持つ人）などが挙げられている。

双翅目では、mouche à merde（うんこの上の蠅→不潔な人）、poids mouche（ボクシングでは「フライ級」を指し、やせ細った人）、moucheron（コバエ→小僧）、moustique（蚊→小さく痩せた人、ちょこまかした子供）などが挙げられている。

半翅目では、sale punaise（汚いトコジラミ→卑屈な人）、cigale（ギター奏者）などが挙げられている。

直翅目では、cafard（ゴキブリ→猫かぶりの人）、mante religieuse（カマキリ→カマキリは交尾のあとメスがオスを食べてしまうことがあるため、女性が男性を食べると連想することができ、性行為に執着が強い女性のことを指す）、éphémère（カゲロウ→友人関係が長く続かない人）などが挙げられている。

膜翅目では、abeille（ミツバチ→休みを利用して大修道院でガイドとして働く女

子学生)、fourmi（アリ→重要ではない人)、frelon, bourdon（モンスズメバチ、マルハナバチ→居候の人、寄食者）などが挙げられている。

- 節足動物に関する表現（Edouard 1967：314）では、avoir une araignée au plafond（天井に蜘蛛がいる→頭がいかれている)、scorpion（さそり→さそりは針で指すことから、注射が下手な医者を意味する)、ciron（コナダニ→酔っ払い）などが挙げられている。。

- 多足類に関する表現（Edouard 1967：314）では、mille-pattes（ムカデ→なんでも信じてしまう人、騙されやすい人)、scolopendre（オオムカデ→強い反抗心を持つ人）などが挙げられている。

- 甲殻類に関する表現（Edouard 1967：314）では、vieux crabe（老いたカニ→価値がないバカな奴)、salicoque（エビジャコ→雑な人が修理で出された車、または船舶をさらに傷つける人)、anatife（エボシガイ→髪がフサフサで無知な人)、tourteau（イチョウガニ→tourte は肉や野菜が詰まったパイでボリュームが大きいことから太った人を意味する）などが挙げられている。

- 環形動物に関する表現（Edouard 1967：315）では、ver de terre（ミミズ→しがない存在)、sangsue（ヒル→血を吸い取る人、吸血鬼）などが挙げられている。

- 軟体動物に関する表現（Edouard 1967：315）では、limace（ナメクジ）を用いて、va donc, espèce de limace ! Et si possible, vas-y plus vite ! （ほら、ナメクジめ！できることならもっと早くやれ！)、huître（牡蠣）と moule（ムール貝）を用いて、espèce de huître（牡蠣野郎）または espèce de moule（ムール貝野郎→ひどく無気力な人、行動が遅い人）が挙げられている。他には、oursin（ウニ→ウニは針がたくさんあることから、うっかり近寄れない人を指す)、poulpe（タコ→吸盤があることから、しつこくつきまとう人）などが挙げられている。

- 原生動物に関する表現（Edouard 1967：315）では、microbe（微生物→身長が小さい人)、colibacille（大腸菌→居候が長くて追い出すことができないしつこい人)、

tréponème pâle（梅毒トレポネーマ→性病であるため、天然痘を広める人）などが挙げられている。

c　太古の動物相

「動物に関する罵倒」の第 3 の小区分である「c 太古の動物相」（Edouard 1967：315）は、さらに「恐竜と現存種の祖先」と「化石人類」に分けられている。

- 恐竜と現存種の祖先に関する表現（Edouard 1967：315）では、brontosaure（ブロントザウルス）と diplodocus（ディプロドクス）が挙げられており、両語とも巨大な恐竜を指し示す語彙であるため、肥満体質の人を意味する。また、恐竜は古代動物であるため、恐竜の名称を用いることで考えが古い人を指し示すことができる。他には、mammouth（マンモス）、mastodonte（マストドン）も挙げられており、これらの動物も巨大であるため、体重の重い人を指し示すことができる。
- 化石人類に関する表現（Edouard 1967：315）では、néanderthalien（ネアンデルタール）、sinanthrope（北京原人）、pithécanthrope（ピテカントロプス）、homme de Cro-Magnon（クロマニョン人）などが挙げられており、知恵遅れの人や頭の弱い人を指し示す。

d　神話の動物相

「動物に関する罵倒」の第 4 の小区分である「d 神話の動物相」（Edouard 1967：315）は、さらに「古代怪物」、「精霊と中世悪魔」に分けられている。

- 古代怪物に関する表現（Edouard 1967：315）では、furies（ヘビの頭髪を持つ復讐の女神）、harpies（ハルピュイア、ギリシャ神話に登場する女面鳥身の生物）、hydre de Lerne（ヒュドラー、ギリシャ神話に登場する怪物）、lémures（夜行の死霊）、sirènes（半人半魚の海の精）、Polyphème（人眼の巨人食人種）などが挙げられている。

● 精霊と中世悪魔に関する表現（Edouard 1967：315）では、elfes（エルフ）、farfadets（いらずらな妖精→いらずら小僧）、ondines（北欧神話の水の精オンディーヌ→水浴する若い女、または女性の水泳選手）、vouivre（伝説上の蛇→意地悪な人）、dragons（ドラゴン→いらずらっ子）、ogres（おとぎ話の人食い鬼→悪党）、dames blanches（ドイツの伝承上の不吉な白衣の婦人）、fantômes（幽霊）、sorcières（魔女）、loup-garou（狼男）、zombis（ゾンビ）などが挙げられている。

II 植物に関する罵倒

「自然」の第 2 の中区分である「植物に関する罵倒」（Edouard 1967：316-317）は、「木」、「種」、「草」、「花」、「果物と新鮮な青果」に分けられている。

● 木に関する表現（Edouard 1967：316）では、châtaignier / marronnier（栗の木）、pêcher（桃の木）、prunier（ブラムの木）の 3 つの語彙を用いて、それぞれ quelqu'un qui distribue des châtaignes / des marrons / des pêches / des prunes à son entourage（周りの人に栗、桃、プラムを配る人→誰かを一発殴る人）のように用いることができる。他には、poirier（梨の木）を用いて、être de bonne poire（騙されやすい人）、pistachier（ピスタチオの木）を用いて、se dit d'un patron de bistrot qui pousse à la consommation, qui invite la clientèle à prendre de belles « pistaches »（飲食店の営業者が客を酔っぱらわせることを表す）などが挙げられている。さらに、sapin（モミの木）を用いて、mon beau sapin（私の美しいもみの木→「もみの木」という歌を瀕死の人の枕もとで口ずさんではいけないと考えられている。なぜなら、もみの木をクリスマスツリーとして売り出す際、木を切ってしまうため、瀕死の人の命を断ち切ってしまうという解釈になるからである）。他には、quelle souche！（なんて切り株だ！→切り株は深く土に根付いていることから、昔から同じ場所に定住していることを自慢げに話す家族のことを指す）などの用例が挙げられている。

● 種に関する表現（Edouard 1967：316）では、en avoir un grain（種を持つ→

頭が少しおかしい)、graine de fayot(干しインゲン豆の種→軍人の子弟、子供)、graine de gourde（ひょうたんの種→マヌケの卵)、mauvaise graine（悪い種→ろくなものにならない人)、être une pomme à pépins（種があるりんごになる→厄介事を引き寄せる顔をしている人）などが挙げられている。

- 草に関する表現（Edouard 1967：316）では、bête à manger du foin（バカで秣を食べる人→おおバカ)、mauvaise herbe(雑草→ろくでなし)、perdre son gazon（芝生を失う→髪の毛を失う、禿げる)、va te faire sarcler（雑草を刈ってもらってこい→髪が伸びすぎた青年に対して、髪の毛を切ってもらって来い）などが挙げられている。

- 花に関する表現（Edouard 1967：316）では、cherrer dans les bégonias（ベゴニアの値段を高くする→大げさに言う、めちゃめちゃなことを言う)、belle-de-Nuit（オシロイバナ（夜に美しい）→醜い女性に対して、明るいうちに顔を見せてはいけないことをそれとなくその女性に分からせるために用いる表現)、giroflée à cinq feuilles（葉っぱ→5 本指の後が残るほどの強い平手打ち)、mimosa（ミモザ→女性的な若い男性の向かって言う)、narcisse（スイセン→自己陶酔の人)、envoyer sur les roses（バラのとげの上に送る意味から、こっぴどくはねつける、追っ払う）などが挙げられている。

- 果物や新鮮な青果に関する表現（Edouard 1967：316-317）では、ramener sa fraise（イチゴを拾う→悪い時に顔を出す、なんでも口に出して言う)、prendre une pêche（桃を取る→一撃を受ける、殴られる)、tu me casses les pruneaux（プラムをつぶす→君にはうんざりだ)、va te rincer l'abricot（杏を洗ってこい→女性に向かって女性器を洗ってこい)、ce ne sont pas tes oignons（君のたまねぎではない→君には関係ない、君が口出しすることではない)、patate(じゃがいも→間抜け)、radis noir（黒いカブ→黒い服の神父)、espèce de concombre（きゅうり野郎→間抜け野郎)、espèce de cornichon（ピクルス野郎→間抜け野郎)、espèce de courgette（ズッキー

ニ野郎→間抜け野郎）などが挙げられている。

III　鉱物に関する罵倒

「自然」の第 3 の中区分である「鉱物に関する罵倒」（Edouard 1967：317）は、「燃料」、「金属」、「岩」、「宝石」、「塩」に分けられている。「塩」に関する用例は挙げられていないため、以下では提示していない。

- 燃料に関する表現（Edouard 1967：317）では、quelle tourbe（泥炭→つまらない人、またはヘビースモーカー）、tu es noir comme le charbon（君は石炭のように黒い→あらゆることに満足した人）、fleur de bitume（瀝青の花→客を引く売春婦）などが挙げられている。

- 金属に関する表現（Edouard 1967：317）では、fer（鉄）を用いて、sors de ta boîte en fer blanc si tu es un homme（男ならその白い鉄の箱から出てこい）、bronze（ブロンズ→少し日焼けした）、or（金）を用いて、tout ce qui brille n'est pas d'or（光っているから言って金だとは限らない）などが挙げられている。

- 岩に関する表現（Edouard 1967：317）では、brique（レンガ→レンガ造りの壁に衝突した車の運転手をからかう際に、faut-il que tu sois fauché pour lui faire bouffer des briques（車にレンガを食べさせるには貧乏でないといけないよ）のように用いることができる）。また、sable（砂）を用いて、tu es sur le sable ici, et pas sur le macadam！（ここは砂浜だ、砕石道じゃない！→砂浜で自分の夫に色目を使って通り過ぎる女に向かって言う表現である）。さらに、pierre（石→心が冷たい人）などが挙げられている。

- 宝石に関する表現（Edouard 1967：317）では、enfileur de perle（真珠に糸を通す→つまらない事に長々と時間を費やす人）、topaze（黄玉→職務懈怠の公務員）、être bouché à 1'êmeri（エメリー岩で塞がる→頭が鈍い人）などが挙げられている。

IV　液体に関する罵倒

「自然」の第 4 の中区分である「液体に関する罵倒」（Edouard 1967：317）では、「水」に関する表現が挙げられている。例えば、buveur d'eau（水を飲む人→酒が飲めない人）、pisse-vinaigre（陰気な奴）、ce n'est pas la mer à boire（海を飲むことではない→大して難しいことではない）、envoyer au bain（追い払う）、sirop de grenouille（雨水）、jus de chaussette（靴下の汁→まずいコーヒー）などが挙げられている。

V　ガスに関する罵倒

「自然」の第 5 の中区分である「ガスに関する罵倒」（Edouard 1967：317）では、「空気」に関する表現が挙げられている。例えば、tu ne manques pas d'air（お前は空気が欠けていない→ずうずうしい）、être dans le brouillard（霧の中にいる→頭がはっきりしない、何が何だかわからない）、être dans les nuages（雲の中→うわのそら）、schlinguer（臭い、におう）、avoir pété（屁をする）、avoir chié dans son froc, s'être oublié dans sa culotte（ズボンの中でくそをたれる、パンツの中にくそを忘れる）などが挙げられている。

1.1.3　第 3 区分「社会」

Edouard（1967）では、第 3 の大区分として「社会」（Edouard 1967：319-326）が挙げられており、その中区分として、「I 家族に関する罵倒」、「II 貴族に関する罵倒」、「III 美食に関する罵倒」、「IV 農業に関する罵倒」、「V 家事に関する罵倒」、「VI 呼称に関する罵倒」、「VII 宗教に関する罵倒」、「VIII 職業に関する罵倒」の 8 つが挙げられている。それぞれの区分に沿って罵倒表現を提示する[7]。

[7] 参考資料 3 参照

I　家族に関する罵倒

「社会」の第 1 の中区分である「家族に関する罵倒」（Edouard 1967：319）は、「祖先」、「子孫」、「傍系親族」分けられている。

● 祖先に関する表現（Edouard 1967：319）では、mère lapine（多産の女）、mère poule（母鶏→過保護の母）、mère maquerelle（淫売宿の女主人）、fille-mère（未婚の母）、père dénaturé（薄情な父親）、père fouettard（鞭打ちじいさん→気難し屋頑固者）、père peinard（のんきな人）、est-ce que je te demande si ta grand-mère fait du vélo ?（あなたのおばあさんが自転車に乗るかどうか聞かないでしょう？→なんでもかんでも聞いてくるおせっかいな人に対して用いる表現）、le vioc（年寄り）、le papa-gâteux（耄碌老人）、les vieux（年寄りたち→両親たち）、les croulants（崩れかかった→老いぼれたち）などが挙げられている。

● 子孫に関する表現（Edouard 1967：319）では、fils de pute（売春婦の息子→このくそ野郎）、fille de rien（誰の娘でもない）、enfant de salaud（げす野郎の子供）などが挙げられている。

● 傍系親族に関する表現（Edouard 1967：319）では、義母に関しては belle-doche（義母）、marâtre（義母→邪険な母親）、belle-daronne（義母）、reine mère（女王）、reine des emmerdeuses（厄介な女王）、faux frère（裏切り者）、la famille à Rikiki（ちっぽけな家族）、La famille Tuyau de poêle（近親相姦の家族）などが挙げられている。

II　貴族に関する罵倒

「社会」の第 2 の中区分である「貴族に関する罵倒」（Edouard 1967：319）は、「王様」、「王妃」、「公爵」、「各種名称」に分けられている。

● 王様に関する表現（Edouard 1967：319）では、roi des cons（バカの王様→大バカ）、roi des andouilles（間抜けの王様→大の間抜け）、roi des salauds（卑怯者

の王様)、roi des tapeurs（借金の王様）などが挙げられている。

- 王妃に関する表現（Edouard 1967：319）では、reine des salopes / reine des putains（売春婦の王妃)、reine des connes（バカの王妃)、reine des ordures（げす野郎の王妃）などが挙げられている。

- 公爵に関する表現（Edouard 1967：319）では、duc（公爵）が挙げられており、duc は罵倒語を後続させることでその罵倒語を連想させることができ、その罵倒語を意味する。例えば、ducocu（cocu 寝取られた人)、ducon（con バカ)、duconard（connard うすのろ)、ducouillon（couillon 間抜け）が見られる。さらに、これらの表現に「極度の意」を表す接頭辞 « archi- » を付け加えることもできる。この場合も語尾の罵倒語の意味を取る。例えば、archiducocu (archi+duc+cocu)（寝取られた人)、archiducon (archi+duc+con)（バカ)、archiduconard (archi+duc+conard)（間抜け）のように用いることができる。

- 各種名称に関する表現（Edouard 1967：319）では、chevalier paillard（猥褻な騎士→女をたくさん捕まえる騎士)、baron de cuir（革男爵→革製品を身にまとう社長)、marquise（侯爵夫人→une femme plus marquée que remarquée 美しい婦人よりもしわだらけの婦人)、hobereau（田舎貴族)、boyard（富豪)、courtisan（宮廷の人→追従者）などが挙げられている。

III　美食に関する罵倒

「社会」の第 3 の中区分である「美食に関する罵倒」（Edouard 1967：320）は、「ポタージュ」、「オードブル」、「前菜と盛り合わせ料理」、「野菜」、「サラダ」、「チーズ」、「デザートとアントルメ」、「香辛料・ファインハーブと各種調味料」、「砂糖菓子」に分けられている。

- ポタージュに関する表現（Edouard 1967：320）では、gros plein de soupe（スープで満たされた→太って腹の出た男、金持ち)、vermicelle（バーミセリ：細い

イタリア麺、はるさめ→髪の毛が長くて汚い人）などが挙げられている。

- オードブルに関する表現（Edouard 1967：320）では、va te faire cuire un œuf（卵を調理して来い→ほっといて）、me casse pas les olives（うんざりさせないで）などが挙げられている。

- 前菜と盛り合わせ料理に関する表現（Edouard 1967：320）では、cervelle d'oiseau（鳥の脳みそ→バカ）、regarde-moi cette bécasse（見て、このバカ女）、viande congelée（冷凍肉→冷たい女）、pisser une côtelette（骨付き背肉を漏らす→分娩する）、boudin（ブーダン→太っている人）、gros lard（豚の背脂やデブ）などが挙げられている。

- 野菜に関する表現（Edouard 1967：320）では、va donc, eh, purée（あっちへ行け、貧乏野郎）、plat de nouilles（麺料理→うすらとんかち）、ta bouche bébé, t'auras une frites（お前のその赤ちゃんの口なら、ポテト 1 本もらえるぜ→黙れ）などが挙げられている。

- サラダに関する表現（Edouard 1967：320）では、arrête tes salades！（サラダをやめろ！→嘘をつくな！）、pissenlit（たんぽぽ→自身のことを「奇妙な服を着た人」とからかった相手に向かって、Espèce de pissenlit（たんぽぽ野郎）を用いて言い返すことができる）などが挙げられている。

- チーズに関する表現（Edouard 1967：320）では、avoir le nez en quart de brie（4 分の 1 のブリチーズの鼻を持つ→大きくて尖った鼻を持つ人）、gruyère（グリュイエールチーズ→グリュイエールチーズは穴があることから、trou de mémoire 記憶の穴→記憶が欠落していることを意味する）などが挙げられている。

- デザートとアントルメに関する表現（Edouard 1967：320）では、en être comme deux ronds de flan（2 つの丸いプリンのようになる→目が点、目が丸くなるイメージでびっくり仰天の意、驚きのあまりにぽかんとしている人）、se retrouver en compote（コンポートになる→コンポートは煮詰めることから、めちゃくちゃに痛め

つけられることを意味する)、avoir une sacrée brioche（聖なるブリオッシュを持つ→大きなお腹を持つ）などが挙げられている。

- 香辛料・ファインハーブと各種調味料に関する表現（Edouard 1967：320）では、ma parole, tu chiques des gousses d'ail（おやまあ、にんにくを食べたね→口が臭い)、qu'est-ce qu'il se poivre（あいつはなんて自分にコショウかけているんだ→酔っ払いの人)、huile lourde（重い油→重要人物）などが挙げられている。

- 砂糖菓子に関する表現（Edouard 1967：320）では、viens pas me casser les nougats（ヌガーをつぶしに来ないで→うんざりさせることをしないで)、tu me fatigues les bonbons（君は私の飴（睾丸）を疲れさせる→君にはうんざりだ)、tu m'esquintes les pralines（君は私のプラリーヌを疲れさせる→君には疲れたよ)、pain de sucre（砂糖パン→禿げている人）などが挙げられている。

IV　農業に関する罵倒

「社会」の第 4 の中区分である「農業に関する罵倒」（Edouard 1967：321）は、「人物」、「道具」、「場所」、「農産物」、「畜産物」、「残留物」に分けられている。

- 人物に関する表現（Edouard 1967：321）では、paysan（農民)、bouseux（どん百姓)、manant（平民)、charretier（馬車馬)、valet de ferme（作男)、garçon d'écurie（馬丁)、idiot de village（村の愚か者）などが挙げられている。

- 道具に関する表現（Edouard 1967：321）では、faire une drôle de binette（引き鍬→おかしな顔をする)、tête de pioche（つるはし顔→頑固者)、fosse à purin（水肥の穴→汚れが落とし切れていない容器）などが挙げられている。

- 場所に関する表現（Edouard 1967：321）では、étable（家畜小屋)、porcherie（豚小屋→汚い場所)、écurie（馬小屋→整理整頓されていない家）が挙げられている。

- 農産物に関する表現（Edouard 1967：321）では、refiler une avoine（燕麦を与える→一人分の食糧を配給する)、bête à manger du foin（バカで秣を食べる）

などが挙げられている。

- 畜産物に関する表現（Edouard 1967：321）では、sale comme un cochon（豚のように汚い）、animaux de basse-cour（家禽飼養場の動物たち→貞操観念の薄い貴婦人たちと貴婦人に忠誠を誓った騎士たち）、lapins de clapier（飼いウサギ→団地に住む人々）などが挙げられている。

- 残留物に関する表現（Edouard 1967：321）では、purin（水肥）を用いて、être dans le purin jusqu'au cou（水肥が首のところまで浸かっている、または、être dans la merde（糞の中に浸かっている）→困惑する状況に置かれる）、chardons（アザミ→有害で頑固な人）、faire l'âne pour avoir du son（ふすまを得るためにロバの振りをする→大事なことを聞き出すためにバカを装う）などが挙げられている。

V　家事に関する罵倒

「社会」の第 5 の中区分である「家事に関する罵倒」（Edouard 1967：321-322）は、「台所用品」、「家庭用布類」、「身繕い用品」、「手入れ用製品」、「道具一式」、「家具と寝具」に分けられている。

- 台所用品に関する表現（Edouard 1967：321）では、espèce de cruche（水差しめ→とんま）、dame-jeanne（細首の大瓶→肉付きのよい人）、chanter comme une casserole（鍋のように歌う→調子外れに歌う）、planche à pain（パン用まな板→貧乳の女性）、un nez en pied de marmite（鍋の脚のような鼻→あぐらをかいた鼻）、ramasser à la petite cuillère（小さなスポーンを拾う→参ってしまいみじめな状態）、tu me bassines（君は私をぬらす→君にはうんざりだ）などが挙げられている。

- 家庭用布類に関する表現（Edouard 1967：321）では、lavette（掃除用の布切れ→役立たず）、torchon（雑巾→身なりが汚いの人）、tapis brosse（靴ふきマット→尊厳がない人）、doublure（裏地→代役のスタンドマン）などが挙げられている。

- 身繕い用品に関する表現（Edouard 1967：321）では、torche-cul（尻ふき紙

→くだらない本や新聞)、ce que tu peux être rasoir（どこまで君はかみそりになれるんだ→どこまで君は退屈な人なんだ)、regarde-toi dans une glace（鏡でよく顔をよく見ろ)、être sale comme un peigne（櫛のように汚い）などが挙げられている。

- 手入れ用製品に関する表現（Edouard 1967：321）では、poubelle（ゴミ箱)、ordures（ゴミ)、raclures（削りくず→人間のくず)、souillures（汚点)、lavasse（台所の洗い水→汚らしい奴)、rinçures（すすぎ水→水っぽい安い酒)、poussières（埃）などが挙げられている。

- 道具一式に関する表現（Edouard 1967：321）では、être un peu marteau（金槌になる→頭が少しおかしい)、ne pas valoir un clou（釘の価値もない→何の価値もない)、tu nous scies les oreilles（君は私たちの耳をのこぎりで切る→騒音が大きくてうるさい)、nous casse pas les burettes（小瓶（睾丸）を割るな→私たちをうんざりさせないで)、un drôle de pistolet（おもしろい拳銃→変な奴）などが挙げられている。

- 家具と寝具に関する表現（Edouard 1967：322）では、paillasse à soldats（兵士の藁布団→尻軽女)、se mettre à table（食卓につく→白状する)、une vie de bâton de chaise（でたらめな生活をする人）などが挙げられている。

VI　呼称に関する罵倒

「社会」の第 6 の中区分である「呼称に関する罵倒」（Edouard 1967：322）は、「婦人」、「紳士」、「男女」に分けられている。

- 婦人に関する表現（Edouard 1967：322）では、brinvilliers（ブランヴィリエ侯爵夫人、17 世紀のフランスの連続殺人犯→害毒をまき散らす人、うんざりさせる人)、marie-Couche-toi-là（尻軽女)、marie-Graillon（下品で不潔な女)、marie-la-suie（不潔で嫌悪感を起こさせる女)、marie-Salope（売春婦）などが挙げられている。

- 紳士に関する表現（Edouard 1967：322）では、mathusalem（メトシェラ、

聖書に出てくる最も長寿だった伝説の人物→死が近づいている老人)、harpagon（アルパゴン、Molière の戯曲『守銭奴』の主人公→非常にけちな人)、tartarin（タルタラン、Daudet の小説の登場人物→はったり屋)、quasimodo（カジモド、『ノートルダムの鐘』の主人公→醜い人)、un drôle de pierrot（滑稽なピエロ→とんま)、faire le Jacques（Jacques や Gilles は 17 世紀において単純、または間抜けを思い起こさせる名前→ジャックのようにバカなことをする)、gros jean（阿呆)、jean-foutre（ろくでなし）などが挙げられている。

- 男女に関する表現（Edouard 1967：322）では、giton（ペトロニウスの Satiricon という小説の登場人物→同性愛者の相手になる稚児)、hermaphrodite（ヘルマプロディトス→男女両性の特徴を備えた人）などが挙げられている。

VII　宗教に関する罵倒

「社会」の第 7 の中区分である「宗教に関する罵倒」（Edouard 1967：323）は、「天国と救済」、「地獄と罪」に分けられている。

- 天国と救済に関する表現（Edouard 1967：323）では、cagot（狂信者)、cureton（若僧の神父)、crétin（サヴォワ方言では Chrétien（キリスト教）を Crétin（バカ）と発音するため→大バカ野郎)、benêt（間抜けな人)、enfant de Chœur（コーラスの子供→ミサの侍者)、frère prêcheur（説教修道者会士→お説教屋でロやかましい人)、jésuite（イエズス会→猫かぶりの人)、espèce de Mardi-gras（謝肉の火曜日は仮装をすることから→カーニバル野郎）などが挙げられている。

- 地獄と罪に関する表現（Edouard 1967：323）では、démon（悪魔)、Satan（悪魔の長→fils de Satan 悪魔の息子→意地悪な人)、maudit（呪われた人)、esprit impur（不純な心)、esprit immonde（不浄の霊)、diable（悪魔)、pauvre pécheur（悔い改めた罪人)、âme perdue（失われた霊→気が狂った人)、sorcier（魔術師)、ange déchu（堕天使）などが挙げられている。

VIII　職業に関する罵倒

「社会」の第 8 の中区分である「職業に関する罵倒」（Edouard 1967：324-326）は、「食料品店」、「調度品」、「建物と公共土木事業」、「皮革と粗皮」、「製鉄業」、「服飾業」、「農業」、「水と森」、「公共サービス」、「医学と薬学」、「興行業」、「奉公人」、「各種職人」、「第 3 次産業」に分けられている。

- 食料品店に関する表現（Edouard 1967：324）では、boucher（肉屋→戦場で人を殺す兵士）、charcutier（豚肉製品屋→外科医）、poissonnier（魚屋→娼婦宿の女将）、épicier（食料品店→卑猥なことを言う人に対して用いる）、gâte-sauce（見習い料理人→できの悪い料理長）、bistrot（ピストロ→喫茶店の管理人）、caviste（酒蔵係→単純な人をだます人）などが挙げられている。

- 調度品に関する表現（Edouard 1967：324）では、antiquaire（骨董屋→老いぼれた哀れな奴）、encadreur（額縁職人→ボディーガード）、déménageur（引っ越し業者→一目見ただけで引っ越しをしたくなるような迷惑なお隣さん）、tapissier（じゅんたん装飾業者→酷い心配性な人）、matelassier（マットレス職人→お札がぎっしり詰まった財布を持つ人、お金持ち）などが挙げられている。

- 建物と公共土木事業に関する表現（Edouard 1967：324）では、plâtrier（石膏業者→メイクアップアーティスト）、fumiste（暖炉職人→ちゃらんぽらんで不真面目な人）、plombier（配管業者→歯医者）、terrassier（土木業者→格闘士）、couvreur（屋根職人→女たらし）などが挙げられている。

- 皮革と粗皮に関する表現（Edouard 1967：324）では、tanneur（皮のなめし工職人→迷惑な奴）、bourrelier（革製品の馬具製造人→好色男）などが挙げられている。

- 製鉄業に関する表現（Edouard 1967：324）では、chaudronnier（金物製作人→ジャズのドラム奏者）、ferblantier（ブリキ製品の製造人→宝石店主）、tôlier（銅板製造工→ホテルの主人）、manœuvre-balai（雑役夫→ダンスの振付師）などが挙げ

られている。

- 服飾業に関する表現（Edouard 1967：324）では、petite main（見習いのお針子→言葉遣いが汚い人）、mannequin（マネキン→動きがぎこちない人）、calicot（キャラコ綿布→有名な服仕立業）、retoucheur（服の寸法直し係→いろんなものに興味を持ち、あちこち触る人）などが挙げられている。

- 農業に関する表現（Edouard 1967：324）では、vacher（牛飼い→カウボーイ）、garçon d'écurie（馬丁→身だしなみが良くないウエーター）、gardeur de cochons（豚の世話人→生徒に清潔さを十分に教えられなかった先生）、gardeuse d'oies（ガチョウの世話人→高校の女子生徒の見張り役）、gardeuse de dindons（七面鳥の世話人→主人の信頼を裏切るお手伝いさん）などが挙げられている。

- 水と森に関する表現（Edouard 1967：324）では、 mât de misaine（フォアマスト→ひょろ長い人）、garçon baigneur（水浴する人→甘言でだます人）、bûcheron（きこり→自分との関係を切ろうとする偽りの友）などが挙げられている。

- 公共サービスに関する表現（Edouard 1967：324-325）では、poubellier（ゴミ収集の人→骨董屋）、bourreau（死刑執行人→要求が多い上級幹部）、croque-mort（葬儀人→靴の商売人、parce qu'il est dans les « pompes » （「葬儀」/「靴」の中にいる→この場合の pompes は「葬儀」と「靴」の 2 つの意味を持ち、また同音であるため、葬儀人と発話することで、靴の商売人を指し示すことができる）、avocat（弁護士→張り切って仕事に取り掛かる労働者）、balayeur de rues（道路を掃除する人→敵を地面にたたきつける）、contractuel（臨時職員→非常に強い罵倒であり、精神年齢が 7 歳くらいの精神薄弱者）、égoutier（下水道掃除人→長靴を履いた人）、artilleur（砲兵→使用人に乞食にお金をあげさせる新米金持ち）などが挙げられている。

- 医学と薬学に関する表現（Edouard 1967：325）では、infirmier（看護師→肉屋の見習い店員）、anesthésiste（麻酔医→しびれるほど魅力的な歌手）、oculiste（眼科医→近視の人）、empirique（経験主義の医者→やぶ医者）、masseur（マッサージ

師→女の体を撫でまわす手を持つ人）が見られる。

- 興行業に関する表現（Edouard 1967：325）では、machiniste（機械操作係→名前を思い出せない人）、funambule（綱渡り芸人→いつかは失敗する大胆な金儲け商人）、clown（ピエロ→目立ちたがり屋の人がバカらしいジェスチャーをして周囲の注目を独り占めにする人）、pin-up（セクシーな美女→魅力が全くない酷い意地悪女）、play-boy（チャラ男、プレイボーイ→がんの末期に現れる悪液質を患っている老いぼれ）、figurant（端役→まじめに仕事をしない人）、voltigeur（空中曲芸師→その場しのぎで生活をする詐欺師）、ouvreuse（劇場などの案内嬢→よくしゃべる女）、débutante（初心者→まだデビューしていない繊細な男の子）などが挙げられている。

- 奉公人に関する表現（Edouard 1967：325-326）では、valet de pied（使用人→テーブルの下で女性にちょっかいを出す男）、régisseur（管理人→自分の女や友達を監視しすぎている人）、jardinier（庭師→花壇を踏みつける迷惑な人）、grand veneur（狩猟長→異性を追い回す人）などが挙げられている。

- 各種職人に関する表現（Edouard 1967：326）では、cocher de fiacre（辻馬車の御者→タクシーの運転手）、ramoneur（煙突掃除夫→触る物をすべて黒く汚す人）、ferrailleur（くず鉄商→格闘する癖がある人）、reproducteur（繁殖用の家禽→大家族の父親）などが挙げられている。

- 第 3 次産業に関する表現（Edouard 1967：326）を以下に提示する。

商人に関する表現では、crieur de foire（お祭りで宣伝する人→乱痴気騒ぎの人が不適当な時間に街全体を起こしてしまう人）、camelot（露店商人→麻薬密売人）、homme de main（悪の手先→まだ毛が生えていない青年）、parfumeur（香水商→悪臭を放つ人）、cartomancienne（トランプ占い師→周りの人にポストカードを送り、自分が良い旅をしたことを見せびらかす人）などが挙げられている。

宗教に関する表現では、bedeau（教会の用務員→酷い太鼓腹の人）、sacristain（聖具納室係→すべてに対して評価や批判をする人）、curé（神父→くたくたに疲れて弱

った人、または温泉から出た人)、chaisière（椅子製造職人→相手に仕返しができなく、遠慮がちで臆病な人）などが挙げられている。

ホテル業に関する表現では、garçon de café（カフェのウエーター→ビストロの柱)、débitant（小売商→浮気症の人が自分の愛人関係を清算する)、traiteur（総菜屋→おおざっぱで想像力が豊かな人）などが挙げられている。

その他では、trois pour cent（3 パーセント→年金生活者)、gymnaste（体育専門家→八方手を尽くす人)、chaperon（頭巾→帽子店の店員）などが挙げられている。

1.1.4　第 4 区分「風習・公衆道徳」

Edouard（1967）では、第 4 の大区分として 「風習・公衆道徳」（Edouard 1967：327-332）が挙げられており、その中区分として、「I 7 つの大罪」と「II 汚名に関する罵倒」の 2 つが挙げられている。2 つの中区分に沿って罵倒表現を提示する[8]。

I　7 つの大罪

「風習・公衆道徳」の第 1 の中区分である「7 つの大罪」（Edouard 1967：327-329）は、「高慢」、「ねたみ」、「物欲」、「色欲」、「貧食」、「憤怒」、「怠惰」に分けられている。

- 高慢に関する表現（Edouard 1967：327）では、bluffeur（はったり屋)、bravache（空威張りする人)、enflé（鼻高々の人)、fanfaron（自慢話をする人)、fat（うぬぼれの強い人)、pécore（気取った娘)、péronnelle（おしゃべりのバカ娘)、pète-sec（横柄な人)、snobinard（ちょっとお高くとまった人)、vantard（自慢ばかりする人)、vaniteux（虚栄心の強い人)、faire le coq（虚勢を張る人)、ne pas se croire une petite merde（自分をクソな奴だと思っていない人→他人を見下す人)、être sorti de la cuisse de Jupiter（自分は神・ジュピターの足であるとうぬぼれている人→生ま

[8] 参考資料 4 参照

れ地位を鼻にかけ他人を見下す人）などが挙げられている。

- ねたみに関する表現（Edouard 1967：327）では、n'être qu'un grand jaloux（ひどく嫉妬深い人）、voyeur（のぞき魔）、en baver des ronds de chapeau（びっくり仰天する）、s'en lécher les babines（舌なめずりをする）、pas la peine de te fatiguer（自分を疲れさせる必要はない）、faire ceinture（何もなしで済ませる）、faire Tintin（何もない）などが挙げられている。

- 物欲に関する表現（Edouard 1967：327）では、être radin, être rat, être rapiat（けちである）、n'être qu'un grippe-sou（金に卑しい男でしかない）、n'être qu'un Harpagon（アルパゴン（Molière の戯曲『守銭奴』の主人公）でしかない→非常にケチな人）、être près de ses sous（自分のお金のそばにいる→お金に厳しい人）、être dur à la détente（財布の紐が堅い）、être vachement pingre（非常にけちな人）、être vachement rapace（非常に貧欲である）などが挙げられている。

- 色欲に関する表現（Edouard 1967：327-328）では、dépravé（変質者）、luxurieux（淫蕩な）、dévergondé（放蕩者）、libertin（みだらな人）、don Juan de Sous-Préfecture（郡庁の漁色家、女たらし）、noceur（遊び好きの人）、sybarite（惰弱で遊蕩好き）、coquin(e)（卑猥ないたずらっ子）、cuisse légère（軽い脚→尻軽女）、bacchante（淫奔な女）、drôle de coco（変な奴）、vieillard lubrique（色気違いの老人）、gourgandine（浮気女）などが挙げられている。

- 貧食に関する表現（Edouard 1967：328）では、espèce de goinfre（がつがつ食う奴）、gros goulu（食いしん坊）、sac à viande（肉の袋→大食いの人）、baffrer comme un porc（豚のように食う）、avoir les yeux plus gros que le ventre（お腹より目のほうが大きい→食べきれないほどの料理をお皿に盛る）、soûlot, soûlard, ivrogne, picoleur（酔っ払い、大酒飲みの）、pochard（飲んだくれ）、imbibé（酒漬かりの人）、lever le coude（肘を上げる→大酒を飲む人）、être plein comme une barrique（大樽のようにパンパンである）などが挙げられている。

● 憤怒に関する表現（Edouard 1967：329）では、cabochard（手に負えない人）、une vrai chipie（口うるさい高慢ちきな女）、une vraie furie（すぐかっとなる人）、une vraie mégère（がみがみ言う女）、un furibard（かんかんに怒る人）、un furieux（狂暴性のある狂人）、un râleur（いつも文句ばかり言う人）、un drôle d'énergumène（興奮して騒ぐ人）、être à cran（今にも怒りが爆発しそうである）、être aimable comme une porte de prison（牢獄の扉のように親切→無愛想な人）、monter sur ses ergots（挑発的な態度）、en sortir des vertes et des pas mûres（青いのと熟していないのを出す、verte は果実が熟しておらず酸っぱいことも意味するため、酸っぱくて熟していない言葉→耳ざわりな言葉を言う）などが挙げられている。

● 怠惰に関する表現（Edouard 1967：329）では、bougre de cagnard（怠け者め）、fainéant（怠け者）、ramier（ぐうたら者）、lymphatique（リンパ→のろまな人）、être partisan du moindre effort（最小限の努力をする→怠け者）、né un dimanche（日曜日に生まれた人→怠け者）、avoir un poil dans la main（怠け者の手のひらに毛が生える→ぐうたらもの）、se laisser vivre（気ままに暮らす）、se faire engraisser（自分を太らせる→よく食べる）、chercher du travail en priant le bon Dieu de ne pas en trouver（仕事が見つからないと神に祈りを捧げることで仕事を探す人）、être de la graine de clochard（浮浪者の種になる）、ne pas se casser le cul（お尻をつぶさない→難しいことを考えない）、compter les mouches au plafond（天井の蝿を数える→何もしていない時間、退屈な時間）などが挙げられている。

II　汚名に関する罵倒

「風習・公衆道徳」の第 2 の中区分である「汚名に関する罵倒」（Edouard 1967：329-332）は、「愚鈍と軽信」、「乱暴と暴力」、「虚言と多弁」、「衰弱と貧困」、「卑猥と下品」、「無遠慮と執拗」、「卑猥と堕落」、「衝動」、「不潔」、「欺瞞と虚言」、「窃盗と不正」、「見栄」、「低劣」に分けられている。

- 愚鈍と軽信に関する表現（Edouard 1967：329）では、pauvre sot（バカげた野郎）、sombre idiot（愚か者め）、triple imbécile（3 倍バカ→大バカ）、espèce de gogo（騙されやすい人）、grand jobard（軽々しく信じる人）、obtus（理解が遅く鈍い人）、être bête comme ses pieds（自分の足のようにバカである→ひどくバカである）、avoir les méninges constipées（脳の髄膜が便秘している→脳が鈍い人）、le cerveau ramolli（柔らかくなった脳→ぼけた脳）、être bouché à l'émeri（愚鈍である）などが挙げられている。
- 乱暴と暴力に関する表現（Edouard 1967：329）では、égorgeur（のどを切る殺人者）、tueur（殺人者）、assassin（人殺し）、voyou（非行少年）、apache（ごろつき）、nervi（殺し屋）、escarpe（殺人強盗犯）、criminel（犯罪者）、brigand（山賊）、incendiaire（放火犯人）、rustre（無礼ながさつ男）、espèce de sauvage（野蛮人）、gibier de potence（縛り首に値する奴）、espèce de soudard（粗暴野郎）、être une sale engeance（汚い連中）などが挙げられている。
- 虚言と多弁に関する表現（Edouard 1967：329-330）では、un babilleur（おしゃべりな人）、un baratineur（口が達者な人）、un bonimenteur（でたらめを言う人）、cherrer dans les bégonias（物事を大げさに言う人）、clabauder（悪口を言いふらす）、être le roi des charrieurs（ほら吹きの王様）、être le roi des menteurs（嘘つき王）、être un margoulin（ずる賢い商人）、être un effronté（ずうずうしい人）、faire son petit cinéma（芝居がかった態度を見せる）、raconter des histoires（物語を語る→でたらめなことを言う）、être un peu trop finaud（少し狡猾な人）、jacasser comme un perroquet（オウムのように鳴く→うるさくしゃべりまくる）、tailler une bavette（ぺちゃくちゃとおしゃべりをする）、ferme ton clapet（口を閉じろ）、je m'en tape（関係ない、どうでもよい）などが挙げられている。
- 衰弱と貧困に関する表現（Edouard 1967：330）では、chiffe molle（腰抜けの人）、loque humaine（気力を失ってぼろ切れのようになった人間）、lessivé（洗濯

済み→疲れ切ってへとへとの人)、petit crevé（くたびれた人)、pétochard（臆病な人)、peureux（怖がりの人)、poltron（意気地なし)、timoré（小心者)、ne plus avoir un poil de sec（乾いた毛が一本もない→汗だくになる)、tu n'as rien dans le ventre（お腹の中に何もない→何の意欲もない)、tu n'as pas de couilles au cul（お尻に睾丸がない→意気地なし)、miséreux（みすぼらしい人)、sans le sou（お金がない)、gueux famélique（飢えた乞食)、va-nu-pieds（浮浪者)、ramasse-miettes（パンくず用卓上ブラシ→残飯やごみをあさる人）などが挙げられている。

- 卑猥と下品に関する表現（Edouard 1967：330）では、ostrogoth（変人)、dégueulasse（気持ち悪い奴)、grande gueule（でかい顔→口先だけの人)、mufle（下品な奴)、grand sans-gêne（無遠慮でずうずうしい人)、poissard（魚売り女→下品で口汚い女)、espèce de mal embouché（口汚い奴め)、ta gueule, eh, vulgaire（黙れ、下品な奴め)、chercher ses mots dans une poubelle（ゴミ箱から言葉を探す→汚い言葉ばかり口にする人）などが挙げられている。

- 無遠慮と執拗に関する表現（Edouard 1967：330-331）では、concierge（管理人→管理人のようにおしゃべりでがさつな人)、ce que tu peux être pénible（君はどこまでうっとうしい人なんだ)、être un fâcheux（厄介者)、être un persécuteur（迫害者)、tu m'agaces（君にはいらいらする)、ce que tu peux être collant（君はどこまでしつこい人なんだ)、c'est la merde un type comme ça !（こいつみたいな奴は人間のくずだ！)、ne commence pas à foutre ton nez là-dedans（そこに鼻を突っ込むな)、faut toujours qu'il colle son nez dans nos fesses !（彼はいつも鼻を私たちのお尻に貼り付けている！→彼はいつも私たちを混乱させ困らせる人)、on ne lui demande pas si sa mère fait du strip-tease（彼に彼のお母さんはストリッピショーをするかどうかなんて聞かないでしょ→いちいちこちらの話に首を突っ込んでくる人)、on lui suggère d'aller voir ailleurs si j'y suis（ほかの場所に私がいるか見てくるように勧める→他へいけ)、on lui suggère d'aller faire soigner sa chaude-pisse（淋

病を治療してくるよう勧める→あっちへ行け）、on lui suggère d'aller foutre son grain de sel ailleurs（別の場所に塩を撒いてくるよう勧める→他をあたれ、相手にこの場から立ち去ってほしい際に用いられる表現）などが挙げられている。

- 卑猥と堕落に関する表現（Edouard 1967：331）では、créature（素行の悪い女）、grue（ツル→淫売婦）、pouffiasse（品のない女）、tapineuse, catin, putain, pute, putasse（売春婦）、greluche（情婦や愛人）、femme entretenue（妾）、cocotte-minute（圧力鍋→連続で客をとる売春婦）、pompeuse, tribade, gouine, gousse（レズビアン）、chienne en chaleur（発情している雌犬→色情症の女）、homosexuel, enculé, pédale, pédé, tapette（男性同性愛者、ホモ）、maquereau, maquerelle（女衒、淫売宿の主人）、se vautrer dans le stupre（淫蕩生活にふける）、mener une vie de patachon（放埒な生活をする）、cache tes cuisses ou je vais vomir（腿を隠せ、吐いてしまう）、si tu commences ici, tu finiras en enfer（ここで始めたら地獄に落ちる→家に着くまで待て）などが挙げられている。

- 衝動に関する表現（Edouard 1967：332）では、tête de Linotte（慌て者）、sans cervelle（脳みそがない人）、 écervelé（思慮の足りない人）、étourneau（おっちょこちょいな人）、évaporé（蒸発した→軽率な人）、possédé（悪魔に取りつかれた人）、ce n’est pas parce que tu es dans le brouillard que tu dois foncer dedans（霧の中にいるからってさらに奥に突き進む必要はない）、qu'est-ce que tu as dans le crâne ?（いったい君の頭の中には何が入っているんだ）などが挙げられている。

- 不潔に関する表現（Edouard 1967：332）を見ていく。

身体に関する表現では、crasseux（垢だらけのうす汚い奴）、crado（非常に不潔な奴）、dégoûtant（不潔な奴）、galeux（疥癬病にかかった人）、va te laver, plein de poux（体洗ってこい、シラミだらけの奴め）、souillon（だらしない人）、espèce de pouacre（汚いブスめ）、espèce de cochon（ブタ野郎）、tire-toi, raclure, tu me fous des puces（あっち行け、くず、ノミをまき散らすな）、viande pourrie（腐った肉）、

pue-la-sueur（汗臭い人）、pue-de-la-gueule（口臭がきつい人）、pue-la-merde（くそくさい）、pue-du-cul（ケツ臭い）、un vrai seau de merde（糞樽）、ce que tu peux schlinguer, mon salaud（どこまで臭うんだ、げす野郎）、c'est une vraie infection（感染症の人）、ça tape（悪臭がする）、ça cogne（悪臭がする）などが挙げられている。

道徳的倫理に関する表現では、un beau dégueulasse（非常に卑劣な事態）、une belle saleté（卑劣な振る舞い）、une belle saloperie（下劣な行為）、une belle salope（売春婦のように振る舞う女）、une vraie bouche d'égout（下水口→ひどく汚い場所）、une vieille grognasse（老いぼれた娼婦）、une belle ordure（汚い言葉）、 une belle merde（糞→困惑すること）などが挙げられている。

- 欺瞞と虚言に関する表現（Edouard 1967：332）では、empileur（泥棒）、floueur（いんちき野郎）、fourbe（腹黒い人）、hypocrite（偽善者）、patte-pelu（猫かぶりの人）、blagueur（でたらめを言う人）、imposteur（詐欺師）、faux jeton（ペテン師）、faux témoin（偽証者）、faussaire（捏造者）、félon（不忠者）、mouchard（密告者）、charlatan（いかさま）、renégat（背教者）、ne pas se laisser posséder par un con pareil（このような愚か者に騙されないよう注意する）などが挙げられている。

- 窃盗と不正に関する表現（Edouard 1967：332）では、brigand（山賊）、entôleur（金品をだまし取る人）、gredin（いんちき野郎）、profiteur（悪徳利用する人）、larron（こそ泥）、prévaricateur（不正行為をする人）、tricheur（いかさま）、arnaqueur（ペテン師）、concussionnaire（公金横領者）、pick-pocket（すり）、tire-laine（つじ強盗）、maraudeur（畑泥棒）、voleur de grand chemin（追いはぎ）、coupeur de bourse（巾着切り）、spoliateur（略奪者）などが挙げられている。

- 見栄に関する表現（Edouard 1967：332）では、rabat-joie（他人の興をそぐ人）、rabâcheur（くどくどいう人）、éteignoir（座をしらけさせる人）、bonnet de nuit（夜の帽子→陰気な人間）、punaise de sacristie（信心の虫）、prêcheur（説教好きの

人)、emmerdeur（厄介な奴)、impuissant（無能な奴)、épuisé（疲れてくたくたの人)、dyspeptique（消化不良)、mort-vivant（生きる屍)、repenti（悔悛者)、bégueule（淑女ぶった人)、jaloux（嫉妬深い人)、cœur de pierre（非情な心）などが挙げられている。

- 低劣に関する表現（Edouard 1967：332）では、valet（召使)、lèche-cul（お尻を舐める→ごますりの人)、n'être qu'un faux-cul（偽りのケツでしかない→偽善者)、espèce de rampant（ぺこぺこしてお世辞を言う人)、espèce de donneur（おべっか使いの人)、cireur de bottes（靴磨きの人→お世辞を言う人)、béni oui-oui（何にでも賛同する人)、n'être qu'un plat courtisan（追従者でしかない)、passer de la pommade（ごまをする）などが挙げられている。

ここまで、Edouard（1967：305-332）の 4 つの区分に沿って、フランス語の罵倒表現を提示した。以下では、これらの罵倒表現の多様性の特徴をまとめておくことにする。

1.2　Edouard（1967）の記述の特徴

Edouard（1967：305-332）が記述する罵倒表現の特徴として、以下の 2 点を挙げることができる。

1 点目は、フランス語の罵倒表現にはさまざまな「言語表現形式」が用いられている点である。Edouard（1967：305-332）が提示するフランス語の罵倒表現には、名詞（merde「くそ」)、動詞（chier「くそをたれる」)、形容詞（gros「太い」、sale「汚い」)、派生語（merde「くそ」の派生語 démerdard「抜け目のない人」、con「バカ」の派生語 connard「うすのろ」)、合成語（casse-couille「うんざり」)、慣用表現（vas te faire foutre「あっち行っちまえ」、face de …「～顔」、espèce de…「～野郎」）など、さまざまな言語表現形式が用いられている。

これらの言語表現形式に見られる語彙には 2 つの特徴がある。1 つ目は、例えば、名詞では connard（うすのろ）、pute（売春婦）、cul（ケツ）、動詞では chier（くそをたれる）、foutre（やる、する）、形容詞では pauvre（かわいそうな）sale（汚い）などのように、語彙自体がマイナスの意味を持つ下品な言葉であり、卑劣や汚らわしい意味を表す語彙である。2 つ目は、例えば、名詞では cochon（ブタ→太った人）、mouche（蠅→不潔な人）、cornichon（ピクルス→間抜けな人）、形容詞では、grand（大きい）、petit（小さい）、gros（太い）などのように、語彙自体は下品な意味を持たず、いわゆる「普通名詞」が用いられており、文脈によって、比喩的に罵倒表現として用いられるという特徴が挙げられる。

(ii) 2 点目は、Edouard（1967：305-332）は世界を構成するさまざまな要素に注目し、「テーマ」によって罵倒表現を分類している点である。これまで見てきた、l'homme（人類）、la nature（自然）、la société（社会）、les mœurs / la morale publique（風習・公衆道徳）の 4 つの大区分、また各大区分に見られる、中区分、小区分のそれぞれの区分が「テーマ」にあたる。例えば、cochon（ブタ）、chienne（雌犬）などは「動物」というテーマに属し、merde（くそ）、chier（くそをたれる）などは「排泄物」というテーマに属している。Edouard（1967：305-333）の記述は罵倒表現の語彙が示す意味の特徴に注目した辞書的記述であり、フランス語の罵倒表現の多様性が秩序だって分類され、顕著に表れている。

しかしながら、Edouard（1967）がどのようにしてこのような分類に至ったのか、また、どのようにしてこれらの語彙を、日常会話に用いられる「普通」の言葉としてではなく、「罵倒表現」として捉えているのかに関しては言及されていない。Edouard（1967）は、人類に関する語彙、自然に関する語彙のように、世界を構成する要素や社会的分類に従い罵倒表現を区分しているが、各区分に見られるすべての下品な語彙が「罵倒表現」として機能するとは限らない。

Edouard（1967）が記述しているさまざまな罵倒表現は、共通して「人物を対象に

発話される」という言語的特徴を持つ。また、これらの表現は、話し手が聞き手の嫌がるようなことについて言及しり、または聞き手を不愉快にさせる表現である。Edouard（1967）の分類において、人類に関する表現では、例えば、お腹が出ている、背が低いなど、「人物」に関して言及している。その人物が持つコンプレックスを取り上げ、敢えて発言することによって、相手に精神的にダメージを与えることができるような語彙がこの罵倒表現リストに現れているといえる。同様に、自然社会に見られる動物名詞、食に関する名詞、道具に関する名詞といった表現も、その表現が示す物が持つ特徴を比喩的に「人物」に適用させられる表現を発言することで相手に対する罵倒表現として機能させることができる語彙を挙げている。

ここで混同してはいけないのは「罵倒表現」と「平俗な言葉」である。平俗な言葉（la vulgarité）とは、その人の教育背景や社会的地位を示すことができる言葉でもあり、例えば、「規範語彙」に比べてくだけた言い方（たばこであれば cigarette に対して clope）は、相手の人間価値を貶める要素がなければ、罵倒表現として用いられにくいのである。これは、cigarette（たばこ）を clope と発話することと、excrément（糞）を merde、prostituée（売春婦）を pute と発話するのでは、言葉の表現レベルが異なる。clope は「たばこ」という物を指し示すことに留まるが、merde や pute は社会的に下位階層に位置する人物の発話を表したり、発話状況によっては罵倒表現として用いることができる。

「罵倒」の基本は聞き手を言葉で貶められるかどうかである。Edouard（1967）が記述している罵倒表現の目録に現れている語彙は、発話することで相手を不愉快にする語彙であったり、発話することで相手を貶めることができる表現である。そのため、janvier（1 月）、paris（パリ）、la tour Eiffel（エッフェル塔）のような名詞や固有名詞は、凝結表現や慣用表現の形を取らない限り、相手を貶める要素が表れにくく罵倒表現として機能しにくいのである。

さらに、Edouard（1967）の研究では、これらの罵倒表現がどのように罵倒表現と

して機能しているのかに関しても十分に記述されていない。Connard！（愚か者！）は語彙自体が下品な言葉であり、一般的にはタブー言葉とされているが、タブー言葉を敢えて発話することで、どのような言語効果がもたらされるのかは明記していない。また、下品さを持たない身体名詞、動物名詞、植物名詞など、がどのようにして罵倒表現として機能し、どのように相手に罵倒効果をもたらしているのかに関しても触れられていない。このように、Edouard（1967）の研究は、言語の持つ機能、また罵倒という本質に関する考察は十分に行われているとはいえない。

Edouard（1967）の特徴をもう 1 点付け加えるのであれば、Edouard（1967）が記述している「テーマ」には、多くの言語が共通して持つ「テーマ」もあれば、フランス語特有の「テーマ」もあることが挙げられる。例えば、糞尿表現と性的表現は比較的に多くの言語において見られるが、神に対する冒涜、または教会に関する表現が含まれる「宗教」というテーマはキリスト教文化圏に限ったものである。そのため、フランス語において罵倒表現として機能する表現が他の言語においても同じく罵倒表現として機能するとは限らない。罵倒表現はそれぞれの言語が持つ意味特徴が現れ、それぞれの文化が反映されているといえる。フランス語のみに見られるテーマであるかについては、他言語と比較し、使用の有無や頻度を調査する必要があるが、少なくとも、Edouard（1967）では、フランス語の罵倒表現をもとに「テーマ」が設けられているといえる。

Edouard（1967）は、*Dictionnaire des injures* 『罵倒表現辞書』というタイトルにもあるように、フランス語の罵倒表現を « injure »（罵倒）という用語で統一している。しかし、フランス語の罵倒表現研究を基に考えると、injure は罵倒表現における 1 つのタイプである。次章では、フランス語の罵倒表現のタイプを、先行研究を踏まえて検討する。

第 2 章

フランス語の罵倒表現の形式と表現類型

本章では、フランス語における主な罵倒表現に関する先行研究を取り上げながら、罵倒表現のタイプについて検討する。

2.1　Edouard（1967）

Edouard（1967）はフランス語の罵倒表現を « injure »（罵倒）という用語で統一している。以下では、Edouard（1967）の用いる injure という罵倒行為について考察する。

2.1.1　Injure（罵倒）の意味解釈

Edouard（1976）は、injure を解釈する上で、« les reproches »（非難）と « les menaces »（脅迫）を理解する必要があるとしている。Edouard（1976：17）によれば、les reproches（非難）は確実な理由を必要とし、相手に非難の内容を重視してもらうためにも、事態に応じて慇懃な言葉遣いで発話されるものである。また、les menaces（脅迫）にはある程度の明確さと真実さが必要であり、話し手は脅迫という行為を用いて、ある状況、または相手の振る舞いを変化させようとするのである。以上で挙げた、「非難」と「脅迫」とは区別して、Edouard（1976：17-18）は injure を以下のように定義している。

> L'injure n'est rien de tout cela. Imprécise, excessive, souvent triviale, elle ne vise ni à accuser, ni à terroriser, ni à porter un préjudice d'aucune sorte ; mais

seulement à chatouiller l'amour-propre de celui ou de celle auquel on la décoche sans autre motif qu'une irritation illogique et momentanée ou le besoin irraisonné d'attirer l'attention. (Edouard 1967：17)

（罵倒はこれらのどれにも当てはまらない。罵倒という行為は、不明確で度が過ぎた発言であり、多くの場合において下品である。罵倒は相手を責めたり、恐怖感を与えたり、なんらかの被害を加えることではない。罵倒は非論理的、または一時的ないらだちによって他人の自尊心を刺激するものであり、周囲の注目を引くための行為である。）

Edouard（1976：18）はまた、on n'injure pas quelqu'un quand on le qualifie（聞き手の性質を記述する場合は、その人を罵倒しているとは言えない）と述べており、例えば、« paresseux »（怠け者）という発話は、「怠けている」という事実をもとに相手を形容しており、この場合は相手の行動に対する非難であり、罵倒ではないとしている。Edouard（1976：18）は、「怠け者」に向かって「罵倒」をするのであれば、むしろ、« Bougre de feignasse ! »（ぐうたらめ！）、または « Ce que tu peux être flemmard ! »（どこまで怠け者でいられるんだ君は）という表現の方がより適切であると述べている。つまり、言及対象を描写するのに適している形容詞をそのまま用いるだけでは、罵倒という行為は成り立たない。本来用いられる表現の形式を変化させたり、他の表現で代用することで罵倒へとつながると理解できる。

Edouard（1976：18）は続けて、paresseux（怠け者）は injure として決して機能できないわけではなく、短い文の最後に位置させ、相手に注意を促し警告する状況であれば、罵倒として機能させることができると述べている。例えば、青信号に変わってもなかなか車を発進させない運転手に向かって、« Tu pouilles, eh, paresseux ? » (Edouard 1976：18)（寝てるのか、おい、怠け者？）のように用いるのであれば、injure

となり得る。しかし、Edouard（1976：18）は、このような発話は、やはり多少の礼儀正しさがうかがえるため、効果的な罵倒表現とは言えないとしている。

さらに、Edouard（1967：21）によれば、injure は何よりもまず明確である必要がある。

> A l'encontre de l'Argot, qui se veut intelligible aux seuls initiés, le vocabulaire de l'injure se doit d'être accessible au plus grand nombre. L'injure courante est généralement construite de manière à être comprise, sinon de tout le monde, au moins de la personne à qui elle est décochée. （Edouard 1967：21）
>
> （特定のグループにのみ理解される隠語とは反対に、罵倒の語彙はより大多数の人々に理解されなければならない。普段使用されている罵倒表現は一般的には理解されやすく、少なくとも罵られる人物にすぐに理解されるように構成されている。）

Edouard（1967：33）は injure が用いられる状況に関しても述べており、それによれば、罵倒行為を必要とする状況は、例えば、「相手に自分の意見を聞き入れてもらえない時」、または「相手の不正行為によって自身の行動が妨げられた時」など、ある明確な状況に直面した時である。しかしながら、これらの状況において、辛辣な表現や強烈な言葉をすばやく作り出せることは珍しく、これらの「困惑状況」に直面した際に発話される言葉は、injure というよりも、l'ordure（汚い言葉）に近い表現であるとしている。この記述から、Edouard（1967：33）は injure と ordure（汚い言葉）を区別していることがわかるが、具体的に ordure がどのような言葉であるかに関する用例は挙げられていない。

injure が発話される際、たいていの話し手は怒りに任せて罵倒を発話するため、聞き手や発話状況にはまったく関係のない表現や語彙が用いられる場合もしばしば見

受けられる。つまり、罵倒場面において、語彙が持つ本来の意味から逸脱していても、罵倒表現として機能する場合があり、状況に対して適切に使用しているのであれば、そのような語彙も罵倒表現として不自然ではないのである。例えば、Edouard（1967：34）では、« Dégage, eh, serpillière ! »（あっちへ行け、床雑巾！）、« Fais pas ta gueule de veau mort-né ! »（お前のその死んだ牛のような顔をするな！）など、雑巾、牛といった身の回りの物を用いて、比喩的に罵り相手を言い表す用例が挙げられている。

Edouard（1967）はさらに、こういった優れた想像力を持ち罵倒表現をうまく作り出し使いこなす者は、喧嘩好きな人やすぐ激怒してしまう人よりも、むしろ物静かで落ち着きがあって気さくな人である場合が多いと述べている。

2.1.2　Injure（罵倒）の表現形式

Edouard（1967：18）によれば、injure は、基本的には « le tutoiement »[9] または、3 人称 « il /elle »[10]（彼 / 彼女）を用いて発話される。この記述を踏まえて考えれば、« tu » と « il /elle » はいずれも聞き手に対する発話であり、injure は発話相手を必要とし、相手に向かって発話されるものとして捉えることができる。

Edouard（1967：19）は、injure の表現形式として（A）独立語と（B）罵倒成句の 2 種類を挙げており、また（A）と（B）のそれぞれにおいて、さらに（a）個人（一人）に対する罵倒と（b）複数の人（グループ）に対する罵倒、の 2 つ分けられるとしている。

(A) Le vocable isolé：*pouffiasse, salopard, morue, chameau…*

---

[9] « le tutoiement » は、tu を用いた親しい関係にある相手に対する話し方である。

[10] 例えば、celui-là, ce qu'il peut être flemmard !（あいつ、どこまでぐうたらなんだ！）のように 3 人称 il を用いた発話である。

(B) La locution injurieuse：*Va te faire foutre…, Espèce de peau de fesse…*

(Edouard 1967：19)

（独立語：売春婦、卑怯者、タラ→売女、ラクダ→いじわる女）

（罵倒成句：くそくらえ、ブランド野郎）

(a) L'injure visant un individu déterminé：Con !

(b) L'injure visant l'ensemble d'une collectivité：Bande de cons ! (ibid.)

（－個人を対象とする罵倒：バカ！）

（－複数の人を対象とする罵倒：バカども！）

Edouard（1967：72）は、injure の言語形式をこのように挙げており、また injure について以下のように述べている。

> L'injure la meilleure est la plus courte. Mais le vocable le plus incisif risque de tomber à plat si on le décoche du but en blanc：dans la plupart des cas, la personne à qui on l'a lancé ne l'entend pas. (Edouard 1967：72)
>
> （最も短い表現が最もよい罵倒である。しかし、鋭い言葉を突然相手に投げつけると、失敗する恐れがある。多くの場合、その言葉を言われた人物はその言葉が聞こえていない。）

Edouard（1967：72）によれば、ざわめきの中、または、相手が無関心の状況において発話される « Idiot ! »（バカ！）や « Cruche ! »（とんま！）のような下品な言葉は、確実に聞き手に伝わらない。そのため、下品な言葉の前に、他の短い表現を前置させることで、聞き手の注意を引くことができる。例えば、単に « Idiot ! » と発話するよりも、« Regarde-moi cette espèce d'idiot ! »（見ろよ、あのバカ！）のように、« Regarde-moi cette espèce d'… » が先行する場合は、相手は後続する言葉に注

意深くなるのである。なぜなら、たいていの人は、このような発話に後続する言葉はほぼ下品な言葉であるという認識を持っており、sympathique（親切）のような語彙が続くことはないと考えられているからである。

Edouard（1967：72）は、下品な言葉を導入することができる成句にはさまざまなものがあるが、その長さも大事であると指摘している。

短文の形式を取る用例には、« Quel … ! »（なんて…！）を伴う用例が見られ、例えば、« Quel sot ! »（なんてバカなんだ！）のように感嘆的に用いることができる。Edouard（1967：72）によれば、このような短文は、活発で反応が素早い相手にのみに向かって発話されるべきである。それ以外の相手には、以下のような表現を用いることができる。

(1) « Non mais… Quel abruti ! » (Edouard 1967：72)

（なんだよ…なんてバカなんだ！）

(2) « En bien… Quel énergumène ! » (ibid.)

（そうね、なんて狂った人なんだ！）

(3) « ça, alors… Quel cornichon ! » (ibid.)

（なんと…なんてピクルス→なんて間抜けなんだ！）

このように、« Quel N » の前に、間投詞的表現を付け加えることで、相手に発話を注目させ罵倒効果を高めることができると記述している。

Edouard（1967：73-74）はまた、下品な言葉に前置することのできる凝結表現として、「成句」と「形容詞」の 2 種類を挙げており、以下に提示する。

成句：« Espèce de… »（～野郎、～め）

« Va donc, eh… »（あっちへ行け、この～）

« Vise un peu ce (regarde-moi ce)… » （あの～を見ろよ）

« Bougre de… » （～な奴め）

« Graine de… » （～の種）

« Fils (filles ou enfant) de… » （～の息子、～の娘、～の子供）

« Tête de… » （～顔、～頭）

形容詞：« foutre… » (foutu menteur) （やる）「酷い嘘つき」

« Grand… » (grande perche) （大きい）「大きい竿→のっぽな人」

« Sale… » (sale merdeux) （汚い）「くそ野郎、くそガキ」

« Petit… » (Petit salaud) （小さい）「げす野郎」

« Pauvre… » (Pauvre mec) （哀れな）「かわいそうな奴」

« Gros… » (Gros cochon) （太い）「汚い奴」

« Sacré… » (Sacré couillon) （聖なる）「畜生め」

« Maudit… » (Maudit peigne-cul) （呪い）「卑猥な奴」

(Edouard 1967：73-74 日本語訳筆者加筆)

Edouard（1967）は短い表現ほどよい罵倒表現であると述べつつも、罵倒表現がうまく機能するためには、他の表現を前置させることが望ましいとしている。このように、Edouard（1967）は、罵倒表現の言語形式について記述しているが、より深い考察に至っていない。例えば、« Idiot ! » は、単独で用いられる場合でも罵倒表現として機能するが、いつどのような状況で発話されるのか、また、« Idiot ! » （バカ！）と « Espèce d'idiot ! » （この大バカ野郎！）にどのような違いがあるのか、さらに、« Regarde-moi cette espèce d'idiot ! » （見ろよ、この大バカ野郎！）という場合はどのような罵倒効果がもたらされるのかなど、罵倒そのものの機能に関しては記述されていない。

以上で見てきたように、Edouard（1967）が定義する injure は一時的ないらだちによって突発的に発話されるものであり、周囲の注目を引くための行為であると解釈することができる。また、injure は聞き手を必要とし、聞き手に向かって発話する表現であるといえる。さらに、injure は明確である必要があり、ある特別な状況において発話され、たとえその表現が字義的意味から逸脱していても、発話状況が適切であれば、罵倒として機能することができる。

このように、Edouard（1967）は injure の特徴を記述する上で、どのような人物が罵倒の対象となり得るのか、どのような表現が罵倒として適切で効果的であるか、また罵倒された際どのような反応が適切かなど、罵倒の手法に重点を置き、injure の特徴について非常に詳しく記述している。しかし、これらは社会における罵倒の運用に関する記述であり、すでに述べたように、罵倒表現そのものが持つ機能、罵倒表現として機能できる語彙の特徴に関しては言及されていない。

Edouard（1967：19）は、フランス語の罵倒表現を injure として取り上げ、le gros mot（下品な言葉）、le juron（ののしり）、les écarts de langage（失言）、la calomnie（誹謗）、la diffamation（中傷）などとは区別しながらも、injure 以外の用語に関しては詳しく考察していない。以下では、injure には相当しないとされる罵倒表現について考察している先行研究をみていく。

2.2. Guiraud（1976）

Guiraud（1976）は、以上で挙げた Edouard（1967）*Dictionnaire des injures*『罵倒表現辞書』に対して、« il est fort bien fait et nous aurons l'occasion d'y puiser largement, mais ce n'est pas une étude linguistique »（Guiraud 1976：5）（非常に良い研究であり、罵倒表現の知識を深めるには良い機会だが言語学的研究ではない）と批判的な意見を示している。

Guiraud (1976) は、罵倒のタイプについて考察し、gros mots (下品な言葉)、injure (罵倒)、juron (ののしり) の 3 つを区別して論じている。以下でそれぞれ検討する。

2.2.1 Gros mots（下品な言葉）

Guiraud（1976：9）によれば、gros mots（下品な言葉）は 2 つの特徴を持つ。1 つは、言葉の contenu（意味内容）であり、下品な言葉には la sexualité（性）、la défécation（排泄物）、la digestion（消化）などに関する語彙が含まれている。もう 1 つは、言葉の usage（運用）であり、言葉の運用は社会階層と関係し、下品な言葉は教養のあるエリート階層よりも、下級階層に位置する民衆が使用する言葉であるとしている。Guiraud（1976：9）は、gros mots を考える上で、この 2 つの特徴を切り離して考えるべきであると述べている。なぜなら、言葉の運用という観点からみれば、例えば、j'en ai marre（もううんざりだ）、bouffer（食う）のような言葉は gros mots（下品な言葉）というよりは、le mot bas（平俗な言葉）であり、口語的表現だからである。

Guiraud（1976：9）はまた、la vulgarité（下品さ）、l'obscénité（猥褻さ）、la grossièreté（卑猥さ）の 3 つの用語を区別している。Guiraud（1976：10-11）によれば、la vulgarité（下品さ）の類似語は la bassesse（下劣・卑劣）であり、社会階層や教育環境と密接に関係している。また、かつては je suis été（j'ai été「直説法複合過去」の誤用）、plucher les patates（éplucher les patates「じゃがいもの皮をむく」の誤用）のような間違った表現も la vulgarité（下品さ）と見なされていた。このような平俗な表現は、un manque d'éducation（教育不足）、une origine（家柄）、des fréquentations basses（低劣な人付き合い）など、話し手の社会的地位が反映された発話であるとしている。要するに、下級階層に位置する民衆は知的水準が低く、倫理や道徳面においても知識が不足していると考えられているため、これらの民衆が使用する言葉も俗語的な言葉であることが多いのである。

L'obscène（猥褻）な表現には、主に性に関する表現が含まれているが、それ以外に排泄物に関する表現も見られる。Guiraud（1976：11）によれば、猥褻な表現は表現そのものが「淫ら」であるというよりも、これらの表現を発話することが「淫らな行為」に当たるのである。Guiraud（1976：11）はまた、性的行為と排泄行為は自然な生理的現象であり、罪に問われるものではないが、一般的には隠すべきものとされているため、猥褻な言葉を口にしたり、書き出したりすることが「猥褻的行為」にあたると述べている。以上のことを踏まえて、Guiraud（1976：11）は、« Obscénité et vulgarité ne se confondent donc pas »（下品さと猥褻さは混同されない）としており、なぜなら、下品な人（des gens vulgaires）の中には上品ぶる人もいれば、反対に、上品な人の中にも下品な言葉を使用する場合が見受けられるからである。L'obscénité（猥褻さ）を含む表現は、俗語の中でも最も下品な表現であり、最も低劣な表現形式（la base des formes les plus basses）で構成されており、gros mots（下品な言葉）の多くを占めているのである。

La grossièreté（卑猥さ）に関して、Guiraud（1976：23）は « la grossièreté est un jugement porté sur un individu, une chose, un mot et une qualité qui lui est attribuée »（卑猥な表現はある個人、ある物事、またある言葉に対する価値づけである）と述べ、また「礼儀正しさ」と「卑猥さ」は文化的、または社会的価値によって形成されているとも述べている。卑劣な言葉は、一方では物事を指し示しており、もう一方では話し手がその物に与える価値を表しているとしている。例えば、bouffer（食らう）、glavioter（吐く）、se marrer（あざける）は、それぞれ manger（食べる）、cracher（もどす）、rire（笑う）のくだけた言い方であるが、これらの言葉を好んで使用する人は、低い社会階級に属し、卑劣で品がない人として見なされる。Guiraud（1976：23）によれば、「良い」言葉の使い方が gros mots（下品な言葉）を排除しようとするのはこのためである。

Gros mots（下品な言葉）は、基本的に、聞き手の価値を下げることを目的として発話されており、Guiraud（1976：25）は、gros mots の機能として、« ils trouvent leur principal champ d'emploi dans le juron et dans l'injure »（ののしりとして機能する場合もあれば、injure として捉えられる場合もある）と記述している。以下では、injure（罵倒）と juron（ののしり）それぞれの機能について見ていく。

2.2.2 Injure（罵倒）

Guiraud（1976：27）によれば、gros mots（下品な言葉）には物事に「卑劣な名称」を与えることでその物事の価値を下げる役割があり、言及対象が人物である場合は、下品な言葉を発話することでその人物の価値を下げた発話となる。この時に使用される下品な言葉は罵倒表現として機能するといえる。下品な言葉は、しばしば話し手の感情的態度（不快、軽蔑、敵意など）を伴い発話されるため、話し手にとっての le moyen d'exprimer（感情のはけ口）として働く。Guiraud（1976：27）によれば、下品な言葉の多くは injures（罵倒表現）であり、injure（罵倒）と juron（ののしり）を含む表現である。そのため、injures（罵倒表現）は多くの場合、gros mots（下品な言葉）で構成されている。

Guiraud（1976：27）は injure に関して以下のように述べている。

> L'injure est un « acte » de parole, un « coup » qu'un sujet porte à un objet.
>
> (Guiraud 1976：27)
>
> （罵倒は発話「行為」であり、主体が対象にかます「一撃」である。）

以上の記述からわかるように、injure という発話行為には、le sujet（主体、または話し手）と l'objet（対象、または聞き手）が存在し、言い換えれば、injure という行為は対象を必要とし、対象に向かって罵る行為であると解釈できる。

Guiraud（1976）は injure を他動的関係性（la relation transitive）と関連付けて考察している。Guiraud（1976：28）によれば、行動には un agent（動作主）が存在し、それは言語レベルで言えば、verbe（動詞）と sujet（主語）にあたる。一方、le verbe transitif（他動詞）においては、動詞が示す動作を受ける le patient（被動作主）が存在する[11]。言語学的には、「le sujet（主語）+ le verbe（動詞）＋le complément d'objet（目的語）」の関係であるとしている。injure をこの関係性に当てはめて考えると、罵倒の話し手が l'agent（動作主）であり、罵倒を受ける対象が le patient（被動作主）である。Guiraud（1976：28）はこの場合に見られる injure の特徴として、« le sujet et l'objet sont à la fois agents et patients » (Guiraud 1976：28)（主体と対象は同時に動作主と被動作主である）と述べている。

Guiraud（1976：29）によれば、聞き手の振る舞いや言動を受けて、話し手に、agréable（心地よい）または désagréable（不愉快）という感情が生じる。これらの感情は、心地よい感情を持続させたいというポジティブな意欲と、不愉快な感情を中止させたいというネガティブな意欲に分かれるが、この意欲が話し手の行動や発話を引き起こすのであるとしている。

injure は、罵倒の聞き手の理不尽な振る舞いや卑劣な言動によって引き起こされる。また、聞き手の振る舞いが話し手にとって不愉快であると感じることが injure には必要である。つまり、聞き手の行為や行動に怒りを覚えることで、話し手の中でネガティブな意欲がわき上がった結果、相手の発話を中断させたり、相手に対して反論したりするため、罵倒行為がなされるのである。

---

[11] Toute « action » postule un « agent » et au niveau du langage un verbe et un sujet ; le verbe transitif, d'autre part, comporte un objet qui représente le « patiente » qui subit l'action. (Guiraud 1976：28)（すべての「行為」は「動作主」を伴い、言語的には動詞と主語を伴う；一方では、他動詞においては行為を受ける「非動作主」を表す対象を伴う。）

罵倒の話し手が le sujet = l'agent（主体＝動作主）であり、罵倒の聞き手が l'objet = le patient（対象＝被動作主）であるのは確かだが、罵倒表現が聞き手の理不尽な振る舞いや言動によって引き起こされたものであると考えるのであれば、l'objet（罵倒の聞き手）が罵倒行為の「最初の動作主 l'agent（罵倒を引き起こす人物）」でもあり、le sujet（罵倒の話し手）は、相手の不愉快な行動または卑劣な言動を受けて、それが自身にとって不合理であると感じることで、いわば「最初の被動作主」でさえあるといえる。こうして、le sujet（罵倒の話し手、または主体）が le patient（被動作主）となるのである。つまり、罵倒表現の発話において、話し手と聞き手が交互に発話し、常に話し手と聞き手が入れ替わっているため、injure は le sujet patient（主体＝被動作主）と l'objet agent（対象＝動作主）という関係にあるのである（Guiraud 1976：30-31）。

さらに、Guiraud（1976：31）は、injure を « le parole offensant »（無礼な言葉）としても捉えている。Offense（無礼）はラテン語の « offendere » を語源とし、« coup, une attaque »（一撃、攻撃）を意味する。他者への攻撃は、一般的には相手を殴りつけ、相手の身体に被害を加え、「傷つける」ために行われるが、この場合の「傷つけ」は、一方では侮辱、軽蔑、挑発的な身ぶりといった les actes concrets（具体的な行為）という形で行われ、もう一方では、話し手の感情を表す les paroles（言葉）という形で行われるものである。これらの言葉は単なる主張や批判を超えた les actes（行為）であり、聞き手を目の前にして直接言葉を投げつける罵倒「行為」である。

Guiraud（1976：32）は、injure にはさまざまな種類があると述べており、例えば、affronts（辱め）、insultes（侮辱）、outrages（激昂）、invectives（罵言）、reproches（非難）、blasphèmes（冒涜）といった名詞と、insulter（侮辱する）、outrager（激昂する）、blesser（傷つける）、froisser（害する）、mortifier（屈辱を与える）といった動詞を挙げている。これらの用語は共通して « un coup porté à l'objet »（対象に対

してかます一撃）という特徴を持つと述べている。これらの発話は聞き手を必要し、聞き手に向かって発話される罵倒表現であるといえる。

Guiraud（1976：34）は、injure の形式はその機能と使用条件によって決定されると述べ、injure は « elle exprime moins une idée qu'un sentiment »（話し手の意見や考えよりも感情を表している）としている。そのため、injure が示す意味範囲は広くて曖昧であり、それは罵倒の対象を限定することもなく、広くさまざまな対象に用いられる意味機能を持つ。例えば、les cons（バカども）の指示対象はどんな人物にも当てはまるし、merde（くそ）は、あらゆる物を指し示すことができ、感嘆や称賛を表す場合もある。また、話し手の感情は、発話された語彙の意味によって表現されるだけではなく、発話イントネーション（乱暴、ためらい、命令、疑惑、疑問など）によっても表現される。さらに、Guiraud（1976：34-35）は、これらの発話イントネーションには、ジェスチャー（威嚇のこぶし、軽蔑の眉、ふくれ面など）が伴うこともあるとし、以下のように述べている。

> Étroitement lié à cette expressivité vocale et corporelle est le fait que l'injure et le juron s'adressent directement - et physiquement - à un interlocuteur.
>
> (Guiraud 1976：34-35)
>
> （罵倒とののしりが発話と身体の表現の豊かさと密接に関わっているのは、両者とも直接的に、または身体的に、聞き手に向けられた発話であるためである。）

Guiraud（1976 ）は基本的には injure（罵倒）と juron（ののしり）を区別しているが、この場合においては、両者は同じような振る舞いがあるとしている。

Guiraud（1976 ）は罵倒の形式に関しても言及しており、以下の用例を挙げている。

(4) Durand est un salaud ! (Guiraud 1976：35)

（デュランはげす野郎だ！）

(5) Tu es un salaud ! (ibid.)

（君はげす野郎だ！）

(6) Salaud ! (ibid.)

（げす野郎！）

(7) Le salaud ! (S'il était là qu'est-ce que je lui passerais.) (ibid.)

（あのげす野郎！（彼がここにいるなら、なんて彼に言おう））

Guiraud（1976：35 ）によれば、(4) のように、3 人称を用いて他人について言及する行為は「誹謗中傷」であり、injure（罵倒）ではない。injure は、これまでにも見てきたように、聞き手に向かって発話されるものである。下品な言葉が (5) のように 2 人称 « tu »（君）を伴う場合と、(6) のように無主語、無冠詞かつ単独で用いられる場合は、vocatif（呼びかけ）として機能する。また、Guiraud（1976：35 ）は、聞き手が不在な場合でも、(7) のように、聞き手のことを思い浮かべながら、独り言のように罵倒することができるとしている。

さらに、Guiraud（1976：35 ）は、聞き手に向かわない juron（ののしり）として見なされている merde（くそ）も、pour celui qui lira（これを読む人へ）を書き加えることで、立派な injure となると記述している。このように、Guiraud（1976：35）は、injure という罵倒行為を un acte de parole（発話行為）と見なし、聞き手に向かって発話される罵倒行為として捉えている。

2.2.3　Juron（ののしり）

Guiraud（1976 ）は、juron の 2 つの意味を記述している。Guiraud（1976：101）によれば、« juron » という語は « jurer »（宣言する）の派生語であり、« jurer » は、1）affirmer ou promettre par serment（宣誓による断言または約束）、2）crier, pester

contre quelqu'un ou quelque chose（人物または物に対して叫ぶまたはののしる）の 2 つの解釈を持つ。したがって、juron は以下の 2 つの意味を持つとされる。

1）le jurement ou serment（冒涜的な言葉、または宣誓）

2）une certaine façon, l'injure（ある観点から見れば、罵倒である）

Guiraud（1976：102）は、juron をある種の感嘆詞として捉えており、それには常に saint（神聖）という考えが伴うとしている。それゆえ、その表現は、しばしば罪に問われる神に対する冒涜、非宗教、俗化であることを思い起こさせる。Guiraud（1976：102）は、le juron serait « toujours » d'origine religieuse（ののしりは「常に」宗教に由来する）とも述べている。また、peste（ちくしょう）、foutre（くそったれ）、merde（くそ）のような表現を juron として捉えるのであれば、それは、les jurons laïques（非宗教的な冒涜表現）であるとされている。

juron には「神に対する冒涜表現」、「直接的な冒涜表現を避けるための婉曲表現」、「非宗教的な冒涜表現」があるが、Guiraud（1976：103）は juron の特徴を以下のように記述している。

> Ces jurements ne sont donc plus que des interjections à fonction expressive, par lesquels le sujet parlant manifeste ses sentiments. Ces sentiments peuvent être positifs (joie, admiration, plaisir, etc.) ou négatifs (colère, haine, mépris, etc.) (Guiraud 1976：103)
>
> （これらの冒涜的な言葉は、話し手の感情を表し、表現機能を持つ間投詞でしかない。これらの感情には「喜び、称賛、楽しみなどを表すポジティブ感情」と、「怒り、憎悪、軽蔑などを表すネガティブ感情」が見られる。）

Guiraud（1976）はこのように述べ、juron には、話し手のネガティブ感情が根本にあり、対象の価値を下げる軽蔑的な jurement（冒涜的な言葉）であると付け加えている。

冒涜表現は、神聖なものを貶める発話、または行為が基となっており、神を思い起こさせる。Guiraud（1976）によれば、同じく神を思い起こさせる行為として、les prières（祈り）が挙げられ、通常であれば、そこには幸福や健康といったポジティブ感情が現れる。反対に、ネガティブ感情の「祈り」の場合は、« imprécation »（呪い）、« exécration »（憎悪）、« blasphème »（冒涜）が挙げられるとされ、Guiraud（1976）は、このネガティブ感情の 3 つの特徴が juron の基本であるとしている。

juron はまた、grossièreté（卑猥さ）を伴う。例えば、foutre（くそったれ）、merde（くそ）などの言葉は、それらが持つ言外の意味により話し手の怒りや拒否の感情を強化している。

> Le juron est plutôt une réaction en face de la situation. On pourrait définir le juron comme : « une interjection dévalorisante et grossière ».
>
> (Guiraud 1976 : 104)
>
> （ののしりは、どちらかといえば、状況に対する反応である。ののしりを「卑猥で評価を下げる間投詞である」と定義することができる。）

これまで、Guiraud（1976）が記述する罵倒表現の 3 つのタイプ、gros mots（下品な言葉）、injure（罵倒）、juron（ののしり）について見てきた。

Guiraud（1976）はまず、gros mots（下品な言葉）の持つ意味内容と言葉の運用を切り離して考察すべきだと指摘している。Guiraud（1976）によれば、la vulgarité（下品さ）を伴う表現の使用は、話し手の社会階層を反映しており、多くの場合、下級階層に位置する民衆によって使用される。この点に関して、社会規範の観点から考

えれば、例えば bouffer（食らう）よりも manger（食べる）の方が低劣さを伴わずより規範的であると考えることができる。

Guiraud（1976）は、bouffer（食らう）、glavioter（吐く）を使用する人を卑劣で品がない人として捉えているが、必ずしもそうではない。この点に関して以下の 2 点を指摘することができる。まず、現代フランス語において、gros mots（下品な言葉）は下級階層のみならず、あらゆる社会階層の人々に使用されている点である。本来、上品さという観点では、下品な言葉の使用は忌避されるべきだが、ここで重要なのは、上品な人、下品な人問わず、下品な言葉が「発話」されてはじめて、その低劣さが周囲の人に認知される点である。次に、bouffer（食らう）のような平俗な言葉がある特定の社会グループのみで使用される場合である。たとえそれが社会規範的にはふさわしくない表現であっても、ある地域において慣習的に使用されているのであれば、下品な言葉の使用も不自然ではない。このような言葉は、下品な言葉と見なされることなく、平俗で隠語的に用いられている。

Guiraud（1976）は、gros mots（下品な言葉）が、injure（罵倒）として機能する表現もあれば、juron（ののしり）として機能する表現もあるとして、両者を区別している。injure は聞き手に向けられた発話であるという特徴を持ち、juron は相手に向かうのではなく、ある状況に対する反応であり間投詞として捉えられている。Guiraud（1976）もまた、injure を話し手の感情を含めた表現であると捉えており、発話イントネーションとジェスチャーを伴う罵倒であれば、injure と juron は両者とも聞き手に向けられた発話であるとしている。Guiraud（1976）は injure と juron の共通点と相違点の両方を指摘しているが、実際の罵倒において、どのような状況において injure は juron と区別され、どのような状況において両者は共通した機能を持つのかについては十分に考察されておらず曖昧である。

Guiraud（1976）は juron を間投詞として捉え、また juron を基本的に神に対する冒涜行為に関する表現で構成されるものとしている。仮に、merde（くそ）や foutre

（ちぇっ）を juron として捉えるのであれば、それらを非宗教的な表現として見なすことができる。宗教に関する罵倒に関しては Roueyrenc（1998）に詳しく記述されており、以下では、Roueyrenc（1998）が記述している罵倒表現リストも含め、罵倒表現の類型に関して検討する。

2.3　Rouayrenc（1998）

Rouayrenc（1998）は、著書 *Les gros mots*（『下品な言葉』）の前半において、フランス語の罵倒表現を「神と悪魔」、「性」、「排泄物」に分類し、それぞれの語彙の特徴を考察している。また後半では、形態論的、統語論的、または語用論的に観察し、罵倒表現の機能について記述されている。以下では、Rouayrenc（1998）による罵倒効果の分類を見ていく。

2.3.1　神に関する表現

Rouayrenc（1998：8）によれば、キリスト教の信仰において、Dieu（神）または Jésus（神の子の名）を発話することは、神に対する冒涜行為にあたるため禁じられている。そのため、« Dieu ! »（神よ！）、« Jésus ! »（イエス！→感嘆の「ああ、おお」）、« nom de Dieu ! »（神の名！）、« Jésus Marie Joseph ! »（イエス、マリー、ジョセフ！）は冒涜的な表現であり、gros mots（下品な言葉）として捉えることができる。

Rouayrenc（1998：8-15）は神に関する表現において、dieu という言葉を伴う罵倒表現、dieu という直接的表現を避けるために使用される婉曲表現、また語彙の移り変わりや語変形を詳しく考察している。

2.3.1.1　Dieu（神）を伴う表現

Rouayrenc（1998：8）によれば、dieu は単独で用いることができるほか、Seigneur

（主）を前置させ、« Seigneur Dieu ! »（ああ神様！）のように使用することができる。また、「dieu が主要部分となる名詞句」の形を取ることができ、前置する副次的部分には限定辞と名詞が見られる。

(8) Mon Dieu, mon (bon) Dieu Jésus (Rouayrenc 1998：9)

（私の神、私の神イエス→驚きや賛嘆を示す「おお！」「ああ！」）

(9) Vingt dieux, mille dieux, milliard de dieux (Rouayrenc 1998：10)

（20 の神、1000 の神、10 億の神→感情をあらわす「ああ！おやまあ！」）

(8) では、所有形容詞 mon（私の）が前置しており、(9) では、数名詞が前置し、vingt dieux（20 の神）のように「数名詞のみ」の場合と、Milliard de dieux（10 億の神）にように、「限定辞を伴わない数名詞＋前置詞 de」の前置が見られる。

Rouayrenc（1998：10）はまた、形容詞を伴う名詞句を挙げている。

(10) Bon dieu, grand dieu, vrai dieu, vain dieu (Rouayrenc 1998：10)

（良い神、大きい神、本当の神、無駄な神→ちぇっ、まったく）

(11) Juste dieu, dieu juste (ibid.)

（公平な神→驚き・憤りを表す「おお神様」）

(12) Dieu vivant, Dieu puissant (ibid.)

（生きている神、力強い神→ああ神様）

(13) Dieu de miséricorde, Dieu du ciel (ibid.)

（慈悲の神、天の神→ああ神様）

(10) のように、形容詞 bon（良い）、grand（大きい）、vrai（本当の）、vain（無駄な）が前置する用例が挙げられており、中でも vain dieu（無神）に関しては、(9) で

見た vingt dieux（20 の神）と同音であるため、話し言葉においては 2 つの解釈が生まれる。Rouayrenc（1998：10）によれば、vain dieu（無駄な神）は神の vanité（無意味さ）を意味し、vingt dieux（20 の神）は dieu unique（神の唯一無二）の理念に反しているため、両用例とも冒涜発言にあたる。(11) の juste は dieu に対して前置、または後置することができ、(12) の vivant と puissant は dieu に後置する。また、(13) のように、名詞の代わりに「前置詞 de (du) 」を伴う前置詞句が見られる用例も挙げられている。

これまで、dieu が主要部分となる名詞句を見てきたが、Rouayrenc（1998：10）はさらに、dieu が名詞句において副次的要素となる用例も挙げており、(14) に示すように「前置詞 de に導かれる前置詞句」の形を取ることができるとしている。

(14) nom de dieu, corps de dieu, tête de dieu, sang de dieu, bonté de dieu, jour de dieu (Rouayrenc 1998：10)

（神の名、神の体、神の頭、神の血、神の善意、神の日→ちくしょう、まったく）

Rouayrenc（1998：10）によれば、(14) には「所有の de」が用いられており、de に前置する名詞は dieu の属性（attribut de Dieu）であり、dieu に属する性質を表すとしている。同様な形を取る表現として、Rouayrenc（1998：10）は、下品な言葉である putain（売春婦）と bordel（売春宿）を伴う用例を挙げている。

(15) Putain de dieu, bordel de dieu (Rouayrenc 1998：10)

（ちくしょう）

Rouayrenc（1998：10）によれば、(15) の putain と bordel は、(14) で示した nom de dieu（神の名）のように、dieu に属する性質を示すのではなく、putain と bordel

は dieu の価値を特徴づける役割を果たしており、ce fripon de valet（いたずらな召使）や cet imbécile de Pierre（愚かなピエール）と同様の形式を示している。

しかし、例えば（16）と（17）のような単なる下品な言葉の羅列である用例とは区別して考察する必要がある。なぜなら（16）と（17）の de は個々の下品な言葉を繋げる連結の役割しか果たさないからである。

(16) putain de merde, bordel de merde (Rouayrenc 1998：11)

（こん畜生、くそったれ）

(17) putain de bordel de merde ! Nom de Dieu de nom de Dieu de nom de Dieu !

（この野郎こん畜生くそったれ） (ibid.)

これまで、Rouayrenc（1998）の論じる dieu の用例について見てきた。すでに述べたように、dieu という言葉の使用は神に対する冒涜行為にあたる。そのため、dieu という言葉を直接用いることを避けるために、別の語彙で代用したり、冒涜表現の一部を省略、あるいは短縮させたりするなど、さまざまな婉曲表現が用いられる。この点については、以下で詳しく見ていく。

2.3.1.2　Dieu（神）の婉曲表現

Rouayrenc（1998：11）は、フランス語の冒涜表現の変形についても記述している。(18) は、前置詞 par によって導かれる前置詞句である。また、(19) では、前置詞 par が欠落し、「限定辞を伴う用例」と「限定辞を伴わない用例」に区分される。

(18) Par le jour dieu, Par la mort dieu (Rouayrenc 1998：11)

（神の日で、神の死で→ああ神様）

(19) le corps dieu, corps-dieu, ventre-dieu, sang-dieu (ibid.)

（神の体、神の腹部、神の血→ああ神様）

Rouayrenc（1998：11-12）はさらに、(14) ですでに見た attribut + de + dieu の形も par に導かれる前置詞句として用いることができるとし、(20) のような用例は古フランス語の冒涜表現において、最も頻繁に見られる形式であると述べている。

(20) Par le ventre de Dieu ! Par le sang de Dieu ! (Rouayrenc 1998：12)

（神の腹部で！神の血で！→ああ神様）

Rouayrenc（1998：11）によれば、(20) に見られる par le sang de Dieu は、のちに婉曲表現として現れ、モリエールの喜劇にも用いられた palsambleu, par le sang bleu, par la sangbleu の原型となる表現である。しかし、Rouayrenc（1998：11）は、形が類似している « palsangué » と « palsanguienne » は、par le sang de Dieu の婉曲変形ではなく、語尾に見られる « -gué » と « -guinenne » は dieu の語変形であり、方言にあたる形であるとも記述している。

Rouayrenc（1998：12-13）が記述している dieu に関係する冒涜表現の語変形を以下にまとめる。

- « pardieu » (Rouayrenc 1998：12) の婉曲表現には parbleu と parbieu が見られ、語尾省略の形は pardi である。また、pardé（トゥーレ—ヌ）、pardié（プロヴァンス地方）、pardine と parguène（ピカルディー地方）、pargué（ポワトゥー）のように、地域によって形が変化する。
- « mordieu » (Rouayrenc 1998：12-13) の婉曲表現は morbleu であり、方言では、mordinne（トゥールコワン地域）、mordious（オック語）、morgué（マイエンヌ県）、morguienne（ノルマンディー地方）などのような変形が見られる。

- « ventredieu » (Rouayrenc 1998：13) の婉曲表現は ventrebleu であり、Rouayrenc（1998：9）によれば 1552 年にはすでにこの表現の使用が確認されており、ventrebleu をもとに、Henri IV によって考案された « ventre saint-gris » という表現が残っている。
- « vertubleu » (Rouayrenc 1998：13) は « par la vertu de Dieu » の短縮形であり、16 世紀では vertubieu や vertuchou(x) という形が確認されている。« -bieu » の形に関しては、par le corps de Dieu の短縮形である cordieu から、corbleu を経て、corbieu へと変化した。
- « sacredieu » (Rouayrenc 1998：13) は、« sacre Dieu (c'est à dire Fête-Dieu) »（聖体の祝日）が基となっている。また、婉曲表現として sacrebleu と par la sacrebleu（ピカルディー方言では sacredié, par la sacredié）が挙げられる。Rouayrenc（1998：13）によれば、« sacrebleu » は sacreblotte と sacrelot(t)e という 2 つの独自の変形バリエーションを持ち、sapristi の同義語であり、sacré の婉曲変形である。また、saprelotte, saperlotte, saperlipopette も « sacrebleu » から派生した変形である。

このように、dieu の婉曲表現には « -bieu » と « -bleu »（例えば corbleu, corbieu, morbleu, mordieu）が見られる。Rouayrenc（1998：14）によれば、morbleu は 17 世紀に見られ、morbieu は 15 世紀に見られるため、« -bieu » の形がより古くから存在していることがわかる。

さらに、冒涜行為を避けるために、dieu が別の言葉に置き換えられる場合もある。Rouayrenc（1998：13）によれば、例えば nom de dieu（神の名→ちくしょう）では (21) のような置き換えが見られる。

(21) Nom de Zeus ! Nom d'un chien ! Nom d'un petit bonhomme ! Nom d'un

tonnerre ! Nom de nom ! (Rouayrenc 1998：14)

（ゼウスの名！犬の名！若者の名！雷の名！名の名！→ちくしょう、ちぇっ）

ここまで、Rouayrenc（1998）が記述している神に関する表現を dieu という言葉自体の振る舞いと dieu の語変形（婉曲表現）という観点から見てきた。次に、性に関する表現を見ていく。

2.3.2　性に関する表現

Rouayrenc（1998）は性に関する表現も挙げている。そこで、女性器、男性器、性行為、同性愛と売春に関する表現について見ていく。

2.3.2.1　女性器

Rouayrenc（1998：19）によれば、性器を意味する言葉は、ラテン語の cunnus に由来し、12 世紀頃に出現した « con » という言葉がある。また、vulve（外陰部）を指し示す際は特に chat（猫）という言葉がしばしば使われ、「女」性器であることから chat の女性形である « chatte »（変形型 chagatte）が使われるようになった。Rouayrenc（1998：20）はまた、小猫を意味する minou（変形型 minet, minette）、猫の愛称である « mistigri »[12]、chat（猫）の隠語である greffier と greffière が女性器を意味すると記述している。

女性器の隠喩表現として、Rouayrenc（1998：20-21）は「割れ目」を意味する « fente » と « fendasse » を挙げており、岩にできる割れ目を意味する « craque » も女性器を意味すると記述している。他には形が似ていることから、植物に関する表

[12] Mistigri (1982) s'explique par une antonomase, mistigri étant d'abord le nom donné familièrement au chat. (Rouayrenc 1998：20)（Mistigri は換称で説明することができる、mistigri は本来猫に与える名前である。）

現では、figue（イチジク）、abrico（あんず）、begonia（ベゴニア）、nenuphar（スイレン）が見られ、生き物に関する表現では、moule（ムール貝）が比喩的に用いられるとしている。Rouayrenc（1998：21）によれば、女性器は「入れ物」としても考えられており、boîte à ouvrage（裁縫箱）や bénitier（聖水盤）などが見られる。また、foufoune（女性器）と、その語尾に « -ette »（親愛語）が付いて、愛称名詞の形をとる foufounette や founette も見られる

Rouayrenc（1998：22）はさらに、女性器を部分的に記述しており、陰核（clitoris）に関しては、省略形である clito が見られ、また第 1 音節を重複させる clicli も見られる。また、形や色が似ていることから、berlingot（ピラミッド形のキャンディー）、bouton（ボタン）が陰核を意味するとしている。恥丘（pubis）に関しては比喩的に motte（塊）が用いられ、毛（toison）に関する表現では、gazon（芝生）、laitue（レタス）、barbu（陰毛）などがあるとされる。膣（vagin）に関しては、baba（ドーナッツ形のお菓子）、turlurette（フルートのような楽器）、比喩的には salle des fêtes（パーティー会場）が挙げられている。

2.3.2.2　男性器

男性器に関する表現では、男性器全体に関して言及する表現と部分的に言及する表現に分けられている。Rouayrenc（1998：23）では、男性器を全体的に捉えた言葉として、parties honteuses（恥部）、bijoux de famille（家族の宝石）、service trois pièces（三点一式）、marchandise（商品）、bibelots（置物）などが挙げられており、また男性器は露出していることから、boutique（店）という表現も挙げられている。

Testicule（睾丸）に関する表現（Rouayrenc 1998：24-25）は、多くの場合、睾丸の俗語である couilles が用いられ複数形を取る。また、形が似ていることから、rognons（腎臓）、prunes（プラム）、grelots（鈴）、noisettes（ヘーゼルナッツ）、noix vomique（馬銭子）、olives（オリーブ）、pelotes（玉）、montgolfières（熱気球）など

が比喩的に用いられ、他には、joyeuses（愉快な）、valseuses（ワルツ、隠語：きんたま）、précieuses（高価な）などが換喩的に用いられる。

pénis（陰茎）に関する表現（Rouayrenc 1998：25-31）は、俗に bite (bitte)（ペニス）が用いられ、逆さ言葉（verlan）として tébi, teubi, teub(e) が陰茎を意味する。また、zeb, zébi（バリエーションには zob, zobi）はマグレブ地方のアラビア語の zebbi に由来し、陰茎を意味する。幼児言葉では zizi（おちんちん）と quéquette（バリエーションには quique, quiquette）がある。Rouayrenc（1998：23）はさらに、陰茎を「道具」に見立てて用いられる言葉として、darrac（金槌）、défonceuse（穿孔機）を挙げており、武器と見立てられた場合は、braquemart（短剣）、dard（槍）などがあり、硬性を強調する表現としては、trique（太い棒）tringle（物を吊るす横棒）、gourdin（棍棒）、ardillon（針）などがある。その他には、形が似ていることから queue（しっぽ）、poireau（ねぎ、逆さ言葉で reaupoi）、panais（パースニップ、ニンジンに似た根菜）、andouille à col roulé（首を縛られたアンドゥーユ）、vipère broussailleuse（やぶに覆われたヘビ）、merguez（ソーセージ）なども見られる。

Rouayrenc（1998：29-30）はまた、男性器の機能に関する表現を挙げている。中でも特に、« être en érection »（勃起する）と « la masturbation masculine »（自慰行為）に関する表現を挙げている。前者においては、助動詞 avoir（持つ）を伴う成句の形で用いられ、例えば、avoir le bâton（棒を持つ）、avoir le gaule（釣竿を持つ）、avoir le bambou（竹を持つ）、avoir la banane（バナナを持つ）、avoir le petit pain（小さなパンを持つ）などが挙げられている。後者においては、se polir la colonne（円柱を磨く）、s'astiquer la gaule（釣竿を磨く）などの比喩表現と s'allonger（横になる）、faire juter l'os à moelle[13]（骨髄の汁を出す）などの換喩表現が挙げられて

[13] « Faire juter l'os à <u>moëlle</u> »（骨髄）：Rouayrenc (1998：29) では、下線部のように最初の « e » に tréma（トレマ）が記載されているが、現代フランスでは « moelle »（髄）が用いられており、TLFi では、« moëlle épinière »（脊髄）のみが tréma（トレマ）を用いた表記

いる。

2.3.2.3　性行為

Rouayrenc（1998：31-41）は性行為に関する表現を les verbes（動詞）、les locutions verbales（動詞句）、les noms（名詞）の 3 つに区分し記述している。

動詞（Rouayrenc 1998：31-37）に関しては、自動詞的（intransitif）に用いる « faire l'amour »（性交する）と他動詞的（transitif）に用いる « posséder sexuellement »（性的関係を持つ）の 2 つに分けて記述されているが、主に他動詞的に用いられる語彙を挙げている。例えば、« fourailler »（性交する）は fourrer（突っ込む）が変形した形で、four（窯）の派生語であり他動詞的に性交を意味する。また、« godiller »（性交する）は godille（艪→比喩的に男性器）と godiller（艪を操る→比喩的に性交）に由来する。Rouayrenc（1998：34）は、la pénétration（入り込む）という考えから 17 世紀には mettre quelqu'un（誰かを入れる）が出現し、16 世紀には emmancher（はめ込む）、défoncer（突き破る）、poinçonner（打ち抜く）などが性交を意味すると記述している。他には、chevaucher（馬に乗る）、類似する語彙には enjamber（またぐ）、sauter（ジャンプする）、fricasser（煮込む→肉体関係を持つ）なども性交の意味として換喩的に用いられている。Rouayrenc（1998：35）はまた、他動詞的に用いる動詞には une femme（女性）が後続することで性交の意味を持つ用例を挙げており、例えば、12 世紀に出現した baiser une femme（女性と性交をする）や 1640 年に見られる culbuter une femme（女性を倒す）、grimper une femme（女性によじ登る）を挙げている。Rouayrenc（1998）は、数は少ないが自動詞的に用いられる動詞も挙げており、例えば、モロッコのアラビア語 « i-nik (il fait l'amour) »（彼は性交する）に由来する niquer（…と寝る）、enfiler（糸を通す→性交する）、limer（やす

になっている。

りをかける→性交する）は自他動詞両方の用法で用いることができると記述している。

動詞句（Rouayrenc 1998：37-40）に関しては、Rouayrenc（1998：37）によれば、暴力という考えから出発して、性交の意味で用いられるようになった用例も見られる。例えば、1830 年に出現した « tirer un (son) coup »（一発打つ→女と一発やる）、1977 年に見られる « filer un coup de baguette à quelqu'un »（誰かにバゲットで一発食らわす）などが挙げられている。Rouayrenc（1998：39）はさらに、これまで挙げた用例はほぼすべて男性主体の性行為であり、女性と男性の両方に用いることができる用例として、s'envoyer（送り合う）、se farcir（詰め込み合う）、se faire（やり合う）を挙げている。また、baiser（…と寝る）を自動詞的に用いる表現は、男性または女性両方の主体的動作として用いることができるが、他動詞的に用いる場合には男性主体の動作しか意味しない。さらに、1920 年には、カップルや夫婦の性交を意味する se mélanger（混ぜ合う→肉体関係を持つ）が見られる。

名詞に関しては、動詞の baiser（…と寝る）から派生した baise（性行為）、niquer から派生した nique などが挙げられている。また coup（一発）に関する用例においては、coup de sabre（一発の刀）、coup d'arbalète（一発の弓）などが挙げられている。

男性器に関する表現において、Rouayrenc（1998： 41-42）は男性器とは別に « sperme »（精子）の節を設けており、精子に関する表現が挙げている。精子に関しては、foutre（する・やる）が名詞化された foutre（精子）がある。また、juter（汁を出す）という動詞からの派生名詞である jute が精子を意味し、比喩的には éjaculer（射精）を意味する。他には換喩表現として、blanc（白）、crème（クリーム）、sirop de corps d'homme（男性のシロップ）などが挙げられている。また、射精を意味する表現として、envoyer la fumée（煙を出す）、balancer la purée（ピュレを出す）、balancer la sauce（ソースを出す）などが挙げられている。

2.3.2.4　同性愛者と売春婦

Rouayrenc（1998：42-44）は、同性愛者に関する語彙を「男性同性愛者」と「女性同性愛者」に区分している。Rouayrenc（1998）によれば、同性愛者と売春婦はタブーな分野とされており、またこれらに関する表現は injure（罵倒）として使用される場合がある。

男性同性愛者に関しては、pédé（pédéraste の短縮形）や homo（homosexuel の短縮形）が挙げられている。Rouayrenc（1998：43）によれば、男性同性愛者に関する用例には、enculer（おかまを掘る）から派生した enculeur と enculé が見られる。この 2 つ言葉は男性同士の性行為において「する」「される」の関係にあたり、前者を homosexuel actif（能動的同性愛者）と 後者を homosexuel passif（受動的同性愛者）として捉えている。同様に、tante（叔母）も同性愛者の意味を持ち、tante の派生語には tantouse, tantouze が見られ、女性名詞を用いることで男性を男性として認めない意図があるとしており、tapette（同性愛者の女役）という用例も見られる。

女性同性愛者（Rouayrenc 1998：43）では、homosexuelle（同性愛者）以外には、gouine（レズビアン）、派生語には gouinasse と gougnasse を挙げている。Gouine はまた、une femme de mauvaise vie（品行が悪い女性）、つまり une prostituée（売春婦）を意味するとされる。

売春婦（Rouayrenc 1998：43-44）に関する表現は、Rouayrenc（1998）によれば、pute（売春婦）と putain（売春婦）の 2 つの名詞が見られ、injure の一つとして捉えられている。Rouayrenc（1998）はまた、pute は putidus（臭い）を語源に持つ形容詞 put（臭い）が名詞化した単語の女性形であり、putain は古フランス語における pute の被制格である « -ain » の形を取るとしている。

2.3.3　排泄物に関する表現

Rouayrenc（1998：49-50）は糞に関する表現を名詞、動詞、成句に区分し提示して

いる。名詞においては、「字義的意味が糞である場合」と「比喩的に糞を意味する場合」に分類できる。前者については、ラテン語の merda を語源とし、13 世紀頭に使用され始めた merde が頻繁に用いられ、また幼児語の caca（うんち）に由来する cacade（下痢）、chiasse（下痢）が挙げられている。後者については、mouise が une soupe de mauvaise qualité（質の悪いスープ）を意味し、excrément（糞）の意味で用いられる。また、colombin は、long rouleau de pâte molle servant à fabriquer certaines poteries（陶器を製作するために柔らかい陶土で作られた長い棒状のもの）を意味し、「糞」と形が似ていることから、比喩的に用いられるとされる。

動詞（Rouayrenc 1998：50-51）に関しては、déféquer を意味する chier（くそを垂れる）が 8 世紀頃から用いられ、下痢を意味する foire から foirer が 16 世紀ころに出現した。

成句（Rouayrenc 1998：51-52）に関しては、mouler un bronze（ブロンズ像製品を鋳造する→排便する）、poser sa pêche（桃を置く→排便する）、perdre ses légumes（野菜を失う→下痢する）が挙げられる。他には、téléphone au papa（パパに電話する→トイレに長くいる）、filer le rondin（丸太を与える）、déposer un kilo（1 キロ下ろす）なども挙げられている。

これまで、Rouayrenc（1998）が記述している下品な言葉をまとめた。Rouayrenc（1998）は、第 1 章で取り上げた Edouard（1967）のように、単に世界を構成するさまざまなカテゴリーに沿って罵倒語彙を記述しているのではなく、神、性、排泄物の 3 つのテーマを取り上げ、それぞれのテーマに見られる下品な言葉の特徴を記述していると考えられる。

Rouayrenc（1998）は神に関する表現において、まず、dieu という言葉が冒涜表現として用いられる際の表現形式について考察している。次に、Rouayrenc（1998）は、dieu の婉曲表現における語と語の組み合わせ、省略、変形などについて語形成の観点

から考察している。婉曲表現においては、Rouayrenc（1998）は、単語から文、また文から単語への移り変わりの過程を記述している。前節で取り上げた Guiraud（1976：102）は「juron は宗教に由来する」と指摘しており、冒涜表現を juron として捉えることができるのではないかと考えられる。

一方、性に関する表現には猥褻で下品な言葉が多く見られ、一般に、これらの言葉を直接発話することは忌避される。そのため、Rouayrenc（1998）の記述にある通り、例えば性器を道具や果物に見立てたり、性行為を全く別の言葉で表現したり、性に関する直接的な発話を避けるため、下品な意味を持たない語彙を比喩的に用いた表現がなされる。排泄物に関する表現においても同様である。一般に、排泄物は「不潔」というイメージを伴うため、糞や排便行為を意味する表現をなるべく使用しないほうが好ましいとされる。Rouayrenc（1998）は、そうした表現の使用を避けるべく、形や特徴が似ている別の表現が使用されていることを明らかとした。

性や排泄物に関する表現に関しては、冒涜表現に見られた語彙の省略や変形とは異なり、猥褻さや下品さを直接言い表さないために、別な言葉でそれらを置き換えるといった事態が散見された。これらの言葉はあくまで間接的にのみ性的意味や排泄物を意味するため、使用状況や発話相手によって、聞き手と話し手がお互いに同様の解釈をすることが求められる。このように、性と排泄物に関する表現には特定の状況で、特定の言い回しが適切に使用されはじめて、話し手と聞き手にのみ理解されるという隠語的特徴があると考えることができ、この点で罵倒行為とは一線を画している。

タブー表現は社会規範と関係している。一般に、上品または普通（下品ではない）であることが社会的に要請されている。性や排泄物に関する表現は常に猥褻さ、下品さという概念と結びついてしまうため、発話することで話し手の品格を下げてしまう。Rouayrenc（1998）の 3 つの分類（冒涜表現、性、排泄物）に見られる表現の共通点として、表現自体が下品な言葉であっても、下品な意味を持たない普通名詞であっても、これらの言葉は「発話される」ことによって、神に対する冒涜行為や下品で猥褻

的な発言であるとして見なされるのである。このように、Rouayrenc（1998）はそれぞれのテーマにおいて、3 つの語彙の現れ方を記述し、それぞれに見られる語彙の在り方の特徴を記述しているといえる。

Rouayrenc（1998）はまた、下品な言葉の多様性だけではなく、言語表現形式も多種多様であることを記述している。そこで、その多様な表現を見ていくことにする。

2.3.4　Rouayrenc（1998）における罵倒表現の表現形式

Rouayrenc（1998：78-84）は、下品な言葉の表現形式の構造について考察しており、いくつかの種類を提示している。

1）Mots simples（一語）

Rouayrenc（1998：78-79）によれば、「非標準フランス語」（français non standard）においては、con（女性器）、couille（睾丸）などの語彙が見られ、「標準フランス語」（français standard）においては、poireau（ネギ）、figue（イチジク）、framboise（キイチゴ）などの「普通名詞」が見られる。前者は俗語であり、後者は名詞を比喩的に用いることによって下品な意味がもたらされるとされる。

2）Mots dérivés（派生語）

下品な言葉に見られる派生語の多くは「接尾辞付加型」（la suffixation）である。Rouayrenc（1998：79-83）は以下のような接尾辞を挙げている。

« -ade »：foirade (diarrhée)（下痢）

« -ard »：con(n)ard（うすのろ）

« -asse »：con(n)asse, gouinasse（バカな女、売春婦）

« -aille »：lopaille (homosexuel)（同性愛者）

« -aud »：salaud（げす野郎）

« -erie »：connerie（バカげたこと）

« -eur »：enculeur（おかま）

« -on »：couillon（間抜け）　(Rouayrenc 1998：80)

これらは名詞から派生したものであるが、動詞では、« grogner → grognasse »（ぶつぶつ不満を言う）や « foirer → foirade »（下痢）、形容詞では、« sale → salaud »（げす野郎）なども挙げられている。

3）Mots composés（合成語）

Rouayrenc（1998：83-84）は、非標準フランス語には多くの合成語が含まれているとし、先に挙げたような独立した語彙を 2 つ以上含む場合を合成語として見なしている。

－nom + nom：espèce bonbons

（名詞＋名詞：うんざり野郎）

－nom + préposition + nom：manche à balai, dé à coudre

（名詞＋前置詞＋名詞：箒の取っ手→ペニス、裁縫用指ぬき→お尻の穴）

－nom + adjective：vipère broussailleuse

（名詞＋形容詞：もじゃもじゃしたヘビ→ペニス）

－verbe + nom：fouille-merde, casse-couilles, pousse-café

（動詞＋名詞：人のプライベートに首を突っ込む人、食後酒）

－préposition + nom：sans-couilles

（前置詞＋名詞：睾丸のない→意気地なし）

－adverbe + participe：mal-baisée

（副詞＋分子：性的欲求不満）　(Rouayrenc 1998：83)

Rouayrenc（1998：84）によれば、以上の用例では、普通名詞と下品な言葉が並置されて用いられているが、下品な言葉同士が組み合わさった用例も見られる（例えば Trou du cul： ケツの穴)。

4）Locution（成句）

Rouayrenc（1998：84）は、成句と合成語の違いはごくわずかであると述べ、成句の特徴として、各語彙が統語的、または意味的に独立していることを挙げている。

－verbe + complément d'objet direct：égoutter la sardine
（動詞＋直接目的語：イワシの水切り→排尿する）
－verbe + complément prépositionnel：téléphoner au pape
（動詞＋前置補語：教皇に電話する→トイレに行く）
－verbe + complément direct + complément prépositionnel： avoir un porte-manteau dans le pantalon
（動詞＋直接補語＋前置補語：ズボンに中にコート掛けを持つ→勃起する）

(Rouayrenc 1998：84)

ここまで取り上げた 4 つの表現形式は、決して罵倒表現に固有なものではない。例えば、2）の接尾辞では、下品な言葉ではなくても同様の接尾辞を持つ語彙が見られるし、3）と 4）の語彙の組合せに関しても、用いる語彙によっては下品さを持たない発話となる、という点を指摘できる。

5）Les phrases figées（凝結表現）

Rouayrenc（1998：85）は、je te pisse au cul！（お尻におしっこをかける：嫌いな相手を軽蔑する際に、お前なんかどうでもいい！くたばれ！の意）、fais pas chier！（うんざりさせるな！）、occupe-toi de ton cul！(大きなお世話だ！ほっといてくれ！）などを、「凝結表現」として挙げている。

他にも、l'aphérèse（語頭音消失）による panouille → nouille（男性器）への変化、l'apocope（語尾音消失）による homosexuel → homo（同性愛者）への変化など、語彙の形成に関する用例も見られる。さらに借用語も見られ、英語からの借用語は fuck you（くたばれ、フランス語では va te faire foutre）、fuck（くそったれ、フランス語の enculé にあたる）を挙げており、英語の形のまま用いられることが多い。

これまで、Rouayrenc（1998）が記述した下品な言葉の語彙的形式を形態別に見てきた。フランス語には実に多くの下品な言葉が存在することがわかるだろう。話し手は、これらの無数に存在する表現をいくつも自由に組み合わせることができる。そこで、次に、罵倒表現のタイプについて見ていく。

2.3.5　Rouayrenc（1998）における罵倒表現のタイプ

Rouayrenc（1998）は、juron（ののしり）と injure（罵倒）の特徴をそれぞれ記述している。

まず、juron の特徴に関して見ていく。Rouayrenc（1998：94）によると、gros mots（下品な言葉）は統語的には、主に名詞、動詞、形容詞、副詞、間投詞の形を取る。中でも、間投詞は他の文法要素とは異なり独立して存在している。Rouayrenc（1998）は、juron を les interjections（間投詞）として捉え、次のように述べている。

Si toutes les interjections ne sont pas des jurons, tous les jurons sont des interjections. (Rouayrenc 1998：95)

（すべての間投詞はののしりとは言えないが、すべてのののしりは間投詞である。）

Rouayrenc（1998：95-96）は juron の代表的ものとして、名詞では « merde »（くそ）、« crotte »（糞）、« putain »（売春婦→ちくしょう）、« bordel »（売春宿→くそったれ）などを挙げており、形容詞では « mince ! »（ちぇっ）、動詞では « foutre ! »（くたばれ）を挙げている。Rouayrenc（1998）によれば、間投詞はそれだけで発話として成立し、文と同じように機能することができる。間投詞は多くの場合、話し手による自身の発話に対する単なる「コメント」として機能しており、発話に前置、後置することができ、または発話を一時的に中断させることができる[14]。

また、Rouayrenc（1998：97）は les interjections-jurons（ののしり間投詞）を提示しており、« ah putain ! »（あっちくしょう！）や « ah ! foutre ! »（あっ！まったくだ！）のように、とりわけ ah !（あっ！）の前置が多く見られるほか、« merde alors ! »（なんてこった！）のように alors が後続する用例も挙げている。

さらに、Rouayrenc（1998）は juron の特徴に関して、次のように述べている。

---

[14] juron が文においての出現位置を表した用例を以下に示す。

前置：« Merde ! Ça y était, je le tenais bon »（クソ！よし、来た、しっかり持ってたんだ）

後置：« Baissez-vous donc, nom de Dieu ! »（降参しろよ、ああ神様！）

中断：« Qu'est-ce que vous racontez putain comme conneries »

（何を、ちくしょう、ばかげたことを言ってんだよ）

(Rouayrenc 1998：96-97 下線部筆者加筆)

Le juron en effet nous sert « à soulager notre cœur » et peut ne même pas être considéré comme une énonciation lorsque, dans le cas du juron réflexe, il ne sert pas à communiquer. (Rouayrenc 1998：109)

（ののしりは話し手の「心の負担を軽くする」役割があり、また、反射的に発話される冒涜表現の場合は、コミュニケーションの役割を果しているとはいえず、発話としては捉えられない。）

次に、injure（罵倒）について見ていく。Rouayrenc（1998：97）は injure を代表する性質として、「相手に向かって発話される l'apostrophe（乱暴な呼びかけ）」と記述しており、injure は発話の合間にポーズを取ることで他の構成要素と切り離され、統語的機能を果たしていないと述べている。例えば、« Appelle-moi comme tu veux, tête de fiente » (Rouayrenc 1998：98) （好きなように呼んでくれ、間抜け！）のような用例において « tête de fiente » は文の構成要素に含まれない。このように、injure は、« désigner quelqu'un par un gros mot, c'est en effet l'injurier » (Rouayrenc 1998：98)（下品な言葉で誰かを指し示すことは、その人を罵倒することである）という特徴を持つ。

Rouayrenc（1998：98）はまた、« en général, les injures apparaissent sans déterminant »（一般的には、罵倒は無冠詞の形で用いられる）と述べ、例えば、Fumier！（くそ野郎！）、Connard！（うすのろ！）、Salaud！（げす野郎）、Bâtard！（あっち行け！）などが見られる。しかし、Rouayrenc（1998：98-99）によれば、これらの語彙は短文（la brièveté）であるため、単独使用だけではなく、形容詞の前置を伴う場合も見られる。例えば以下の用例が見られる。

Sale（汚れた）→　sale con（くそ野郎）

Petit（小さい）→　petit merdeux（クソガキ）

Grand（大きい）→　grand couillon（大バカ野郎）

Gros（太い）→　gros salaud（くそげす野郎）

Vieux（老いた）→　vieux con（老いぼれ野郎）

Vieille（老いた）→　vieille pute（老いぼれ娼婦）

Pauvre（かわいそうな）→　pauvre con（愚か野郎）

Sacré（聖なる）→　sacré fumier（こん畜生）

Foutu（ひどい）→　foutu con（大バカ）　(Rouayrenc 1998 : 98)

Rouayrenc（1998：98）はまた、injure において、face（顔）や espèce（種）といった日用レベルの語が、罵りを導入するマーカーとして機能している点を指摘している。face（顔）は名詞を後続させることができ、また前置詞 de 伴うことで、卑劣な表現を後続させることができる（例えば、face de con バカ顔）。espèce（種）は、常に前置詞 de を伴い、例えば、espèce d'idiot（いかれた野郎）のように用いられるとされている。

これまで、Rouayrenc（1998）が記述している juron と injure の特徴についてまとめた。Rouayrenc（1998）はさらに、juron 的に用いる言葉と injure 的に用いる言葉は「異なる性質を持つ」と述べており、2 つを区別して考察する必要があるとしている。Rouayrenc（1998）は、juron と injure の違いについて以下のように記述している。

> L'injure implique un destinataire (qui peut évidemment être parfois le destinateur), que l'on veut provoquer ou surprendre, qui est contraint par là à réagir et dont la réaction peut être très variable. Le juron, lui, en principe, n'est pas formulé à l'adresse d'un destinataire, du moins direct.
>
> (Rouayrenc 1998：110)

（罵倒は私たちが挑発したい、または驚かしたい聞き手を伴い（当然ながら話し手となることもある）、この場合、聞き手は反応を強いられ、その反応にはさまざまなバリエーションがある。ののしりに関しては、原則として、少なくとも直接的には、聞き手に向かって発話されるようになっていない。）

これまでの記述からわかるように、Rouayrenc（1998）は前節で取り上げた Guiraud（1976）と同様の見解を示している。juron は間投詞的に用いられ、それは話し手自身による一方的な発話であり、物事に対する反応や独り言に用いられる。それに対して、injure は文の構成要素に含まれず、聞き手に対する罵倒を目的として用いられる発話であると解釈できる。また、言語形式の観点から見れば、juron と injure は、「文の構成要素に含まれず、単独で用いることができる」という点においては共通している。

Rouayrenc（1998）は、「冒涜表現」、「性的表現」、「排泄物」に見られる表現をすべて gros mots（下品な言葉）という用語で一括りしている。冒涜表現では、例えば、dieu という言葉自体は下品さを持たず、慣用表現や特定の語彙との組み合わせで用いた時のみ下品な言葉として捉えられる。また、すでに述べたように、冒涜表現は juron と関係づけることができ、多くの場合、juron として機能し得る。

また、性と排泄物に関する表現では、多くの場合、表現される語彙自体は下品さを持たない。例えば、女性器の意味で用いられる figue（イチジク）や abrico（あんず）は下品さを含まない通常の「名詞」であり、特定の文脈においてのみ「女性器」として解釈され、下品な言葉として捉えられる。このような表現は、状況に対する反応を表す juron でもなければ、聞き手に対する罵倒を意味する injure として捉えることもできない。この場合は、すでに記述したように、「隠語」として捉えることができる。つまり、話し手と聞き手が共通の解釈を持ってはじめて、その発話に意味がもたらされるのである。

Rouayrenc（1998）の分類は、Edouard（1967）の区分に比べ、分類の仕方が異なるものの、語彙の多様性を提示しているといえる。そのため、これらの表現がどのような場面において発話されるのか、また発話することで、聞き手、または第 3 者にどのような効果をもたらすのかという点について、より深く考察する必要がある。そこで、会話の参加者同士の関係性を踏まえた罵倒表現に関する先行研究について検討していく。

2.4　Larguèche（1983）

Larguèche（1983）は « l'effet injure »（罵倒効果）に関する分析が主題であり、罵倒表現がどのように他者に伝わるのか、発話された罵倒表現が誰にどのような効果をもたらすのか、聞き手がどのように罵倒表現を感じ取るのかなど、罵倒行為が聞き手にもたらす効果について研究し、罵倒表現が成立する過程を詳しく論じている。

Larguèche（1983）によれば、injure（罵倒）は日常生活にしばしば見られる現象であり、あらゆる語彙が用いられている。そのため、どこまでを罵倒として認めるのか、その範囲を定めるのは容易ではないとされている。また、Larguèche（1983）は、罵倒表現として用いられるさまざまな表現は、la conséquence d'un acte ou d'une parole（罵倒行為、または罵倒語彙がもたらす結果）と l'acte ou le mot lui-même（罵倒行為や罵倒語彙そのもの）が混同しており不明確であると述べている。Larguèche（1983：1）は「罵倒」の意味を持つ用語として、« injure, gros mots, blasphème, invective, insulte, outrage, offense, malédiction »（罵倒、冒涜表現、冒涜的な言葉、罵言、ののしり、侮辱、無礼、呪い）を挙げており、これらの用語が持つ意味は互いに密接に関係しており、injure と同じような現象をもたらすとしている。

Larguèche（1983：2）によれば、罵倒行為を行う際に用いられる語彙は、必ずしも卑劣な意味を持つ言葉（例えば、connard（うすのろ）などの下品な言葉）である必要はなく、「一般的な」発話も状況によっては罵倒表現となり得る。また、罵倒表現の

発話に限らず、身ぶりをすることでも罵倒行為を成し遂げることが可能である。さらに、罵倒場面ではない楽しい状況や冗談の場面においても、しばしば罵倒表現が用いられることもある。このように、罵倒表現を考察する際は発話場面を踏まえて考える必要がある。

2.4.1　罵倒表現の伝達過程

Larguèche（1983：12）は、会話の伝達モデルをもとに、罵倒表現が成立する基本的過程として、主に 3 つのパターンを挙げている。

1）Le destinateur sera l'*injurieur* (ou le jureur), c'est-à-dire celui qui prononce l'injure ou le juron ;

2）Le destinataire sera l'*injuriaire*, celui à qui s'adresse l'injurieur ;

3）Le référent sera l'*injurié*, celui dont parle l'injure

(Larguèche 1983：12)

（発信者は*罵倒の話し手*（またはののしる人）、罵倒やののしりを行う者）

（受信者は*罵倒の聞き手*、罵倒の話し手が罵倒をする対象）

（指示対象は*罵倒の対象*、罵倒される当事者）

Larguèche（1983：12）によれば、1）は 3 者間の関係にあり、L'injurieur s'adresse à l'injuriaire à propos de l'injurié（罵倒の話し手が罵倒の聞き手に向かって罵倒の対象について言及する）場合である。この場合は、l'injuriaire（罵倒の聞き手）と l'injurié（罵倒の対象）は異なる人物、または異なる対象を指し示している。

2）は 2 者間の関係にあり、L'injurieur s'adresse à l'injuriaire qui est en même temps l'injurié. (Larguèche 1983：12)（罵倒の話し手が罵倒の聞き手（＝罵倒の対

象）に向かって発話する）場合である。この場合は、l'injuriaire（罵倒の聞き手）と l'injurié（罵り対象）は同一人物、または同一対象である。

3）に関しては、le juron se distingue de l'injure en ce qu'il n'y a ni injuriaire, ni injurié ; il n'y a que le jureur. (Larguèche 1983：12)（ののしりは罵倒の聞き手も罵倒の対象も存在しないという点において injure と区別される。ののしる人のみ存在する)。Larguèche（1983：12）は、このような場合を injure ではなく juron として捉えている。

Larguèche（1983）は、3 者間の会話関係である第 1 のパターンを « injure référentielle »（指示的罵倒)、2 者間の対話関係である第 2 のパターンを « injure interpellative »（呼びかけの罵倒）と名付けており、第 3 のパターンを « juron »（ののしり）として捉えている。

さらに、Larguèche（1983）は以上で挙げた罵倒の基本的過程に加えて、もう 1 つ、« témoins »（証言者）という構成要素を加えている。

> Il nous faut encore prendre en considération une quatrième fonction, que nous désignerons du terme de *témoin* et qui peut être présente aussi bien dans les deux sortes d'injure que dans le juron. (Larguèche 1983：12)
>
> （第 4 の機能として、「証言者」と呼ぶべき機能についても考慮しなければならない。この機能は、2 つの罵倒パターンにも、ののしりにも存在する機能である。）

証言者は、罵り場面に居合わせた人物を指し示し、罵倒表現の「聴衆」として捉えることができる。したがって、証言者が加わることで、injure référentielle（指示的罵倒）においては 4 者間、injure interpellative（呼びかけ罵倒）においては 3 者間の会話関係となる。

以下では、Larguèche（1983：13）が記述している図式を踏まえて、罵倒表現の 3 つの発話パターンを提示する。

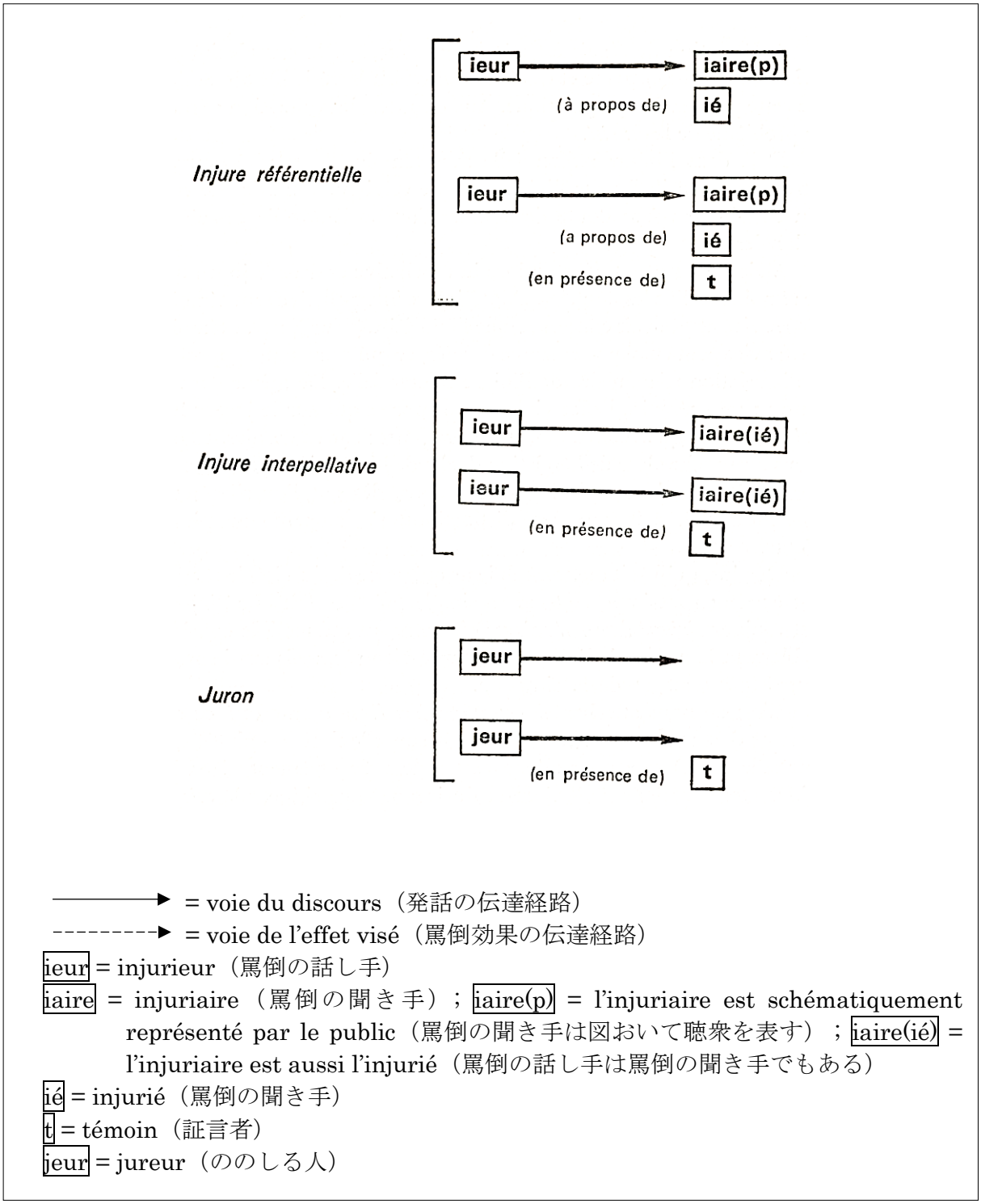


図 1　Larguèche（1983：13）による罵倒表現の 3 つの発話パターン

1）Injure référentielle（指示的罵倒）では、2 つの発話の伝達経路が見られる。1 つは、「罵倒の話し手」が「罵倒の聞き手」に向かって「罵倒の対象」について言及する場合である。もう 1 つは、「罵倒の話し手」が「罵倒の聞き手」に向かって、「証言者」の前で、「罵倒の対象」について言及する場合である。

2）Injure interpellative（呼びかけの罵倒）においても、2 つの発話の伝達経路が見られる。1 つは、「罵倒の話し手」が「罵倒の聞き手（＝罵倒の対象)」に向かって発話する場合である。もう 1 つは、「罵倒の話し手」が「罵倒の聞き手（＝罵倒の対象)」に向かって、「証言者」の前で、発話する場合である。

3）Juron（ののしり）においても、2 つの発話伝達が見られるが、ここでは聞き手がおらず、話し手のみの発話となる。1 つは、「罵倒の話し手」のみの発話である。もう 1 つは、「証言者」の前において、「罵倒の話し手」のみの発話である。

2.4.2　3 つの伝達パターンにおける罵倒効果

以上で示したように、Larguèche（1983）は罵倒表現における 3 つの発話パターンを図式化し、それぞれのパターンにおいて実例を挙げながら、罵倒行為がどのように伝わり、誰に向かっての発話なのか、どのような効果をもたらしているのかについて論じている。

1）« Injure référentielle »（指示的罵倒）では、証言者がいない場合においては、3 者間の関係である。Larguèche（1983：15）は、テレビやラジオにおける政治インタビューを例に説明している。1978 年 3 月の国民議会議員選挙を控えた Raymond Barre（レイモン・バール）は 1977 年 10 月にテレビのインタビューを受けた。このインタビューにおいて、バール氏は、ライバルである François Mitterrand（フランソワ・ミッテラン）を批判しつつ、ミッテラン氏を « prince de l'équivoque »（曖昧さの王子）と呼んだ。この発話は、一見聞き手である「記者」に向かって発話されたもののように思われるが、Larguèche（1983）によれば、実際には聴衆にもなんらか

の効果をもたらしている。この関係に関して、Larguèche（1983：23）は図 2 を挙げている。

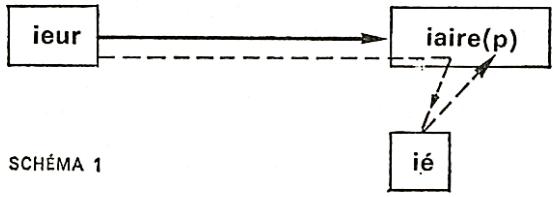


図 2　Larguèche (1983：23) による injure référentielle の伝達経路

この発話の伝達経路（la voie du discours）において、聞き手は記者というよりも、テレビを見ている「聴衆」（le public）である。罵倒効果の伝達経路（la voie de l'effet visé）に関しては、バール氏からまず「聴衆」に伝わり、ミッテラン氏（l'injurié）を介して、最終的には「聴衆」に効果がもたらされる。なぜなら、ここでは、政治家同士がお互いに相手を傷つけようとすることよりも、聴衆対して政治的影響を与えることが目的とされているからだ。

このように、Larguèche（1983）は、さまざまは罵倒場面を用いて、そこで使用されている語彙を考察し、「発話の伝達経路」と「罵倒効果の伝達経路」がどのような過程をたどるのかを細かく記述している。次のパターンを見ていく。

2）　« Injure interpellative »（呼びかけの罵倒）では、罵倒の聞き手と対象が同一であるため 2 者間の関係にあり、Larguèche（1983：40）によれば、このパターンにおいて、témoin（証言者）が存在することによって発話状況に変化をもたらす場合があるため、証言者の存在が重要な要素となる。なぜなら、« L'effet visé pourra porter aussi bien sur ce témoin que sur l'injuriaire (injurié) ou sur l'injurieur. » (Larguèche 1983：40)（罵倒効果の標的は、罵倒の聞き手（＝罵倒の対象）、または罵倒の話し手に向けられるのと同様に、証言者にも向けられ得る）。Larguèche（1983）は、このパターン

を 2 国間の政治的訪問を例に説明している。1979 年 2 月、当時のアメリカ大統領（ジミー・カーター）は、友好関係の維持と発展のためメキシコを訪問した。空港でメキシコ大統領（ホセ・ロペス・ポルティーヨ）とあいさつを交わす際、カーター大統領は「抱擁」を求める素振りを見せたが、これに対して、ポルティーヨ大統領は手を伸ばし「握手」で対応した。Larguèche（1983）はこの行動を発話によるものではなく「行動による罵倒」として捉えている。握手そのものは礼儀作法であり、攻撃的なものではないが、抱擁よりも相手との距離を感じさせる行動である。Larguèche（1983）は、両者のあいさつのずれに問題があり、文化的な要素も無視できないとしているが、抱擁を拒絶し、代わりに握手を求めるのは、相手との心的距離感の観点から考えれば、« du positif vers le négatif »（ポジティブからネガティブ、つまり友好的関係から距離感を感じさせる関係）に向かうため、これが罵倒を引き起こしていると論じている。この状況で最も重要なのは、両大統領のやりとりは、個人としてのものだけではではなく、その場にいる関係者（証言者）、さらにはメディアの放送によって世界中の人々に向けられているという点である。ポルティーヨ大統領が抱擁を拒否し、握手で対応したことは、Larguèche（1983）によれば、政治的関係を友好関係ではなく、単なる政治的関係にとどめたいという狙いがある。この時、カーター大統領は「l'injuriaire（罵りの聞き手）＝l'injurié（罵りの対象）」の立場にあり、アメリカの代表として罵倒を受けていると同時に、カーター大統領個人としても聴衆の前で罵倒されていることに違いない。この関係に関して、Larguèche（1983：42）は図 3 を挙げている。

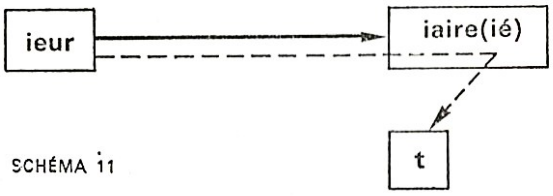


図 3　Larguèche（1983：42）による injure interpellative の伝達経路

この場合の「発話の伝達経路」は、発話ではなくカーター大統領に向けられた les gestes（ジェスチャー）である。「罵倒効果の伝達経路」もカーター大統領に向けられているが、それよりもカーター大統領を通して、「証言者」（その場の関係者及び世界中の聴衆）に罵倒の効果がもたらされている。この場合において、罵倒の聞き手と罵倒の対象が同じであるため、証言者に向かって罵倒が行われていることになる。

Injure interpellative（呼びかけの罵倒）においては、話し手と聞き手は対面（または電話による会話）において罵倒し合う状態になる。つまり、話し手の罵倒に対して聞き手が罵倒を返し、相互に罵倒し合うことになるのである。話し手と聞き手は l'injurieur（罵倒の話し手）と l'injuriaire=l'injurié（罵倒の聞き手＝罵倒の対象）の役割を果たしている。Larguèche（1983）は、このように、証言者の有無、聞き手（対象）がその場に存在するかどうかなど、あらゆる場面を例に挙げて考察している。続いて、最後のパターンを見ていく。

3）Juron（ののしり）に関して Larguèche（1983：57）は、le juron se distinguait de l'injure par le fait qu'il n'y avait ni injuriaire ni injurié（ののしりには罵倒の話し手も罵倒の対象も存在しないという点において、罵倒と区別される）と記述している。また、juron の「発話の伝達経路」には聞き手という到達点（point d'aboutissement）がなく、話し手の一方的な発話であるとしている。この点において、Larguèche（1983）は、 Guiraud（1976）の記述である « Étroitement lié à cette expressivité vocale et corporelle est le fait que l'injure et le juron s'adressent directement - et physiquement - à un interlocuteur. » (Guiraud 1976：34-35)（罵倒は言語表現と身体表現が密接に関係しており、罵倒とののしりは両者とも直接的に、または身体的に聞き手に向けられた発話である）を批判している。

さらに、Larguèche（1983：57-58）は、juron を以下のように解釈している。

Cette situation a le plus souvent un caractère émotionnel - de nature aussi bien positive que négative. Le juron est ainsi généralement rapproché du cri, et c'est en ce sens qu'on le trouve classé, grammaticalement, parmi les interjections. Il n'empêche qu'on peut se demander pourquoi, lorsque l'on se pince, se cogne, tombe ou s'étonne, l'on crie *merde ! putain ! nom de Dieu ! Diable !* ou *fichtre !* etc., plutôt que *aïe ! oh !* ou *ah !* On voit bien que ce n'est pas tout à fait la même chose. (Larguèche 1983：57-58)

（この状況は、多くの場合、感情を伴うという特徴があり、ポジティブ感情とネガティブ感情の両方を伴う。ののしりは、一般的には叫びに近いものであり、文法的には間投詞に分類することができる。それでもやはり、なぜ指を挟んだ時、頭をぶつけた時、転んだ時、または驚いた時に、私たちは*「痛っ！」*、*「おっ！」「あっ！」*と発話するよりも、*「くそ！」*、*「ちくしょう」*、*「ちぇ！」*、*「うわあ」*、*「まったくだ！」*と叫ぶのか不思議に思う。両者は明らかに同じ意味を持つとは言えない。）

Larguèche（1983：57-58）はこのように述べ、juron の基本的な発話過程を、「発話の伝達経路」では聞き手を必要とせず、「罵倒効果の伝達経路」は話し手自身に向けられたものであるとし、以下の図 4 を提示している。

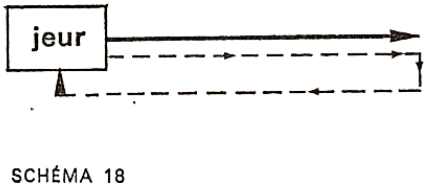


SCHÉMA 18

図 4　Larguèche (1983：58) による juron の伝達経路

図 4 に示したように、Larguèche（1983：58）によれば、juron は罵倒の話し手のみの発話であるが、それでも誰かに関する罵倒的な意見を述べることができる[15]。例えば、テレビに嫌いな人物が映った際に « le Salaud ! » (Larguèche 1983：58)（げす野郎）と発話することができるが、この場合は、必ずしもその人物に向けられた発話ではないとしている。そのため、、テレビの出演者に対して罵る場合、確かに「罵倒の対象」は存在するが、発話はその対象に向けられたものではなく、罵倒効果ももっぱら罵倒の話し手（l'injurieur）自身にもたらされるものである。これに関して、Larguèche（1983：59）は図 5 を挙げている。

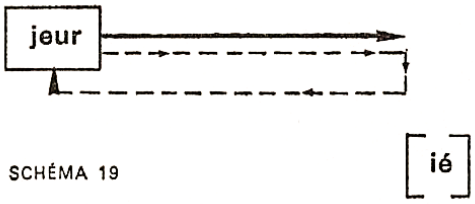


図 5　Larguèche (1983：59) による juron の罵倒効果（1）

また、Larguèche（1983：59）によれば、juron は罵倒の対象に対してではなく、証言者がいる前で発話される場合も考えられる。例えば、友人の前で頭をぶつけた際に発話される merde（くそ）、zut（ちぇっ）の罵倒効果は罵倒の話し手にのみ適用される。なぜなら、その場に居合わせた証言者である友人は一連の動作に直接的な関係

[15] すでに見たように、この点に関しては、Guiraud（1976）も同じ見解である：« Même si l'interlocuteur est absent, c'est à lui qu'on s'adresse en pensée：le Salaud ! (s'il était là qu'est-ce que je lui passerais) » (Guiraud 1976：58)（聞き手が目の前にいない場合でも、話し手のイメージの中で聞き手に向けた発話である：げす野郎！（彼がここにいたら私は何と言おう））

を持たないからである。そのため、罵倒効果は「証言者」と関わることなく、話し手自身に効果をもたらしている。（図 6 参照）

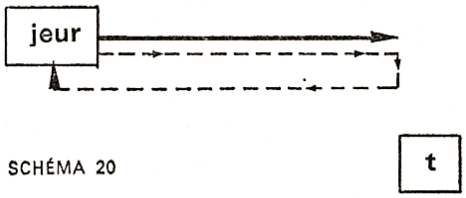


図 6　Larguèche (1983：59) による juron の罵倒効果（2）

このように、証言者は聞き手側に位置することができる。しかし、先に挙げたテレビの用例において、一緒にテレビを見ている友人がその場に居合わせた場合、まだテレビの出演者に対して発話される « le Salaud ! » (Larguèche 1983：58)（げす野郎）を juron として捉えられるのだろうか。Larguèche（1983：60）によれば、この発話場面は、「指示的罵倒」において聞き手が欠落している場合か、もしくは、「呼びかけの罵倒」において証言者のみが話し手の罵倒意図を理解することができる場合、の 2 つのパターンとして考えることができる。したがって、この場合は実際のところ、罵倒の話し手は証言者に向かって発話しているとしか言いようがないとして、以下のように図式している。

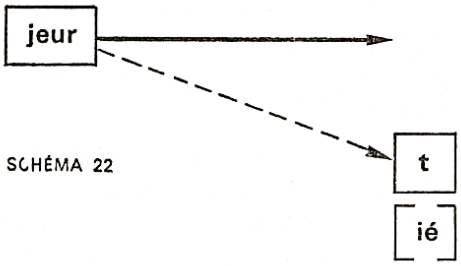


図 7　Larguèche (1983：61) による juron の罵倒効果（3）

しかし、Larguèche（1983：61）は、もしテレビの前に居合わせた友人（証言者）が話し手と異なる意見を持っているのであれば（つまり、証言者が対象であるテレビの出演者に対して好感を抱いている場合）、証言者は「出演者の代わりに」自身が罵られているように感じ取るとしている。この場合 juron の罵倒効果は、証言者を罵倒の対象と見なし、罵倒の対象にもたらされるのである。

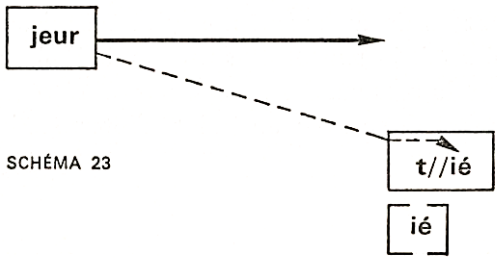


図 8　Larguèche (1983：61) による juron の罵倒効果（4）

これまで、Larguèche（1983）が論じる罵倒効果について見てきた。ここで、Larguèche（1983）の研究上の特徴を 2 点指摘したい。

1 点目としては、Larguèche（1983）は、これまで見てきた先行研究と同様、injure（罵倒）と juron（ののしり）の機能を区別している点である。Larguèche（1983）は injure の機能を、聞き手を必要とし、聞き手に向かって発話される罵倒行為として捉えている。一方、juron に関しては、話し手の一方的な発話であり、発話の到達点である聞き手が存在せず、独り言や不快な状況に対する反応を表すものであると捉えている。

2 点目としては、Larguèche（1983）は、「証言者」という新たな要素を提示している点である。Larguèche（1983）は、« injure référentielle »（指示的罵倒）、« injure interpellative »（呼びかけの罵倒）、juron（ののしり）の 3 つの伝達過程を記述した

うえで、罵倒の発話が必ずしも罵倒の聞き手に向けられたものではなく、罵倒の場面に居合わせた証言者に影響を及ぼすものであるとしている。

Larguèche（1983）は、罵倒行為において、「話し手」、「聞き手」、「罵倒の対象」、「証言者」のそれぞれの立場を考察し、4 者間（聞き手と罵倒の対象が同一である場合は 3 者間）の関係性における罵倒行為の特徴を図式化している。中でも「証言者」という新たな要素が、« injure interpellative »（呼びかけの罵倒）と juron（ののしり）の 2 つの場面において重要な役割を果たしていると記述している。Larguèche（1983）はまた、« injure interpellative »（呼びかけの罵倒）において、政治家同士の罵倒[16]、叙事詩[17]、モリエールの戯曲[18]を分析対象として取り上げている。これらの場面に共通するのは証言者の存在であり、罵倒の効果は必ずしも「罵倒の聞き手」に向けられたものではなく、「証言者」に影響を及ぼす場合がある。例えば、政治家同士の罵倒において、話し手は証言者の前で相手を侮辱することで、自身の意見が正しいということを証言者に印象付けようという試みが見られるし、また聞き手に対して距離を取った態度を示すことで、証言者に話し手と聞き手は友好関係を築いていないという印象を与えることができる。Larguèche（1983）はこのように場面に限定して罵倒が生じた際に見られる人物の関係性を考察し記述している。

しかし、話し手が証言者の前で聞き手を侮辱するすべての場面において、罵倒が証言者に影響を及ぼすとは限らない。例えば、聞き手のみに解釈される表現を用いた場

---

[16] Larguèche（1983：40-42）は政治家同士の罵倒を考察しており、この際に見られる証言者はテレビやラジオの視聴者、またはメディアや記者である。罵倒の内容は 2.4.2 の « injure interpellative »（呼びかけの罵倒）を参照。

[17] Larguèche（1983：43-48）は、ホメロスの長編叙事詩『イーリアス』に見られるアキレウスとアガメムノンの口論場面を分析対象とし、アガメムノンを王として慕う民衆を証言者として取り上げ、罵倒の関係性を考察している。

[18] Larguèche（1983：55）はモリエールの戯曲『町人貴族』の演劇を取り上げ、役者同士の罵倒を考察している。この時の証言者は演劇を見ている観客である。

合、罵倒の効果は直接聞き手に向けられる（Larguèche 1983 : 56）[19]。また日常に見られる罵倒場面においては、例えば、教室で生徒 2 人がクラスメイトの前で喧嘩している場面、または何人かの警察官が路上で口論をしている 2 人の仲裁に入る場面、この 2 つの場面は、いずれも Larguèche（1983）の « injure interpellative »（呼びかけの罵倒）の関係性に相当する。それぞれの場面においての証言者は「クラスメイト」と「警察官」であるが、この時、罵倒の効果は証言者に向けられているとは考えにくい。敢えて言えば、クラスメイトの場合はけんかした生徒 2 人が仲良くないことを証言者であるクラスメイトたちに見せつけることができる。警察官の場合は口論の当事者と顔見知りではない可能性が高く、警察官に向かって直接罵倒しない限り、罵倒の効果が警察官にもたらされることはないといえる。したがって、ある程度罵倒の当事者と関係のある人物が証言者となった場合にのみ、証言者に罵倒の効果がもたらされ得るのだと言える。では、罵倒ではない普通のコミュニケーションにおいては、証言者という要素は無視できるものなのだろうか。この点に関しては、罵倒ではない発話を考察したうえで、比較検討を行う必要があるが、少なくともここで言えることは、「証言者」という要素は、とりわけ罵倒のようなネガティブ評価を伴う発話場面において生じやすいということである。

Larguèche（1983）の研究は、これまで見てきた、罵倒語彙の意味的特徴や罵倒表現の言語形式の考察が中心であった先行研究とは異なり、罵倒の話し手、聞き手、対象、また証言者という罵倒に関わる人物の関係性の中において、罵倒の伝わり方や罵倒がもたらす効果を論じた言語学的研究であるといえる。

次節では、同じように罵倒を関係性の中で考察し、これまでの先行研究で触れられてこなかった insulte（侮辱）という概念についても検討していく。

---

[19] 例えば、演劇関係者に向けられた演劇のリハーサルの場合が挙げられる。セリフは演劇上の聞き手に向けられたものであり、リハーサルを見守っている演劇関係者（証言者）に罵倒効果を与えることはない。

2.5　Lagorgette（1994, 2003, 2006）

Lagorgetten の 3 つ研究（1994, 2003, 2006）は主に中世フランス語に見られる暴力的な言葉の言語現象を分析対象としており、特に insulte（侮辱）と blasphème（冒涜）について研究を行っている。Lagorgette（1994）は聞き手に対する呼びかけを示す「名詞グループ」（les groupes nominaux）を « les termes d'adresse »（呼称表現）[20]と呼ぶ。Lagorgette（1994）は、オースティンの発話行為[21]に基づき、この「呼称表現」を言語行為（un acte de langage）として捉え、会話のやり取りにおいて、とりわけ発話媒介行為（l'acte perlocutoire）の特徴を持つと述べている[22]。

2.5.1　Insulte（侮辱）blasphème（冒涜）

Lagorgette（2003）は、とりわけ「名詞句」の形を取る insulte を研究対象としており、以下のように述べている。

> Toutes les insultes lexicalisées n'accomplissent pas l'acte d'insulter, alors que des GN non classifiés comme axiologiques négatifs accomplissent cet acte. {…} Les seules insultes lexicalisées ne suffisent pas pour identifier l'acte.
>
> (Lagorgette 2003：172)

---

[20] Je nomme terme d'adresse les groupes nominaux qui servent dans le discours direct à interpeller les différents locuteurs. (Lagorgette 1994：§2)（直接話法において、異なる聞き手に対して呼びかける名詞グループを呼称表現と呼ぶ。）

[21] John Langshaw Austin (1990) *Quand dire, c'est faire* (*How to do things with Words*, 1962), Paris, Le Seuil.

[22] Les termes d'adresse marquent dans les dialogues la présence d'acte perlocutoires et favorisent le succès de ces actes. (Lagorgette 1994：§3)（呼称表現は会話において発話媒介行為を指し示し、これらの行為の成功を促進する。）

（語彙化されたすべての侮辱表現が侮辱行為を実現するわけではない、それに対して、ネガティブ評価として分類されていない名詞グループが侮辱行為を実行する。語彙化された侮辱表現のみでは行為を特定するのに不十分である。）

Lagorgette（2003）によれば、実際の会話において、insulte として用いられる名詞グループは、辞書に載っているような語彙化された侮辱表現リストに含まれていない。そのうえ、言葉のやり取りにおいて、発話の参加者は「名詞グループ」の形を取る表現を自由に組み合わせて言い換えを行っているため、発話状況が適切であれば、どんな表現でも insulte として用いることができる（Lagorgette 2006：27）。したがって、侮辱表現を研究するにあたり、語彙化された侮辱表現リストに含まれない発話が持つ意味的機能を考察することが重要である[23]。

Lagorgette（2003）の研究は、insulte を発話したからといって、insulter（侮辱する）が実現することにはならないという考えを土台としており、blasphème も同じ特徴を持つとしている。

Dire des insultes (lexicalisées) n'est pas insulter en tant qu'acte. {…} Dire des insultes accomplit l'acte de DIRE, alors qu'INSULTER est un acte illocutoire accompli par au moins un GN dont la valeur pragmatique n'est pas donnée par la simple appartenance des lexèmes à une classe lexicale. De même, dire

[23] Calculer le sens d'un énoncé quand il n'appartient pas à l'axiologie lexicalisée usuelle. {…} Le calcul du sens des différents GN aura à prendre en compte, bien au-delà de la seule valeur lexicale, un groupe d'éléments que nous nous attacherons à délimiter. (Lagorgette 2003：172)（日常的に使用される語彙化された価値表現に含まれない発話の意味を考察する。異なる名詞グループの意味を考察し、語彙レベル以上に、ある構成要素グループに範囲を定めることに焦点を当てる。）

des blasphèmes ou des jurons accomplit l'acte de DIRE, alors que BLASPHÉMER est un acte illocutoire accompli par au moins un GN, selon un faisceau de conditions de félicité. (Lagorgette 2003：172)

（（語彙化された）侮辱表現を発話したところで、行為としての侮辱にはならない。侮辱表現を「言う」ことは、「言う」という行為を遂行するだけであるが、「侮辱する」ことは、少なくともひとつの名詞グループ、しかもその名詞グループの語用論的価値が、グループ内の語彙素がたったひとつの語彙クラスに属することによっては得られないような、そうした名詞グループによって実行される発話内行為なのである。同様に、冒涜的な言葉またはののしりを発話することも「言う」という行為を実行するが、「冒涜する」という発話内行為は、適切性条件を満たすことにより、少なくとも 1 つの名詞グループによって実行される。）

Lagorgette（2003）はこのように論じ、insulte と blasphème の共通点を指摘している。しかし、実際の発話では、両者において聞き手の反応が異なることも指摘されている。以下で、insulte と blasphème の関係性をみていく。

2.5.2 Lagorgette（2003）: « conditions de félicité »（適切性条件）

Lagorgette（2003）によれば、上記で見たように、insulter（侮辱する）または blasphémer（冒涜する）は発話することで発話内行為を実行する。しかし、Lagorgette（2003）は、これらの用語は「ある文を発話した時点でその文が表す動作を行うことになる」ことを示す遂行動詞ではないため、発話行為は他の手段によってでしか実行することができないと指摘している[24]。遂行動詞ではない動詞が発話行為を生じさせ

[24] この点に関しては、Lagorgette（1994）においても以下のように指摘されている。Dans la syntaxe, l'insulte directe se signale par l'usage de groupes nominaux et non de verbes. Il

るには、話し手の発話を基に、聞き手が適切な反応を見せることによって発話行為が実行される[25]。

Lagorgette（2003）は、insulte と blasphème の発話を成立させるには話し手のみの発話では不十分であり、他にもいくつかの条件が必要であるとし、« conditions de félicité »（適切性条件）という概念を提示している。Lagorgette（2003：186）によれば、侮辱表現を発話する際、「話し手」の意図（侮辱の標的）は明確である必要があり、適切な状況において適切な語彙や表現を選択して発話する必要がある。受信者である聞き手に関しては、はっきりと侮辱の標的を認識する必要があり、侮辱に対する解釈、または事実に基づいた評価によって反応を見せる必要がある。Lagorgette（2003：186）が示した « conditions de félicité »（適切性条件）の図式に日本語訳を付け、図 9 に示す。

---

n'existe pas de verbe performatif. (Lagorgette 1994：§15)（統語的には、直接的な侮辱は動詞ではなく、名詞グループの使用によって表される。侮辱においては、遂行動詞は存在しない。）Lagorgette（1994）はこのように述べ、insulter（侮辱する）という動詞を用いて、遂行文を表すことはできないと論じている。例えば、« Je t'insulte：garce ! »（君を侮辱する：あばずれ！）と発話することはできない。しかし、on m'a insulté（侮辱された）、on m'a injurié（罵倒された）のような場合は、侮辱行為が存在したことを記述している。

[25] Si les verbes performatifs n'existent pas, c'est parce que l'acte reste incomplet lors de l'énonciation. Tant que L2 ou L3 n'a pas validé la visée de L1, la force illocutoire reste inexistante. (Lagorgette 2003：184-185)（遂行動詞が存在しない理由は、発話の際に行為が完成しないからである。L2（聞き手）または L3（第 3 者、聴衆）が L1（話し手）の目的を確認しなければ、発話内効力は存在しないままである。）

L1 話し手		L2 ou L3 聞き手、または第 3 者
―**volonté** (« visée ») ―**sélection de lexème(s) pertinent(s) / contexte** ―**formulation adéquate** ―話し手の意図（侮辱の標的） ―適切な語彙選択 / 状況 ―適切な表現	 >>> <<<	**reconnaissance d'une visée explicite message en retour** dépendant de： a ＞ interprétation；b ＞ évaluation valeur vérité： *insulte rituelle* (aucune) ou *personnelle* (V / F) **ou rupture de l'échange verbal** tel que construit par L_1 **(et/ou sanction)** 明確な標的の認識 返答は以下によるものである： a > 解釈；b > 事実に基づいた評価： 慣用的な侮辱表現（なし） または個人の侮辱表現（事実/虚偽） または話し手によって構成されたような言葉のやり取りの中断（加えて / または処罰）

図 9　Lagorgette（2003：186）による「適切性条件」の図式

このように、適切性条件に基づいて insulte と blasphème を考察したところ、Lagorgette（2003：186）によれば、両者において L1（話し手）の発話過程は同じであるが、blasphème の場合において、発話は L2（聞き手）によって「冒涜」として捉えられているというわけではない。この場合の発話は、L2 が冒涜のひどさの程度を評価するのではなく、第 3 者である世俗の人々（L3）が冒涜性を評価するのである。図 10 に Lagorgette（2003：186）の図式を提示する。

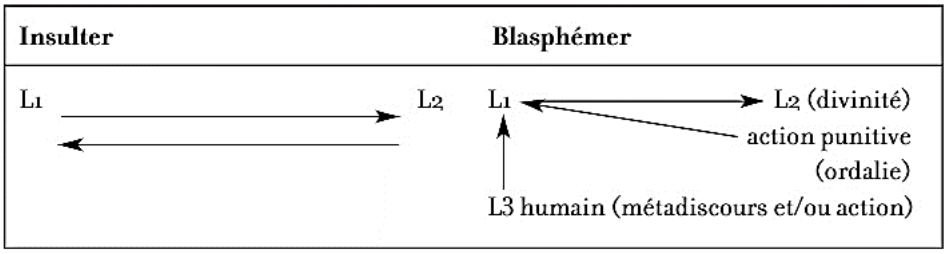


図 10　Lagorgette（2003：186）による insulter と blasphémer の相違

Lagorgette（2003：186）は、このように insulte と blasphème の発話において、発話の受信者側の振る舞いに違いがあると論じている。ここまで、Lagorgette（2003）の研究を見てきたが、以下では Lagorgette（1994）が論じるもう 1 つの概念を見ていく。

2.5.3　Lagorgette（1994）: « cohésion du groupe »　（集団の結束性）

Lagorgette（1994）[26]の研究において、もう 1 つ、« cohésion du groupe »（集団の結束性）という概念の重要性が指摘されている。Lagorgette（1994：§24）は中世フランス語の侮辱表現を研究する上で、15 世紀を代表する喜劇である « *La Farce de Maistre Pierre Pathelin* »『ピエール・パトラン先生の喜劇』と « *Le Meunier dont le Diable Emporte l'âme en Enfer* »『地獄の悪魔に魂をもっていかれた粉屋』に見られる侮辱表現を分析データとして取り上げている。中でも、insulte が罵りの対象である聞き手に直接向かない場合において、第 3 者（観客）との関係が重要であるとして « cohésion du groupe »（集団の結束性）という概念を提示している。

[26] Lagorgette, D (1994) « Termes d'adresse, acte perlocutoire et insultes：la violence verbale dans quelques textes des 14e siècles, 15e siècles et 16e siècles », *SENEFIANCE* 36, pp.317-332.（オンラインアクセス：https://books.openedition.org/pup/3163）Lagorgette（1994）のこの論文はインターネットにて公開されているものを引用している。そのため、引用の際はページ数ではなく、段落（paragraphe：§）で提示する。

『ピエール・パトラン先生の喜劇』では、パトラン先生が布屋の主人を騙し、買った布の代金をわざと家まで取りに来させるという場面において、代金を払いたくないパトラン先生は精神錯乱状態を装い、布屋の主人に意味不明の言葉を浴びせるのである。パトラン先生は、その節々で罵りの言葉だけははっきりと分かるように叫び、罵るのである[27]。しかし、布屋の主人はその罵りが聞こえておらず反応を見せない。『地獄の悪魔に魂をもっていかれた粉屋』では、瀕死状態で寝たきりの粉屋の主人が自分の妻とその愛人が家にいることに気づき、ぶつぶつ言いながら密かに彼らを罵るが、妻と愛人にその声は届かず、観客だけが聞いている[28]。Lagorgette（1994：§28）によれば、この 2 つの場面に見られる insulte の機能は、対話者同士のやりとりというよりも観客を含めた台本の構成（économie du texte）全体に向かうものである。つまり、2 人の主人公（パトラン先生と粉屋）は間接的にそれぞれの聞き手を罵っているが、その罵りは聞き手に届かず、観客だけが受け止めることのできる発話である。観客はまた、自身が「パトラン先生」や「粉屋の主人」と同じ舞台を構成する要素の一部であるかのような感覚を覚え、パトラン先生と粉屋の主人の独り言のような罵りを聞き、役者を笑ったり、からかったりするのである。役者と観客が一体になることが「集団の結束性」という概念でまとめられているのである。

以上の考察を踏まえて、Lagorgette（1994）は「演劇」場面に見られる insulte の特徴を以下のようにまとめている。

> L'insulte non adressée clairement à son destinataire et fonctionnant comme ressort dramatique, qui cherche à établir des relations de solidarité. Car si

[27] 劇中のセリフ（罵倒表現）は、参考資料 5 参照。

[28] 劇中のセリフ（罵倒表現）は、参考資料 6 参照。

l'insulte cherche à isoler le récepteur, elle aime à avoir l'assentiment des autres membres du groupe. (Lagorgette 1994：§28)

（侮辱が明確に相手に向かわず、さらに演劇的手段のような機能があり、連帯関係を築こうとするのである。なぜなら、屈辱が相手（受信者）を除外しようとするその一方で、集団内の他の参加者の賛同を求めようとするからである。）

演劇の場合において、第 3 者の賛同とは、観客の笑いなどであり、Lagorgette（1994：§28）によれば、insulte は、1）単なる発話行為（発話内行為）であり、2）聞き手を脅し攻撃をすると同時に、集団内の参加者を納得させようとする、という 2 つの特徴において、言語行為（acte de langage）を実行しているといえる。

以上で見てきたように、Lagorgette（2003）の「適切性条件」において、insulter（侮辱する）では 2 者間、blasphèmer（冒涜する）では 3 者間の会話の関係である。また、Lagorgette（1994）の「集団の結束性」では、演劇を考察対象とし、喜劇の主人公（話し手）が観客（第 3 者）と一体になることで、insulte の効果は実際の罵りの対象（聞き手）ではなく、「観客」が受け止める機能であることが指摘されている。Lagorgette（1994）が記述している「観客」は、前節で紹介した Larguèche（1983）が記述している「証言者」（特に « injure interpellative »（呼びかけの罵倒）に見られる証言者）と類似している。両者の研究は話し手、聞き手とは別に、第 3 者の存在が重要な役割を果たしている、という点において共通している。

Lagorgette（1994）は主に演劇の台本（セリフ）に見られる侮辱表現の機能を考察しており、役者（話し手）は自身が発話した侮辱表現を観客と共有して一体感を醸し出して、さらに観客に侮辱表現の「演技」を納得させることが重要であるとしている。この場合は、観客が役者の侮辱表現に反応を見せ、賛同するという役割を果たしており、侮辱行為は役者（話し手）の演技と観客の反応で成り立つといえる。一方、Larguèche（1983）は、「罵倒の話し手」が「罵倒の聞き手（＝罵倒の対象）」に向か

って、「証言者」の前で発話する状況を表す « injure interpellative »（呼びかけの罵倒）において、いくつかの場面を提示し、「証言者」の役割を記述している。政治家同士の罵倒場面においては、メディアやテレビの視聴者が証言者であり、罵倒は聞き手（罵倒の対象となる政治家）に向けられるが、多くの場合、罵倒の効果は聞き手（=罵倒の対象）ではなく、証言者に及ぼされるものである。また、Larguèche（1983：55）はモリエールの戯曲 « *Le bourgeois Gentilhomme* »『町人貴族』を例に演劇場面に関しても記述している。Larguèche（1983 : 55）によれば、演劇における証言者は「観客」である場合と「同じ舞台にいる役者」である場合が見られる。

「証言者＝観客」の場合、罵倒の「発話の伝達経路」は聞き手に向かっているが、「罵倒効果の伝達経路」は証言者である観客に向けられているとしている。Larguèche（1983：55）によれば、演劇の場合、le témoins est du même bord que l'injurieur（証言者は罵りの話し手と同じ側に位置する）。これは、Lagorgette（1994）が論じている「役者（話し手）と観客の一体感」と同様の機能を持つといえる。

「証言者＝舞台の役者」の場合、le témoins se sent injurié à la place de l'injuriaire (injurié) (Larguèche 1983：55)（証言者は聞き手（罵りの対象）の代わりに罵られていると感じる）場合である。例えば、舞台での 3 者間の会話では、話し手（役者 L1）が証言者（役者 L3）の前で聞き手（役者 L2）を罵倒している状況において、証言者は自身が罵られている（自身が罵倒の対象）かのように感じ取る場合があり、この場合は、罵倒の効果は証言者（=罵倒の対象）に向けられるものである。

Larguèche（1983）はこのように、演劇における証言者がどのように罵倒の効果の影響を受けているのか、いくつかの場面において考察している。

Lagorgette（1994）における「観客」は、罵倒の話し手と一体になり、笑いなどの反応を見せ、発話に賛同することで侮辱を成立させる役割を果たしている。それに対して、Larguèche（1983）における「証言者」は、罵倒の話し手と一体になるというよりも、むしろ罵倒の効果が影響を及ぼす対象である。「観客」と「証言者」という概

念は、演劇、政治的インタビュー、詩作品などの作られた場面にのみならず、自然会話における罵倒場面にも見られる場合がある。自然会話に見られる「観客」と「証言者」に関しては、用例を基にさらなる考察が必要であるが、例えば、2 者間の口論である際、それを見ている人がいれば証言者となり得るし、3 者間の口論の場合、第 3 者が聞き手に賛同するのであれば、「観客」と同じような役割があるといえる。第 3 者の役割は各発話場面において異なり、罵倒研究を行う際は発話場面がどのように構成されたものなのかを分析することが重要な要素となる。

2.5.4 Lagorgette（2006）: insulte の特徴とタイプ

Lagorgette（2003）によれば、dans un contexte religieux comme le moyen âge, il est difficile de dissocier nom et essence. (Lagorgette 2003：176)（中世のような宗教に関わる場面において、名前と本質を切り離して考えるのは難しい）とあり、中世フランス語における insulte は、une action（行為）であると同時に、un prédicat（属性）であり、聞き手の本質として持つ属性を表すものであるとしている。

> En attaquant l'homme verbalement sous la forme de termes d'adresse axiologiques négatifs, on prédique en effet ses propriétés, et si l'on parvient à convaincre l'auditoire, il y a fort à parier que cette nouvelle prédication métonymique deviendra l'étiquette sous laquelle se feront par la suite tous les actes illocutoires d'appel. (Lagorgette 2003：176)
>
> （ネガティブ評価を持つ呼称表現を用いて人を言葉で侮辱することは、その人物の属性について言及していることに他ならない。また、聴衆がみなそれを受け入れるのであれば、間違いなくこの新しい侮辱の換喩的表現は、その人を呼ぶ場合のラベルとなるのである。）

この指摘からわかるように、insulte は侮辱の対象が実際に持つ特徴を捉え、その特徴に基づいて相手を再定義し、新たな名称（ラベル）を与えるという機能があると理解できる。このラベルは、多くの場合、負の評価を示すネガティブな表現であり、lagorgette（1994）によれば、それは罵りの対象を本来属する社会階級（地位、身分など）から排除する役割がある[29]。

insulte に用いられる語彙や表現にはさまざまなものがあり、侮辱の対象が持つ特徴によって変化する。Lagorgette（2006：28）は、11 世紀から 20 世紀に見られる日常的な侮辱語彙を通時的に考察し、Edouard（1967）と Rouayrenc（1998）の罵倒表現研究をも踏まえた上で、insulte を a）非・人間と比較する要素、b）人間に関する要素、c）譲渡不可能なものに対する侮辱、の 3 つのタイプに分類している。この考察から、語彙化されている insulte の語彙形成や表現の特徴には、主に métaphore（隠喩）と métonymie（換喩）という 2 つの意味的構造によって成り立っていることがわかる、と記述している。以下に Lagorgette（2006：28-29）が挙げている 3 つのタイプを提示する。

a）*Comparaisons à des éléments non humains*：

Animaux：chien mastin (théâtre du XVe s.：farce), cochonne, vache, morue

Substance：merdaille, vieux lavement

(Lagorgette 2006：28)

（*非・人間と比較する要素：*）

動物：料理の詰め物（15 世紀の劇に見られる表現）、豚（cochon の女性形）→卑猥な奴、牛→太った女、タラ→売春婦

[29] On pointe ainsi un individu que l'on qualifie par des traits négatifs, ce qui lui ôte son statut d'élément social normal. (Lagorgette 1994：§15)（ネガティブな特徴を用いて評価するある個人を指し示し、その人の社会的地位を普通社会から剥奪する。）

物質：クソ（merde の派生形）、洗うこと→うざい奴

b) *Comparaisons à des élément humains：*

Profession：apoticaire, munier (XVe s.), boucher, flic

Mœurs：ribauld, perfide (XVIIe s., tragédies et comédies), menteur, voleur

Noms propres：guignol, harpagon, castafiore, Lilith

Titres + nc / NP：non conventionnel：reine / roi des + N

(Lagorgette 2006：28)

（*人間に関する要素：*）

職業：薬剤師、粉屋（15 世紀）、肉屋、警察

風習：売春婦、裏切りまたは浮気者（17 世紀の悲喜劇に見られる表現）、うそつき、どろぼう

固有名詞：絹布職工（18 世紀、リヨンの指人形芝居の主人公）、モリエールの『守銭奴』の主人公、カスタフィオーレ（タンタンの冒険の登場人物）

名称＋非寛容表現：～の女王、～の王様

c) *Attaques portant sur des éléments inaliénables：*

« Race »： païen (Chanson de geste, XIe-XIVe s.), bougnoules, négro, spaghetti, rital, melon, schleuh, chinetoque

Ontotype：pétasse (connasse, pouffiasse), gonzesse, salope

Capacités sexuelles：hebohet (=eunuque), nympho, frigide

Filiation：fils à putain (Chanson de Roland 1080), fils de prêtre, fils de moine, fils de chienne

Insultes par ricochet：cocu, mal baisée

(Lagorgette 2006：28-29)

（*譲渡不可能なものに対する侮辱：*）

「人種」：異教徒（11-14 世紀の武勲詩）、黒人またはアラブ人、黒人、イタ公、イタリア人、アラブ人、ドイツ人、中国人

社会的存在：売春婦（あばずれ、娼婦）、売春夫、淫売男

性的能力：宦官、色情症の女、不感症の女

親子関係：売春婦の息子（1080 年のローランの歌）、神父の息子、修道士の息子、娼婦の息子

間接的侮辱：寝取られた人、性的行為に満足しなかった女

以上のリストから、第 1 のタイプは「非・人間と比較する要素」に関する表現であり、「動物」と「物質」の 2 つに分けられている。第 2 のタイプは「人間に関する要素」に関する表現であり、「職業」、「風習」、「固有名詞」、「名称＋非慣用表現」の 4 つに分けられている。第 3 のタイプは「譲渡不可能なものに対する侮辱」であり、「人種」、「社会的存在」、「性的能力」、「親子関係」、「間接的侮辱」の 5 つに分けられている。

Lagorgette（2006：29）はさらに、insulte は時代、地域、またフランス語の多様性によって使用する語彙が異なり、人々の職業や社会的地位によっても使用する語彙に変化が見られると述べている[30]。

---

[30] 地域によって表現が異なることに関して、Lagorgette（2006：29）は以下の用例を挙げている。

Régis：Ah non, m'appelle pas « Grand » ! Ici, on dit « Gros ».

DL：- C'est marrant, ça：chez nous, « Grand », c'est très affectueux.

R：- Ben ici, c'est « Gros ». Avec « Grand », on a toujours l'impression qu'il y a « grand con » derrière. (corpus Régis, août 2002, Mesvres, S.-et -L.)

(Lagorgette 2006：29)

Lagorgette（2006：28-29）はこのように、insulte を 3 つのタイプに分類している。しかし、これらの分類は、Edouard（1967）と Rouayrenc（1998）の両方の罵倒表現リストに見られる分類でもあり、injure（罵倒）として捉えられている。このような違いが見られるのは、おそらく insulte が持つ特徴が関係していると推察できる。Lagorgette（2006）が記述した insulte の特徴は以下の 3 点にまとめることができる。

1）insulte という行為には L_1（話し手）、L_2（聞き手）、L_3（第 3 者、聴衆）が存在することから、insulte は、聞き手を必要とし、相手に向かって発話されると考えられる[31]。

2）Lagorgette（1994）はオースティンが提唱する 3 つの発話行為に基づいて、insultes は発話することで発話行為（acte locutoire）を実行し、また発話そのものが侮辱行為となるため発話内行為（acte illocutoire）を実行し、さらに侮辱することで相手の振る舞いになんらかの影響を与えようとするため発話媒介行為（acte perlocuteur）を実行する特徴を持つと述べている。

（Régis：やめて、「大きい」と呼ばないで！ここでは「太い」と言うんだ。）

（DL：それはおもしろいね、私のところでは「大きい」はとても愛情のこもった言葉なんだ）

（R：そう、ここでは「太い」を使うんだ。「大きい」だと、いつも後ろに con（バカ）がついて、「大きいバカ→大バカ」という感じがする。）

[31] この点に関しては、Lagorgette et Larrivée（2004）においても指摘されている。« L'insulte suppose un destinataire, elle a une fonction d'adresse. »（Lagorgette et Larrivée 2004：7）（insulte は相手がいることを前提としており、相手に向かって話しかける機能を持つ。）

Rouayrenc（1998：110）もまた les insultes（侮辱表現）に関して言及しており、les insultes は « l'orientation vers le destinataire »（聞き手に向けられた）発話であると述べている。

3）insulte は相手が持つ特徴や属性に対して、ネガティブ評価を表す語彙を用いて侮辱するため、相手の特徴を再定義し、負のラベルを与えることで侮辱が成立する。

以上の 3 点を踏まえて考えると、侮辱の対象となる相手の特徴は実際に確認できるものが多いと推察でき、例えば、上記のリストにおいて、牛（→太った女）は実際に体型がふくよかな女性を対象として発話されるものであり、insulte は罵りの対象が実際に持っている特徴に対する侮辱であるといえる。他には、泥棒、粉屋、人種などに関しても同様なことがいえる。泥棒、粉屋は後天的に備わった性質であり、反対に人種に関しては先天的に決められたものであるが、いずれの場合においても、その人物が実際に持つ特徴に対する侮辱である。Lgorgette（2006）はこのような観点で insulte を 3 つのタイプに分類しており、語彙の意味的特徴に注目し、世界を構成するテーマによって罵倒表現を分類している Edouard（1967）と罵倒表現の語形成や罵倒表現が持つ婉曲表現や隠語などの特徴で分類している Rouayrenc（1998）とは、分類の仕方が異なるといえる。そのため、同じ語彙や表現が insulte としても、injure としても捉えられるのである。

2.6 まとめ

第 2 章では、Edouard（1967）、Guiraud（1976）、Rouayrenc（1998）、Larguèche（1983）、Lagorgette（1993, 2003, 2006）の先行研究を取り上げ、フランス語における罵倒表現の言語形式とそのタイプを検討した。

Edouard（1967）は、すでに述べたように、罵倒表現を injure という用語で統一している。injure は聞き手に向かって発話するという特徴があり、一語（idiot バカ、cruche とんま）、成句（Bougre de feignasse この怠け者野郎！）、形容詞の前置を伴う名詞句表現（sale pute 汚い売春婦→あばずれ、gros con 太いバカ→大バカ野郎）

などの言語形式で用いられる。また、罵倒の聞き手に関しては、個人である場合（espèce de con）と不特定多数の人物である場合（bande de cons）が見られる。Edouard（1967）の研究は主に、罵倒する際の語彙選択、罵倒に対する反応などを記述しており、罵倒という行為を成功させるには、どのような語彙を用いた方がより適切で効率よく聞き手を貶めることができるのか、社会においての罵倒表現の使われ方に関して詳しく記述している研究である。

Guiraud（1976）と Rouayrenc（1998）は gros mots（下品な言葉）について言及している。Guiraud（1976）は、普段の日常会話に見られる砕けた言い回し（低俗な言葉）と罵倒の際に見られる下品な言葉や猥褻な言葉を区別しており、下品な言葉の使用は、話し手の社会的階層を反映する発話であるとしている。Rouayrenc（1998）は、下品な言葉を冒涜表現、性的表現、糞尿表現の 3 つに分類し、冒涜表現に見られる婉曲表現、また直接的な性や排泄物に関する表現を避けるための隠語を記述している。Edouard（1967）、Guiraud（1976）、Rouayrenc（1998）の研究は主に罵倒表現を語彙的に考察しており、語彙の多様性、語彙の意味的特徴、言語形式などを詳細に考察した研究である。

これらの研究に対して、Larguèche（1983）と Lagorgette（1993, 2003, 2006）は、罵倒を発話における関係性の中で捉えている。Larguèche（1983）は、罵倒の発話場面において、話し手、聞き手、罵倒の対象、証言者という 4 つの要素を記述しており、主に政治的場面においての罵倒を考察し、罵倒がもたらす効果を記述している。Lagorgette（1993, 2003, 2006）においても、話し手、聞き手、観客の 3 つの要素があるとし、主に演劇場面における罵倒を考察している。両者はともに発話における関係性に注目し罵倒の機能を言語学的に記述しているといえる。

Larguèche（1983）では、injure と juron の 2 つの罵倒のタイプを区別している。injure タイプは、例えば、« tu » を伴う発言（tu es un salaud！お前はげす野郎だ！）、または無冠詞（Salaud！げす野郎）の形を取り、罵倒の聞き手に向かって直接的に発

話するという特徴を持つ。それに対して、juron タイプは、聞き手に向かわず、話し手自身の感情を表し間投詞的な振る舞いをする。

Lagorgette（1993, 2003, 2006）では、insulte と blasphème が挙げられている。insulte タイプの発話も聞き手を必要としており、罵倒の内容は実際に確認できる「事実」である場合が多い。例えば、« Échalas ! »（のっぽ）、« Croulant ! »（老いぼれ）、« voleur ! »（どろぼう！）などのように、多くの場合、聞き手が実際に持つ特徴や実際の振る舞いを際立たせて、罵るのである。blasphème は、主に神に対する冒涜表現が多く含まれている。冒涜表現自体が禁止されているというよりは、冒涜表現を発話すること自体がタブーであり、神様に対する冒涜行為となるのである。また、発話の冒涜性を評価するのは、聞き手ではなく、第 3 者である世俗の人々である。

以上の考察を踏まえて、次章では罵倒表現のタイプ、特に injure, juron, insulte, blasphème, gros mots の 5 つに注目し、罵倒表現が誰に向かって発話されるのか、またはどのような機能を持つのかなど、それぞれのタイプに見られる罵倒表現の特徴、罵倒表現の機能についてさらに詳しく考察する。

第 3 章

フランス語における各罵倒タイプの特徴と関係性

3.1　「罵倒」を表す語彙

フランス語において、「罵倒」を意味する語彙は多数見受けられる。Lagorgette & Larrivée（2004：6）は、罵倒を意味する言葉として、insulte（侮辱）、injure（罵倒）、invective（罵言）、apostrophe（乱暴な言葉）、vanne（悪口）、juron（ののしり）、blasphème（冒涜）、gros mot（下品な言葉）、incivilité（無礼な言葉）、outrage（凌辱）などを挙げており、これらの語彙は罵倒研究において用いられているが、それぞれが持つ定義を明確に区別することは難しい、としている。

先行研究において、injure（罵倒）、insulte（侮辱）、juron（ののしり）、blasphème（冒涜）の 4 つの罵倒タイプが研究対象とされていることを見てきた。本章では、この 4 つのタイプの罵倒表現の特徴を考察することを試みる。最後に、この 4 つの用語と gros mots（下品な言葉）との関わりについて考察する。

3.2　Injure（罵倒）と insulte（侮辱）

injure と insulte としての罵倒表現は、先行研究で見たように、両用語とも罵倒を浴びせる発話の相手を必要とし、つまり、聞き手に向かって発話される表現である。

3.2.1　Injure（罵倒）

« injure »（罵倒）という語は、jus (droit)（法律）、または juris (justice)（不正）に否定の接頭辞 « in- » を加えた、ラテン語の injuria に由来する言葉である。そのため、injure は « injustice, violation du droit » (*TFLi*)（不正、法の違反）、または « tort »

（過ち）という意味を持つ。injure が « parole outrageante » (*TFLi*)（侮辱的な言葉）の意で用いられ始めたのは 16 世紀頃からであり、現代においても同様の意味で使用されている。

injure は、「単数形」で用いられた場合、« geste, procédé, parole ou écrit adressés directement et délibérément à une personne pour l'offenser » (*TFLi*)（ある人物に向かって直接的に侮辱し傷つけるための言葉、身ぶりまたは手法）を意味しており、(1) のように用いられる。成句の形で injure は、faire une injure à qqn（誰かに向かって罵倒する）のように用いられる。この場合、injure は他人の欠点を非難したり、他人の行いを軽蔑する手段を意味する。

(1) Tu lui infliges la plus sanglante injure qui se puisse infliger à une femme...

(Hermant, M. de Courpière,1907, II, 4, p. 16.) (*TFLi*)

（君は彼女に、女性に苦痛を加えられるような最も残酷な罵倒を与えた…）

一方、injures（罵倒表現）のように、「複数形」で用いられた場合、« parole offensante, interjection grossière adressée à quelqu'un » (*TFLi*)（侮辱的な言葉、他人に向けられた卑劣的な間投詞）を意味しており、(2) のように用いられる。また、成句の形で injures は、dire des injures à qqn（誰かに罵倒表現を言う）のように用いられる。

(2) Athénaïs vomit les plus sales injures, les invectives les plus obscènes sur les magistrats et les grenadiers

(France, Dieux ont soif,1912, p. 218.) (*TFLi*)

（アテナイスは行政官と兵士に向かって、最も汚い罵倒、最も下品な罵言を吐いた）

このように、injure は他人に対する侮辱行為であり、injures は侮辱的な言葉そのものを示すと理解することができる。これらの辞書の定義からわかるように、injure は相手に対する罵倒行為であり、発話相手を必要とする罵倒行為であるといえる。続いて、insulte を見ていく。

3.2.2 Insulte（侮辱）

« insulte »（侮辱）が女性名詞として使用され始めたのは 1664 年からであり、それ以前には、insulte は男性名詞で用いられ、すでに « offense outrageante en paroles ou en actes »（*TFLi*）（侮辱的で無礼な言葉または行為）を意味していた。16－18 世紀においては、insulte は（3）のように、« attaque armée contre quelque chose ou quelqu'un »（*TFLi*）（ある物事またはある人物に対する武器による攻撃）の意で用いられた。

(3) Les assiégés (...), n'ayant pas prévu cette insulte, n'avaient rien aux remparts du midi (Chateaubr., Mém., t. 1, 1848, p. 413) (*TFLi*)
（籠城軍は、この攻撃を予測していなかった、南の城塞には何もなかった）

現代において、insulte は « paroles ou attitude portant atteinte à l'honneur ou à la dignité de quelqu'un (marquant de l'irrespect, du mépris envers quelque chose) »（*TFLi*）（ある人物の名誉または尊厳を侵害するような言葉または態度（無礼、または物事に対する軽蔑））を意味し、(4) の用例のように用いる。また、成句の形では、dire des insultes à qqn（誰かに侮辱的な言葉を言う）のように用いることができる。

(4) Gérard, mon vieux, disait Paul entre ses lèvres, n'écoute pas cette typesse... Elle nous embête. Élisabeth bondit sous l'insulte：– Typesse! eh bien, mes

types, débrouillez-vous. Soigne-toi tout seul

(Cocteau, Enf. terr.,1929, p. 30) (*TFLi*)

（ジェラール、お前よ、とポールは言った、この小娘の言うことを聞かないで、私たちを困らせているんだ。エリザベスは侮辱を交えて怒り：小娘！あーそうかい、野郎ども、お前らでなんとかするがいい。あんた一人で治せばいい）

このように、insulte は聞き手に対して無礼な態度を見せ、尊厳に欠ける態度を見せることで相手を攻撃する行為である。

以上の辞書定義から、injure と insulte はともに人物または物事を対象とした、言葉による攻撃であり、卑劣な言葉を用いて「発話をする」ということを基本としている。また、両者は発話において聞き手を必要とする発話行為であることで共通している。

3.2.3 Injure（罵倒）と insulte（侮辱）の関係性

Fracchiolla（2011）は、injure と insulte の相違点を以下のように述べている。

L'insulte renvoie à l'origine au mouvement (assaut, sédition) et l'injure au résultat (la blessure, la « navrure ») et que les deux termes peuvent désigner un même type d'attaque de la part de l'injurieur, ils ne désignent pas la même chose du point de vue de l'injuriaire (la personne à qui est destinée l'injure). {…} L'insulte serait plus grossière et maladroite, plus directe aussi, verbale, mais frontale, alors que l'injure renvoie plus facilement à l'essentiel de l'être, blesse, plus insidieusement. (Fracchiolla 2011：2)

（侮辱は行動（襲撃、反乱）、罵倒は結果（傷つき、「傷を負わせる」）が基本にあり、罵りの話し手の方から見れば、2 つの用語は同様のタイプの攻撃を指し示

しているが、罵倒を受け止める罵りの聞き手にとっては異なる罵倒効果をもたらす。侮辱は、礼儀に欠ける態度であり、より直接的であり、面と向かって発話されるものである。一方、罵倒はどちらかというと存在する人物の本質的なもの、苦痛、言葉巧みに発話されるものである。）

辞書の定義と以上の引用を踏まえて、injure と insulte をさらに考察する。

injure は「不正、法律違反、または過ち」を基本的な意味として持ち、のちに侮辱的な言葉という意味で用いられた。injure と見なされる発話は、卑劣な表現が用いられていることが多く、他人の悪行や道徳に反する悪習に対して、声高く発話し、聞き手に対して非難する発話行為であるといえる。このように考えるのであれば、話し手は、他人の卑劣な振る舞いや態度を基に判断し非難しているため、injure は話し手自身の主観的な評価を反映した発話であると考えられる。injure の発話は下品な表現、卑劣な表現であることが多く、他人を傷つけるような表現が用いられている。また、injure の場合は、話し手が発信源であり、話し手の意見によって相手を非難することが目的である。しかし、injure が聞き手に与える影響は、心が折れるような強烈なものではなく、聞き手を connard（バカ野郎）、salaud（げす野郎）として取り上げ、聞き手にとって不愉快な発話であることが多い。

これに対して、insulte は定義で見たように、他人の行為を非難するというよりも、他人の尊厳や名誉に対する侵害であり、どちらかというと聞き手を心理的に追い詰めることを目的としている。例えば、ノーベル賞を受賞した人物に向かって、« sous-développé du bulbe ! » (Anscombre 2008：20)（脳の発達遅れ野郎→あの発達障害野郎！）と発話することで、その人物の人格を貶め、名誉を侮辱する行為となる。この用例からわかるように、insulte は必ずしも卑劣な言葉を使用していない点において、injure と区別することができる。このように、insulte は、injure よりも相手に対する心理的攻撃が強い傾向にあり、相手を侮辱し、傷つけ、貶めるのである。また、insulte

の場合、後述するように、話し手は相手が「実際に」持つマイナス的特徴について言及し、心理的に貶めることが多いのである。

以上で見たように、injure と insulte は、罵倒における相手の特徴の捉え方が異なる。そのため、聞き手に与える影響、また聞き手による返答や反撃も異なる。この点について以下で考察していく。

3.2.4　Anscombre（2009）における罵倒タイプ

ここまで、injure と insulte という語の辞書的意味を基に、両語の用法を考察した。しかし、これらの辞書定義からは injure と insulte がどのような言語形式を取るのか、卑劣な言葉をどのように用いるのかについては明確に記述されていない。

Anscombre（2009）は両語彙が取る言語形式に注目し、共通点と相違点を指摘している。まず、共通点に目を向ければ、Anscombre（2009：27）によれば、injure と insulte はともに、1）« une caractérisation négative du destinataire »（聞き手が持つマイナス的特徴づけ）について言及しており、2)「物事や人物のステレオタイプな語彙」を扱っている、という 2 つの点において共通している。ステレオタイプとは、多くの人が持つイメージや固定観念あるいは偏見であり、それぞれの言語と文化によって異なる。例えば、le cocu（寝取られた男または女)、le bâtard（私生児)、l'idiot（愚か者)、la prostituée（売春婦）のような語彙は、フランス語においてネガティブな表現として受け止められているとしているが、スペインの武勇伝においては、伝統的に、le bâtard（私生児）こそが家族の名誉であると考えられている（Anscombre 2009：27)。このように、文化的に下品、卑劣、猥褻とされる言葉が injure と insulte として用いられているのである。

続いて、injure と insulte の相違点に関して、Anscombre（2009）は、以下の 2 点を指摘している。

1）injure に使用される語彙は限られており、一方、insulte は発話の解釈と結びついている。

2）injure と insulte はともに聞き手を必要とする発話であるが、injure は、聞き手を目の前に発話する必要がある。それに対して、insulte は聞き手が発話場面に居合わせる必要はない。

（Anscombre 2009：27-28 参照）

3.2.4.1　Injure（罵倒）と insulte（侮辱）の相違点（1）

Anscombre（2009：27）によれば、injure に使用される語彙は « un lexique bien circonscrit »（使用範囲の限られた語彙）であり、一方、insulte は « liée à l'interprétation d'une énonciation »（発話の解釈と結びついている）のである。

(4) Pauvre cloche !　(Anscombre 2009：27)

（哀れな鐘→この間抜け野郎！）

(5) Ta mère est plus souvent du bistrot qu'au boulot.　(ibid.)

（お前のお袋は仕事場にいるよりバーにいることが多いね）

(4) と (5) において、Anscombre（2009：27）によれば、(4) は injure と insulte の両方として機能するが、(5) は insulte として捉えるべきである。その理由として、各用例にコメントを付けることで違いを明確にすることができるとしている。

(4') Pauvre cloche ! Vos (insultes + injures) ne m'atteignent pas.

(Anscombre 2009：27)

（この間抜け野郎！君の「侮辱／罵倒」は私を傷つけることはない。）

(5') Ta mère est plus souvent du bistrot qu'au boulot. Vos (insultes + *injures) ne

m'atteignent pas. (ibid.)

（お前の母さんは仕事場にいるよりバーにいることが多いね。君の「侮辱／？罵倒」は私を傷つけることはない）

このように、(4') では、injure と insulte の両方をコメントとして用いることができるが、(5') において、insulte のみが適切であり、injure と捉えるのは不自然である。

以下で、(4) と (5) をさらに詳しく見ていく。Anscombre（2009）の観察から、(4) の発話は、下品な言葉、成句または慣用表現が用いられると考えることができ、例えば、« sale con »（くそ野郎）、« espèce de salaud »（げす野郎）、«（Tu me) casse(s) les couilles ! »（(おまえには）うんざりだ）のような成句が用いられる。(4) の発話は情報伝達を目的として発話されたものではなく、相手を「罵られるべき人」として捉え貶めようとする行為であり、挑発としても捉えることができる。このような発話に対して、同じような表現で反論することができる。つまり、(6) のように、injure に対して injure で返答することができる。

(6) - tu me fais mal, espèce de goret !

- T'avais qu'à lâcher ce bignou, saleté !

- Qu'est-ce que t'as dit ?

- j'ai dit saleté, hé, morue !

- Bougre de vieux singe !

（*Ça mange pas de pain*, 2010：37　下線部筆者加筆）

（君は私を傷つけた、このクソ野郎！）

（この機械を放せばよかったんだよ、不潔野郎！）

（なんだった？）

（不潔野郎って言ったんだよ！えー！あばずれ！）

（この老いぼれ猿め！）

このように、injure は、« un phénomène plutôt oral, comportemental, spontané et immédiat » (Fracchiolla 2011)（どちらかというと、口頭、行動による発言であり、即時的で自然な発話現象）である。これに対して、(5) は、必ずしも下品な言葉を用いる必要はなく、適切な相手に向かって、適切な発話状況において発話することが大事である。

Anscombre（2009）の用例 (5) は、聞き手の母親に対する侮辱であるが、「仕事場にいるよりバーにいる」という具体的な内容をもって侮辱行為を行っている。つまり、聞き手の母親は「あまり仕事をしていない人」と捉えられてもおかしくないような特徴を持っており、話し手は事実に基づいて発話している考えることができる。また、(5) において、下品な言葉の使用は見られず、実際、物事や状況に即した陳述文である。この場合は、聞き手が「仕事をしていない母親に対する侮辱」であると解釈してはじめて、侮辱行為が成立する。

続いて、insulte に対する反応を見ていく。injure に対して injure で返答する事が可能であると述べたが、insulte と見なされる発話の特徴として、聞き手は発話に対して否認することができるという点である。この点に関して、以下の 2 点を指摘することができる。

insulte は、話し手が確認できる事実に基づき、聞き手を侮辱していると述べたが、その事実は「真」か「偽」か、という 2 つ（a と b）のパターンがあると考えられる。

a）発話内容が「真」である場合は、言及内容は聞き手が持つ目に見えるマイナス的特徴、また聞き手が持つコンプレックスである場合が多い。つまり、聞き手が言われて傷つく特徴について言及することである。例えば、以下のような用例がある。

(7) Eh, toi, la plante grimpante, tu cherches où t'accrocher ?

(Edouard 1967：307)

（へい、お前、この攀援つる植物め、どこに引っ掛けられるのかさがしているのか？）

(8) Tu vas crever, t'es trop gonflé ! (Edouard 1967：308)

（あんた死ぬよ、膨れすぎだよ！（太りすぎだよ！））

(7) は背が高いことについて言及しており、のっぽな人をバカにする発話である。(8) は聞き手が太っていることについて言及している。このように、insulte は実際に確認できる事実に対する侮辱であることが多く、他には、« Croulant ! »（老いぼれ！）や « Voleur ! »（どろぼう！）などの表現が挙げられる。このように、聞き手が実際に持つマイナス的特徴に関して、聞き手に向かってその事実を言うことで、聞き手を傷つけることができるのである。

b）発話内容が「偽」である場合は、人物や物事が持つ特徴が事実であるかどうかというよりも、話し手自身が信じている事実に基づき聞き手を評価し、聞き手に向かって発話している場合である。この場合は、聞き手は insulte に対して否認や訂正を用いて返答をすることができる。

(9) Ce que tu peux être moche ! (Edouard 1967：308)

（どこまで醜いんだ君は！）

(10)=(5) Ta mère est plus souvent du bistrot qu'au boulot.

(Anscombre 2009：27)

（お前の母さんは仕事場にいるよりバーにいることが多いね）

(9) は醜さが問題となっている。醜さは、身長が高いことや太っていることに比べ

て、基準がわかりにくく、話し手の判断によるものである。(10) も聞き手の判断であることが多く、他には、« fils de pute »（売春婦の息子→このくそ野郎）や « bâtard »（私生児）なども、時には根拠に欠ける発話である。このように、実際の事柄であるかどうか不明な場合は、話し手は、自身がそうであろうと信じている事実に対して侮辱するのである。つまり、この場合は話し手が「真」と思う事実に基づいた発話であり、聞き手にとっては「偽」であることも考えられる。

このように、a）と b）の両方の場合において、聞き手は injure に対しては injure で返答することができ、insulte に対して否定する態度を見せ、反論することができる。

3.2.4.2 Injure（罵倒）と insulte（侮辱）の相違点（2）

Anscombre（2009：28）によれば、injure と insulte はともに、聞き手に向かって発話するという特徴を持つが、injure として用いられる発話は、聞き手を「目の前にして」発話する必要がある。反対に、insulte として用いられる発話も、聞き手を必要とする点では同様であるが、聞き手が発話場面に居合わせる必要はないという点で異なっている。以下でこの点について検討する。

(11) Hier, après que tu sois parti, Max t'a (insulté + *injurié)：il a dit que tu étais un parfait abruti. (Anscombre 2009：28)

（昨日、君が帰ったあと、マックスが君のことを「侮辱／？罵倒」してたよ。君は完全に愚か者だと言っていたよ。）

(11) は間接話法が用いられ、話し手は聞き手にマックスが言ったことを伝えている。そのため、罵倒の対象を目の前に罵倒しておらず、insulte として捉えることができる。injure に関して、(4) Pauvre cloche！（この間抜け野郎！）のような用例は、確

かに相手を目の前にして罵る必要がある。しかし、injure として用いられる発言は、必ずしも聞き手を目の前に発話する必要はない。この点に関しては、さらに考察する必要があるが、例えば、espèce de connard !（うすのろ！）は injure として見なされているが、コーパス[32]を観察したところ、電話においての発話や、罵り相手が去ったあとに発話される場合がある。電話に関しては、間接的ではあるが、聞き手に向かって直接罵倒している点においては injure として捉えても不自然ではない。同様に、相手が目の前から立ち去ったあとに発話される罵倒も、相手がその場にいたと考えるのであれば、罵り相手もはっきりしているため、injure と捉えても問題はないと考えられる。

injure の特徴に関して、以下で Rouayrenc（1998）について少し触れておく。

---

[32] Anscombre（2009：28）によれば、injure の発話は相手を目の前にして罵る必要がある。しかし、例えば、« Espèce de N » は injure とされているが、相手に向かって発話する罵倒表現であるが、電話や相手が立ち去ったあとに発話される場合がある。以下に、映画 « Comme les autres » に見られる 2 つの用例を提示する。

1)【電話における会話】

Cathy：Je sais, Pedro, c'est le huitième message que je te laisse et je te gonfle, ok… mais putain, tu pourrais au moins me rappeler, ne serait-ce que pour me dire merde, espèce de connard ! （*Comme les autres*）

（わかってるわ、ペドロ、あなたに留守電を残すのはこれで 8 回目ってことは、あなたをうんざりさせていることはわかってるわよ！でもね、ちくしょう、返事くらいしてくれてもいいじゃない、私に「くそ」というだけでもね！うすのろ！）

2)【家庭裁判を終え、法廷から出てくる妻が立ち去る夫に向かって発話する場面、夫は妻と同じ空間にいるが、目の前にいるわけではない】

La cliente：Salaud… C'est ça, ouais, casse-toi ! Va retrouver ta pute, espèce de connard ! （*Comme les autres*）

（クズ野郎、そうね、さっさと消えろ！愛人のところに行けば、このうすのろ！）

3.2.5　Rouayrenc（1998）における injure（罵倒）の考察

Rouayrenc（1998：101）によれば、injure として用いられる表現は、apostrophe（乱暴な呼びかけ）として機能することができ、valeur prédicative（叙述的価値）をもって用いられている。したがって、Salaud！（げす野郎）という罵倒は、tu es un salaud！（お前はげす野郎だ！）と発話しているのと同様であり、これが injure の基本的構造であると記述している。この構造は、第 3 者について言及する場合も同じである。injure には、quel を用いた感嘆文、« quel con ! »（なんてバカなんだ！）が見られ、また、限定辞 le を伴う感嘆文 « le con ! »（あのバカ！）も聞き手を「バカ」と名指しすることができる。Anscombre（2009：15）は、このような限定辞 le を定冠詞の le としてではなく、発話の対象を指し示す démonstratif（指示詞）として捉えている[33]。

Rouayrenc（1998）はまた、自分自身に対する罵倒も見られるとして、以下のような用例を挙げている。

(12) « Merde ! que je suis con, excusez-moi. Merde, quel con ! que je suis manche ! »　(Rouayrenc 1998：101)

（くそ！私はなんてばかなんだ、ごめんなさい。くそ、なんてこった！私はな

---

[33] A：Est-ce que tu as lu le dernier article de Max ?

B：Le salaud ! Il a tout pompé sur moi !

On remarque que le *le* de *Le Salaud* n'est certainement pas déterminant, mais plus vraisemblablement démonstratif, ou à tout le moins pourvu d'une fonction déictique.

(Anscombre 2009：15)

（A：マックスの最新の論文を読んだ？）

（B：あのげす野郎！全部私のものをコピーして書いたんだ！）

（この用例において、le salaud の le は限定辞ではことは明確である。むしろ指示詞として捉えるべきである、もしくは少なくとも指し示す機能を持っているといえる。）

んて無能なんだ！）

(12) では、客観的に「自分」に向かって発話していると考えられる。しかし、自分自身に対する罵りの場合、自身の行動が引き起こした困惑事態や失敗、後悔などの事態に対する反応としても捉えられるため、juron としても捉えられる。そのため、merde などの間投詞が前置する用例が見られる。

Rouayrenc（1998：107）はさらに、injure が向けられる相手によって用いられる言葉が異なると述べ、男女別に罵倒の語彙を記述している。また、いずれの場合においても、相手の人間価値を下げるのが目的であるとしている。

- 聞き手が女性の場合、5 つのテーマにおいて罵倒語彙が見られる。

Une prostituée（売春婦）: pute（売春婦）、putain（売春婦）、roulure（街娼）、pétasse（娼婦）、traînée（ふしだらな女）

Sa féminité（女性らしさ）: mal baisée（性的行為で快感を得られなかった女性）

Vieille（老いた）: vieille taupe（くそばばあ）、vieille peau（古い皮→くそばばあ）、mémé（ばばあ）

Laide（醜さ）: boudin（太って不器量な女）、pouffiasse（品のない太っちょ女）

Laideur morale（道徳的醜さ）: salope（あばずれ）、sale garce（くそ売女）、chameau（ラクダ→売春婦）

- 聞き手が男性の場合においても、4 つのテーマにおいて罵倒語彙が見られる。多くの場合、男らしさや性的能力に関する言葉が用いられている。

Nier sa masculinité（男らしさ対する否定）: t'as pas de couilles（睾丸がない→臆病者）、couille molle（柔らかい睾丸→意気地なし）、bite froide（冷たいペニス→性行為ができない男）、femmelette（意気地

なしで女々しい男）

Homosexuel passif（受動的同性愛者）: enculé（おかまを掘る）、enviandé, enfoiré（くそで汚れた→間抜け）、enfifré (sodomiser)（肛門性交）、pédé（ホモ）、pédale（男色家）、tapette（おかま、女役）

Termes qui réfèrent à la femme（女性を指し示す用語）: con（女性器）

Terme féminin（女性名詞）: raclure（街娼）

(Rouayrenc 1998：107)

このように、発話の対象が女性である場合は、美醜や年齢、または品行の悪さに対して罵倒することができ、男性である場合は、男らしさを貶したり、同性愛者に関する言葉を用いることができる。また、女性を指し示す言葉を男性に用いる場合は、強い侮辱となる。Rouayrenc（1998）は、これらの語彙を injure として見なしているが、putain（売春婦→ちくしょう）と enculé（おかまを掘る→くそったれ）は聞き手に対する発話というよりも物事に対する反応を示す言葉であるため、juron として捉えるべきである。このことから、Rouayrenc（1998）は、言葉の機能ではなく、女性または男性を示す言葉として取り上げ分類を行っているといえる。

ここまで、injure と insulte に関して考察してきた。両語彙はともに相手に向かって発話するという特徴を持つが、injure は多くの場合、下品な言葉を用いて強い口調で相手を非難する行為であり、反対に、insulte は必ずしも下品な言葉を用いるわけではなく、聞き手の解釈によって侮辱的意味となる。injure と insulte として用いられる表現の分類は極めて曖昧で、明確な語彙リストを作成することは困難である。しかしながら、injure は、表現自体が「相手を目の前にして発話するという特徴を持つ」ことが重要であり、聞き手に向かって発話することではじめて罵倒が成り立つ。この点において、insulte と区別できるだろう。

これまで見てきたような罵倒語彙は、マイナス価値をもつ語彙的意味は持つものの、

それだけでは相手への罵倒にはならない。したがって、純粋な罵倒語というものは存在せず、発話行為を通じてはじめて罵倒語となるのである。また、insulte には特有の語や表現が備わっているわけではなく、特定の状況や場面において、相手の価値を蔑むような表現が insulte となる。

3.3 Juron（ののしり）と blasphème（冒涜）

juron と blasphème の特徴は、相手に向かって発話するのではなく、ある出来事、ある状況を受けて発話されるものであることを、先行研究を頼りにすでに確認した。

3.3.1 Juron（ののしり）

« juron »（ののしり）は、動詞 jurer（宣言する）から派生した名詞形である。juron は、« serment »（誓い）を意味し、jurement (serment fait sans nécessité ni obligation. *TLFi*)（冒涜的な言葉、無用な誓い）との意味的関連性を持つ。juron の同義語には、blasphème（冒涜）が見られる。juron は本来「宣言をする」という行為を意味することから、« il a juré son grand juron » (*TFLi*)（彼は、ののしりを発した）のように、juron は宣言するための言葉として捉えられる。また、1690 年頃、juron は « façon particulière que des peuples ou des particuliers ont de jurer. » (*TFLi*)（民衆または個人が持つよる特別な宣言方法）という意味を持ち始め、個人の好み、または口癖によって、多種多様な juron が作られた。例えば、Henri IV によって考案された « ventre saint-gris » (*TFLi*)、また、« Dieu me damne » (*TFLi*)（神は私を地獄に落とす）と « Dieu me sauve » (*TFLi*)（神は私を救う）はガスコーニュ人によって使用されたののしりである。このように、juron は神に関する言葉が用いられ、冒涜表現としても機能するのである。

現代において、juron は神に対する侮辱という意味を保持しており、« exclamation offensante à l'égard de Dieu qui traduit une réaction vive de colère, dépit ou

surprise. » (*TFLi*)（神に関する侮辱的な感嘆表現であり、怒り、悔しさ、驚きの反応を表す）ことを意味する。以下のような用例が見られる。

(13) Il entendit une voix forte et sonore articuler derrière lui une série formidable de jurons. – Sang-dieu ! Ventre-dieu ! Bédieu[34] ! Corps de dieu ! Nombril de Belzébuth[35] ! Nom d'un pape !

(Hugo, N.-D. Paris, 1832, p. 327) (*TFLi*)（注、筆者加筆）

（彼は後ろのほうから、大きい声ではっきりの発話された、ものすごいののしりを聞いた。神の血！神の腹！良い神！神の体！ベルゼブトのへそ！教皇の名！）

上の定義からさらに拡張した意味として、juron は、(14) のように « interjection ou exclamation grossière ou familière qui traduit une réaction vive de colère, dépit ou surprise. » (*TFLi*)（卑劣な間投詞、または卑劣な感嘆詞であり、怒り、悔しさ、驚きの反応を表す）ことを意味する。

(14) « Caramba! » cher à Victor Hugo, juron qui, pour le dire en passant, n'est qu'à l'usage des femmes et correspond à notre « sapristi! »

(T'Serstevens, Itinér. esp.,1963, p. 329) (*TFLi*)

（「くたばれ！（スペイン語）」親愛なるヴィクトル・ユーゴ、これはすれ違う時に言うののしりである。また、女性のみが使用する言葉であり、フランス語の苛立ちを表す「なんてこった」に相当する）

---

[34] « Bédieu » : Juron équivalent à Bon Dieu (*TFLi*)（ののしりの「良い神」と同じ意味）

[35] « Belzébuth » : Prince des démons (*TFLi*) （悪魔の王子）

このように、juron は発話することで話し手の感情を表すことができ、先行研究でも述べられていたように、merde（くそ）、flute（ちぇっ）、putain（ちくしょう）、bordel（こんちくしょう）のような語彙も juron として捉えられる。このように、juron は「宣言」の意味から、神に関する侮辱の言葉、さらに話し手の感情を表す間投詞として捉えられ、意味変化が見られる。次に、blasphème（冒涜的な言葉）を見ていく。

3.3.2 Blasphème（冒涜）

« blasphème »（冒涜）は 7 世紀末、« parole qui outrage la divinité »（*TFLi*）（神を侮辱する言葉）を意味したことから、神に対する冒涜的な発話として捉えられる。例えば、« corps dieu »（神の体）、« bon dieu »（良い神）、« Jésus Marie Joseph ! »（イエス、マリー、ジョセフ）といった、神（Dieu）または、神の子の名（Jésus）に関する言葉を含む表現が blasphème として見なされている。

16 世紀頃、blasphème は「神」に対する侮辱的発言だけではなく、(15) のように、« parole, discours outrageant à l'égard de la divinité, de la religion, de tout ce qui est considéré comme sacré. »（*TFLi*）（神、宗教に関する侮辱、または神聖とされるすべてのものに対する侮辱発言や言葉）という意味で用いられていた。

(15) Ainsi ce serait un blasphème, que de dire que Dieu est injuste & cruel parce qu'il punit le péché originel dans les enfants qui meurent sans baptême.

（*L'Encyclopédie* 1751）[36]

（洗礼を受けずに死んでしまった子供たちの罪を罰するという理由で、神は不公平で残酷である、と発言するのは、冒涜的な言葉として見なされる）

[36] Toussaint-Mallet, L'Encyclopédie, édition de 1751, tome 2, article Blasphème (https://www.lalanguefrancaise.com/dictionnaire/definition/blaspheme) より引用

このように、言葉（時には心情、気持ち）による神に対する冒涜行為はひどい罪として見なされ、罰せられることもあった。

また、blasphème の拡張した意味として、(16) のように、blasphème は、« parole, propos, acte injuste, injurieux, indécent contre une personne ou une chose considérée comme respectable » (*TFLi*) （尊敬されるべき人物や物事に対する発言、言葉、不正行為、無礼な態度、下品な発話）を意味する。

(16) Fais c'que j'te dis... Je ne suis pas assez sérieux pour qu'on m'appelle mon oncle... Ça me fait l'effet d'un blasphème... Tout le monde m'appelle Édouard...

(Gyp, Souvenirs d'une petite fille,1928, p. 259) (*TFLi*)

（私の言うことを聞いていればいい、「じいさん」と呼ばれるほど私はまじめではない。私に対する侮辱に聞こえる、みんな私のことをエドワールと呼ぶ…）

このように、blasphème は主に、神に対する冒涜発言、また尊敬すべき相手を侮辱する際に用いられる表現であるといえる。

3.3.3 Juron（ののしり）と blasphème（冒涜）の関係性

juron と blasphème の定義から、両語彙には意味的関連性があり、同義語として見なすことができる。juron は間投詞的に用いる下品な言葉、または神に対する冒涜表現を含む。blasphème は基本的には神に対する冒涜的な言葉である。したがって、blasphème は juron に含まれる発話であると考えることができる。また、blasphème は主に、「神の名」を直接的に用いる表現であり、それ自体が冒涜行為であるために、これらの冒涜的意図を避けるために、dieu に関するさまざまな婉曲表現が出現した。例えば、dieu の婉曲表現には « -bieu » と « -bleu » が見られ、ventrebleu, ventrebieu,

corbleu, corbieu などが見られる。これらの婉曲表現は、神という言葉を避け、直接的な冒涜ではないため、blasphème ではなく、juron として捉えることができる。

juron に関してもう 1 点指摘できることは、現代フランス語において、下品で卑劣な意味を持つ語彙（putain, bordel, merde, enculé）が、本来の意味である「下品さ」が薄れ、間投詞として用いられ、juron として見なされるというという点である。これらの語彙の名詞的意味は「汚らしい」イメージを持つ「売春婦」、「売春宿」、「糞」、「おかまを掘る」であるが、間投詞的に用いられた場合は、話し手の心情を表す表現、「ちくしょう」、「ちぇっ」、「クソ」、「くそったれ」という意味に変化する。このように、ある特定の語彙が、下品で猥褻な「名詞」から「間投詞」へと文法上の変化を起こしているといえる。

3.3.4　Larguèche（1997）における juron（ののしり）の考察

juron は、動詞 jurer（宣言する）に由来し、それについて、主に、1）serment（宣誓）、2）jurement（冒涜的な言葉）、3）感情を表す間投詞的用法、の 3 つの定義を見てきた。juron とされる表現は、現代フランス語話し言葉において、宣言、冒涜の意味で用いられるよりも、間投詞に用いられる場合が多い。これに関して、Larguèche（1997：49）は以下のように述べている。

> Les définitions actuelles les plus générales et les plus courantes ne renvoient apparemment ni de près ni de loin au serment. {…} L'acte de jurer n'est donc pas toujours mentionné et semble même laisser la place à la seule expression émotive représentée par l'interjection et l'exclamation. (Larguèche 1997：49)
>
> （現代の定義において、最も一般的で、最も用いられている用法は、どうやら近くからも遠くからもまったく宣誓の意味には送り返されないようだ。宣言するという行為は常に現れているのではなく、それよりもむしろ、間投詞的または

感嘆的によってのみ示される感情という意味が現れるように仕向けているようだ。）

Larguèche（1997：50）はまた、感嘆詞についても言及している。Larguèche（1997：50）は、感嘆詞には神に対する侮辱以外に、« grossière »（野卑な言葉）も用いられ、聞き手に向かって発話する機能があるため、injure との関連性が見られると付け加えている。さらに、juron は gros mots（下品な言葉）として捉えられる場合があるともされている。

juron は jurement（冒涜的な言葉）という意味を持ちつつ、« un petit jurement, méconnaissable en tant que tel » (Larguèche 1997：50)（見分けがつかないほど弱い冒涜的な言葉）とされる。この点に関して Larguèche（1997：50）は、juron という言葉が「小さい」を意味する接尾辞 « -on » を取るため、un petit jurement（弱い冒涜的な言葉）として解釈することができるのではないかと推論している。この考えに従えば、blasphème ではない表現や blasphème の婉曲表現も juron として捉えられる。また、Larguèche（1997）は、juron を gros mots（下品な言葉）として捉えることができるという点においても、接尾辞 « -on » が関係しているとしている。

さらに、Larguèche（1997：50）は接尾辞 « -on » を反対の意味で捉えることもできるとし、以下のように述べている。

> Le juron serait un jurement qui n'en serait pas vraiment un, parce que ce serait un gros jurement, un jurement grossier ; et le suffixe -on, dans ce cas, indiquerait une valeur augmentative. (Larguèche 1997：50)
>
> （ののしりは、冒涜的な言葉そのものとは言えない、なぜならそれは「強い冒涜的な言葉」からであり、卑劣な言葉である。接尾辞 -on は、この場合、意味を強調する役割がある）

次に、juron が les interjections（間投詞）として捉えられることを見ていく。間投詞は、言葉と言葉の間に挿入できる言葉を意味しており、*le Bon usage* によれば、叫びのようなものであり、話し手の思考、警告、呼びかけなどを表し、会話に用いることができる。また、間投詞は文の頭、文と文の間、文の最後に置かれ、Larguèche（1997：51）によれば、間投詞は、いわば文のどの位置にも挿入することができ、単独、語彙グループ、または前置詞 de を伴って用いられる。

juron は、辞書記述で見たように、« interjection ou exclamation grossière ou familière »（*TFLi*）（卑劣または平俗な間投詞、感嘆詞）である。しかし、この定義のみでは、どのような語彙が juron として捉えられるのかは明確ではない。

Larguèche（1997：53）は、*le Bon usage* に記載されいる juron の 3 つの間投詞的用法を引用している。

1）いくつかの間投詞は宗教における祈願を表す。例えば：Dame ! Tredame ! (abréviation de Notre-dame), Dieu ! Miséricorde !

2）ののしりは、悪意を取り除くため、大なり小なり変化が見られ、dieu（神）や diable（悪魔）の類音語による置き換えが見られる。

3）juron が間投詞として使用される場合、その表現は精彩を放つか、もしくは下品である。時代の移り変わりによってさまざまな表現が作られている。

（Larguèche 1997：53 - *Le Bon usage* 参照）

Larguèche（1997：53）は、以上の *Le Bon usage* の定義から、dieu または diable、またそれらの置き換え表現[37]のみが間投詞としてみなされると理解することができる、

[37] Dieu（神）の置き換え：-bleu, -dien, -quien, etc.
Diable（悪魔）の置き換え：diantre （Larguèche 1997：53）

述べている。また、間投詞に関しては、俗語または下品な言葉が見られるが、いずれの場合においても grossièreté（卑猥さ）を伴う gros mots（下品な言葉）が用いられており、juron として捉えられる。

« juron » の定義で見たように、間投詞的に用いる putain（売春婦）や merde（糞）は本来の意味ではなく、感情的に発話される「ちくしょう」、「くそ」という意味で現れる。同様に、間投詞的に用いることができる dieu や diable も、本来の意味ではなく、dieu !（おやまあ）mon dieu !（驚きや賞賛を表す「おお」）、nom de Dieu !（ちぇっ、ちくしょう）の意味で解釈される。しかし、putain も dieu も本来持つ意味が消滅したわけではないため、putain のような下品な言葉は、一般的にタブーとされる言葉を発話したことで、タブーを犯したことになる。また、dieu のような言葉は、神の名を口にした冒涜行為となると考えられる。

3.4　Gros mots（下品な言葉）

これまで、injure（罵倒）、insulte（侮辱）、juron（ののしり）、blasphème（冒涜）の 4 つのタイプの罵倒表現を見てきた。いずれのタイプにおいても、la grossièreté（卑猥さ）を伴う gros mots（下品な言葉）が用いられていることがわかる。そこで、gros mots（下品な言葉）の特徴について考察し、他の用語との関連性を考察する。

gros mots（下品な言葉）は、*TLFi* によれば、« mot grossier ou trivial »（卑劣または野卑な言葉）を意味し、« dire des gros mots »（下品な言葉を言う）のように用いることができる。

(17) Certains, sans faire attention, mettent des gros mots dans la bouche des enfants. (Abellio, Pacifiques,1946, p. 30) (*TLFi*)

（ある人は、わざとではないが、子供に下品な言葉を覚えさせていた。）

gros mots のもう 1 つの意味は、« mot emphatique »（誇張された言葉）である。これは言葉遣いが大げさで、強調された表現を指し示す。現代フランス語において、この意味で使用されることは少ない。

このように、gros mots は、卑劣な言葉であり、発話の対象がショックを受けるような言葉であり、良俗に反する言葉であると考えられる。これらの言葉には、多くの場合、性的表現、糞尿表現などが含まれている。しかし、Rouayrenc（1998：5）が述べるように、罵倒表現の中には下品な言葉ではない表現もあり、反対に罵倒でもののしりでもない言葉が下品な言葉として捉える場合も見られる[38]。したがって、下品な言葉として機能するかどうかは、話し手の意図と聞き手の解釈による場合があり、下品な言葉ではない表現が用いられた場合でも、injure または insulte として解釈されることがある。

これまで見てきた injure（罵倒）、insulte（侮辱）、juron（ののしり）、blasphème（冒涜）の 4 つのタイプに加えて、gros mots（下品な言葉）の特徴についても考察した。これら 5 つのタイプは互いに関係しあっており、明確に区分することは難しい。以下では、5 つの罵倒タイプの特徴を簡潔にまとめた上で、これらの関係性を図式化する。

---

[38] Malheureusement, il est des injures qui ne sont pas des gros mots (par exemple *pintade*, *blaireau*), et, inversement, certains des mots considérés comme *gros mots* tels que *branlette*, *pine* ne sont pas eux-mêmes ni des jurons, ni des injures. (Rouayrenc 1998：5)（残念ながら、罵倒を表す表現には下品な言葉ではない表現も見られる。例えば、ホロホロチョウ（愚かな女）、アナ熊（素朴で気楽な人）、また、反対に、branlette（自慰行為）、pine（ペニス）のような言葉は、罵倒でもののしりでもないが、下品な言葉として捉えることができる。）

各罵倒タイプの特徴

injure（罵倒）: 聞き手に向かって発話される表現である。下品で卑劣な表現が用いられていることが多く、聞き手の態度や行動をもとに判断し、聞き手を非難する発話行為である。

insulte（侮辱）: 聞き手に向かって発話される表現である。他人に対する非難するというよりも聞き手の尊厳や名誉に対する侵害であり、また、聞き手が「実際に」持つマイナス的特徴について言及する。聞き手に対する攻撃であり、心理的に追い詰めることを目的としている。必ずしも下品な言葉を用いる必要はなく、発話の解釈と結び付いている。

juron（ののしり）: 聞き手に向けられた発話ではなく、事態に対する反応を表す間投詞である。発話することで、話し手の怒り、悔しさ、驚きなどの心情を表す間投詞である。

blasphème（冒涜）: 聞き手に向けられた発話ではなく、事態に対する反応を表す間投詞であり、juron に含まれる。基本的には、神に対する冒涜表現である。冒涜行為を避けるために、dieu（神）に関する表現に関するさまざまな婉曲表現（dieu→bleu, bieu）も見られる。

gros mot（下品な言葉）: 下品で卑劣な語彙であり、聞き手がショックを受けるような、良俗に反する語彙や表現である。性的表現、糞尿表現などが含まれている。上の 4 つのタイプを包括している。

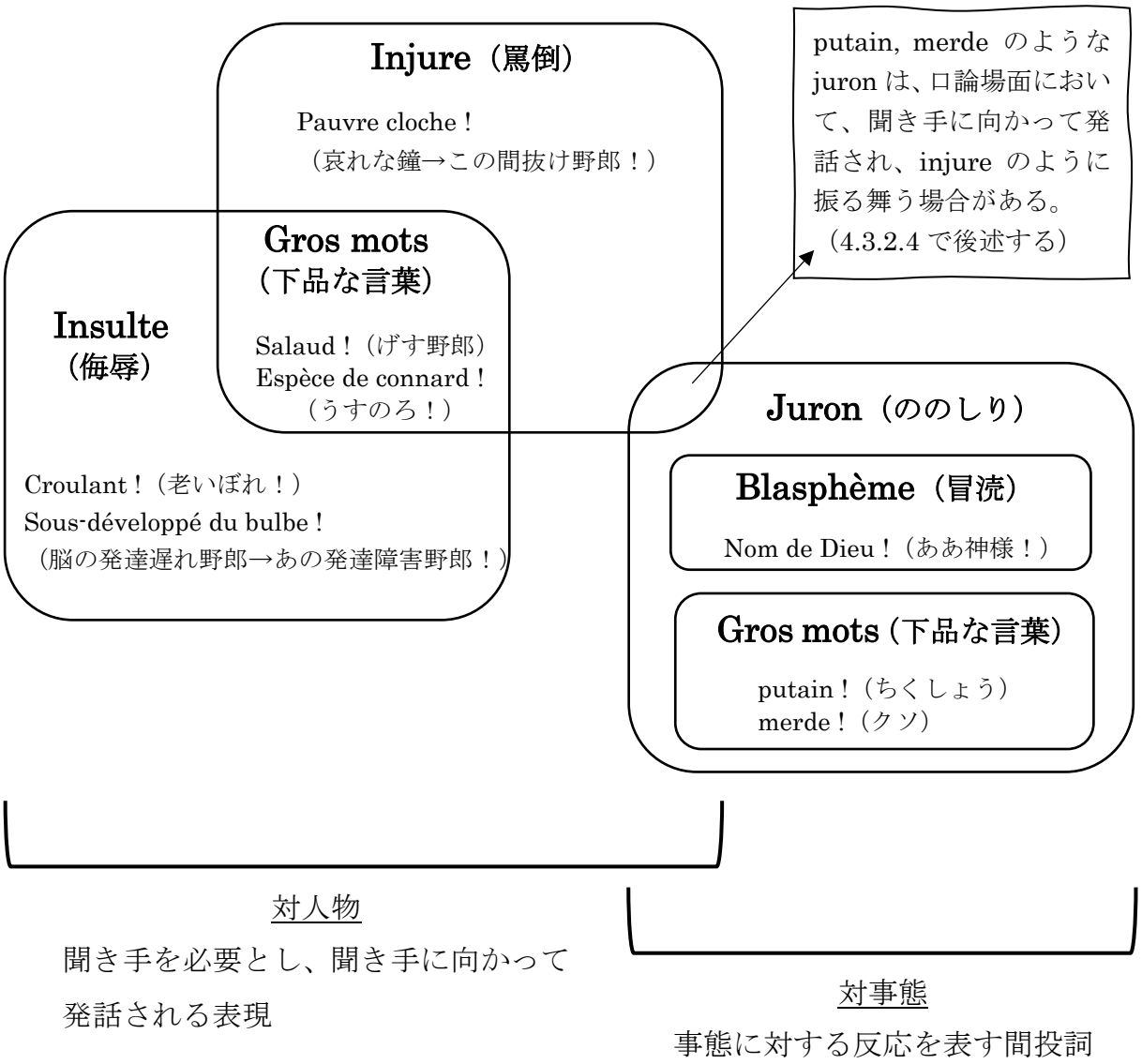


図１　罵倒を表す５つの用語の意味的関連性

3.5　罵倒表現の伝達過程の再検討

ここまで、「罵倒」を意味する用語のそれぞれの意味特徴を考察した。聞き手を必要とする罵倒表現は聞き手に向かって発話されることで罵倒行為となる。また、聞き手を必要としない罵倒表現は、事態に対する反応であり、感情的に発話されることによって話し手の心情（怒り、驚きなど）が現れた発話となる。以下では、罵倒表現が聞き手に伝わる過程を再検討してみたい。

罵倒表現の伝達過程は、先行研究がすでに述べている。Larguèche（1983）は、最大 4 者間においての発話関係を記述しており、Lagorgette（1993, 2003, 2006）は 2 者間と 3 者間の発話関係を記述している。両者は、「話し手」、「聞き手」、「罵倒の対象」、「証言者（または観客）」の 4 つの要素の関係性によって罵倒が成立すると捉えている点は共通している。この関係性に立脚し、さらに、発話された「罵倒表現」を伝達メッセージとして捉えるのであれば、「罵倒の言葉」を付け加えることができる。罵倒の伝達過程を以下のように図式化できる。

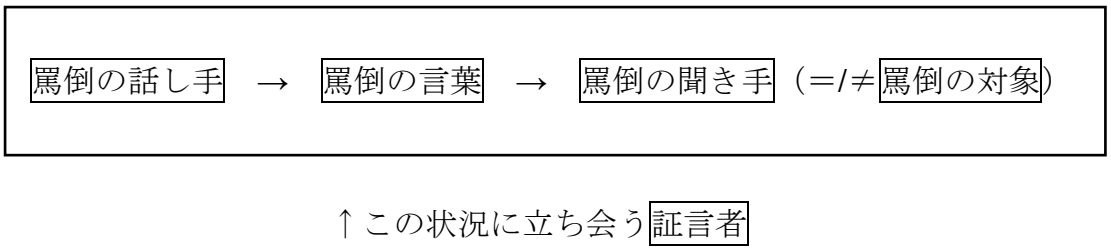


図 2　罵倒表現の伝達過程

図 2 が示すように、罵倒という発話行為において、「罵倒の話し手」が発話することで「罵倒の言葉」が「罵倒の聞き手」に届く。この時、罵倒の話し手と「罵倒の対象」が同一人物である場合（君はバカだな！）と、異なる場合（あいつはバカだな！）の両方が存在する。さらに、この発話状況に居合わせ、罵倒を目撃している証言者が

存在することもある。基本的に罵倒の伝達は、この流れに沿って進行し、発話された罵倒表現や罵倒に関係する人物の振る舞いによって、罵倒の聞き手に作用したり、証言者に作用したりするのである。このように、それぞれの要素と発話状況が、「罵倒」という場を作っているといえる。

罵倒表現を考察する上で「話し手の意欲」は重要な点であり、話し手の「相手を罵倒したい」という意欲が発話につながるのである。何かを発話したいという点においては、普段の会話においても同様であるが、普段の会話では、「話し手」を出発点として、聞き手にメッセージを送り、情報を共有するということが目的である。したがって、普段の会話は、話し手によって突然開始されても不自然ではない。しかし、罵倒表現が発話される状況においては、何もない状況において突然罵倒が始まるということは考えにくい。話し手が罵倒を始めるには、必ずなんらかのきっかけや出来事が必要で、それらの出来事を受けて罵倒が発話されるのである。つまり、話し手は罵倒を発話する前になんらかの出来事に「影響」され、その影響のされ方によって、用いられる罵倒表現のタイプも変化するのである。

話し手に影響を及ぼす出来事とは、相手の振る舞いであったり、言葉遣いであったり、いずれも話し手を不快にさせ、社会的常識から外れた行動である。このような振る舞いをする相手が、罵倒の聞き手となり、罵倒を引き起こすのである。この場合は、相手に向かって罵倒するため、聞き手を必要とする injure タイプと insulte タイプの罵倒となる。また、話し手に影響を及ぼす出来事は必ずしも人物である必要はなく、ある不快な出来事によって引き起こされる場合も考えられる。話し手はこの状況に影響され、苛立ちや不快を感じ、文句を言ったり不平不満を発話するのである。この場合は、事態に対する反応を表す juron または blasphème タイプの発話である。

罵倒表現が発話される前から罵倒の過程が始まっていると考えるのであれば、罵倒表現を考察する際には、話し手の罵倒をしたいという切っ掛けとなるものが何であるかということも含めて考察する必要がある。2 つの伝達過程を図 3 に示す。

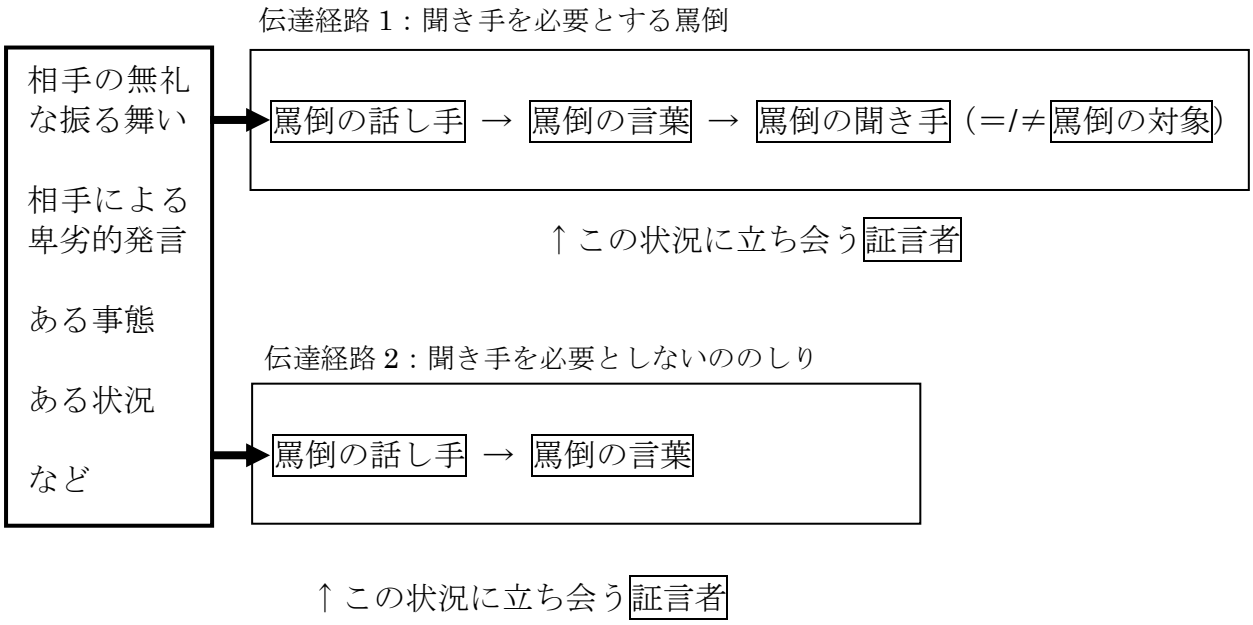


図 3　罵倒を引き起こす要素を踏まえた罵倒の伝達過程

図 3 のように、罵倒の話し手が発話する前の段階である、「ある人物の振る舞いや発言」または「ある事態と状況」も罵倒を成立する発話構造の一部であると考えることができる。発話の伝達過程は、injure と insulte のように聞き手を必要とする伝達経路 1 と、juron のように、聞き手を必要とせず、事態に対する反応である伝達経路 2 が見られる。

さらに罵倒にとって重要な点は、罵倒に含まれている価値観である。話し手はある人物、またはある状況になんらかの影響を受けて罵倒表現を発話するが、聞き手の振る舞いや状況が自身にとって不快なもの、嫌悪を催すものであると感じる必要がある。不快感、嫌悪感が生ずる要因は、生理的なものから道義的なものまで多様であるが、いずれも話し手によってはマイナス評価を伴うものである。

罵倒の場は、話し手と聞き手が持つ価値観に支えられ成り立っている。話し手は自身が持っている価値観で人物や状況を判断し、罵倒をするのか、ほめるのかなどの判

断をする。したがって、話し手と聞き手が同じ価値観を持っているのであれば、卑劣な振る舞いであっても、罵倒は起こらないのである場合もあると考えられる。

本章では、罵倒表現を表す用語の意味特徴を考察し、それぞれの意味的関係性について図式化することを試みた。また、罵倒を引き起こす要素を踏まえて罵倒の伝達過程について検討した。次章からは、具体的に罵倒に用いられる語彙を取り上げ、罵倒が引き起こされる要素、語彙が持つ意味的特徴や意味機能について考察する。

第 4 章

話し言葉における merde の意味機能

4.1　はじめに

本章では、フランス語の下品な言葉を代表する表現の一つである merde（糞）を取り上げる。merde は、歴史的には « m... » のように伏せ字で書き表わされており[39]、公的な場や教育機関ではタブーな言葉とされ、通常は発話を忌避される表現である。このように、merde は gros mots（下品な言葉）として認識されているが、現代フランス語の話し言葉においては極めて頻繁に用いられている。

« merde » は、la merde de chien（犬の糞）のように、基本的には人または動物の「糞」を意味し、名詞的に用いられる。一方では、糞は体から排泄された汚物であるという考え方から、merde は不潔なもの、忌み嫌うものといった、マイナス価値をともなう場合もある。例えば、c'est de la merde !（クソ（糞）みたいなものだ！）のような発話は、ある物を「糞」に喩えることで、その物の価値を下げ、蔑むことができる。また、対象が人である場合は、tu es une merde !（君は糞だ！）のように、人物を糞に見立てることで、その人物を無能な奴として捉え、罵声を浴びせることができる。

---

[39] « Vous êtes de la m… dans un bas de soie », mot de Napoléon à Talleyrand. (*Le nouveau petit robert* 2003：1612)（「あなた様は絹の靴下の中の糞だ！」ナポレオンがタレーランに向かって言った言葉である。）このように、« merde » → « m… » は伏せ字になっている。また、Rouayrenc（1998：80）では、このような伏せ字を merde の l'euphémisme（婉曲表現）として捉えている。他にも、« chier » → « ch… »（くそを垂れる）、« con / cul » → « c… »（バカ者 / ケツ）、« foutre » → « f… »（やる）、« putain » → « p… »（ちぇっ）などのような伏せ字が見られる。

また、すでに述べたように、merde は間投詞としても捉えられており、ある事態に対する話し手の反応を表す。つまり、merde は juron（ののしり）として現れることが多いのである。本章では、名詞的、比喩的、間投詞的に用いられる merde の意味の関係性について考察し、とりわけ間投詞として用いられる merde の意味機能を明らかにする。

4.2 先行研究

« merde » は bataille de Waterloo[40]（ワーテルローの戦い）において、le général Cambronne（カンブロンヌ将軍）が敗北を迫るイギリス軍に向かって発話した言葉であることから、merde は « mot de Cambronne »（カンブロンヌの言葉）とも呼ばれている（Edouard 1967：215）。この出来事が歴史的事実であるかどうかに関しては研究者によって意見が分かれるが、Edouard（1967：215）の記述によれば、小説家の Victor Hugo（ヴィクトル・ユーゴ）は、カンブロンヌ将軍の発話を歴史的事実と捉えている（Edouard 1967：215）。ユーゴは、自身の著書 *les Misérables*『レ・ミゼラブル』に「ワーテルローの戦い」および「カンブロンヌ将軍の発話」を登場させており、merde を伏字にすることなく、そのまま書き残している[41]。さらにその後、劇作家の Sacha Guitry（サシャ・ギトリ）によって、1937 年に « *Le Mot de Cambronne* »『カンブロンヌの言葉』というタイトルで白黒の短編映画が作成され

---

[40] Waterloo（ワーテルロー）はベルギー中部、ブリュッセルの南東にある都市である。ワーテルローの戦いは「1815 年、イギリス・プロイセン連合軍がナポレオン 1 世のフランス軍を撃破した（大辞林）」戦いである。

[41] « Un général anglais, Colville selon les uns, Maitland selon les autres, leur cria : Braves français, rendez-vous ! Cambronne répondit : Merde ! » (Frantext, *Les Misérables* 1881：271)（あるイギリス人の将官、ある人は彼をコルヴィルと呼び、ある人は彼をメイトランドと呼ぶ、は彼らに向かって叫んだ：フランスの勇士たちよ、降参しろ！カンブロンヌは答えた：くそったれ！）

ている。このように、歴史的に見ても、merde はフランス語を代表する罵り表現として脈々と用いられてきた。

4.2.1　Edouard（1967）における merde の考察

Edouard（1967：213-231）によれば、この 5 文字のアルファベット（merde）が、フランス語を象徴する言葉となってしまっていることは否定できない事実である。なぜなら、merde は単に「糞」を意味するだけではなく、それ以上の意味価値を持ち、« il s'emploie en toutes circonstances et presque dans chaque phrase »（Edouard 1967：214）（あらゆる文、またはあらゆる状況で使用されている）からである。また、Edouard（1967：214）の記述によれば、演劇作家の Sacha Guitry（サシャ・ギトリ）も、自身の作品で « merde, ça veut tout dire »[42]（merde はすべてを言い表すことができる）と役者に言わせているように、merde はあらゆる場面で用いることができると言っても過言ではない。

Edouard（1967：214）はまた、merde は長きにわたって繰り返し使用されてきたのにもかかわらず、その意味価値や言葉の力にあまり変化が見られず、本来の意味価値を保ちつつ存続していると述べている。さらに、Edouard（1967：214）は、merde が用いられる状況や場面を観察し、日常会話に用いられる際の特徴を記述することで、なぜ、この 5 つのアルファベットがフランスの文化、言葉、民族の土台になっているのかを理解することができると指摘している。

Edouard（1967）は merde の語源や merde から派生した語彙に関しても記述を行っている。Edouard（1967：216）によれば、merde は François Rabelais（フランソワ・ラブレー、1483? - 1553）の時代よりも遥か昔、すでに一般に普及し広く使用されていた。文献の中で確認された最も古い merde は 13 世紀のものであり、*Le roman*

[42] Sacha Guitry の舞台演劇 « Tu m'as sauvé la vie » のセリフである。

de Renart(『狐物語』)の中で用いられたとされている。しかし、Edouard(1967：216)は、この時代よりもさらに以前の俗ラテン語からロマンス語の時代において、口承文学において既に出現していたと考えても不思議はなく、遡ればラテン語の « merda » に行き着くことができるだろう、と説明している。

さらに、merde には多くの派生語が存在し、動詞や形容詞への派生が見られる[43]。Edouard（1967：216）によれば、14 世紀頃には merdeux（厄介な）や emmerder（うんざりさせる）という形が見られ、19 世紀には démerder（抜け目なくうまくやる人）が確認されている。また、20 世紀には emmerdeur（うんさりする奴）が使われるようになったとしている。Edouard（1967：305）は、merde には少なくとも 59 の派生語があると述べており、以下のように merde の派生語を提示している。

« Démerdable, Démerdage, Démerdailler, Démerdant, Démerdard, Démerde (Système), Démerder, Démerdeur, Démerdise, Démerdouiller, Emmerdable, Emmerdablement, Emmerdage, Emmerdailler, Emmerdailleur, Emmerdant, Emmerdasser, Emmerdasserie, Emmerdation, Emmerdé, Emmerdement, Emmerder, Emmerdeur, Emmerdouillable, Emmerdouillage, Emmerdouillé, Emmerdouilleur, Emmerdoyer, Merdaceus, Merdaille, Merdailler, Merdaillerie, Merdailleur, Merdaillon, Merdaillonner, Merdasse, Merdasser, Merder, Merderie, Merdeusement, Merdeux, Merdicole, Merdier, Merdigues, Merdissime, Merdoir, Merdophage, Merdophile, Merdophobe, Merdouillage, Merdouillard, Merdouille, Merdouiller, Merdouilleur, Merdous, Merdoyer »

(Edouard 1967：305)

---

[43] Rouayrenc（1998：80）も merde の派生語について言及しており、merde は les verbe（動詞：merder, merdoyer, etc）、les adjectifs（形容詞：merdeux, merdique, etc）、les noms（名詞：merdaille, merdaillon, etc）への派生が見られる記述している。

以上からわかるように、Edouard（1967：305）が提示している merde の派生語は、1）« Démerd- »（接頭辞 Dé + merde / merd + 語尾変化）、2）« Emmerd- »（接頭辞 Em + merde / merd + 語尾変化）、3）« Merd- »（Merd + 語尾変化）の 3 種類を確認することができる。

このように、Edouard（1967）は merde を語彙的に観察し記述している。以下では、Edouard（1967）が記述している merde のタイプを見ていく。

4.2.1.1 merde-exclamation（感嘆詞的 merde）

Edouard（1967：224）は、間投詞的に振る舞う « Merde ! »（くそ！）を « merde-exclamation »（感嘆詞的 merde）と呼び、あらゆる場面に用いることができるしている。とりわけ、予測外の出来事に直面した際に見られる話し手の「驚き」（surprise）を表すことができるとし、以下のような用例を挙げている。

(1) Surprise moins agréable（あまり心地よくない驚き）

－Chérie, maman arrive demain

－Ah, merde !…

（（妻に向かって）君、お母さんは明日着くよ）

（あら、残念）

(2) Surprise indignée（憤慨の驚き）

－Désolé, mais votre assurance ne couvre pas ces petits dégâts…

－Eh ben, merde alors !

（申し訳ございません、ご加入の保険はこれらの被害をカバーしておりません）

（そんな、なんてこった）

(3) Surprise inopportune（不都合の驚き）

－Regarde qui a sonné, veux-tu ?

－Merde ! Ton mari…

（誰がベルを鳴らしたか見てきてくれる？）

（やばい、君の夫だよ）

(4) Surprise résignée（諦めの驚き）

－Il y a une lettre du percepteur…

－Encore lui ? Merde à la fin !

（徴収官の手紙があるよ）

（また彼？もううんざりだよ）

(5) Surprise affamée（飢えた驚き）

－Je n'ai pas eu le temps de préparer le dîner …

－Il est huit heures, quoi, merde !

（夕飯を作る時間がなかったよ）

（もう 8 時だよ、なんだよ、なんてこった！）

（Edouard 1967：224）

このように、Edouard（1967）は「驚き」のタイプによって merde を記述している。「驚き」は、基本的には予想外の事態や思いがけない事態が起った際に生じる感情である。Edouard（1967）の記述から、merde は普通の会話場面ではなく、驚きという感情が現れる場面で用いられると理解することができる。しかし、驚きの場面であれば常に merde が用いられるというわけではないため、以下で発話状況を詳しく考察する。

(1) - (5) は、いずれも 2 者間の会話関係である。merde の話し手は、先行する相手の発話を受け、自身が置かれた状況を把握することで merde と発話している。(1) の「あまり心地よくない驚き」は夫婦の会話である。妻は夫の発話で「次の日、（夫の）母親が家に来る」という事態を知り、« ah, merde ! »（あら、残念）と発話している。

このことから、「母親が来る」という事態は妻にとってどこか都合の悪いことである、と解釈することができる。妻は、「母親が来る」というすでに決定している事態を受け入れることしかできず、merde を用いて反応を見せている。(2) の「憤慨の驚き」は保険会社の職員と保険加入者の会話である。保険加入者は、自身が入っている保険で「被害をカバーできない」という発話（またはその状況）を受けて困惑を見せている。しかし、これ以上交渉の余地がなく、保険金の請求ができないことを受け入れることしかできない状況において merde と発話している。(3) の「不都合の驚き」はいくつかの発話場面が考えられるが、例えば、妻の浮気中に夫が帰ってきてしまったという状況を想像することができる。この状況であれば、(3) は妻と浮気相手の会話であり、「夫がドアの前まで来ている」という事実を告げられた妻は戸惑い、すぐに解決策を見つけることができず、merde と発話し反応を見せている。(4) の「諦めの驚き」は会話の内容から、merde の話し手は、すでに徴収官から何通かの手紙を受け取っており、さらに「新しく手紙が届いた」ということを受けてうんざりしていることが読み取れる。話し手は、手紙を拒否することができないという状況に対して反応を見せている。(5) の「飢えた驚き」では、お腹がすいているという限られた状況である。merde の話し手は、夕飯がないという事実を受け入れることしかできず merde と発話している。

このように、merde が発話される場面を観察してみると、(1) では母親が来るという事態、(2) では保険で被害をカバーできないという事態、(3) では浮気中に夫が来てしまったという事態、(4) ではまた手紙が来たという事態、(5) では夕飯の準備ができていないという事態、いずれの事態も merde の話し手にとって困惑する事態が起きているのである。merde の話し手は、このような困惑状況を受けて、感情的に反応を見せた結果が、Edouard（1967）が記述している「驚き」であると考えるとこができる。

Edouard（1967：224-225）はさらに、会話関係においてではなく、(6) - (9) のよ

うに、日常生活に起こる「目立たない苦痛」や「不幸な出来事」においても驚き場面に merde が用いられるとし、以下の用例を挙げている。

(6) Surprise douloureuse（痛みの驚き）

… qui a tenté d'enforcer un clou et qui s'en mord les doigts：

－Merde !…

（釘を打とうとするが、自分の指を打ってしまった）

（くそったれ！）

(7) Surprise hebdomadaire（週ごとの驚き）

… qui a raté le bon tiercé：

－Merde !...

（競馬で負けてしまって）

（くそ！）

(8) Surprise frappante（衝撃的な驚き）

… qui, dans le métro, a – involontairement bien sûr – laissé sa main s'approcher trop près des rondeurs d'une jolie dame：

－Merde !...

（地下鉄で、もちろんうっかり、きれいな女性の胸に手が当たりそうな時）

（やば！）

(9) Surprise trop fréquente（非常に頻繁な驚き）

… qui ne retrouve plus son portefeuille：

－Merde !...

（財布が見つからない時）

（やばい）

(Edouard 1967：224-225)

(6) の「痛みの驚き」では、誤って指を打ってしまったという事態に対する反応である。merde の話し手は、突然の痛みに襲われ拒否することができず、ただ痛みに耐えなければならないという事態に直面している。(7) の「週ごとの驚き」では、merde の話し手は、毎週のように競馬をやっては負けているという状況を想定することができる。今週も負けてしまったという事態を受け入れることしかできず、merde を用いて反応を見せている。(8) の「衝撃的驚き」では、うっかり女性の胸に触れてしまったという事態が衝撃的事態である。通常であれば起きないことが、話し手の意向に反して起きてしまい、話し手は気まずい状況を受け入れることしかできず、merde の発話につながっている。(9) の「非常に頻繁な驚き」では、財布が見つからないという用例が挙げられている。財布が見つからないことが「頻繁」であるどうかは見方によるが、物を無くしたり、物が見つからないといった状況は他の用例に比べてより身近に見られる場面であることから頻繁な状況であるといえる。(9) の話し手は、財布がないという困惑状況をどうすることもできず、merde と発話するしかないのである。このように、(6) - (9) は、会話関係ではなく、いずれもある困惑する事態が merde の発話を引き起こしている。

(1) - (9) は、Edouard（1967）が記述したように、驚きの感情を伴う発話であることは間違いないが、発話状況に関して言えば、merde は困惑的な状況の中で解決策を見い出せない時に用いる表現であるといえる。つまり、それ以上解決の可能性がなくなり、その事実を受け入れざるを得ないときに、merde と発話しているのである。

Edouard（1967）は、merde は日常生活のあらゆる場面において頻繁に使用されると記述しているが、あらゆる場面とはどのような場面であるかさらに考えてみたい。ここまで見てきた用例に関して言えば、merde の発話は、少なくとも、困惑的な状況において、驚きの感情を伴い発話されるものである。

4.2.1.2　merde-substantif（名詞的 merde）

Edouard（1967：226）によれば、名詞として用いられる merde は、多くの場合、基本的には「糞」というマイナス評価を伴った指示対象を表す。Edouard（1967：226）は、この場合の merde を merde-substantif（名詞の merde）とし、3 つのタイプを挙げている。

1）Une appréciation qualitative（物事への質的評価）

Ex：Depuis pas mal de temps, la télé, c'est de la merde

（ずいぶん前から、テレビ番組、クソだよね）

2）Résumer l'analyse d'un phénomène biochimique（生化学的現象分析）

Ex：C'est pas d'la soup', c'est du rata – C'est pas d'la merd' mais ça viendra…

（スープではないね、まずい食事だ－クソじゃないけど、いずれそうなるね）

3）Motiver une décision mûrement digérée（熟考された決意）

Ex：Faire ça, moi ? De la merde !

（それをやるの？私が？糞くらえだ！）

（Edouard 1967：226）

名詞としての merde は人や動物の「糞」を意味する他、1）ではある物事に対する評価を表しており、対象となる物事を価値のない「糞」に喩えることで低評価することができる。2）も同様に、スープの状態があまりにもひどいため、「糞」として捉えることで、生理的に受け付けないということを示している。3）においては、merde が発話される前に「何か仕事を任された」と想定することができ、任された用件に対する拒否反応を示している。このように、名詞的に用いる merde は、単独ではなく、成句や文の形で用いることによって、物事を糞に喩えて低評価をすることができ、忌避、拒否、嫌悪などを示すことができる。

この 3 つのタイプに関して、Edouard（1967：226）はさらに、3）の « De la merde ! » を 1）の « C'est de la merde ! » と混同してはいけないと指摘している。Edouard（1967：226）にれよば、3）の « De la merde ! » は « Je préfèrerais plutôt bouffer de la merde ! »（クソでも食べている方がいい）をという成句を省略した形であり、« J'éprouve une très vive répugnance pour le travail ou le service que vous attendez de moi »（私は、あなたが私に期待している仕事また課題に対してひどい嫌悪を感じている）という解釈となる。それに対して、1）の « C'est de la merde ! » は、« Sans intérêt, sans valeur »（つまらない、価値のない）、または « Trop facile »（非常に簡単である）という 2 つ状況に用いることができるとしている。このように、Edouard（1967）は merde の言語形式を考察した上で、発話状況によって解釈が異なることを記述している。

Edouard（1967）は加えて、merde-substantif（名詞の merde）は、比喩を含み、精彩のある成句を作り出すことができるとして以下の用例を挙げている。

(10) －*Il se croit pas une petite merde !*

(= Il a une très haute idée de lui-même.)

（彼は自分をクソだと思っていない！）

（= 彼は自分自身を高く評価している。）

(11) －*Il est si radin qu'il boufferait sa merde !*

(= Il a horreur du gaspillage, il est d'une sordide avarice.)

（彼はすごくケチだから、自分のクソでも食っていればいい！）

（= 彼は無駄遣いをひどく嫌っており、極度のけちである。）

(12) －*Il est dans la merde jusqu'au cou.*

(= Le pauvre homme a présentement de gros ennuis. Mais si l'on dit seulement : « Il est dans la merde », cela signifie que la personne en cause

est dans la misère.)

（彼は首までクソに浸かっている。）

（= かわいそうな人が大変な厄介事を抱えている。しかし、「彼は糞の中にいる」と発話するのみであれば、不幸な出来事や災難、ひどい困惑事態に直面していることを意味する。）

(13) －*Tu auras de la merde !*

(= Tu n'auras rien)

（クソでも受け取ってろ！）

（何も得られないこと）

(14) －*Un vrai tas de merde.*

(= une personne, mais plus souvent d'un rassemblement de plusieurs personnes malpropres, physiquement ou moralement)

（クソの山）

（身体的にも、道徳的にも汚れている人、また複数の人からなる集団）

(Edouard 1967：227)

(10)－(14) のように、名詞的に用いられる merde は文の構成要素として機能しており、c'est de la merde のような慣用表現という形で用いられたり、また「糞」という意味が解釈に影響を及ぼし、「価値のない」、「無駄な」、「汚らわしい」という性質を物事に与えることができる。さらに (14) のように、人物を「糞」に喩えることで、merde は「汚い行為」、「卑劣」、「意地悪」、「ずうずうしい」など、その人物に負の特徴を与えることができる。

merde の用法に関しては、Guiraud（1976）もほぼ同じ見解である。

4.2.2　Guiraud（1976）における merde の考察

Guiraud（1976：95）によれば、中世フランス語において merde は、« une chose ou une personne de peu de valeur »（あまり価値のない人物または物事）、« un individu méprisable »（卑劣な人間）、« un routier »（平民）、« une situation embarrassante »（面倒な状況）という意味を持つ。Guiraud（1976：115）はまた、名詞的に用いられる « la merde »（糞）は、私たちをうんざりさせ、そのものから遠ざけたい、拒否したいという感情を引き起こすものであるとし、la merde は「嫌な感じ」または「厄介なもの」の象徴であると記述している。Guiraud（1976：115）は、この「嫌な」特徴が merde の間投詞用法に影響を及ぼしており、間投詞的に用いられる merde は « ce que tu fais, ce que tu dis et, d'une façon générale, ce qui arrive m'ennuie » (Guiraud 1976：114)（君のやること、君の言うこと、一般的には、何が起きてもそれは私をうんざりさせるものである）と解釈することができると記述している。

さらに、merde という言葉は、Guiraud（1976：114）によれば、大きな苦痛や大惨事の際に用いられるというよりも、「身近に起こる厄介な出来事」に使用するものである。例えば、« je me suis cassé la jambe »（足を骨折した）のような大きな不幸よりも、« merde ! je me suis piqué le doigt »（やばっ！手を刺された）のような身近に起こり得る状況に使用する方がより適しているのである。同様に、« la maison brûle »（家が燃えている）よりも « Merde ! le tapis est brûlé »（やばい、カーペットが燃えてしまった）のような場合、merde は間投詞として用いられやすい。

Guiraud（1976：114-115）の考察によれば、merde が用いられる状況には以下の特徴が見られる。

1）ある物、ある人物、ある出来事、ある状況が厄介であること。

2）これらの厄介な物事は、負の感情を引き起こす。

3）この感情は話し手の拒否反応を引き起こす。状況の進行を阻止したり、またはその出来事から遠ざけようとすることで、負の感情を中断させたいという気持ちを引き起こす。

4）最後の特徴は「驚き」である。この特徴は必ずしも必要ではなく、いつも存在するわけではないが、驚きは感情表現を豊かにし、厄介な出来事をさらに我慢できないものにするのである。言い換えれば、私たちは突発的な状況にすばやく適応することができず、厄介な出来事を受け入れる時間がない状況において発話されるのである。

(Guiraud 1976：114-115 参照)

このように、merde は厄介な状況において発話され、Guiraud（1976）も Edouard（1967）と同様、驚きの感情を伴う場合があるとしている。また、merde が間投詞的用いられる際に、話し手の感情に左右され、発話イントネーションにも変化が見られる。Guiraud（1976）は、以下に示すように、間投詞的に用いられる merde を分類している。

- le refus péremptoire né de la colère：Merde !
- le refus exaspéré：E-ê-êh ! merde !
- le refus énervé：merd' ! merd' ! merd' !
- l'acceptation résignée：Et puis merde ! puisque c'est ça que tu veux.

(Guiraud 1976：115)

（怒りによる断定の拒否：くそくらえ！）

（激昂の拒否：えええ！くそったれ！）

（苛立ちの拒否：くそ！くそ！くそ！）

（強制的承諾：くそったれ！それを望んでいたんでしょ！）

以上からわかるように、Guiraud（1976）は merde を物事に対する「拒否」として捉えている。「怒りによる断定の拒否」は、相手の反論を拒否し会話の中止を求めるような発話場面である。「激昂の拒否」は、繰り返し厄介な出来事に見舞われうんざりしている発話場面である。また「苛立ちの拒否」は、怒りの感情が強く見られる発話場面である。「強制的承諾」においても、無理やり承諾していることから、ある意味では拒否を示し、承諾しているが厄介な状況に置かれることを拒んでいると解釈することができる。Guiraud（1976）は、このように拒否のタイプによって merde を区別し、異なる発話場面において merde の発話がどのような感情をもたらすのかを記述している。このように考えれば、merde の発話場面によっては、苛立ちや怒り以外の感情（例えば、残念、喜びなど）ももたらすことができる。

Guiraud（1976）の考察では、merde の名詞的用法と間投詞的用法に注目していた。merde の発話は物事への低評価、予想外の出来事に対する反応を表し、話し手の感情を伴い発話されるため、結果的には驚きや苛立ちの表明となる。しかし、間投詞的に用いられる merde に関して言えば、話し手の感情というのは、話し手が事態を認識し merde を発話した後に現れるものではないか。したがって、merde という言葉が持つ本質的な機能を明らかにするために、さらに考察を進める必要である。

そこで、フランス語の話し言葉の実例を用いて、間投詞的に用いられている merde を発話の関係性の中で捉えて考察していく。

4.3. merde の意味考察

考察に入る前に、これまで見た merde の特徴や用法をまとめておきたい。この節では、まずは名詞として用いられる merde のいくつかの用法を確認する。次に、間投詞として用いられる « merde ! » の振る舞いを考察し、用法間の関係性を見ていく。最後に、間投詞として用いられる merde に焦点を当て、merde の持つ多様な表現価値を観察し、間投詞としての merde の本質的な意味機能を論じたい。

考察をするにあたり、本論文はフランス語書き言葉コーパス（Frantext）[44]とフランス語話し言葉コーパス（ESLO）[45]、さらに、フランスで放送されているテレビ番組で収集した 3 つのコーパス[46] 、計 5 つのコーパスを使用する。

4.3.1　merde の名詞的用法

すでに見たように、merde の名詞的用法は「糞」を意味し、糞という物質そのものを指し示す場合と「汚らしい」、「回避したい」、「無価値」などの意味価値を人物や物

---

[44] Frantext は 5430 部のフランス文学作品（約 2 億 5600 万語）が収集されているフランス語書き言葉コーパスである（2019 年 12 月時点）。

[45] ESLO (Enquête Sociolinguistique à Orléans) は、オルレアン大学がインターネット上に公開しているフランス語話し言葉コーパスである。1968 年から 1971 年までに収集された « ESLO1 » と 2008 年から現在までに収集された « ESLO2 » に区分されており、本論文では ESLO2 に限定して検索した。引用の際は、ESLO コーパスの transcription（転記）部分の記載通り、(ESLO_XXXX_0000_C) と記載する。XXXX 部分はコーパスの種類であり、0000 はコーパス番号である。

[46] 今回は 3 つのテレビ番組を使用した。

1）Pascal Le Grand Frère（パスカル兄貴）

2）SOS Ma Famille a Besoin D'aide（SOS 私の家族を助けて）

この 2 つの番組は、反抗期や不登校、なんらかの問題を抱えている青少年（中学生、高校生）を持つ親が、Pascal という教育者を家に呼び、青少年の問題を見つけ、学校に復帰させたり、仕事を体験させるという内容である。番組の冒頭に見られる親子喧嘩の発話を収集したコーパスである。

3）Cauchemar en cuisine（厨房の悪夢）はイギリスで放送されていた Ramsay's Kitchen Nightmares のフランス版であり、経営がうまくいかないレストランを立て直すために、有名フランス料理シェフである Philippe Etchebest がそれらのレストランに赴く乗り込むテレビ番組である。この番組は、料理、サービス、人間関係など、現場の問題を厳しくコーチングし、解決していくことを目的としている。レストランの視察過程の中で、ひどい料理を出された際や汚い厨房などに直面した際、putain の発話が見られる。引用の際は（Cauchemar en cuisine - レストラン名称）のように記載する。

事に転移させ、それらの対象に対する評価を示す場合が見られる。

4.3.1.1 「糞」を意味する merde

名詞としての merde の実質的な意味は「糞」である。例えば、以下のような用例が観察される。

(15) Un jour, c'est elle qui lui a dit, je l'ai entendu : « Ah ! je t'aime Julien, tellement, que je te boufferais ta merde, même si tu faisais des étrons grands comme ça… » (*Voyage au bout de la nuit*, 1932)

（ある日、彼女の方から彼に言った、私はそれを聞いた：「あ！愛しているのよ、ジュリアン、すごく、あなたの便をほおばってしまうほどに、こんなに大きな便であったとしてもね…」）

(16) J'ai le trottoir pour moi tout seul, il n'y a pas une seule merde de chien à l'horizon et en fermant les yeux, on pourrait presque croire que ça sent la mer. (Frantext, *Ceux qui savent comprendront*, 2000 : 11)

（この歩道はすべて私一人のものだ。地平線には犬の糞一つない。目を閉じれば、海の匂いがすると思えるほどである。）

(15) と (16) では、merde は「（人または動物から排泄された）糞」という実質的な意味で使用されており、物事や事態に対する記述を示している。この場合は、同様に「糞」の意味で用いられる étron（糞）、または crotte（主に動物の糞、一般的に「くそ」）との置き換えが可能である。

4.3.1.2　比喩的に用いられる merde

Guiraud（1976：115）が記述していたように、名詞としての merde の指示的意味である「排泄物」には、臭くて汚らわしいもの、触れたくないものというマイナス価値が伴う。この場合、名詞の持つ実質的意味から派生して、内容だけを取り出し、比喩的意味を派生することができる。

(17) ZD520：et puis il me disait euh il y a des euh bâtons de surimi qui tombaient par terre donc voilà ben ils les ils les prenaient ils les jetaient pas ils les remettaient en boîte hein

KX664：ah merde, en fait on mange de la *merde* quoi

(ESLO2_REPAS_1261_C)

（それで、カニ蒲鉾が床に落ちてね、それを彼らは捨てずに、箱に戻したって言っていたのよ）

（なんてこった！クソを食べるようなもんだね）

(18) NR390：je l'avais acheté je sais plus genre à une merde euh genre Babou un truc comme ça (ESLO2_24H_1249_C)

（それ（クリスマスツリー）買ったのは、くだらないようなところ、バブーみたいな、そういうところ）

(17) において、ZD520 は「ある飲食店で床に落ちたカニ蒲鉾を捨てずに箱に戻している」という話をしている。これに対して、KX664 は 2 つの merde を発話している。最初の merde は「飲食店が不衛生な物を提供していること」を知った時の反応として間投詞的用法が用いられている。注目したいのは、比喩的に用いられているのは 2 つ目の merde であり、ここで話し手はカニ蒲鉾を「糞」として捉え merde を比喩

的に用いている。そのような汚れたカニ蒲鉾を食べるのは、不衛生な「糞」を食べるのと同じであると理解することができる。（18）は、意外と品質の良いクリスマスツリーを買ったことについて話している場面である。Babou は、フランスの大手ディスカウントストアであり、低価格・低品質製品も多く取り扱っている。そのようなお店を「糞」として捉え、品質が良くないお店であることを示し、それでも品質の良いツリーを買ったと、解釈することができる。

このように、物事を「糞」に喩えることで merde の持つ「臭くて汚いもの」、「嫌悪を引き起こすもの」、「品質が良くないもの」という内包的な意味が引き出され、「避けるべきもの」、「忌々しいもの」などの比喩的解釈が広がっているのだと考えられる。そのため、物事や行為に対して使用された merde は、それらの価値を貶める内包的表現として理解され得るのである。

4.3.1.3　侮辱的に用いられる merde

侮辱的に用いられる merde は、基本的には、比喩的用法であるが、(19) や (20) のように、物事や行為ではなく、人物を「糞」に見立てて比喩的に使用する場合は、他人の価値や地位を貶める表現となる。

(19) Il me doit quatre-vingt-six mille francs, ce fumier, cette ordure, ce Ppportugais. C'est même pas un vrai Portugais. Les vrais Portugais, ils restent chez eux. Il y a trois espèces de Portugais, les vrais Portugais ; et puis les Portugais de la merde ; et puis la merde de Portugais. Lui, <u>c'est de la merde de Portugais</u>. Fumier ! Ordure !

(Frantext, *Voyage au Congo*, 1927：702　下線筆者加筆)

（あいつは私に 9 万フランの借金をしている、あのバカ、あのくず、あのポルトガル人。あいつは本当のポルトガル人でさえもない。本当のポルトガル人

はポルトガルに帰ってるよ。ここには 3 種類のポルトガル人がいる。本当のポルトガル人、腐ったようなポルトガル人、それとポルトガル人のクズだ。あいつはポルトガル人のクズだ！クソ野郎！くず野郎！）

(20) Laetitia：t'es qui pour me donner des ordres, t'es pas le patron, t'es pas le mari, t'es pas le père, t'es rien, t'es qu'une merde, t'es qu'une merde (SOS Ma Famille à Besoin D'aide - Laetitia)
（あんた何様のつもりで私に指図してんの、パトロンでもないし、夫でもないし、父親でもないし、なんでもないくせに、あんたは糞でしかない、あんたは糞でしかない）

(19) は会話形式において、聞き手を直接侮辱しているのではなく、語りの中においての侮辱である。下線部に注目すると、話し手はお金を返さないポルトガル人のことを「ポルトガル人のくず」として取り上げている。ポルトガル人の中でも「価値のない」最低レベルに位置するポルトガル人である。このように、人物を merde に喩え、取り上げることでその人物に対する低評価を示し、間接的に侮辱となる。(20) は、妹である Laetitia が兄と口論している場面である。Laetitia は兄を「糞」として取り上げ、« t'es qu'une merde »（君は糞でしかない）という形を用いて兄を侮辱している。このように、聞き手を糞として捉えることでその品格を貶め、結果として、merde は聞き手に対する直接的な侮辱表現となる。

4.3.1.4　成句で用いられる merde

Edouard（1967：226）が言及していたように、merde は成句で用いることができる。以下では、頻繁に用いられる形式を 4 つ取り上げる。

(21) Mère：tu m’as parlé comme une merde hier

(SOS Ma Famille à Besoin D'aide - Kimberley 下線筆者加筆)

（お前は昨日私にくそみたいな話し方をした）

(22) Père：tu vas avoir une vie de merde

(Pascal Le Grand Frère – Anaïs 下線筆者加筆)

（君はくそみたいな人生を送ることになるよ）

(23) LD860MER：non mais c'est de la merde ça tient pas

(ESLO2_REPAS_1268_C 下線筆者加筆)

（でも本当に最悪、くっつかない）

(24) Phillipe：mais t’as de la merde dans les yeux ou quoi, pour toi ce baquet est propre ?

Katie：bha propre, on peut envoyer quand même comme ça, on ne les nettoie jamais Sophie

Phillipe：bhe non tu travailles dans la merde tous les jours

(Cauchemar en cuisine - Pizza Kelly[47] 下線筆者加筆)

（目にクソでも入ってんのか、君にとってこのタッパーはきれいなのか）

（うーん、きれい、このままでも（中身）を（客）出せるし、洗ったことないね、ソフィー）

（ダメだ、君は毎日糞の中で（最悪な状況で）仕事をしてる）

[47] 現在は « La fabrique » という店名に変更されている。

下線部に示したように、(21) では « comme une merde » （くそのように）、(22) では « une vie de merde » （酷い人生）、(23) では « c'est de la merde » （これは糞だ→これは酷い）、(24) では « dans la merde » （糞の中にいる→困る状態にある）、それぞれの用例において merde は成句の形で現れている。

(21) は、母親が卑劣な言葉しか言わない娘に対して批判している場面である。普通であれば、母親に向かってそのような話し方を回避すべきであるが、娘の話し方は無礼でクソ（糞）と同レベルであると理解することができる。このように、物事のひどさが糞に相当するという意味で « … comme une merde » を用いることができる。(22) は、父親が毎日学校にも行かず、タバコを吸ってふらふらしている高校生の娘に対して忠告している発話場面である。「糞」を用いて人生を表現することで「酷い人生」という意味で解釈される。このように、 « une /un N de merde » （腐った～）は、N の状態が悲惨であることを表している。(23) は、車のワイパーの交換について話している場面である。LD860MER の発話は、自分でワイパーをうまく装着することができず、すぐ外れてしまうという事態に対する発話である。Edouard（1967：226）でも見たように、c'est de la merde は「つまらない、価値のない」という意味であり、この用例においては、事態が複雑で思い通りに進まないと解釈することができる。(24) は、Phillipe が Katie のレストランの衛生問題について指摘し、ピザソースが入ったタッパーウェアが汚れていることを叱責されている場面である。Katie は汚れをあまり気にしていなく、Phillipe は、Katie の仕事環境が「糞の中にいる」ようであると発話し、最悪な状況において仕事をしていることを示唆している。このように、« dans la merde » （糞の中にいる）は悲惨な状況、または厄介な状態であることを表現している。

これまで、名詞としての merde の実質的用法、比喩的用法、侮辱的用法、および成句としての用法について検討した。merde は「糞」という「実質的な意味」を持つが、これが物事に対して比喩的に用いられた場合はそれらの価値を下げる発話となり、人

物に対して比喩的に用いられた場合は、聞き手に対する侮辱的発言として捉えられる。また、成句で用いられる merde も糞という実質的意味から、「つまらない」、「くだらない」、「悲惨」、「困惑」などの意味が引き出されている。merde は、単に「糞」を指し示すだけではなく、常に嫌悪、忌避などのマイナス価値が随伴することが、merde の名詞的用法の特徴である。

一方では、merde は糞という意味が現れず、物事に対する反応として間投詞的に用いられる場合もある。以下で、merde の間投詞的用法を考察する。

4.3.2　merde の間投詞的用法

Anscombre（2009）は、merde のような言葉を「ある状態に対しての話し手の反応を表す間投詞」と特徴づけている[48]。merde の間投詞的用法は、以下のような用例が見られる。

(25) KR001：merde j'ai oublié de boire mon thé　　(ESLO2_ENT_1261_C)

（やばい、お茶を飲むのを忘れていた）

(26) RN166：merde excusez-moi　　(ESLO2_ENT_1260_C)

（（食事中にコップを倒して）いけない、ごめんなさい）

[48] À la première classe appartiendraient des interjections comme *Hélas*, *Pouah*, etc., qui expriment un sentiment. À la seconde des interjections comme *Flûte*, *Merde*, etc., qui représentent une réaction face à une situation. (Anscombre 2009：19)（第 1 の分類に属するのは、Hélas（嘆きの「ああ」）、Pouah（ああ嫌だ）のような間投詞であり、話し手の感情を表している。第 2 の分類においては、Flûte（ちぇっ）、Merde（くそ）のような間投詞が見られ、状況に対する反応を表している。）

(25) では、お茶を飲み忘れたことに対する反応であり、(26) では、コップを倒してしまったことに対する反応である。いずれも「飲むはずだった」や「倒してはいけなかった」という話し手自身の失敗や過失に気づいた際に発話されたものであり、ある事態に対する反応である。この場合は、merde を「糞」として解釈することができず、困惑する状況に直面した際に発話する「やばい」、「いけない」、「しまった」といった意味で捉える方がより適切である。そのため、間投詞的用法に関しては « crotte » や « caca » などの「排泄物」を意味する言葉と置き換えると不自然な発話となる。以下では、とりわけ間投詞としての merde に注目し、実例をもとにその振る舞いや意味機能を考察する。

4.3.2.1　間投詞としての merde の意味機能分析

間投詞的に用いられる merde は文の構成要素として機能せず、独立して文の中に存在することができる。つまり、merde が欠落しても発話として成立するが、この場合、ただ話し手が自身の考えを断定、または主張する文となる。

フランス語話し言葉コーパス (ESLO2) を用いて merde を検索したところ、全 139 例中 74 例が間投詞的用法であった[49]。74 例の merde の発話場面に注目すると、merde の発話場面を 2 つのパターンに分けることができる。

第 1 のパターンは「実現すべき事態」が「非実現」となった場合である。

(27)=(25) KR001：merde j'ai oublié de boire mon thé　　(ESLO2_ENT_1261_C)

（いけない、お茶を飲むのを忘れていた）

[49] merde の用例の詳細は、参考資料 7 参照。

(28) RN488FRE：oh merde j'aurais dû lui dire

RN488：bah oui alors tu es déjà déjà que tu es dans la merde et ils t'enfonçent encore plus (ESLO2_ENT_1247_C)

（まったく、言うべきだったよ）

（そうだよ、もうすでに厄介事に巻き込まれているんだから、彼らはさらにあなたを追い込むんだから）

(29) ch_PP6：Dexter c'est fini hein

AJ38：bah y a ils vont avoir sûrement une saison six

ch_PP6：je crois pas hein je crois l'acteur il a un cancer

AJ38：oh merde c'est con parce que euh c'était bien

(ESLO2_ENT_1038_C)

（デクスター（ドラマ）終わったよね）

（シーズン 6 が出ると思うよ）

（いや、出ないと思う。あの俳優ガンになったらしいよ）

（えっ、残念、すごくよかったのに）

(30) GG675：quand ça clignote c'est en pause

GG675PER：oh merde donc là c'est bon ?

GG675：ouais (ESLO2_ENT_1267_C)

（（録音の機械を見て）点滅しているときは一時停止だよ）

（あっいけない、もう大丈夫？）

（うん）

以上の用例において merde の話し手はいずれも自身の失敗や過失、あるいはある

困惑事態に対して反応している。(27)=(25) では、飲もうと思っていたお茶を飲み忘れていたという事態、(28) では、言っておけばよかったことを言わなかったという事態、(29) では、続くと思っていたドラマが終わってしまうという事態、(30) では、録音されなければいけなかったが、結果的には録音されていなかったという事態が起こっている。話し手はこれらの事態を認識した際に merde と発話し反応を見せている。このパターンで、話し手が直面している状況とは、話し手にとって本来実現しているに違いなかった事態、実現していることが望ましい事態が実際には「話し手の思い通りに実現しなかった」という状況である。この「実現していない」という現実に気づくことで話し手は merde と発話する。その発話からは、(28) にあるような「言っておけばよかった」という後悔の感情や、(29) にあるような「俳優さんがもうドラマに出ない」ことを残念に思う感情が読み取れるだろう。確かに、Edouard（1967：224）が指摘するように、merde を驚きとして見なすこともできるが、しかしながら、merde が最終的にもたらす心情は、驚きだけではなく、後悔や口惜しさ、自身の失敗といったさまざまな感情であるだろう。

続いて、第 2 のパターンである、「回避すべき事態」を「回避できなかった」場合について見ていく。

(31)=(26) RN166：merde excusez-moi (ESLO2_ENT_1260_C)

（（食事中にコップを倒して）いけない、ごめんなさい）

(32) RF126AMI：oh merde je l'ai trop taillé du coup y a un petit trou là

(ESLO2_REPAS_1271_C)

（パンにバターをぬりながら）

（いけない、伸ばしすぎて小さい穴が開いてしまった）

(33) DM95：dis donc c'est une impression ou c'est des cheveux blancs que tu as là-haut

272LOC1：cheveux blancs

DM95：ah merde (ESLO1_REPAS_272_C)

（あれ、勘違いなのか、それとも白髪があるのか？）

（白髪だよ）

（あちゃー）

(34) WC29：tu es sur la bande

ENT_29INC：oh merde (ESLO2_ENT_1029_C)

（バンドを踏んでいるよ）

（あっいっけない）

(31)=(26) では、食事中に水が入っているコップを倒してしまったという事態、(32) では、パンに穴をあけてしまったという事態、(33) では、友人の白髪を見つけてしまったという事態、(34) では、踏んではいけないバンドを踏みつけてしまったという事態、にそれぞれ直面している。これらの用例は、「回避すべき事態」、すなわち話し手が真に望まなかったことが実現してしまったという状況を示している。話し手は、回避すべき事態を回避することができず、それが実現してしまった状況に置かれているのである。

このように、merde が発話される状況には、以下の 2 つの発話場面が見られる。

1)「実現すべき事態」が「実現しなかった」場合

2)「回避すべき事態」が「実現してしまった」場合

さらに重要な点として、いずれの発話場面においても、話し手は merde を発話する前の時点において、自身の思い描く理念的事態を「実現すべき事態」、または「回避すべき事態」として認識している必要がある。例えば、(27)=(25) において、話し手が持つ理念的事態とは「お茶を飲まなければいけない」事態であるが、実際に起こったのは「飲んでいなかった」事態である。このことから、話し手が持つ「理念的事態」と「現実的事態」が対峙する状況において merde が発話されると理解できる。さらに加えて言えば、merde を発話することによって、話し手は、「実際に起こった事態と異なる自身がイメージした理念的事態」を再認識するのである。

merde の機能をこのように規定するのならば、たとえば、(31)=(26) では、飲まなかったという結果、(28) では、言わなかったという結果と、「飲まなければいけなかった」、「言っておけばよかった」という話し手の理想との対立からくる後悔の気持ちが表現されていることが理解できる。同様に考えれば、(31)=(26) では、「倒してはいけなかった」、(32) では、「穴をあけてはいけなかった」など、話し手にとって実現してほしくなかったことが実現してしまったという不都合な状態に話し手自身が気づき、その取り返しのつかなさに対する悲観の感情が表明されているのである。

以上の考察を踏まえて、merde が発話される 2 つの発話パターンを図 1 のように示すことができる。

パターン 1）実現すべき事態　→　**実現しなかった**

パターン 2）回避すべき事態　→　**実現してしまった**

理念的事態 P　≠　**現実的事態 P'**　→　**merde の産出**

図 1　間投詞として用いられる merde の産出プロセス

理念的事態を P、現実的自体を P'とする。図 1 において、話し手が持つ理念的事態

（P）とは、話し手にとって「実現すべき事態」と「回避すべき事態」であり、話し手の思い通りに事態が運ぶことである。しかし、merde が出現する状況とは、話し手の思い通りにいかなかった場合である。パターン 1 では、やるべきことをしなかった場合（非現実）、パターン 2 では、してはいけないことをしてしまった場合（実現済）、いずれも、話し手が持つ理念的事態とは反対の事態が起きてしまった状況であり、この反対の事態が現実的事態（P'）である。このように、理念的事態（P）と現実的事態（P'）が食い違い、話し手の思い通りにことが運ばず、そうであってほしくなかったという現実の事態（P'）に直面した時に、merde の発話が見られるのである。

ここから、merde の名詞的用法と merde の間投詞的用法には意味的なつながりがあることがわかる。名詞としての merde は、「汚いもの」や「触りたくないもの」という否定的な価値を内包して持っており、それが実体的な悪臭を放つ汚物としてではなく、事態の価値付けを目的とした場合には、いわば、忌避すべき事態（汚物を避けようとすること）を指し示すのだと考えられる。このように考えれば、間投詞としての merde も同様の発話機能を持っており、それは「実現すべき事態が実現で着なかった」場合と、さらには、「忌避すべきものを忌避できず、実現してしまった」場合とに分かれるといえる。

ここまで、merde の 2 つの発話パターンを記述した。merde は、話し手が困惑する事態に直面した際に発話され、結果的に、merde は話し手の驚き、後悔、反省と言った心情を示すに至る。merde は、話し手による現実の状況に対する価値判断を含む発話であるといえる。

ところで、merde は物事や人物に多くの場合否定的価値を与えやすいが、一方で発話場面によっては賞賛を表す場合もある。

4.3.2.2　評価を表す merde

賞賛を表す merde には、例えば、以下のような用例がある。

(35) sûrement une ancienne demeure de michés du Siècle... Ça se voyait aux décorations, aux moulures, aux rampes entièrement forgées, aux marches en marbre et porphyre... C'était pas du toc !... Rien que du travail à la main !... Je les connaissais les choses de style ! Merde ! C'était vraiment magnifique ! (Céline, *Mort à crédit*, 1936：812)

（おそらく古い時代の隠れ家だ。装飾、刳り形、手すり全体の作り、大理石と斑岩で作られた階段で想像がつく。模造品ではなかった！手作業というだけで。私はこれらの芸術作品のスタイルを知っている。ちくしょう！本当に素晴らしい！）

(35) は、家の描写をしている発話場面であり、装飾が「素晴らしすぎるさま」について言及したものである。このような賞賛を表す merde は、ある対象の素晴らしさを前にして、いろいろ否定的にケチをつけようとしても、非の打ち所が見つからない状況に見られる発話である。すなわち、どのように否定的な立場を取ろうとしても、プラスの評価しかできず、話し手の評価は言及対象の「素晴らしさ」という評価を回避することができないのである。まさに、Guiraud（1976）が記述しているように、« *Oh ! merde ! que c'est beau !* cette beauté qui me prend par surprise est si grands que je ne trouve pas de mots pour le décrire » (Guiraud 1976：115) （お！ちくしょう！なんて美しいのだ！この美しさは私に大きな衝撃を与え、これを描写するための言葉が見つからない）という状況である。このように、merde は物事に対する最高評価を表すことができ、「merde としか言いようがないという状況」であると理解することができる。

このように、間投詞としての merde は、すでに述べたように、話し手の持つ「理念的事態」と「現実的事態」の食い違いが見られる場面における話し手の反応である。プラス評価を表す merde も、基本的にはこの食い違いがベースとなる。この場合、

merde は物事への価値判断を表す間投詞として用いられている。評価としての merde は、人物や物事の美しさ、またそれらの持つ並外れた素晴らしいから「避けられない」という点において、間投詞としての merde との関連性があるといえる。

4.3.2.3　会話構築における merde

merde は事態に対する反応であると述べたが、それだけではなく、話し手自身の発話ミスに対する反応としても用いることができる。話し手は、発話を構築していく上で修正を行いながら発話行為を行っており、語彙の選択ミスや一時的な語彙欠陥が原因で発話が一時的に停止されることが見られる。この時に merde の挿入が認められ、例えば、以下のような用例がある。

(36) WZ853：y a des gens là qui qui veulent être professeurs des écoles qui mettent des photos un peu euh provocantes

WT075：olé olé

WZ853：voilà euh moi je serais un parent j'irais sur Facebook et je verrais des choses comme ça sur l'instit de mon gosse euh je pense que j'aurais du mal

WT075：Et tu penses que les élè- les profs les merde ben les parents des gamins ils vont voir euh la tronche des instits

(ESLO2_ENT_1234_C)

（学校の先生になりたいと思っている人たちが挑発的な写真を（インターネット状に）載せている）

（わお！わお！）

（そうそう。私が親だったら、Facebook 上で、自分の子供の先生がこのような投稿をしているのを見たら、気持ちを悪くすると思う）

（生徒、いや、先生、いや、ちがう、子供たちの親は、（インターネット上で）先生の顔が見えると思う？）

(37) TG634FIE：oh c'est trop bien j'ai étudié des crânes des crânes on a mis de la semoule dans des crânes

TG634：pour quoi faire ?

TG634FIE：pour calculer la masse volum- euh le non la le hm merde le truc ensuite tu mets le cube

TG634：c'est pas la masse volumique ?

(ESLO2_REPAS_1270_C)

（お！すごい良かったんだよ。（学校で）頭蓋骨について勉強したの。頭蓋骨にスムールを入れたんだよ）

（そんなことしてどうするの？）

（密…を測るの、うーん、あの、違う、あの、なんだっけ、あれだよ。それで、次に　　）

（密度じゃない？）

(36) では、「学校の先生がインターネットに挑発的な写真を載せている」ということについて話している場面である。WT075 は、les élè-（生（徒））、les profs（先生たち）と言葉を探し、言い換えをしながら、本来発話したかった言葉 « les parents des gamins »（子供たちの親）にようやくたどり着き、発話を続けている。(37) では、TG634FIE が学校で密度の測り方を教わったと食事中に家族に話している場面である。密度という言葉を思い出せず、« euh le non la le hm »（うーん、あの、違う、あの）という具合で言葉を探しているが、うまく言えず、merde と発話した後で、密度を « le truc »（あれ）と言い直している。このように、話し手自身の発話の訂正に

おいても merde を用いることができる。これを換言すれば、「言い間違えたという事態」を、避けられなかったため merde が発話されたと解釈することができる。

4.3.2.4　苛立ち場面に用いられる merde

ここまで考察してきた merde は、いずれも「普段の会話場面」に見られる発話である。罵り場面に見られる merde は、1）対事、2）対人、の 2 つの発話場面が見られる。以下で実例をもとに考察する。

(38) Phillipe：Merde ! C'est pas l'hôtel ! C'est pas ici ! Mais putain mais c'est où, j'ai vu le panneaux parking. Ah ils vont m'entendre, ils vont m'entendre hein !

(Cauchemar à l'hôtel[50] - L'hôtel-restaurant de l'Agriculture)

（くそ！ホテル（の門）じゃない！ここじゃない！ちくしょう、どこだよ、駐車場の看板を見た！）

(39) Phillipe：laissez-moi par- laissez-moi finir ! merde ! laissez-moi finir ! vous me coupez à chaque fois ! d'accord ! alors moi aussi j'en ai marre, à chaque fois vous me couper la parole !

(Cauchemar à l'hôtel - L'hôtel-restaurant Le Manoir)

[50] Cauchemar à l'hôtel（ホテルの悪夢）は、注 42 で説明した Cauchemar en cuisine（厨房の悪夢）のホテル版である。経営がうまくいかないホテルレストランの立て直しに、有名フランス料理シェフである Philippe Etchebest が実際にそのホテルに泊まり、食事をすることで問題点を見つけ出し、ホテルのレセプション、サービス、清掃、料理、人間関係など、現場の問題を厳しくコーチングし、解決していくことを目的と番組である。引用の際は (Cauchemar à l'hôtel - ホテル名称) のように記載する。

（（何を言っても話を割って入ってきて）話を、最後まで話させろ！くそったれ！最後まで話させろ！毎回割り込んできて！いい！こっちもうんざりなんだよ、毎回話を切りやがって！）

(38) では、宿泊するホテルに戻ってきた Phillipe がホテルの入り口に鍵がかかっていることに気がつく。ホテルの駐車場に裏口があることを知っていた Phillipe は駐車場を探し始めるが、15 分以上探しても見つからない。ようやくある駐車場にたどり着き、門を見つけたが、探していたホテルではないとわかり、苛立ちの感情を伴い発話している場面である。この用例は、「対事」の場合であり、基本的には、ホテルの裏口だと思っていたがそうではなかった、つまり、「望む結果が実現しなかった」という、困惑事態に対する反応として捉えることができる。解決策が見つからない状況に対して merde と発話し、結果的に、自分が泊ることを知っていたのにもかかわらず入口に鍵をかけたオーナーに対する苛立ちの感情が表れている。

一方、「対人の merde」には、2 つの特徴が見られる。(39) において、Phillipe はホテルのオーナーの話し方や無礼な態度に腹が立ち、オーナーに向かって批判をしている発話場面である。この場合の merde は、「事態に対する反応を表す juron」と「聞き手に向かって発話する injure[51]」の 2 つの機能を備えていると考えられる。まず、juron としての機能は、自分の話を最後まで聞こうとしないオーナーの無礼な態度がもたらしている事態に対する反応である。普段であれば、効率よく会話が進むが、この用例ではオーナーの割り込みによって、話し手にとっての理想な会話が実現していない。苛立ち場面に見られる merde は、怒りの感情と強い発話イントネーションを

[51] この点に関して、Larguèche（1983）は以下のように述べている。« Jurer devant quelqu'un peut devenir, sinon une injure, du moins un défi, en fonction de la qualité des personnes présentes. » (Larguèche 1983：59)（ある人物の前で宣言することは、目の前にいる人物の気質によって、罵倒、少なくとも挑発となるのである。）

伴い発話され、そこには、困惑状況を中断させたいという話し手の心情が伺える。次に、injure としての機能は、聞き手を「糞」として取り上げ侮辱しているのではなく、聞き手に対して自身の怒りを強調し、聞き手に対する「権威の見せつけ」として捉えられる。例えば、親子喧嘩において子供が親に向かって発話する場合もこの「対人の merde」にあたる。つまり、会話者同士に上下関係がある場合は尊敬すべき人物に対する侮辱であり、会話者同士が同等の関係にある場合は相手の地位を押さえつけ蔑む役割があるのである。merde はこれ以上言葉が見つからず、merde としか言いようがない状況に用いられるが、それくらいの強い苛立ちであることを相手に印象づけようとしていると理解することができる。また、merde は一連の発話の冒頭に出現することは珍しく、会話のやりとりの末、怒りが頂点に達している際に見られる発話である。

ここまで、間投詞としての merde がある事態に対する反応として使用されることを考察した。merde は、基本的には、マイナスイメージをもたらす語彙であるが、最後に、merde のもう一つの用法である、「祈願としての merde」について見ておきたい。

4.3.3　祈願として用いられる merde

下品や不潔といったマイナスイメージを持つ merde だが、他人の成功を祈る縁起の良い言葉として用いられる場合もある。Edouard（1967：223）によれば、merde は単なる無礼な間投詞であるだけではなく、大事な仕事や試験を控えている人に向かって発話することで、相手を応援すると同時に、仕事や試験が良い結果となるように「祈願をする」という意味が込められている。また、祈願の merde は、以下に示すように、1 回よりも 2 回、2 回よりも数回、発話することで、より効果的な発話となるとしている。

(40) Merde ! merde ! merde !　　（くそ！くそ！くそ！）

(41) Cent fois merde !　　（100 回くそ！）

(42) Un million de fois merde !　　（100 万回くそ！）

(Edouard 1967：223)

では、なぜ merde が「祈願」のために使用されるようになったのか。20 世紀前半において、merde はすでに「祈願」の意味で使用されていたと言われているが、それを裏付ける有力な根拠はない。Planelles（2018）の « *Les 1001 expressions préférées des Français* »（『フランス人が好む 1001 の表現』）において、merde の祈願用法に関する有力な説が 2 つ挙げられている。

Planelles（2018：n620）によれば、1 つの説は迷信的な用法である。大事なことを控えている人に対して、« le souhait de « bonne chance » est interdit, car il peut provoquer un échec »（「幸運」を祈ることは禁止されており、なぜなら、この言葉は逆に「失敗」を引き起こす恐れがある）からである。この場合 merde の発話は、不運をもたらす言葉として考えられており、試験などを控えている人が「悪運から逃れられる」ような役割があるとしている。さらに、Planelles（2018：n620）によると、祈願の merde を言われた人物は、この祈願の「おまじない」を無効にしないためにも、merci（ありがとう）と答えてはいけないと述べている。

もう 1 つの説としては、昔の演劇や戯曲の世界において、souhaiter « merde » à un acteur, c'était espérer pour lui que de nombreux fiacres viennent devant le théâtre déposer les spectateurs（役者に向かって merde と発話することは、その役者の演劇を見るため、劇場前に観客を降ろす辻馬車がたくさん来ること期待する）ということを意味している。当然ながら、馬が劇場前に糞の塊を残していくことは避けられない。馬の糞の数は観客の数に相当していると考えられていたため、糞の量が多ければ多いほど、その演劇が成功したということを物語っている。さらに言えば、迷信的には、左足で糞を踏むことで幸運をもたらすと Planelles（2018：n620）は付け加えている。

1 つ目の merde は « bonne chance » の反対の意味を持つ言葉として用いられており、良い悪いの対比である。2 つ目は馬の糞という名詞的な意味が関係している。祈願の merde は、merde が持つ意味機能が何であるかということよりも、merde という言葉を「発話する」こと、すなわちその行為自体に意味があると考えられる。日本語にもあるように、痛みを鎮める時に用いる「ちちんぷいぷい」、「痛いの痛いの飛んでけ～」、または『アラビアン・ナイト』の「アリババと四十人の盗賊」の物語で有名となった「開け胡麻」など、これらの言葉はすべておまじないの一種であり、呪術的機能を持つ。呪術的機能とは、言語を発することにより、その呪術力を発揮させ、願ったように事柄を実現させることである。merde にもこのような呪術力が備わっていると信じられている。つまり、多くの人々がその言葉がもたらす「力」を信じ、良い結果であってほしいという願い（souhait）を込めるのである。

祈願としての merde は、聞き手を必要としない merde 間投詞的用法とは異なり、「聞き手に向かって」発話することでその言葉の力を発揮する。しかし、実際には「～でありますように」のように、祈りを実現するのは聞き手ではなく、人の力を超えた神や自然の威力であろう。人の力ではもうどうにもならないことだからこそ、人は祈祷するのである。このように考えるのであれば、祈願としての merde は、忌み嫌う事態（受験生であれば不合格）を払いのける儀式的行為といえる。Merde が「避けるべきものである」という点において、間投詞としての merde との間に意味的関連性があるといえる。

呪術は、文化であり、宗教儀礼、民俗的慣習、信仰等との結びつきが強く、国や地域により形態が多様であり、それに応じて用いられる言葉が異なる。merde はフランス語において祈願の呪文として機能している。merde を含め、フランス語のもつ呪術的機能については、歴史的背景を理解し、文化的・民俗学的観点から考察していく必要があるが、ここでは、少なくとも merde の持つ評価的価値と関連することに言及することにとどめておく。

4.4　まとめ

本章では、フランス語に見られる merde の名詞的用法と間投詞的用法を紹介し、主に merde の間投詞的用法に注目し、その意味構造を考察した。

名詞的用法では、merde が持つ実質的意味である「糞」として用いられる場合と、物事や人物を糞に見立て、比喩的に用いることでその対象に対する低評価、または無価値であることを表現する場合とにわけられる。間投詞的用いられる merde は、基本的には、merde が持つ「糞」という実質的意味は表に現れず、ある事態に対する反応のみを示す。間投詞としての merde は、「本来実現すべき事態が実現しなかった場合」と「避けなければならない事態が実現してしまった場合」に使用される。merde は、話し手がある事態に直面した際、自身がその事態とどのようにかかわっているかを認識することで、事態を再定義する役割があり、常に話し手の価値判断や感情的振る舞いが随伴する発話である。

フランス語において、「糞」を意味する言葉は、他にも crotte（主に動物の糞）、fécale（糞便）、excrément（大便）、caca（幼児語でうんち）、étron（人間や動物の糞）、fèces（糞）などが挙げられる。しかし同じ対象を指示する語が複数あったとしても、それぞれの語が同じ記号的機能を果たすわけではなく、これらの「糞」を意味する言葉の中でも、merde は、指示的意味、評価的（内包的）意味の両方で、実に多様な状況と関連づけられる特異な語彙である。merde は、他に糞を意味する言葉とは異なり、名詞的意味である「糞」として発話されるだけにとどまらず、事態に対する反応を示し、話し手の主観と関係付ける機能を持っているのである。

第 5 章

話し言葉における putain の意味機能

5.1　はじめに

本章で考察する putain は、第 4 章で考察した merde と同じく、フランス語において gros mots（下品な言葉）として認識されている。すでに述べたように、gros mots は、主に猥褻的な表現、性的表現、または糞尿表現が多く含まれており、一般に庶民によって使用されると考えられている（Guiraud 1976[52], Mateiu & Florea 2014[53]）。

gros mots は辞書の定義によれば、« juron grossier (cf. Gros mots) »[54]（罵り言葉、下品な言葉）であり、« mot obscène »[55]（みだらな言葉）である。したがって、辞書の定義からわかるように、putain は gros mots（下品な言葉）であり、さらに、juron（ののしり）としても捉えられるだろう。

---

[52] Les gros mots « sont essentiellement des mots d'origine vulgaire (conçus et employés par le peuple) et dont la source principale – sinon unique, en tout cas la plus riche et la plus typique – est dans l'expression de l'obscénité, principalement sexuelle et scatologique ». (Guiraud 1976：128)（下品な言葉は、本来的に民衆を起源とする言葉であり、その由来は一つとは言わないまでも、最も豊富で最も典型的なものは、猥褻な表現、また主に性的表現、糞尿表現を基本とした語彙である。）

[53] Les gros mots représentent une simple classe de mots, vulgaires et bas, employés par le peuple et référant au corps et à ses fonctions (en principal la sexualité et la défécation) d'une façon qui les dévalorise. (Mateiu & Florea 2014：594)（下品な言葉は単なる語彙クラスであり、下品で低劣であり、一般庶民によって使用されるものである。主に、性的表現と排泄表現に関する表現を基にした身体語彙であり、品を貶める働きがある。）

[54] *Le Nouveau Petit Robert de la langue française* (2008)

[55] *Dictionnaire universel* (1978)

フランス語の putain は「売春婦」を意味する名詞である。しかし、現代フランス語の話し言葉において、putain は、第 4 章で考察した merde と同様、多くの場合、物事に対する話し手の反応を表しており、間投詞的に用いられている（後述する 5.4 の比較データを参照）。putain は、名詞的または間投詞的に用いられる他、« putain de N » を基本とした形を取り、多種多様な成句で用いられ、N に対する強調を表すと考えられる。

本章では、putain に関する先行研究を踏まえ、putain の基本的な用法について考察する。そのうえで、主に話し言葉に用いられる putain の間投詞的用法に注目し、putain が発話にもたらす意味効果の特徴について検討する。putain と merde は、フランス語を代表する下品な言葉であると言っても過言ではない。両語は共に事態に対する反応として捉えられる間投詞的用法を持ち、同じ発話場面で用いられる場合もある。本章では、putain の意味機能を明らかにした上で、merde と putain の比較検討を行う。

5.2　先行研究

上で見たように、putain は名詞として「売春婦」を意味し、さらに間投詞として事態を罵る場合に用いられる。先行研究においても、この 2 つの意味的関係について論じられている。

5.2.1　Edouard（1967）における putain の考察

Edouard（1967：538）によれば、putain は « Espèce de putain ! »（あばずれ！）、« Tu n’es qu’une putain »（売女）、« C’est la reine des putains »（売春婦の女王）のように使用することができる。この場合の putain は「売春婦」を意味しており、« une femme qui, sans forcément monnayer ses faveurs, est prête à suivre le premier venu » (Edouard 1967：538)（必ずしも愛情行為によってお金を手に入れるとは限ら

ないが、誰にでもついていく準備ができている女性）であると定義している。また、Edouard（1967：538）によれば、« faire la putain »（売春をする）、« être un peu putain sur les bords »（売春婦の素質がある、売春婦のような振る舞いをする）のような表現は、時代の移り変わりによって意味が拡張され、単に「売春行為」を表すよりも、他人に偽りの好意を見せることでなんらかの援助を獲得する人物のことを指し示し、さらに、偉そうで敬意に欠ける人物を非難する際にも使用されるものである。

putain の同義語には pute（売春婦）という言葉も見られる。Edouard（1967：538）によれば、« pute » は putain の短縮形ではなく、1）臭い、悪臭、汚い、2）醜い、意地悪、悪い、3）卑しい、軽蔑、売春婦、という 3 つの定義を持つ形容詞 « put » の女性形であり、putain の基礎となる語根である。pute は以下のように用いることができる。

(1) vieille pute / sale pute (Edouard 1967：538)

（老いた娼婦 / 汚れた娼婦→あばずれ）

(2) fils, fille ou enfant de pute (Edouard 1967：539)

（売春婦の息子、娘、または子供→このくそ野郎）

(1) では、聞き手を「娼婦」として捉え貶めている。(2) では、聞き手を「売春婦の子供」と見なし蔑むことで罵り行為となる。(1) と (2) は、pute を putain に置き換えることができるが、現代フランスの話し言葉においては、pute の方が多く用いられる。

また、Edouard（1967：539）によると、« fils de pute »（売春婦の息子→このくそ野郎）に対する言い返しは、伝統的には、« pute toi-même ! »（お前こそ！）があり、もっと強く言い返したいのであれば、女性に対しては « Ta gueule, eh, sale

gouine ! »（黙れ、売春婦！[56]）があり、男性に対しては « Qu'est-ce que tu en sais, pauvre tapette[57] ! »（お前に何がわかる、おかま野郎！）を用いることができるとしている。

Edouard（1967：539）はさらに、以下のように付け加えている。putain は、« Du latin *puta* : petite fille (de *puer* : enfant) devenu *pute* puis *putain* en français »（ラテン語の puta（女の子）または puer（子供）に由来し pute となり、putain へと変化した）ものであり、当初は、pute も putain も「子供」の意味で使用されていたが[58]、のちに「売春婦」の意で使用されるようになったと記述している。

5.2.2 Rouayrenc（1998）における putain の考察

Rouayrenc（1998：43-44）も同じく、la prostitution（売春）を意味する言葉として、pute と putain の 2 つの名詞を挙げており、putain は pute から派生した « -ain » で終わる形であるとしている。Rouayrenc（1998：44）によれば、pute から派生した putasse（売春婦）、grogner から派生した grognasse（下等の娼婦）、オノマトペ pouf[59] から派生した pouf(f)iasse（品行の悪い女、売春婦）は、軽蔑的な意味を持つ接尾辞である « -asse » が用いられている。また（3）は pute の派生語であり、軽蔑的な意味を持つ接尾辞 « -asse » [60] を伴う。

---

[56] Gouine は俗語的には、同性愛者の女性（レズビアン）を意味する。

[57] Tapette は、俗語的には、「男性の同性愛者」、または「女役」や「おかま」を意味する。

[58] ルイ 7 世はメイヤン（Meillant）の領主のもとを訪れた際、領主が居なかったため、ルイ 7 世は以下のような置き書きを残している：« Je suis venu vous voir dans votre château. Je n'y ai vu que votre pute et m'y suis embourbé » (Edouard 1967：539)（あなたに会うためにお城を訪れたのですが、あなたの子供にしか会えず、困りました。）

[59] pouf は「ずどん」や「ばたん」などの鈍い落下音を表す擬音語。

[60] この点に関しては、Edouard（1976：538）も、« le suffixe péjoratif *-asse* en fait une injure plus sévère et plus méprisante »（軽蔑的な意味を持つ接尾辞 -asse はより強い罵倒行為で

« -asse » で終わる言葉は、他にも « connasse »（une prostituée marginale 売春を副業としている女性）、« pétasse »（prostituée débutante 新人の、または臨時の売春婦）、« radasse »（dérivé de rade, la prostituée qui fait le trottoir rade から派生した言葉、客を引く娼婦）などが挙げられている。さらに、Rouayrenc（1998：44）によれば、morue（タラ）、barbeau（バーベル）、merlan（メルラン）のような魚の名称も俗語的に「売春婦」を意味する。

Rouayrenc（1998）は putain の名詞的用法を記述している他、putain を juron として捉え、間投詞として機能するとしている。

> Sont aussi interjections des noms, le plus employé étant certainement *merde*, qui a pour variante le synonyme *crotte !* Mais on peut également citer *putain* : « Putain, Cercaire, ça ripe sur la glace ! », *bordel* : « - Va ouvrir, bordel ! », ainsi que toutes les expressions comportant *Dieu*, qui sont considérées comme des jurons. (Rouayrenc 1998：95-96)

（名詞であり、間投詞でもあり、もっとも間投詞として用いられる名詞は、確実に merde であり、同義語には crotte！が挙げられる。また、putain も同じく間投詞として機能し、「ちくしょう、ケルカリア虫め、氷の上を滑ってろ！」のような用例が見られる。さらに、bordel も間投詞の 1 つであり、「開けろ、このクソ！」のように用いられる。他には、Dieu を伴う用例はすべて juron として見なすことができる。）

あり、より侮辱的である）と記述している。

Rouayrenc（1998）はこのように述べ、injure として機能する語彙と juron として機能する語彙を区別している。しかし、Rouayrenc（1998 : 102）は、putain は juron として捉えられる他、injure のような振る舞いも見られるとしている。

1）putain は l'apostrophe（侮辱的で乱暴な呼びかけ）のような振る舞いがあり、また感嘆的な名詞文において、人物や物事に対する価値判断を伴う。

(3) « C'était Respellière […] qui n'avait pas supporté de voir sa femme pelotée par un simple soldat. On entendit : « Putain ! » et une claque »

(Rouayrenc 1998 : 102)

（レスペリエールだった。彼は妻が単なる兵士に愛撫されたことが耐えられなかった。「ちくしょう！」という声とびんたが聞こえた。）

2）putain は les interjections（間投詞）のような振る舞いがあり、現代フランス語において、ほぼ間投詞用法に限定されていると言っても過言ではない。

(4) « - Oh putain c'est infect ! T'as changé l'huile de ta friteuse quand ? »

(Rouayrenc 1998 : 102)

（おお！なんてこった！臭いぞ！揚げ物鍋の油を変えたのはいつだ？）

1）は、人物を目の前にして putain と発話している。そのため、Rouayrenc（1998 : 102）では、l'apostrophe（侮辱的で乱暴な呼びかけ）として捉えていると考えることができる。2）は、putain の間投詞としての振る舞いを記述したものである。

ここまで見てきたように、先行研究では、主に putain の名詞的用法や語源、または派生に関する記述が多く見られる。また、Rouayrenc（1998）では putain の間投

詞としての振る舞いが指摘されている。*TLFi* によれば、putain の間投詞的用法は1931年以降に確認され始め、下品な表現で話し手の驚き（étonnement）、軽蔑（dépit）、怒り（colère）などを表すことができる。しかし、間投詞としての putain が実際の会話における記述および、putain の具体的な機能分析や話し手の感情に関して考察した先行研究は存在しない。本章では、putain の間投詞的用法に焦点を当て、putain が持つ意味的特徴や発話効果について考察していく。

5.3 putain の意味考察

5.3.1 「売春婦」を意味する putain

先行研究でも述べたように、putain は「売春婦」という実質的意味を持つ名詞であり、以下のような用例が見られる。

(5) Le long des grilles du Luxembourg, je rencontre aussi, tous les soirs, une petite putain, peinte et poudrée.

（*Le Grand Robert de la langue française* 2001）

（リュクサンブール公園の格子沿いで、私は毎晩、おめかしをした可愛い娼婦とも出会う。）

売春婦、または娼婦とは、報酬を得ることを目的として不特定の相手と性的関係を持つ女性のことである。古くから売春は「職業」として捉えられていたため、putain は「職業名詞」としても分類されている。(5) の売春婦は、une petite putain（可愛い娼婦）が下品で淫らであるという解釈ではなく、「売春婦」という職業分類に位置する人物であるという解釈となる。売春婦は「一般的な職業（医師、記者、教員など）」に比べて社会的地位が低く、一般的には忌避される職業である。putain が持つこの「低劣さ」が、他の用法において、下品または不潔といったマイナスイメージをもた

らすのである。

5.3.2　比喩的に用いられる putain

(6) Ta mère, c'est une putain qu'y disaient et toi, t'es qu'un bâtard.

(Frantext, *Ensemble, c'est tout*, 2004：355)

（お前の母親は売春婦だ、と言ってた。（僕のこと）お前は私生児でしかない、と言っていた。）

(6) の putain も「売春婦」を意味し、名詞的に用いられている。しかし、(5) のように職業名詞としての解釈とは違って、(6) では母親を「売春婦」に喩えており、母親は品行が悪い人であると解釈することができる。続く bâtard（私生児）は父親が認知しない子のことを指し、複数の男性と性的関係を持ち、売春婦から生まれた子と理解することができる。このように、母親を売春婦と見なし、子供を私生児と見なして比喩的に用いることで、この発話は軽蔑的、または侮辱的なニュアンスを帯びる。したがって、(6) は putain の比喩的用法としても捉えることができる。「売春婦から生まれた子」という表現に関しては、さらに (7) のような用例が見られる。

(7) Tu es parti ; tu veux me laisser. Fils de putain ! Je te connais maintenant !

(Frantext, *Le Grand troupeau*, 1931)

（行ってしまったのね、私をここに残したいのね。このくそ野郎！お前がどんな奴か今わかったよ！）

(7) の « fils de putain »[61] の字義的意味は「売春婦の息子」であるが、全体を 1 つの発話単位として捉え、「このくそ野郎」と解釈する方が適切である。この用例は、聞き手に向かって直接的な発話しているため、聞き手に対する罵り行為であり、聞き手を侮辱し、人間としての価値を蔑んだ表現となる。

5.3.3　成句で用いられる putain

TLFi によれば、putain は 1863 年頃 « putain de + nom » の形式で使用され始め、putain de には後続する名詞（N）の価値を拡張する役割がある。また、この場合は « marque le mépris, l'exaspération » (*TLFi*)（軽蔑や憤慨などの心情を表現する）ことができる。« putain de + nom » の形をベースとした用例は、以下のようなものが見られる。

(8) Putain de chansons d'amour... Toujours aussi sournoises...

(Frantext, *La Consolante*, 2008：33)

（なんて愛の歌なんだ、相変わらず陰険だ…）

(9) Et il a un putain d'accent marseillais.　(Frantext, *La Zonzon*, 2011：246)

（彼はなんとも強いマルセイユ訛りを持つ。）

(10) On n'y voit que dalle dans cette putain de forêt, chef !

(Frantext, *Mapuche*, 2012：398)

（まったくこの厄介な森の中じゃ何にも見えませんぜ、隊長！）

---

[61] « fils de putain »（売春婦の息子）以外にも、« fille de putain »（売春婦の娘）や « enfant de putain »（売春婦の子）の用例が見られる。

(8) の putain は限定詞を伴わず、« Putain de N (de N…) ! » の形を取る。(9) と (10) に関しては、« Déterminant N »[62]（限定辞＋名詞）の形式において、限定辞の後に « putain de » が挿入され、« Dét putain de N (GN) » の形を取る用例である。

(8) の putain de は、「愛の歌」が持つ価値を拡張する役割があり、同時に「愛の歌」に対する評価を示している。愛の歌には、「相変わらず陰険だ」という説明文が後続しており、単ある「愛の歌」ではなく、危ない愛の歌であり、さらに putain de の拡張機能によって、強烈な悪意を持った愛の歌であると理解することができる。また、例えば、« Putain de chansons d'amour... »（なんという愛の歌なんだ）のみの発話であれば、愛の歌のみが持つ価値が拡張され、激烈たる愛にあふれた「愛の歌」というプラス解釈となる場合もある。このように、putain de は N に対する強調のみを示しており、良い評価であるか、または悪い評価であるかは、後続する説明文に左右されるものであると理解できる。

(9) では、un accent marseillais（マルセイユ訛り）に putain de が挿入されており、「ものすごく強い」アクセントであるという解釈となる。この場合、例えば、« un <u>fort</u> accent marseillais » のように、putain de を形容詞 fort に置き換えることができる。したがって、この用例では putain de は名詞 N の程度を強める働きがあり、「形容詞的用法」があると考えることができる。しかし、(10) は (9) と同じように解釈することができない。(10) は、« cette forêt »（この森）に putain de が挿入されており、« cette putain de forêt » の形を取り、「この厄介な森」という解釈である。(10) において、例えば、putain de を形容詞 grande に置き換えることもでき、文としては成立するが、« cette putain de forêt »（この厄介な森）と « cette grande forêt »（この大きい森）の置き換えでは、文意が変化してしまうのである。この場合

[62] 限定詞（déterminant）は、冠詞（un, une, des, le, la ,les）、指示形容詞（ce, cet, cette, ces）、所有形容詞（mon, ton, son, mes, tes, leur...）であり、putain に前置詞、N と性数の一致が見られる。

の putain de は、言及対象 N の程度を強めるのではなく、N に対する悪い評価、または N の価値を下げる働きがあると考えることができる。putain de が N、または文にもたらす影響に関しては、更に文脈を取り入れた用例観察が必要であり、限定辞の種類や発話場面も考慮する必要があるが、ここでは、putain de の用例紹介にとどめておく。

putain de に関係する言語形式は他にも、(11) のように、言及対象であり、核となる N（bouton ボタン）の前に連続していくつもの « N' de »（N'は罵倒語）を挿入することができ、putain de 以外にも他の « N' de » を用いることができる。つまり、(11) は « Déterminant (N' de…) putain de (N' de…) N » の形を取るのである。また、この用例において、putain de が欠落しても、« Déterminant (N' de…) N' de (N' de…) N » の形で発話として成立し、核となる N に対する強調となる。

(11) Chercha une station-service, la trouva derrière un supermarché, mit un temps fou à trouver <u>ce bordel de putain de merde de bouton</u> qui activait l'ouverture du clapet du réservoir.

(Frantext, *La Consolante*, 2008：361 下線筆者加筆)

（ガソリンスタンドを探して、スーパーマーケットに裏にあるのを見つけた。ガソリンタンクのふたを開けるため、<u>この迷惑で厄介でクソボタン</u>を見つけるのにものすごい時間を費やした。）

さらにもう 1 つの言語形式として、核となる N を持たず、(12) のように、N'がすべて罵倒語である « N' de N' (de N'…) » を挙げることができる。

(12) Nom de Dieu de putain de bordel de merde de saloperie de connard d'enculé de ta mère (*The Matrix Reloaded*, 2003)

（お前の母親のバカ野郎のくずのクソったれの売春宿の売春婦の神の名前）

(12) は、映画『マトリックス』シリーズの第 2 作目にあたる『マトリックス リローデッド』において、登場人物であるメロビンジアンがフランス語の罵声に自己陶酔するシーンに見られる発話である。この用例において、N'はすべて下品な罵倒語が用いられている。この場合は、(11) とは異なり、核となる N が存在しない。そのため、(12) には、言及対象に対する価値づけや拡張機能はなく、それは単なる罵倒語の羅列であり、状況に対する反応である juron として捉えられる。しかし、罵倒語が常に (12) と同様の形式を持つとは限らない。そこで、この点に関してより詳細に見ていく必要がある。

5.4.4 putain の出現位置

putain の間投詞的用法の考察に入る前に「間投詞（l'interjection）」の定義を明確にしておこう。*Le Bon usage*（1975）によれば、「間投詞」とは、発話に見られる一種の叫びであり、話し手の考えや警告、呼びかけなどを表す言葉である。また、Riegel, Pellat et Rioul（2015）は間投詞を「一般的には形が短く、慣用表現であり、文全体から独立している。一語文のように、単独で発話することができ、また文のさまざまな位置に挿入することができる」と定義しており、さらに間投詞の種類には、名詞（nom：attention！危ない！）、動詞（verbe：Dis！Tiens！ねぇ！ほら！）、形容詞（adjectif：Bon！よし！）、あいさつ言葉（terme de salutation：bonjour！こんにちは！）、罵り言葉（juron：flûte！ちくしょう）などがあり、意味的には、感情的意味（valeur expressive ou émotive）、命令的意味（Valeur injonctive）、話しかけ機能（valeur phatique）、疑問的意味（valeur interrogative）などが見られると記述して

いる。この定義を踏まえて、putain の用例について考察する[63]。

(14) LG356：vous êtes en fac de lettres mais vous faites quoi exactement ?

CH578：sciences du langage

NW940：c'est pas vrai

LG356：putain c'est ce qu'on a fait

(ESLO2_CINE_1187_C)

（文学部に所属しているけど、正確には何を勉強しているの？）

（言語学）

（うそ！）

（まじで、私たちがやってやつだ！）

(15) UI19：des apparts comme ça euh quand j'en parle à mes potes à Paris ils sont fous quoi, quand je leur dit le loyer

ch_CD2：bah ouais c'est sûr

UI19：pour sept cents euros tu as putain la moitié de cette pièce quoi

(ESLO2_ENT_1019_C)

（この大きさのアパートを、パリの友達に言ったらすごく驚かれて、家賃を言ったら）

（それはそうだよね）

（700 ユーロで、まじで、この部屋の半分しか借りられないよ）

[63] 本稿で扱っている putain の用例は、フランス語の文法上の間違いや誤字脱字が見られるが、これに関しては、コーパスの表記通りに提示した。また、putain の日本語訳には統一性がなく、本論文では各用例の putain にふさわしいと思われる日本語訳を併記した。

(16) AJ38：y a quatre épisodes de disponibles Dexter aussi j'adore

ch_PP6：oh elle a fini c'est trop triste que Rita elle

AJ38：j'ai is-

ch_PP6：tu l'a vu à la fin ? c'est horrible putain

(ESLO2_ENT_1038_C)

（デクスターも 4 話も見れるよ、私好きなの）

（終わったよね、悲しいよね、リタが）

（私…）

（最後見た？ひどいよね、まったくだよ）

(14)、(15)、(16) の putain の出現位置に注目してみると、putain は文頭、文中、文末のどこにでも位置できることがわかる[64]。putain は文の構成要素に含まれず、単独で用いられており、putain の使用がなくても発話は文として成立する。しかし、putain を付け加えることによって、発話のニュアンスが豊かになり、より話し手の心情を表現した発話が可能となる。

以上で挙げた 3 つの用例において、(14) では、聞き手が同じく言語学を勉強していることを知ったこと、(15) では、パリの家賃が高いこと、(16) では、ドラマの結末が予想外だったこと、を受け putain と発話しており、いずれも事態に対する反応である。putain の発話を伴うことで驚きや残念などといった心情が表現されている。

このような場合において、例えば putain ではなく、ah！（あっ！）と発話することも可能である。しかし、ah！は一種の「叫び声」（朝倉 2002：269）であり、単なる

[64] この点に関しては、Rouayrenc（1998：96-97）においても同様の指摘がなされている。Rouayrenc（1998：96-97）によれば、間投詞は発話に「前置」することも、「後置」することもできる。さらに、Rouayrenc（1998：96-97）は、文中に位置する間投詞を「発話の中断」として捉えている。

発見や物事に対する気づきを表す。それに対して、putain という発話は同様に「気づき」ではあるが、単なる気づきではなく、putain はより感情的で話し手の戸惑い、喜び、驚き、困惑、絶望などの心情を感じさせる発話である。

5.4.5　間投詞としての putain の意味機能分析

現代フランス語の話し言葉において、putain（売春婦）や bordel（売春宿）のようなマイナス価値を伴う語彙は、名詞としての意味が薄れ、juron（ののしり）として機能し、話し手の心情を伴う発話として捉えられる。これは、putain が単なる語彙から「間投詞」という文法的要素に変化したことを示している。間投詞的に用いられる putain には、例えば、以下のような用例が見られる。

(13) BT17：on parle français quand même… putain je me suis niq- je me suis niqué au foot hier je me suis je me suis fait mal

(ESLO2_ENT_1017_C)

（フランス語も話すし…くそっ、やってしまった、昨日サッカーでやってしまったよ、痛めてしまったよ）

(13) では、putain を「売春婦」の意で解釈することはできない。(13) において、話し手は発話の途中で突然の痛みに襲われ putain と発話している。この場合の putain は、文の構成要素に含まれておらず、「痛み」という突発事態に対する反応として解釈すべきである。

putain の間投詞的用法に関しては、これまでの研究においても指摘されてきたものの、どのような状況において発話されるのか、また発話にどのような意味効果をもたらすのか、putain の意味分析には至っていない。以下では、(13) のような間投詞的振る舞いを持つ putain に注目し、発話状況や意味解釈を考察する。

フランス語書き言葉コーパス（Frantext[65]）とフランス語話し言葉コーパス（ESLO[66]）において、それぞれ « putain » を検索した。どちらのコーパスにおいても間投詞的に用いられる putain が多数を占めており、次に多いのが名詞的用法であった[67]。文学作品（書き言葉）を収録した Frantext では putain の名詞的用法を確認できたが、日常会話（話し言葉）を収録した ESLO においては putain の名詞的用法は確認できなかった。

フランス語話し言葉コーパス（ESLO2）に見られた putain の間投詞的用法（176 例）を考察したところ、putain のタイプを「話し手に関わる putain」と「事態に関わる putain」の 2 種類に分類することができた。以下で詳しく見ていく。

5.4.5.1　話し手に関わる putain

ある事態が起きた際、話し手は何らかの反応を見せることでその事態と関わりを持つ。「話し手に関わる putain」では、話し手が直面している事態が話し手自身になんらかの被害をもたらす、または自身の行動進行を妨げるものであると話し手が判断した場合、putain の発話が見られる。以下のような用例が見られる。

---

[65] Frantext は 5418 部のフランス文学作品（約 2 億 5400 万語）が収集されているフランス語書き言葉コーパスである（2019 年 9 月時点）。今回はフランス語話し言葉コーパス（ESLO）と比較するため、Frantext の検索範囲を 2008 年～2019 年とし、フランス人作家の作品に限定した。Frantexte では、putain を含む発話は 179 例観察された。

[66] ESLO (Enquête Sociolinguistique à Orléans) は、オルレアン大学がインターネット上に公開しているフランス語話し言葉コーパスである。1968 年から 1971 年までに収集された « ESLO1 » と 2008 年から現在までに収集された « ESLO2 » に区分されており、今回は ESLO2 に限定して検索した。ESLO2 では、putain を含む発話は 176 例観察された。

[67] putain の用例の内訳に関しては、参考資料 8 を参照。

(17)=(13) BT17：on parle français quand même… putain je me suis niq- je me suis niqué au foot hier je me suis je me suis fait mal

(ESLO2_ENT_1017_C)

（フランス語も話すし…くそっ、やってしまった、昨日サッカーでやってしまったよ、痛めてしまったよ）

(18) FH449PER：pourquoi c'est pour appeler Pascal, il était pas au courant Pascal il venait travailler mercredi

FH449MER：j'ai jeté son numéro de portable

FH449PER：ah putain ben je peux pas l'appeler

FH449：bah si tu appelles Carole

(ESLO2_REPAS_1266_C)

（どうしてか、パスカルに電話するたけだよ、彼は知らなかったんだよ、水曜に仕事にきたよ）

（彼の電話番号捨てたよ）

（まじで！じゃ電話できないじゃない）

（じゃ、キャロルに電話したら）

(19) NR390AMIE：putain j'ai troué mes gants quoi (ESLO2_24H_1249_C)

（やばっ、手袋に穴をあけちゃったよ）

(20) RF126SOE：putain j'arrive pas à remettre le bouchon

(ESLO2_REPAS_1271_C)

（ちくしょう、コルクが入らない）

(17)-(20) において、話し手は自分にとって困惑する事態に直面している。(17) では、急に痛みに襲われたという事態、(18) では、電話番号を捨てられてしまい、電話ができないという事態、(19) では、寒い日に手袋に穴をあけてしまったという事態、(20) では、ワインコルクをボトルに戻せないという事態、がそれぞれの用例において話し手にとって困惑する事態である。

話し手は身の回りで起きている事態に対して反応を見せることで直接的にその事態と関わり、事態の「当事者」となる。当事者となった話し手は「直面している事態」を確認し、その事態が自身にとって「望ましい事態であるか、または望ましくない事態のどちらかであること」を瞬時に判断し、反応を見せる。話し手の望む事態が起きた際には、putain と発話されることはないが、反対に、話し手にとって望ましくない事態が起きてしまい、「実際の事態」と「話し手が望む事態」が対立する状況では、putain と発話されるのである。話し手は、自身の理想と異なる「すでに実現してしまった事態」を認識し、それを受け入れなければならないという状況に直面してはじめて、putain と発話するのである。つまり、話し手は「すでに実現してしまった事態」を受け入れなければならないという現実に直面して、putain と発話するのである。

(18) を例に考察する。(18) では、友人パスカルに電話できることが話し手にとって望ましい状態である。しかし、話し手は電話番号を捨てられてしまったため、電話ができないという事態に直面している。実際に起きている事態は「電話ができない」という事態であり、これは話し手が望む「電話ができる事態」と食い違い、話し手は「電話ができない」という動かぬ事実を前に解決策を失い、putain と発話したのだと考えられる。続けて発話されている je peux pas l'appeler（彼女に電話できない）という発話が、話し手にとって困惑する事態であることを裏付けており、結果的には putain という発話から話し手の怒りや嘆きなどの心情を読み取ることができる。

他の用例においても同様に解釈することができる。(17) では、痛み、という事態が実際の事態であり、「痛みがない」と「痛みが生じた」という 2 つの事態の対立であ

る。話し手は、「痛み」という現実に気づいたことで putain の発話につながっている。同様に、(19) では、話し手は自身で手袋に穴をあけてしまい、「手袋に穴がない」と「手袋に穴をあけた」の対立であり、(20) では、「コルクが入る」と「コルクが入らない」の対立である。このように、話し手は 2 つの事態の食い違いによって、自分が置かれている状況を把握し、実際に起きている出来事を否定することができず、話し手にとって困惑する事態が起こったと認識された際に putain が発話されると考えられる。

間投詞的に用いられている putain は、「あ！」や「お！」のような間投詞とは異なる。この点に関して、Riegel, Pellat et Rioul（2015）は間投詞について以下のように述べている。

> « Les interjections émotives sont des formes simples représentant des cris codifiés, qui sont souvent, à l'origine, des onomatopées : ah !, bah !, bof !, ha !, hé… » (Riegel, Pellat et Rioul 2015)
>
> （感情を表す間投詞はシンプルな形であり、「あ！」、「えっと！」、「まあ！」、「は！」、「え！」のようなオノマトペに由来するコード化された叫びである）

つまり、事態に対する単なる発見や気づきであれば、ah !（あ！）と反応することも可能であるが、「あ！」はその事態に気づいたということのみを示し、putain を用いて反応した際にもたらされる話し手の心情を表現しきれない。例えば (19) において、話し手が直面している事態は「手袋に穴をあけてしまった」という事態である。手袋の穴に気づいた瞬間、話し手は自身が望む「手袋に穴があいていない事態」と実際に起こっている「手袋に穴をあけてしまった事態」の不一致に気がつき、「穴が空いてしまった」という動かぬ事態を前に putain と発話している。したがって、(19') のように、putain を ah に置き換えてみると、ah は事態に対する単なる気づきを示す

ため、putain の発話がもたらす話し手の苛立ちや残念といった心情が表れにくい。

(19') NR390AMIE：ah j'ai troué mes gants quoi

（あっ、手袋に穴をあけちゃったよ）

このように、話し手に関わる putain において、話し手は「実際に起きている事態」と「話し手が望む事態」の間に食い違いが生じ、実際に起きている事態が話し手にとって困惑事態である時に putain の発話へとつながる。以下では、「事態に関わる putain」を考察する。

5.4.5.2　事態に関わる putain

「話し手に関わる putain」において、話し手は何らかの反応を見せることでその事態と関わりを持つと述べた。「事態に関わる putain」では、話し手は同様に事態に対して反応を見せるが、その事態は話し手自身になんらかの被害をもたらす困惑事態ではなく、話し手にとって「予想外の事態」である。

(21) RN166：ah le petit lapin putain il a des grandes oreilles hein il est moche ah il est moche (ESLO2_REPAS_1260_C)

（あっ子うさぎ！わぁお！めちゃでかい耳だね！でしょ！ブサイクだね、あーブサイクだわ）

(22) RN166：moi c'est les premiers que je connais qui ont jamais vu un seul James Bond quoi

BV647：et quand j'y pense c'est pas en même pas un bout

MQ293：ah non moi non plus hein

RN166：sérieux ? putain j'ai toute la collection je vais devoir vous la prêter

(ESLO2_REPAS_1260_C)

（私、ジェームズ・ボンドを 1 つも見たことがない人は初めて見たよ）

（考えてみると、違う、全然見たことないね）

（私もだよ）

（本当に？まじで私全シリーズ持っているよ、君たちに貸すべきだね）

(23) RF126SOE：mais Alexandra elle est là ?

RF126：ouais

RF126SOE：elle revient encore ce week-end ?

RF126：ouais

RF126SOE：putain elle est courageuse (ESLO2_REPAS_1271_C)

（あれ、アレクサンドラいるの？）

（うん）

（彼女、今週末にまた戻ってくるの？）

（うん）

（あら、がんばる子だね）

(24) WT075 ：bah tu te souviens pas quand on est allé manger le midi

WX414：je sais pas j'étais j'étais j-

WT075：le midi euh les racailles qu'il y avait sur euh

WX414：ah je me souviens pas

WT075：putain mais tu as pas de mémoire quoi

WX414：non (ESLO2_ENTJEUN_1233_C)

（覚えてる？お昼ご飯食べに行ったときに）

（わからないな、俺、俺）

（昼間、不良が何人かいたじゃない上に）

（あ、覚えてない）

（なんだよ、物覚え悪いな）

（そうだね）

(21)-(24) では、話し手は予想外の事態や突発的に起きた事態に直面している。(21) では、テレビに映ったうさぎの耳が異様に大きいという事態、(22) では、友人らがジェームズ・ボンドの映画を見たことがないという事態、(23) では、週末に Alexandra が再び家に戻るという事態、(24) では、WX414 が「不良が何人かいた」ことを覚えていないという事態を受け反応を見せており、いずれも話し手にとっては予想外の事態である。これらの事態は、話し手に直接被害を及ぼすものではないという点から、「事態に関わる putain」では、話し手は間接的に事態と関わりを持ち、自身が持つ常識や信念を基に直面している事態の性質を判断していると考えることができる。

例えば、(21) では、テレビに映ったうさぎの耳が大きいという事態であり、話し手になんらかの被害を及ぼす事態ではない。この用例において、話し手は、自分の経験に基づくうさぎの定義やイメージを持っていると考えることができる。そのため、話し手は、耳が大きいうさぎを見た瞬間、自分が持つうさぎの定義やイメージと比較し、「実際に見ているうさぎの耳」と「自身がイメージするうさぎの耳」が異なることに気がつく。そして、話し手は実際に見せられているうさぎの耳の大きさを現実として受け止めなければいけない。そのため、いきなり突き付けられた現実は予測できなかった事態となり、結果的には驚きや信じられないといった心情を伴う発話となる。同様に、(22) では、「友達がジェームズ・ボンドの映画を見たことがない」と「当然見たことがある」の対立、(23) では、「戻ってくる」と「戻ってくるとは思わなかった」の対立、(24) では、「覚えている」と「覚えていなかった」の対立であり、実際の事

態と話し手の持つ常識やイメージとの間に食い違いが生じている。話し手は、この「食い違い」を踏まえて、実際の事態を認識し、自分が予測できなかった事態を前に、putain としか言いようがなく、結果的には驚きや信じられないといった心情を伴う発話となる。

このように、「事態に関わる putain」は、「話し手の理想」と「実際の事態」が対立し、実際の事態を受け入れざるを得ないという点においては、「話し手に関わる putain」と共通している。両者の違いは、事態が話し手にとって困惑事態であるか、また話し手になんらかの被害をもたらしてかどうか、という点にある。

ここまで、putain の 2 つのタイプを見てきた。以下では、putain のもう 1 つのタイプである、「評価を表す putain」を見ていく。

5.4.5.3　評価に関わる putain

Lagorgette & Larrivée（2004）によれば、juron タイプの間投詞にはポジティブ用法も見られる。例えば、« Putain / Bon Dieu que c'est beau, mais ? Merde que c'est beau » (Lagorgette & Larrivée 2004：6) （ちくしょう、なんてきれいなんだ！え？くそったれ！なんて美しい）のような用例が見られる。

「評価に関わる putain」は、基本的には、以上で挙げた 2 つのパターンと同様、「話し手のイメージする事態」と「実際の事態」が食い違い、話し手が実際の事態を認識することで putain が発話される。以下では、putain の発話が事態に対する良し悪しの評価につながる用例を見ていく。ここからは、Frantext と ESLO2 コーパスに加えて、フランスのテレビ番組である Cauchemar en cuisine[68]（厨房の悪夢）から転写したやりとりもコーパスも使用する。

[68] 注 42 の 3 つ目を参照。

(25) ML666：putain c'est bon ça la vache (ESLO2_REPAS_1259_C)

（これは！おいしい！見事だ！）

(26) Philippe：ohh…putain ! (Cauchemar en cuisine - La Ch'ti Alsace)

（（レストランで出されたデザートを見て）なんてこった！）

(27) Philippe：ah putain ! Non… ! Non non non non non ! C'est pas vrai ça, un pignon crevé ! (Cauchemar en cuisine - L'Ovalie)

（なんてこった！信じられない、鳩の死骸がある！）

(25) では、おいしさが問題となっており、putain に後続する c'est bon ça la vache（おいしい！見事だ！）の発話から良い評価であることがわかる。話し手は、料理を口にする前に、例えば、「少し」おいしい、「すごく」おいしいのように、おいしさの程度を「このぐらいのおいしさだろうと想定する」ことができる。しかし、話し手が実際に食べてみると、その料理は自分の想定をはるかに超えて「評価不可能なほどのおいしさ」であったりする。この用例において、「話し手の想定したおいしさ」と「実際のおいしさ」が食い違い、話し手は、あまりのおいしさに表現する言葉が見つからず、putain の発話へとつながっていると考えられる。putain による評価は、プラス評価のみならず、マイナス評価の際にも用いることができる。

(26) と (27) では、一流シェフである Philippe が経営困難に陥っているレストランを訪れ、試食をしたり、経営を立て直そうとレストランの厨房や食料保管室を視察している際に見られる発話である。(26) では、vacherin というデザートを注文し、デザートが運ばれてきた際に見られる発話であり、デザートのひどさに対する悪い評価である。話し手は、自分が思い描く vacherin というデザートのイメージを持っているが、出されたデザートは、ただ生クリームに覆われた見た目が良くないものだっ

た。デザートを目の前に、言葉が見つからず、putain と発話していると考えられる。同様に（27）では、レストランの食料保管室を視察する場面である。食料保管室は全体的に暗く散らかっており、(27) の putain は、話し手が床に放置された鳩の死骸を見つけた時の発話である。2 つの用例は、「ひどさ」や「汚さ」を問題にしており、悪い評価であるといえる。話し手（Philippe）は自身が料理人であり、自分が持つ常識としてレストランのイメージは清潔なものであり、整理整頓がしっかりとされているべきであると考えている。しかし、直面している事態は、見た目が悪くおいしくない料理、または食料保管室にいるはずがない動物の死骸など、レストランにおいては起こり得ないひどい状態である。話し手は、レストランでは起こり得ないひどい状態を前に言葉を失い、自身が持つ理想との落差を受け入れることができず、putain と発話するのである。

このように、評価に関わる putain においても 2 つの事態の食い違いに気づくことで putain が発話されるが、結果的には、話し手が物事に対する評価、または驚きや苛立ちの心情を表す発話となる。

putain の間投詞的用法の発話プロセスを図 1 に示すことができる。

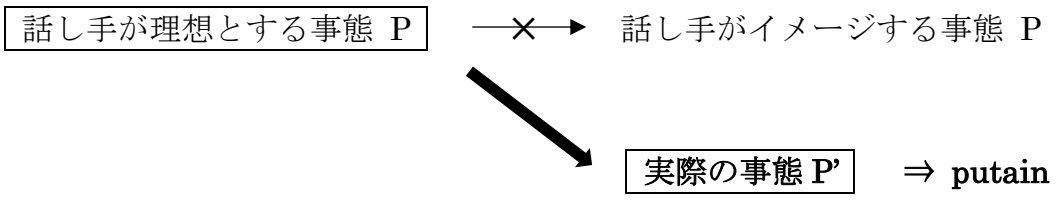


図 1　putain の間投詞的用法の発話プロセス

話し手がイメージする事態を P、実際の事態を P'、とする。話し手は、自身がイメージする事態において、いくつかのイメージの可能性を見い出すことができる（望む/望まない事態、良い/悪い評価など）。しかし、putain が発話される状況とは、話し手

が「実際の事態」を認識した時には、もう自分のイメージのどれとも結び付けることができない状況である。つまり、P' が P に変更されることはなく、話し手のイメージの範囲を超えた「putain としか言いようがない事態」に直面しており、実際の事態は「putain な事態」として認識されると考えられる。結果的に、話し手の喜び、悲しみ、憤慨、残念、焦りなどの心情を伴う発話となる。

5.5 putain と merde の比較

ここまで考察したように、間投詞的に用いられる putain の発話パターンを「話し手に関わる用法」と「事態に関わる用法」の 2 つに分けることができた。また、第 4 章で考察したように、merde を間投詞的に用いる際の特徴としては、「実現すべき事態が実現しなかった場合」と「回避すべき事態を回避できなかった場合」の 2 つの発話パターンが見られた[69]。両語彙は、同様に juron（ののしり）であり、間投詞的に用いることができる。それぞれの語彙が持つ意味的特徴をより明確にするため、putain と merde の置き換えテストを行った[70]。「置き換え可能」、また「置き換え不可能」と回答した参加者の割合が高い用例を用いて、両語彙の共通点と相違点について考察す

---

[69] (a) Merde j'ai oublié de boire mon thé (ESLO2_ENT_1261_C)
（いけない、お茶を飲むのを忘れていた）
(b) Oh merde je l'ai trop taillé du coup y a un petit trou là (ESLO2_REPAS_1271_C)
（(パンにバターをぬりながら）ヤバイ、伸ばしすぎて穴を開けちゃったよ）
(a) では、飲まなければいけなかったが、実際は飲んでいない。つまり、実現すべき事態（お茶を飲む）が実現していない。(b) では、パンに穴をあけないことが普通であるが、実際にはあけてしまった。つまり、回避すべき事態（パンに穴をあける）を回避できなかった。（楊鶴 2018）

[70] フランス語母語話者 18 名に対して、putain と merde の用例をそれぞれ 20 例提示し、同時に各用例に対応する音声データを聞かせる。putain を merde（または merde を putain）に置き換えられる場合は oui（はい）、置き換えられない場合は non（いいえ）を回答するように伝えた。

る。

5.5.1　putain と merde の共通点

まず、putain から merde への置き換えやすい用例を見ていく。5.4.2 の「話し手に関わる putain」で考察したように、ある事態が話し手自身になんらかの被害をもたらし、話し手にとって困惑する事態である際に putain の発話が見られた。このような putain は、同様に困惑する事態に用いることができる merde と置き換えることができる[71]。

(28)=(18) FH449PER：ah <u>putain</u> ben je peux pas l'appeler
= ah <u>merde</u> ben je peux pas l'appeler
（あっ、なんてこった、じゃ電話できないじゃない）
=（あっ、くそっ、じゃ電話できないじゃない）

(29)=(19) NR390AMIE：<u>putain</u> j'ai troué mes gants quoi
= <u>merde</u> j'ai troué mes gants quoi
（やばっ、手袋に穴をあけちゃったよ）
=（くそっ、手袋に穴をあけちゃったよ）

(28) では、電話ができなくなったという事態、(29) では、手袋に穴をあけてしまったという事態、が話し手にとって困惑する事態である。前者は、merde の考察で見られた「実現すべき事態が実現しなかった場合」であり、後者は、「回避すべき事態を

[71] 注 70 で述べた方法で、フランス語母語話者 18 名に対して、putain から merde への置き換えテストを行った。(28)=(18) では 18 人中 13 人、(29)=(19) では 18 人中 12 人が putain を merde に置き換え可能と回答した。

回避できなかった場合」に相当する。そのため、merde との置き換えが可能であると考えられる。

次に、merde から putain への置き換えが可能な用例を見ていく[72]。以下では、CLAPI というコーパスも使用する[73]。

(30) ELEV_CM2：merde j'ai oublié de copier ça　　(ESLO2_ECOLE_1285_C)

= putain j'ai oublié de copier ça

（やばい、これを書き写すの忘れた）

=（ちくしょう、これを書き写すの忘れた）

(31) MIC：donc là on est d'accord que ça touche pas ouais ((pose une barre))

c'est comme ça

CLA：c'est ceux qui sont en en pas qui sont en pente hein qui vont là

MIC：ben ouais ((essaie de poser la barre différemment))

---

[72] 注 70 で述べた方法で、フランス語母語話者 18 名に対して、merde から putain への置き換えテストを行った。(30) では 18 人中 14 人、(31) では 18 人中 13 人が merde を putain に置き換え可能と回答した。

[73] CLAPI (Corpus de Langue Parlée en Interaction)（相互行為における話し言葉コーパス）は、複数の種類のデータからなる、さまざまな場面（職業、商業、教育、医療など）において実際の状況の記録した話し言葉コーパスである。Université Lumière Lyon 2（リヨン第 2 大学：リュミエール）を拠点とし、CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique)（フランス国立科学研究センター）に属する、Laboratoire ICAR (Interactions, Corpus, Apprentissages, Représentations)（「相互行為、コーパス、学習、表現」研究所）によって作成されたものである。引用の際は、(CLAPI - XXXX) と記載する。XXXX 部分はコーパスの名称である。また、このコーパスでは「ポーズ」や「オーバーラップ」を転写するための転写記号が使われているが、本論文では、それらの記号を取り除いた上でコーパスを提示している。(( )) 内は場面の描写を記述したものである。

CLA：d'accord ((MIC enfonce la barre)) oui oui t'as raison c'est ça ça a l'air bien ((regardent la notice))

{…}

MIC：ah merde attends y en a qui sont plats et qui sont en biais

= ah putain attends y en a qui sont plats et qui sont en biais

CLA：ouais ceux-ci sont regarde ils sont larges là ((MIC retire une barre))

(CLAPI - Montage meuble)

（それで、ここはくっつかないのでいいよね、((棒を置く)) こんな感じ？）

（そこは、斜めになっているものをそこに置くんだよ）

（うん、そうよ ((棒を違う方向に置いてみる)))

（そうか。 ((MIC が棒を差し込む)) うんうん、あってるよ、いい感じだと思う ((説明書を見ながら)))

{一部省略}

（あっやばい、待って、平らなものと、斜めになっているものがある）

=（あっいけない、待って、平らなものと、斜めになっているものがある）

（そう、これらは、見て、広くなっているものなの ((MIC が棒を外す)))

(30) では、書き写すことを忘れてしまった事態に直面しており、言い換えれば、「実現すべき事態が実現しなかった場合」である。(31) では、家具の組み立ての際、パーツを間違えて差し込んでしまった事態に直面している。この用例では、「回避すべき事態を回避できなかった場合」であると考えられる。両用例において、いずれも、話し手にとって困惑する事態（忘れた、間違えた）であり[74]、putain と置き換えること

[74] (30) は小学生の発話である。書き写さなかったことで宿題ができないとか、連絡事項が伝わらないといった事態が起こる可能性があるため、話し手にとって困惑する事態である、のちに被害を及ぼすことがある。(31) では、家具の組み立ての際に、パーツを置く順番を間違

ができたと考えられる。

このように考えれば、なぜ、putain と merde がある状況において、同時に用いることができるのか説明できる。

(32) Philippe：regarde ça, regarde ça, putain mais merde, regarde mais c'est honteux quoi ! honteux regarde !

(Cauchemar en cuisine - Crêperie d'Antan[75])

（これ見て、これ見て、なんてこった、くそったれ、見てみろ、けしからん！恥を知れ、見てみろ！）

(32) において、Philippe はレストランで出されたクレープが黒く汚いことに気がつく。Philippe は続けてレストランの厨房の視察を行った。厨房の目にしたクレープ焼き機は、ひどく汚れがこびりつき、しばらく掃除されていなかった。(30) は、Philippe がヘラでクレープのプレートを擦り、汚いことをシェフに伝えながら、シェフを批判している場面に見られる発話である。

この用例において、話し手は「調理器具が汚いという事態」と「本来調理句具は清潔であるべきという事態」に食い違いが生じている。話し手は、「ひどく不衛生なプレートでクレープをつくっている」という現実を前にして、putain と発話している。また、掃除すべき調理器具が掃除されていなかったという点において、「実現すべき事態が実現しなかった」という merde の発話状況にも対応している。そのため、putain と merde の両方を用いることができると考えられる。

この用例のもう 1 つの特徴としては、苛立ち場面に見られる発話である点が挙げら

えてしまい、組み立てが完成できないという点において、話し手にとって困惑する事態であり、被害を及ぼすといえる。

[75] のちにレストランの名前を Le Do-Ré-Mie に改名している。

れる。（32）では、強い口調で発話されており、シェフに対する批判が感じられる発話である。この点に関して、Rouayrenc（1998：102）が記述しているように、putain を « apostrophe »（侮辱的で乱暴な呼びかけ）として捉えることができる。これは、4.3.2.4「苛立ち場面に見られる merde」と同様の機能であるといえる。しかし、putain はあくまでも事態に対する反応であり、聞き手を putain（売春婦）として取り上げているわけではない。この場合の putain は、2 つの事態の食い違いに気がついたことを表し、苛立ちを伴う強いイントネーションで発話されることで、結果的に怒りの感情が現れるのである。その意味では、« apostrophe » であると捉えることができる。

これまで、putain と merde の置き換えが可能とされた用例を見てきた。この考察から、「話し手に関わる putain」と「merde の 2 つの発話パターン」は置き換えがしやすく、話し手にとって困惑する状況が起きているという点において共通しているといえる。しかし、このように結論付けてしまうと、merde が持つ 2 つの発話パターンに見られるすべての用例が「話し手に関わる putain」に相当するという解釈になってしまう恐れがある。両語彙が持つ意味特徴をより明確なものにするためには、merde のみを用いることができる用例の考察が必要である。次に、両語彙の相違点について見ていく。

5.5.2　putain と merde の相違点

まず、putain を merde に置き換えにくい用例を見ていく[76]。putain の考察で挙げた「事態に関わる putain」の発話状況は、話し手にとって困惑する事態ではないため、困惑事態に用いられる merde に置き換えることはできない。merde との置き換えを可能にするには、事態を自分にとって困惑するものとして話し手が認識する必要があ

[76] 注 70 で述べた方法で、フランス語母語話者 18 名に対して、putain と merde の置き換えテストを行った。(31)=(21) と (32)=(23) は、両用例とも 18 人中 17 人が、putain を merde に置き換え不可能と回答した。

る。言い換えれば、merde に置き換えてしまうと、文全体の意味が変化し、事態は予想外の事態から、話し手が困惑する事態となってしまうのである。

(33)=(21) RN166：ah le petit lapin putain il a des grandes oreilles

? ah le petit lapin merde il a des grandes oreilles

（あっうさぎ、なんと、耳でかい）

?（あっうさぎ、やばい、耳でかい）

(34)=(23) RF126SOE：elle revient encore ce week-end ?

RF126：ouais

RF126SOE：putain elle est courageuse

? merde elle est courageuse

（彼女、今週末にまた戻ってくるの？）

（うん）

(すごい、がんばる子だね)

?（まじで、がんばる子だね）

例えば、(33) の putain を merde に置き換えると、話し手は「一般的に見られる耳の大きさを持つうさぎを期待していた」という前提が生じてしまう。耳が大きいうさぎだけは避けたかったけれど、結果的には避けられなかった。そのため、耳が大きいという事態は話し手が困惑するものとして解釈されることになる。(34) も同様に、merde に置き換えると、彼女の頑張りを評価する発話から、彼女がそこまで頑張れる子だと思わなかった、彼女に週末帰られてしまうと困るといったニュアンスが出てしまう。以上の考察から、「事態に関わる putain」は、発話の意味解釈が変化してしまうゆえに、merde との置き換えが不可能であるといえる。

続いて、merde から putain への置き換えが難しいと判断された（35）と（36）の用例を観察する[77]。

(35) GG675MER：c'est des voitures électriques ?

GG675PER：hm

GG675：c'est combien le tarif ?

GG675PER：dix euros une heure

GG675：ouais

GG675MER：une heure ça passe vite hein

GG675：ouais et l'essence tu c'est toi qui payes ?

GG675PER：non c'est électrique

GG675MER：c'est électrique

GG675：ah merde (ESLO2_REPAS_1267_C)

? oh putain

（電気自動車？）

（うん）

（料金はいくら？）

（1 時間 10 ユーロ）

（そう）

（1 時間なんてすぐ過ぎるだからね）

（そうだね、で、ガソリンは自分で払うの？）

（違うよ、電気だよ）

[77] 注 70 で述べた方法で、フランス語母語話者 18 名に対して、merde と putain の置き換えテストを行った。（35）では 18 人中 16 人、（36）は、18 人中 15 人が、merde と putain に置き換え不可能と回答した。

（電気だよ）

（あっそうだった）

?（あっちくしょう）

(36) JEB：attends j’te file euh j’te mets une sucrette

((JEB revient vers la table et tend la tasse à SOP))

SOP：ouais deux même

JEB：ah merde trois

? ah putain trois

SOP：oh ça fait rien j'aime bien quand c'est bien sucré

(CLAPI - Réunion de travail entre publicitaires)

（待って、シュクレット（粒状の人工甘味料）を入れてあげる）

(((JEB はテーブルに戻ってきて、SOP にカップを差し出す)))

（うん、2 つでもいい）

（あっいけない、3 つ）

?（あっちくしょう、3 つ）

（お、大丈夫、すごい甘いの好きだから）

(35) は、レンタカーの借用に関するやりとりである。GG675 は、直前の会話からレンタカーが電気自動車であることを知っていたにもかかわらず、ガソリン代を支払うかどうかについて質問をしている。この質問に対して「電気（自動車）だよ」と指摘された GG675 は、的外れな質問をしてしまったと認識し merde と発話している。すでに述べたように、putain は予想外の出来事に対する驚きである。この場合 putain に置き換えると、まさか電気自動車だと思わなかったという、強い度合いの驚きを伴った発話となってしまう。(35) の merde は、言い間違えたという些細な出来事を指

摘された際の反応としては強すぎてしまうため、putain の使用は不適切となる。

(36) では、JEB がうっかりシュクレットを 1 粒多く SOP のコーヒーに入れてしまった際に見られた発話である。この場合、merde を putain に置き換えると、例えば、SOP のコーヒーにはシュクレットを 2 粒しか入れてはいけない、または、多く入れてしまうと SOP の健康に支障をきたす場合があるといった解釈となってしまう。(36) はそうした深刻な状況ではなく、話し手自身の単なる不注意に対する反応であるため、putain の使用は好まれない。

このように、putain に置き換えることが難しい merde は、「回避すべき事態」または「実現すべき事態」といった話し手の理念的前提を伴わず、話し手の損得にかかわらない状況において用いられる。すでに考察したように、putain と置き換えられる merde の 2 つのパターンは、期待を裏切られた、または、嫌な結果が話し手に跳ね返ってくる発話状況で用いられていた。それに対して、(35) と (36) は日常的に起こり得る些細な出来事（不注意による失敗など）に対する反応であるといえる。

5.6 まとめ

本章では、まず、putain の間投詞的用法について考察を行った。次に、第 4 章で行った merde の考察を踏まえて、putain と merde の置き換え可能性を検討し、それぞれの語彙が持つ意味的特徴について考察した。

putain は「売春婦」を意味する名詞であるが、現代フランス語の話し言葉においては売春婦の意で使用されることはなく少なく、ほとんどの場合、事態に対する反応を見せる間投詞として用いられる。本章では、間投詞的に用いられる putain を考察し、「話し手に関わる putain」と「事態に関わる putain」の 2 つの発話状況に分類した。「話し手に関わる putain」は、話し手が何らかの被害を受け困惑した状況にある際に発話されるものである。それに対して、「事態に関わる putain」は、話し手が予想外の事態に直面している場合に発話されるものである。

putain の発話は、話し手が直面している「実際の事態」と「話し手のイメージする事態」との食い違いによって、自分のイメージのどれとも結び付けることができない状況でなされる。つまり、話し手は、ある事態に直面して、それが「putain な事態」であると認識してはじめて、putain と発話するのである。

次に、putain と merde の置き換え可能性を調査した。その結果、「話し手に関わる putain」は「merde の 2 つの発話パターン」に対応しており、「事態に関わる putain」は、文のニュアンスが変化してしまうという点において、merde との置き換えが不可能であった。また、merde のみを用いることができる用例に関しては、話し手の不注意によって引き起こされた事態に対する反応を表しており、merde は日常的に起こる些細な出来事に対する感情を表す間投詞として使用されているのである。

これまで、merde と putain の間投詞的用法を考察した。両語彙は、罵倒表現のタイプに関して言えば、juron にあたる表現である。このように、両語彙が間投詞として用いられる際、名詞的意味（字義的意味）である「汚さ、下品さ」としての解釈は薄れ、話し手の心情を表す表現、「ちくしょう」、「ちぇっ」、「クソ」、「くそったれ」といった意味に変化するのである。

第 6 章

罵倒表現 « Espèce de N ! » の意味機能

6.1　はじめに

本章では、フランス語の罵倒表現である « Espèce de connard ! »（うすのろ！）などの形を取る、「« Espèce de N ! » タイプ」の罵倒表現を取り上げ、その意味機能について論じる。

« Espèce de N ! » は、「種」を意味する « espèce » に前置詞 de が後続し、N の部分には名詞や形容詞などの言葉が続く成句構造であり、基本的には、これらの 3 つの要素が組み合わさることで罵倒表現として成立する。« Espèce de N ! » タイプの罵倒表現は、聞き手に向かって「うすのろ！」と発話することで罵倒行為が成立するため、第 4 章と第 5 章で取り上げた、merde と putain とは異なり、事態に対する反応を示す間投詞ではなく、罵り対象を必要とする injure（罵倒）として捉えることができる。espèce は、基本的には、espèce humaine（人類）、espèce sauvage（野生種）のように分類学上の「種」を意味する。また、« une espèce de N » という形で用いられることで、une espèce de tour（一種の塔のようなもの）のように名詞（N）の表す対象の「分類」を表すことができる。このように、« espèce » という語彙自体は merde や putain のように「汚らしい」や「わいせつ」という意味を持たず、下品な言葉としても捉えられない。

本章では、« Espèce de N ! » の用例観察を通して、罵倒表現としての意味機能について考察する。また、種類を表す espèce という名詞が罵倒表現とどのように関係しているのかを明らかにする。

6.2　先行研究

6.2.1　Edouard（1967）における « Espèce de N ! » の考察

Edouard（1967：424）によると、espèce de に後続する名詞は、以下に示すように、(1) の鳥の名前、(2) の動物の名前、(3) の人体部位、(4) の耳障りな言葉の 4 種類が見られる。

(1) Espèce d'oie, de faisan, de serin …

(2) Espèce de moule, de babouin, de morue …

(3) Espèce de pied, de cul, de con …

(4) Espèce d'idiot, de minable, de pet-de-zouille …

(Edouard 1967：424)

（ガチョウ野郎、キジ野郎、カナリア野郎）

（ムール貝め、ヒヒめ、タラめ）

（足、ケツ野郎、女性器→おおバカ野郎）

（愚か者やな奴め、惨めな奴、田舎者）

« Espèce de N ! » の解釈において、Edouard（1967：424）によれば、« Espèce de N ! » の N はある種類やあるカテゴリー（例えば、« Espèce de connard ! » であれば、connard という種類）を示しており、人物に向かって発話されることで、聞き手を N というカテゴリーに属させるが、そのカテゴリー内での正当性は付与されず、異種（バリエーション）であるとし、以下のように述べている。

Quand on lance à quelqu'un：« Espèce de cornichon, Espèce de poire, Espèce de patate, Espèce de chose ou de machin… » cela équivaut à lui dire：« Tu n'es pas le Cornichon, la Poire, la Patate, la Chose ou le Machin par excellence, tu

n'en es qu'une variété ! » (Edouard 1967：424)

（誰かに「ピクルス野郎、梨野郎、じゃがいも野郎、なんとか野郎」と発話することは、その人に対して「君はとりわけピクルス、梨、じゃがいも、なんとかではなく、それらの異種でしかない！」と言うのに等しい）

Edouard（1967：424）はこのように述べ、« Espèce de N ! » タイプの罵倒表現を相手に向かって発話することで、容易に相手の自尊心を傷つけ、屈辱を与えることができるとしている。

Edouard（1967：424）の用例からわかるように、N の部分に用いられている言葉は、(1) - (3) では鳥や動物の名前、いわゆる普通名詞であり、(4) では罵り言葉である。(1) - (3) の普通名詞に注目してみると、例えば、oie（ガチョウ→愚か者）、morue（タラ→売春婦）、また引用に見られる cornichon（ピクルス→間抜け野郎）、patate（いも→とんま）は、普段の会話であれば、動物と野菜を意味し語彙自体は下品な意味を持たない。しかし、矢印でも示したように、例えば、« bête comme une oie »[78]（ガチョウのように間抜け）、« Ta gueule, eh patate ! »[79]（黙れ、いも！→黙れ！間抜け！）にように、これらの語彙を人物に対して比喩的に用いる場合は、発話場面や言語形式によって、相手に対する罵りや卑劣的な意味を持って現れる。

では、« Espèce de patate ! » と « Patate ! » 、または« Espèce d'idiot ! » と « Idiot ! » と発話するとき、聞き手にもたらす意味機能がどのように異なるのか。この問いについては、Edouard（1967：424）では考察されていない。この違いを明らかにするためには、« Espèce de N ! » の意味機能を明らかにしなければならない。

ところで、Edouard（1967：348）は、« Espèce de N ! » の記述において、複数形である « Bande de N ! » （N ども！）が存在するとし、以下のように述べている。

---

[78] 『ロワイヤル仏和中辞典』(2005)

[79] *Mon taxi et moi* (1951)

« Bande » s'emploie pour étendre à un groupe une injure qui, appliqué à un seul individu, est habituellement précédée d'espèce. Exemple：Espèce de con – Bande de con. (Edouard 1967：348)

（bande はグループに用いられ、個人のみに用いられる際は、一般的には espèce が前置する。例えば、Espèce de con（バカ野郎め）- Bande de con（バカどもめ！））

この点に関して、Rouayrenc（1998）では « bande de… »（～集団）と « tas de… »（たくさんの～）の意味を比較しながら、« espèce de » について論じている。

6.2.2 Rouayrenc（1998）における « Espèce de N ! » の考察

Rouayrenc（1998：90）によれば、bande と tas は罵り言葉と結びつくことができ、bande de cons（バカな集団：バカども）、bande d'enfoirés（間抜け集団：間抜けども）、tas de fumiers（たくさんの堆肥：クソ野郎ども）のような用例が見られる。しかし、« bande de… » と « tas de… » には、必ずしも同じ言葉が後続できるわけではない。例えば、tas de vaches（牛の群れ）と bande de vaches（牛の群れ）では、問題なく同じ言葉（vache）を適用させることができるが、salaud（げす野郎）や con（間抜け）のような罵り表現が後続する場合は « bande de… » がより適切である。

さらに、Rouayrenc（1998：90）は、espèce de saligaud（不潔な奴）、espèce de con（間抜け野郎）は bande de saligauds（不潔な奴ども）、bande de cons（間抜け野郎ども）に対応しているが、espèce de fumier（くそ野郎）は tas de fumiers（くそ野郎ども）に対応させる方がより自然な表現であるとしている[80]。その理由として、bande も tas も量を表す限定詞（les déterminants quantifieurs）であることに関係

[80] この点に関しては Edouard（1967：450）にも同様の記述がある。

しており、Rouayrenc（1998：90）によれば、bande は bande d'enfants（子供たち）、または bande de brochets（カワカマスたち）のように、人物や動物に適しており、tas は un tas de cailloux（たくさんの石ころ）、un tas de fumiers（たくさんの堆肥）のように、具体的な無生物に適しているからである。したがって、以上の指摘からわかるように、« espèce de… » は « bande de… » と同様に、人物や動物が後続する表現であるといえる。

Rouayrenc（1998：99）では、« Espèce de N ! » を l'apostrophe（乱暴な言葉）として取り上げているが、名詞 « espèce » に関して以下のように述べている。

> Certains termes, qui en eux-mêmes ne sont nullement des gros mots, fonctionnent comme introducteurs de l'injure ; c'est le cas de face ou espèce.
>
> (Rouayrenc 1998：99)
>
> （いくつかの言葉は、言葉そのものは下品な言葉ではなく、罵りを導入するマーカーのように機能する：face や espèce がこれにあたる）

また、Rouayrenc（1998：99）によれば、罵りのマーカーとして機能する語は、face[81]

[81] Rouayrenc（1998）によると、face は前置詞 de を伴い « face de » の形で用いられる。1つの解釈では、禁止表現や罵り表現とみなされている：face de cul（ケツ顔）、face de con（マヌケ顔）、face de nœud（バカ顔：nœud は隠語的にはペニスを意味する）のように用いることができ、「ばか野郎」の意で使用することができる。また、face de pet (trou du cul) de mammouth（マンモスの屁（ケツの穴）顔）ように補語が後続することができる。もう一つの解釈では、« face de » をタブー表現としてではなく、présentatif（提示詞）として見なし、罵倒語が後続しているという考え方である：face de crabe !（カニ顔！：カニは俗語的にはばかな奴、頑固者という意味を持つ）。このように、« face de » は動物名詞が後続することができ（face de lard, face de chacal ジャッカル野郎→他人の利益をせしめようとする卑劣で残忍な男）、他にも後続する言葉が見られる。さらに、« face » は de なしに形容詞も後続する

（顔）、gueule[82]（ツラ）、tête[83]（頭）、tronche[84]（面）などがあるが、espèce はそれらと異なり、「前置詞 de」のみが後続し « espèce de … » の形で用いられる。

Rouayrenc（1998：99-100）は、« espèce de » に後続する語彙（N）を主に 4 種類に分類しており、以下に示す。

1）比喩的意味を持つ動物名詞

Espèce de dinde（七面鳥野郎：愚かな女、バカな女）

Espèce de chameau（ラクダ野郎：売春婦）

2）比喩的に用いることで罵倒の意を持つ名詞

Espèce de cornichon（ピクルス野郎：間抜け）

Espèce de patate（じゃがいも野郎：とんま）

3）タブー言葉や罵り表現

Espèce de couillon（睾丸野郎：間抜け）

Espèce de jean-foutre（ろくでなし）

4）名詞のように用いられる形容詞、または分詞

Espèce d'idiot（愚か者）

Espèce d'enculé（バカ野郎）　(Rouayrenc 1998：99-100 参照)

ことができる（face moche 醜い顔、face bouffie ふくれた顔）。(Rouayrenc 1998：99 参照)

[82] Gueule は face の同義語であり、gueule de con（ばか顔）、gueule de cul（ケツ顔）のように用いることができる。(Rouayrenc 1998：99 参照)

[83] Tête は face と同じように機能し、tête d'abruti（愚か顔）、tête de lard（醜い顔）のように用いることができる。(Rouayrenc 1998：99 参照)

[84] Tronche は隠語的表現であり、同じく「顔・つら」を意味する。Face と同様に tronche de macaque（マカク顔：醜男や醜女）、tronche de bite（ペニス顔）、tronche de cake（ペニス顔:cake は nœud と同じ意味で用いられる）のように用いることができる。(Rouayrenc 1998：99 参照)

Rouayrenc（1998：100）は、« espèce de N » を他の表現[85]と同じように「提示詞[86]」として見なしており、これらの表現には、同様の言葉が後続できる場合があり、同様の意味で用いることができるとしている。例えば、espèce de con（バカ野郎め）、tête de con（間抜け顔）、tronche de con（間抜け顔）のように、いずれも con（バカ）という言葉の後続が見られる。

以上の指摘を踏まえて、これらの提示詞を観察してみると、« face de N », « gueule de N », « tête de N », « tronche de N » のような表現では、いずれも「～顔・～面」を意味し、N の部分に用いられる名詞は顔を修飾できる語彙に限られる。また、「バカ顔」や「間抜け面」は人物の容姿が醜いこと、相手を侮辱する目的で発話されるため、人に向かって発話する罵倒表現であるといえる。しかし、« espèce de N » の場合において、espèce は「種類」を表す言葉であり、espèce が持つ「種」という基本的な意味で解釈することはできない。espèce de は N の部分に名詞や形容詞を導入する場合は、N の持つ「俗語的意味」を引き出す役割があり、N の部分に罵り言葉（connard など）を導入する場合は罵りの程度を強める働きがある。Rouayrenc（1998）が述べているように、« Espèce de N ! » は全体を一つの発話単位として捉えるほうが適確である。Rouayrenc（1998）は、実際の用例において、espèce de N の N が指し示す意味内容によっては、espèce de はあらゆる言葉を後続させることができると述べており、これは、« tête de N » など、他の成句には見られない現象であると述べている。

---

[85] 他の表現とは、すでに取り上げた « face de… », « gueule de… », « tête de… », « tronche de… » である。Rouayrenc（1998）はまた、« espèce de N ! » の同義語には « bougre de N ! »（～の奴）が見られると記述している。

[86] 提示語とは独立的ではない記号素を独立的記号素に接近させる役割を持つ記号素を、提示詞と呼ぶ。フランス語では、c'est、il y a、voici、voilà などが提示詞である。（『フランス語学小事典』（2011：139）

« espèce de N » の成句に見られるもう 1 つの特徴としては、(5) のように N に修飾語が伴う場合と、または (6) のように「de を伴ういくつかの N」を組み合わせて後続させること場合が存在する。

(5) Espèce de sale grognasse (Rouayrenc 1998：100)

（汚れた下級の娼婦め）

(6) Espèce de tête de con habillé en Dimanche (ibid.)

（晴れ着を着て間抜けな顔をしている人）

これまで Rouayrenc（1998）の指摘について確認してきた。Rouayrenc（1998）は、« espèce de N » を形式的に考察し、N の部分に見られる語彙を 4 種類に分類して記述した。また、Rouayrenc（1998）は、« face de… », « gueule de… », « tête de… », « tronche de… » のような « espèce de N » と同じ形を取る表現と比較しながら « espèce de N » の特徴を記述した。しかし、Rouayrenc（1998）では « espèce de N » が実際にどのような発話場面に使用され、発話することで相手にどのような影響を与えるのかは考察されていない。« espèce de N » 全体を 1 つの単位として捉える方が適切であるという点に関しては、Anscombre（2009）も同様の考えを示している。以下で見ていく。

6.2.3 Anscombre（2009）における « Espèce de N ! » の考察

Anscombre（2009）は、罵倒表現と感嘆表現の関係性に関する研究において、« Espèce de N ! » を les exclamatifs（感嘆表現）として捉えた上で、« Espèce de N ! » を感嘆表現の下位カテゴリーである les interjections（間投詞）に位置付けている。

Anscombre（2009：16）は、間投詞を « les interjections sont des exclamatives synchroniquement indérivables »（間投詞は共時的に分解不可能な感嘆詞である）と

定義している。ここで言う「分解不可能」は、意味を成す語彙や成句の最小単位を表しており、それ以上分解してしまうと意味解釈ができなくなってしまうことを意味する。また、「派生タイプの表現」[87] は間投詞と見なすことができないとされている[88]。

Quel espèce d'idiot tu fais ! et *Espèce d'idiot !* sont deux tournure exclamatives, mais seule la seconde est une interjection. (Anscombre 2009：16)

（「なんてバカなことをするんだ君は！」と「バカたれ！」は両者とも感嘆表現であるが、後者のみが間投詞である）

以上に示したように、Anscombre（2009）は « Espèce d'idiot ! »、つまり、« Espèce de N ! » を間投詞として捉えている。Anscombre（2009：17）はさらに、間投詞の下位カテゴリーとして、以下に示す 4 つのカテゴリーを提示している。

1）Les onomatopées：Vlan ! Crac ! Patatras !

2）Les interjections exhortatives：Chut ! Stop ! Gare! Du balai !

3）Les interjections psychologiques：Hélas ! Super ! Berk! Trop cool !

4）Les insultes：Fils de pute ! Enfoiré ! Salaud ! Bâtard ! Pédé !

(Anscombre 2009：17)

（擬音語：殴打音「ばたん」、割れる音「がちゃん」、墜落音「どすん」）

（勧告間投詞：静かに！の「シー」、「ストップ」、「危ない」、「出ていけ」）

---

[87] ここで言う派生は、impossible や présentation の下線部に示したように、語彙派生ではなく、ある表現において、解釈ができる最小単位のことである。例えば、« Quel espèce d'idiot tu fais ! » において « Espèce d'idiot ! » が間投詞であり、前後の語彙が派生したものである。

[88] Ce que je veux dire, c'est que l'emploi d'une interjection ne fait intervenir aucun type de dérivation. (Anscombre 2009：16)

（心理的間投詞：嘆きの「ああ」、「すばらしい」、「うえっ」、「すごくいいね」）

（侮辱表現：「クソ野郎」、「クソ間抜け」、「げす野郎」、「最低な奴」、「ホモ」）

とりわけ、les insultes に注目したい。Anscombre（2009：24）によれば、les insultes（侮辱表現）は「有性」（人物、動物など）または「無性」（物事、例えば、Saloperie de bagnole !（ポンコツ車め！）(Anscombre 2009：24)）の相手を形容し、特徴づける表現である。Anscombre（2009）は、les insultes の特徴を 5 つ挙げており、そのうちの 1 つが les insultes « se combinent avec *espèce de* »[89]（侮辱表現は espèce de と組み合わされる）である。

(7) Espèce de (abruti + pauvre type + crétin + bâtard + pédé + taré + pauvre tâche + mongol + trisomique + enfoiré + …).

(Anscombre 2009：21)

以上から、Anscombre（2009）は « Espèce de N ! » を les insultes として捉えて

---

[89] この点に関しては、Milner（1978：177-182）を参照している。Milner（1978）は nom de qualité（評価名詞）について言及しており、2 種類の名詞を区別している。

1）Les noms A（名詞 A）は感嘆文に用いられる。

(a) Quel imbécile ! Quelle cruche ! Quel amour !

この場合、名詞が持つ意味でポジティブ評価か、ネガティブ評価か明確に解釈できる。

2）Les noms B（名詞 B）は解釈があいまいである。

(b) Quel général ! Quelle femme ! Quel professeur !

名詞 B の場合は、ポジティブ評価であるか、ネガティブ評価であるは文脈に左右される。

Milner（1978）によれば、Les noms A（名詞 A）は固有の文脈を持ち、espèce de と traiter と組み合わせて用いることができる。

(c) espèce d'imbécile ! / *espèce de médecin !

おり、相手の無礼な振る舞いに対する反応という意味で、間投詞としても位置付けていることがわかる。

以上で見てきたように、これまでの研究においては、« espèce de N ! » の文法的位置づけや N の部分に用いられる語彙の種類など、« espèce de N ! » の構造に関する考察はなされてきたものの、意味構造や発話機能に関する考察は十分に行われていない。本章では、Edouard（1967）が指摘している « espèce de N ! » は N というカテゴリーを形成し、対象とするものはそのカテゴリー内の「バリエーション」として捉えられるという考えをもとに、なぜ本来は否定的な意味を持たない « espèce » が、« espèce de N ! » の形で用いられると罵り表現として成立するのかについて考察する。

6.3 « Espèce de N ! » の意味考察

« Espèce de N ! » の形を取る罵倒表現は聞き手に向かって直接的に罵倒する言語行為である。例えば、以下のような用例が観察される。

(8) Espèce de connard !（うすのろ！） (*L'aile ou la cuisse* 1976)

(9) Espèce de chameau !（いじわる女！） (Rouayrenc 1998)

(10) Espèce de vétérinaire !（このヤブ医者！） (Rouayrenc 1998)

以上で挙げた « Espèce de N ! » の N に注目すると、(8) では、単独でも罵倒として機能する connard（うすのろ）が用いられている。(9) では、動物の名称である chameau（ラクダ）が用いられており、この語は、俗語的には「悪女」や「売女」を意味する。(9) では、espèce de が前置することで chameau の俗語的意味が引き出され、人物に向かって発話された場合、聞き手を「売女」として貶める罵倒行為となる。(10) では、職業名詞である vétérinaire（獣医）が用いられており、vétérinaire という語彙自体は、マイナス価値を持たない。(10) では、espèce de が前置することによ

って vétérinaire は医師としての価値を失い、「やぶ医者」を意味するようになる。そのため、espèce de vétérinaire は、聞き手を貶める罵倒表現として使用することができる。

以上で挙げた 3 つの用例に関して、2 つの問いを立てることができる。

1) 例えば、(8) のように、« Connard ! » のみの発話でも聞き手に対する侮辱行為が成立する。このような « Espèce de N ! » の N がすでに罵倒表現である場合、罵倒表現（N）のみの発話と、« Espèce de » が伴う発話ではどのように異なるのか。
2) N に関して言えば、« Espèce de » が前置することによって、例えば、(9) の chameau、または（10）の vétérinaire は侮辱的意味を持つようになる。では、なぜある特定の名詞が espèce de に後続するだけで、一般的意味を喪失し、侮辱的意味として解釈されるのか。

そこで、« Espèce de N ! » が持つ形式や意味機能についての検討を通じて、これら 2 つの問いについて検討する。

6.3.1 「種」を意味する espèce

« Espèce de N ! » の考察に入る前に、まず « espèce » という語彙の定義を見ておく必要がある。

Trésor de la langue française informatisé [90]（以下 *TLFi*）によれば、espèce は « Niveau de la classification des êtres vivants, placé immédiatement sous le

[90] *TLFi* は *TLF*（*Trésor de la langue française informatisé*）電子版の辞書である。インターネット上において、検索することができる（http://atilf.atilf.fr/）。

genre et comprenant lui-même des sous-espèces et des variétés. »（生き物の分類、またはその下位カテゴリー及び変種）を意味する。また、*Le Nouveau Petit Robert de la langue française*（2008）においても、espèce は、« Classe (de personnes, de choses) définie par un ensemble particulier de caractères communs. »（カテゴリー化できるもの。同様の特徴によって定義される（人物または物事の）クラス）と説明されており、例えば、« espèce humaine »（人類）、« les différentes espèces de verres »（異なるガラスの種類）のように用いることができる。

要するに、« espèce » は分類を意味し、« une espèce de petit bonnet » (*TLFi*)（小さい帽子のようなもの）のように、« une espèce de N / GN »[91] という成句の形で用いることができる。N は単独で用いられることもあれば、「小さな帽子」のように名詞句（GN）の形を取ることもある。« une espèce de N » は、説明や描写が困難な物事に対して、「N のようなもの」とひとくくりにすることで、物事を説明してしまおうという際に用いられる「近似表現[92]」である[93]。

---

[91] « une espèce de N » において、N が男性名詞または複数形である場合、« un/des espèce de N(s) » のように関連する限定辞の性数を一致させることがある。朝倉（2002：201）によれば、「N の性とは無関係に espèce を女性に用いるのが正規の用法」であり、「un [cet] espèce de +男性名詞は、文学後にも普及したが誤用とされる」（朝倉 2002：201）のである。また、Rouayrenc（1998：88）も、このような性数の一致に関して同様の見解を持っていて、それによれば、« un fripon d'enfant » のような N1 de N2 の構造において、N1 の限定詞は N1 の性数と一致する（cette vache de Paul, ce chameau de Marie）場合と、N1 の限定詞が N2 の性数と一致する（ce vache de Paul, cette chameau de Marie）場合が見られる。

[92] 近似表現は enclosure（近似）(G. Kleiber & M. Riegel 1978) とも呼ばれる。

[93] 渡邊 (2010) では、このような表現を「留保マーカー」として定義づけている。渡邊 (2010) によれば、Je gagne environ 3500 francs par mois.（わたしは月収およそ 3500 フランです。）のような場合、environ はそれによってみちびかれる辞項が近似的であることを明示している。渡邊（2010）は、このような近似性を明示するマーカーのことを『留保マーカー』（enclosures）」と呼んでいる。また、« espèce » は「種類」を意味し、« un / une espèce de

6.3.2　近似表現 une espèce de N の特徴

« Espèce de N ! » は、近似表現である « une espèce de N » の不定冠詞 une が脱落した形であると考えられる。しかし、近似表現として機能する表現は、« une espèce de N » の他にも « une sorte de N » （N のようなもの）、« un genre de N » （一種の N）、 « un type de N » （N タイプの）などが挙げられるが、その中で限定辞（une/un）を伴わなくとも、発話として成立するのは、« une espèce de N ! » のみである。例えば « Espèce de connard ! » は発話として成立するが、« *Sorte de connard ! », « *Genre de connard ! », « *Type de connard » のような発話は一般の表現としても、また罵倒の表現としても成立しない。このことから、espèce は他の分類を表す名詞と異なる性質を持つと考えられる。そのため、 « une espèce de N » が持つ意味的特徴を明らかにすることで、 « Espèce de N ! » の意味機能を理解することができるのではないか。

罵倒表現 « Espèce de N ! » との意味的関連性を明らかとするために、« une espèce de N » の意味特徴について見ていく必要がある。そこで、« une espèce de N » と隣接する表現である « une sorte de N » と比較検討し、両者の意味上の差異について考察していく。

まずは、 « une sorte de N » と « une espèce de N » の定義について確認する。

Une sorte de N：Une catégorie de personnes ou de choses. Se dit de ce qui ne peut être qualifié exactement, et qui est rapproché d'autre chose. (*TLFi*)

（人物や物事のカテゴリー。人物や物事を正確に形容すること

… »「ある一種の～」の形で使用することができるため、「留保マーカー」として捉えられる（Tamba1991、渡邊 2010）。この場合、「留保マーカー」である « une espèce de » は、後続する事柄が近似的であることを示している。

ができず、他のものに近づけて形容する）

Une espèce de N：Catégorie de personnes ou de choses que l'on a du mal à définir ou à classer. （*TLFi*）

（クラス分け、または定義が困難な人物や物事のカテゴリー）

ここで注目したいのは、une sorte de N によって表される対象は、正確に形容することはできなくとも、少なくともその種類についてある程度判明していると思われるもの、すなわちすでにカテゴリー化されたもの、またはすでに N というカテゴリーに属していると思われるものについて述べている一方で、une espèce de N はそもそも「定義が困難な人物や物事のカテゴリー」について述べているという点である。この定義から、une espèce de N によって表される対象は、一見しただけでは、どのようなものであるか判別できないようなものであり、定義するのが難しいものであると解釈することができる。そのため、言及対象が持つ特徴から判断し、N というカテゴリーに属させて描写する必要がある。

フランス語話し言葉コーパス（ESLO[94]）から « une espèce de N » と « une sorte de N » を 10 例ずつ用いて、両表現の置き換え可能性を調査した[95]。調査の結果、une

[94] ESLO（Enquêtes SocioLinguistiques à Orléans）は、オルレアン大学で作成されている大規模なフランス語話し言葉コーパスである。ESLO コーパスは 2 部に分かれており、ESLO1 は 1968 年から 1974 年の間に収録されたものであり、ESLO2 は 2008 年以降のコーパスである。ESLO コーパスには、発話を転写したテキスト及び音声データが含まれている。« une espèce de » で検索し、比較のため 10 例選択した。選択基準は会話の聞き取りやすさ、区切りの良さである。

[95] 2018 年秋学期から 2019 年秋学期まで、筑波大学、または同大学院に留学中のフランス人学生 16 名（男性 10 名、女性 6 名、年齢 20～30 歳）に置き換えテストを依頼した。いずれもフランス語ネイティブ話者である。調査方法は次の通りである。une espèce de と une sorte de の各用例、および各用例に対応する音声データを提示した。次に、それぞれの表現におい

espèce de N から une sorte de N への置き換えは、多くの場合において可能という結果が得られたが、une sorte de N から une espèce de N への置き換えは不可能と答える参加者の割合が高い用例が散見された[96]。要するに、これら 2 つの表現には、ある程度の互換性が認められるものの、その置き換えはかならずしも可能なわけではなく、2 つの表現には言語レベルにおける何らかの差異が確かに存在すると考えられる。両表現の置き換えにおいて、調査の参加者全員が置き換え不可能と回答した用例はなかったが、ここでは置き換え不可能と回答した参加者が最も多かった用例を用いて、une sorte de N と une espèce de N のそれぞれの意味的特徴について検討する。

以下では、まず « une sorte de N » と « une espèce de N » において、両表現の置き換えが「可能」な用例を提示する。

< une sorte de = une espèce de >　【16 人中 16 人、置き換え可能と回答】

(11) BV647：parce que tu appelles ça comment toi ? un enregistreur ?

MQ293：moi j'en sais rien moi

BV647：ben voilà bah moi j'appelle ça l'appareil

DR381：ouais c'est <u>une sorte de {= une espèce de}</u> de magnétophone un peu euh super sophistiqué quoi

(ESLO2_REPAS_1260_C　下線、括弧内筆者加筆)

（じゃ、君はこれを何と呼ぶの？録音機？）

（知らないよ、私は）

て、置き換えが可能な場合は Oui（はい）に、置き換えが不可能な場合は Non（いいえ）に印をつけるよう指示した。なお、この置き換えテストでは、参加者の出身地、年齢、性別、学歴などの差については加味しなかった。

[96] « une espèce de N » と « une sorte de N » のそれぞれの置き換え可能性テストの結果に関しては、参考資料 9 参照。

（ほらね、私は機械と呼んでいるよ）

（そう。これはテープレコーダーのようなもので、それもかなり凝った構造のものだね）

< une espèce de = une sorte de >　【16 人中 16 人、置き換え可能と回答】

(12) PB：je sais maintenant ce que j'essayais de rappeler il y a quelques minutes euh nous avons remarqué un une espèce de {= une sorte de} petit village artificiel qu'on avait construit euh je ne me rappelle pas exactement du nom mais je crois que c'était dans c'était imité des histoires d'Astérix

EM229：ah oui le village euh gaulois enfin le ça s'appelait comme ça

（ESLO1_ENT_063_C 下線、括弧内筆者加筆）

（数分前に思い出そうとしていた事がわかったよ。私たちは自分たちで作った人工村のようなものに気づいたの。名前を思い出せないけど、きっとアステリックスの物語をまねしたのだと思う）

（あ、そうなのね、村、ガリアの、なんというか、そういう名前なのよ）

(11) と (12) では、参加者全員が「置き換え可能」と回答した。« une sorte de » と « une espèce de » に後続する要素に注目してみると、(11) では、« magnétophone un peu euh super sophistiqué »（かなり凝った構造の録音機）、(12) では、« petit village artificiel »（小さな人工村）であるが、単なる N ではなく、実際は village（村）と magnétophone（録音機）という名詞 N が核となる名詞句（GN）が後続している。このことを踏まえて、次にそれぞれの表現において、置き換えができないと判断した人が多数派であった用例について見ていく。

最初に une sorte de が好まれる用例を 2 つ取り上げ、次に une espèce de が好まれる用例を 2 つ取り上げ、それぞれの意味特徴を考察する。

まず、une sorte de の使用が好まれる用例を 2 つ、次に une espèce de の使用が好まれる用例を 2 つ取り上げ、それぞれの意味的特徴について考察する。

< une sorte de / ?une espèce de >　【16 人中 14 人、置き換え不可能と回答】

(13) ch_BH8：toujours en parlant des loisirs euh à part la danse est-ce que tu fais d'autres sports parce qu'on pourrait considérer la danse comme une sorte de {? une espèce de} sport c'est vrai que c'est une expression

AN43：ah c'est un vrai sport sauf qu'on on se rend pas compte que c'est du sport

(ESLO2_ENT_1043_C 下線、括弧内筆者加筆)

（レジャーの話の続きだけど、ダンス以外には他にどんなスポーツをするの、というかダンスをスポーツの一種とみなしていいのか、表現の問題だけど）

（そうだね、スポーツだね、ただ私たちはそれをスポーツとして認識していないけどね）

< une sorte de / ?une espèce de >　【16 人中 9 人、置き換え不可能と回答】

(14) ch_OB1：y- y a une formation Afpa non justement là-dessus non du tout ?

BV1：non du tout c'est

ch_OB1：non

BV1：je sais pas c'est une formation de quinze jours euh faut s'inscrire en fait c'est une sorte de {? une espèce de} stage obligatoire et puis euh voilà c'est tout c'est le seul truc qu'y a à faire

（ESLO2_ENT_1001_C 下線、括弧内筆者加筆）

（職業訓練の実習、いや、だからそれみたいな、まったくない？）

（いや、全然ない）

（ない）

（わからないけど、15 日間の実習、登録しなきゃいけなくて、義務研修みたいなもの。で、そう、それだけ、それだけやればいい）

（13）と（14）は « une sorte de » が好まれる用例である。(13) において、後続する N は sport（スポーツ）であり、「ダンス」を une sorte de sport（スポーツの一種）として取り上げている。(14) では、stage obligatoire（義務づけられた研修）という名詞句（GN）が後続しており、「15 日間の実習」を une sorte de stage obligatoire（義務研修のようなもの）として取り上げている。このように、「スポーツ」というカテゴリーの中に「ダンス」という別の下位カテゴリーが設けられており、「義務研修」というカテゴリーの中に「実習」という下位カテゴリーが設けられている。つまり、言及対象はすでに N というカテゴリーの中に含まれており、N の下位カテゴリーであってもおかしくないものである。une sorte de は物事を分類的に捉えて、それぞれのカテゴリーを区別しながら、別のカテゴリーに近づけて形容するという機能があるといえる。

続いて、une espèce de から une sorte de への置き換えが難しいと判断された用例を提示する。すでに述べたように、une espèce de は une sorte de に置き換えられやすい傾向にあるため、置き換えできないと判断する人が最も多い用例においても、16 人中 8 人が不可能と回答するにとどまった。以下では、une espèce de の定義を踏まえて考察する。

< une espèce de / ?une sorte de >　【16 人中 8 人　置き換え不可能と回答】

(15) ch_MP10：euh là vous disiez les décorations de Noël à Paris y a le marché de Noël à Orléans c'est quelque chose que vous aimez euh comme le oui

RN488：ah oui oui ah oui j'aime beaucoup moi les dé- les décorations de noël tout ça oui un côté â- âme d'enfant <u>une espèce de {? une sorte de}</u> magie oui

ch_MP10：hm

RN488：on a envie d'y croire

(ESLO2_ENT_1085_C 下線、括弧内筆者加筆)

（えっと、パリのクリスマスの装飾について話していましたね。オルレアンのクリスマス市場もあって、あなたはこのようなことは好きなんですね）

（そうよ。大好きだわ、クリスマスの装飾とか、そういうもの。子供の心が感じられるというか、マジックみたいなもので、うん）

（んー）

（それを信じたくなるのよ）

< une espèce de / ?une sorte de >　【16 人中 5 人　置き換え不可能と回答】

(16) ch_PP6：tu le sors où ton chien ?

AJ38：je le sors euh dans la rue en général on va sur euh en face de la Dariole en fait euh enfin de l'autre côté de la Dariole je sais pas si tu vois où c'est la Dariole

ch_PP6：si ouais

AJ38：ben tu as <u>une espèce de {? une sorte de}</u> petite place là juste en face-

là de chez moi une petite place qui est fermée euh bah en fait c'est de l'autre côté de la Dariole

(ESLO2_ENT_1038_C)

（どこで犬の散歩をするの？）

（いつもは道で散歩させて、Dariole の向かい側に行くのよ、なんていうか、Dariole の裏側、Dariole の場所わかる？）

（うん。わかる）

（そこに小さい広場みたいな場所があって、私の家の向かい側に、囲まれている小さい広場があって、それが Dariole の反対側なのよ）

（15）と（16）は、« une espèce de » を用いた用例である。それぞれ « une espèce de » に後続する名詞、または名詞句は、(15）では、magie（マジック）であり、(16）では、petite place（小さな広場）である。(15）では、les décorations de noël tout ça（クリスマスの装飾とか、そういうもの）を une espèce de magie（マジックのようなもの）として取り上げられ、(16）では、l'autre côté de la Dariole（ダリオールの反対側）を描写する際に une espèce de petite place（小さい広場のみたいな）が用いられている。これらは、une sorte de の用例で見たように、例えば（13）の「ダンス」と「スポーツ」の関係とは異なる。une espèce de N によって示される対象は、「定義が困難な人物や物事のカテゴリー」である。つまり、言及対象は曖昧なものであり、カテゴリー化されていないものとして捉えることができる。(15）の「クリスマスの装飾」はクリスマスを連想させ、しきたりや風習によってツリーを飾ったり、サンタクロースという架空の人物からプレゼントをもらったりと、クリスマスの装飾からさまざまなことを連想することができる。それがマジックのようであると捉えられている。したがって、話し手はクリスマスの装飾を 1 つのカテゴリーとして捉えているのではなく、装飾の機能や用途などの特徴を問題にしている。(16）の「ダリオールの反対側」

と「小さい広場」に関しても同様なことがいえる。「ダリオールの反対側」がどのような場所であるかの説明に「小さい広場のようなもの」が用いられている。このように、« une espèce de » は物事を分類的に捉えているのではなく、言及対象を「識別」するためにさまざまな方面から情報収集をし、対象そのものが内在的に持つ固有の特徴や性質に注目してカテゴリー化をしているといえる。そのため、「クリスマスの装飾」は「マジック」の下位カテゴリーに位置させることができないし、「ダリオールの反対側」と「小さい広場」も従属関係にあるとはいえない。

« une espèce de N » のもう 1 つの特徴として、後続する名詞 N（または名詞句 GN）に対して修飾限定がなされている点が挙げられる。例えば、(15) の une espèce de magie（マジックのようなもの）に対して、on a envie d'y croire（信じたくなるのよ）という話し手のコメントが付け加えられている。つまり、修飾限定がなされていると考えられる。(16) の petite place（小さな広場）に対しては、une petite place qui est fermée（閉じられた小さい広場）という修飾表現が加えられている。une espèce de は曖昧な言及対象の内在的特徴を頼りに、言及対象を N というカテゴリーに位置させつつ言及するが、N というカテゴリーの中においてそれがどのような位置づけなのか、言及対象を識別するためにさらなる修飾限定をする必要がある。その際、話し手は曖昧な対象を描写する際に、物事が持っている特徴から、自身の経験を基に主観的に判断し、描写していると考えられる。つまり、話し手が対象に対する評価が問題であり、話し手の主観的基準によってカテゴリーが決められるため、N は話し手の主観的評価によって決定すると考えられる。

ここまで見てきたように、« une sorte de N » が表すカテゴリーは明確なものであり、多くの場合、言及対象そのものがすでに社会的に存在するカテゴリーに属している。言及対象が「何であるか」を特定するためには、近似するカテゴリーを用いて表現し、N というカテゴリーに中に見られる 1 つの品種として捉えることができる。

それに対して、« une espèce de N » で示される対象は必ずしもカテゴリー化され

ておらず、言及対象が話し手にとって「どう見えるか」が問題となる。話し手は、言及対象が持つ内在的特徴からその物を識別し、主観的判断から自身がそうであろうと思うカテゴリーに近づけて表現するのである。つまり、話し手によって物事に対する認識は違うのだから、当然ながら話し手によって N というカテゴリーも変化するのである。« une espèce de N » が使用される場合は、話し手の評価基準が識別の基本となる。

6.3.2.1 une espèce de が N にもたらす「変な」性質

言及対象を X とし、« X, (c'est) une espèce de N »（X は、N のようなものである）という発話形式を用いて une espèce de N についての考察を進める。すでに述べたように、話し手は主観的に、定義困難な X が持つ内在的特徴を頼りに判断し、近似する N というカテゴリーに関係づけるのである。このように考えれば、言及対象 X は N の内在的特徴を備えたものではあるが、見た目が異なったり、欠陥がある物であるため、完璧な N とは言えない。つまり、X と N は同等のものと見なすことができず、X は N ではないものとして捉えられ、否定的に定義される傾向があるのである。そのため、N そのものになることができないため、N と比べたら「一風変わった特徴」とか「変な性質」を持つ傾向にあるといえる。

N に用いられる名詞には、これまで見てきた une espèce de magie（マジックのようなもの）や une espèce de petite place（小さな広場のようなもの）のように、物事を表す場合と、une espèce d'avocat（朝倉 2002：201）（弁護士のような）のように、人を指し示す名詞または名詞句が用いられている場合が見受けられる。前者は物事同士の近似であるが、後者の場合に関して、朝倉（2002：201）は、「N が人ならば、近似の意から軽蔑の意に転じやすい点、軽蔑を含まない une sorte de とは異なる：*une espèce d'*avocat」と指摘している。つまり、une espèce d'avocat（弁護士のような人）という発話には、対象 X を弁護士そのものではないもの、すなわち弁護士の異種や雑

種として捉えることで、「変な弁護士」や「悪質弁護士」と意味する機能がある。une sorte d'avocat が軽蔑の意で解釈できないのは、物事や人物を分類的に捉えているからであり、言及対象を「弁護士」という職業カテゴリーに位置づけているからである。それに対して、une espèce de は話し手の評価が関係し、社会的分類ではなく、「どのような弁護士」であるかを問題にしているのである。

6.3.2.2　une espèce de N における修飾限定

次に、« une espèce de N » の N に罵倒表現が用いられている « une espèce de connard »（バカのような人）を例に、une espèce de N の修飾限定を見ていく。ここからは、ESLO コーパスではなく、映画のセリフから収集したコーパスを使用する。

(17) Aurélie：avec un mec là, une espèce de gros connard méprisant mais lui parlait mais vraiment comme une merde

(*Parlez-moi de la pluie*, 2008)

（ある男が、軽蔑するようなひどいバカ男で、本当にくそのように話す）

(17) は、« une espèce de GN » の形式を取り、N である connard（バカ）が核となる名詞句 « gros connard méprisant »（横柄で酷いバカ）が後続する用例である。(17) において、話し手は、「男」が持つ内在的特徴から判断し、espèce の分類機能によって、「男」を « gros connard méprisant »（横柄で酷いバカ）というカテゴリー属させている。(17) の espèce は不定冠詞 une を伴うため、「男」をカテゴリー内のさまざまなものの中から 1 つ（une）に限定する機能を持つ。次に、この限定された「1 つ」がどのような性質を持つのかを明示しなければならない。この性質の明示が une espèce de の「修飾限定」である。つまり、(17) は、「男」が gros connard méprisant

というカテゴリーにおいて、« lui parlait mais vraiment comme une merde »（クソみたいな話し方をする）「男」であるという修飾限定を持つ。修飾限定は N（GN）の前に置かれる場合[97]があり、修飾限定を伴わない用例[98]も見受けられるが、修飾限定を伴わない用例においても、言及対象を N というカテゴリーに属させ、その中の 1 つとして捉えているため、une espèce de が軽蔑的表現であることには変わりない。

ここまでの考察をまとめると、« une espèce de N（GN）» の形を取る表現は、曖昧で不明確なものを定義する際に使用され、espèce の分類機能によって、言及対象を N（GN）というカテゴリーに属させる。また、espèce は不定冠詞 une を伴うため、言及対象を多種多様な N（GN）の中から 1 つに限定する。さらに、1 つに限定された N がどのような性質を持つか明示しなければならない。« une espèce de N（GN）» によって示された N（GN）は、ある他では見られないような独特な修飾限定がつきやすいという特徴を持つ。朝倉（2002：201）は、une espèce de に関して「軽蔑語の前では形容詞的にそれを強調し、accompli, fieffé の意に近づく」と指摘しているが、これは N の修飾限定が関係し、単なる N ではなく、限定することで悪評の高いことが強調されるためである。

以上の考察を踏まえて、次節では、« une espèce de N » が持つ特徴が « Espèce de N ! » という侮辱表現とどのような関わりがあるのかについて考察していく。

6.3.3 « Espèce de N ! » の意味機能分析

« Espèce de N ! » の特徴として、以下の 3 点を指摘することができる。

---

[97] « Avant le bagne, j'étais un pauvre paysan très peu intelligent, une espèce d'idiot ; le bagne m'a changé. » (Frantexte, *Les Misérables* 1881：221)（牢獄に入る前に、私はあまり頭が良くない貧乏な農民だった、愚か者のような、服役が私を変えた。）

[98] « Alexandre est une espèce d'idiot dans mon genre. » (Frantexte, *Les Faux-monnayeurs* 1925：1233)（アレクサンドルは私の考えの中では愚か者のような人だ。）

1）形式的には、espèce は不定冠詞 une を伴わず「無冠詞」で用いられ、« Espèce de N ! » は感嘆文の形を取る。

2）意味的には、罵倒表現であり N が持つ意味を強化する。

3）語用論的には、直接聞き手に向かって発話をすることで、「罵倒」という語用論的効果が見られる。

6.3.3.1　N が罵倒表現の場合

まず、N が罵倒表現の場合を見ていく。例えば、« Espèce de connard ! » において espèce は不定冠詞 une を伴わないため、聞き手を connard の「一種」として捉える分類的解釈はできない。« Espèce de N ! » の発話は、聞き手の卑劣な行動や振る舞いによって引き起こされた発話であり、話し手は聞き手を罵るべき人物であると判断し、直接的に発話することで罵倒行為が成立する。以下で実例を用いて考察する。

(18) Femme：Salaud ! Ouais c'est ça casse-toi ! va trouver ta pute ! Espèce de connard ! （*Comme les autres*, 2008）

（げす野郎、えーそうだよ、さっさと行け！愛人のとこに行けば！このうすのろめ！）

(19) Hugo：pourquoi tu t'es tapé la meuf que je veux hein

Antoine：lâche-moi

Hugo：il a fallu que tu te la tapes aussi hein

Antoine：laisse-moi passer je t'expliquerai plus tard

Hugo：Espèce d'enculé (Antoine tombe)

Hugo：merde, merde, merde… merde ! Antoine !

（*Amours et Turbulences*, 2013）

（どうして俺が好きな女に手を出した）

（離してくれ）

（彼女まで手に入れる必要があったのかよ）

（通してくれ、今度説明するから）

（このチャラ男野郎！）Hugo に押されて、Antoine 階段から落ちる

（やばい、やばい、やばい、どうしよう！）

（18）は、裁判を終えて法廷から出てきた妻が、浮気をした夫に対して罵る場面に見られる発話である。（19）は、Hugo は自分が好意を寄せている女性を友人の Antoine に奪われてしまったことを知って、自分の気持ちを知っていたのにもかかわらず、自分を裏切った Antoine に対して Hugo が罵る場面に見られる発話である。2 つの場面において、（18）では、夫の浮気、（19）では友人の裏切り、によって罵倒が引き起こされている。話し手は聞き手の許しがたい行動を弾劾すべく、« Espèce de N（connard / enculé）! » と発話するのである。

« Espèce de N ! » は、espèce の分類機能によって、聞き手を N（例えば、connard または enculé）というカテゴリーに属させることができる。N は、N というカテゴリーにおいて、N_1, N_2, N_3…（例えば、connard であれば、よく人を騙す嘘つき connard、相手を裏切る connard など、いずれの場合においても、聞き手の悪質な行動や言動を基に判断している。Connard のカテゴリーに属させるかは話し手の主観的判断によって決められる）のようにさまざまなバリエーションを持つことができるが、espèce に前置する不定冠詞 une の欠落により、« Espèce de N ! » は、聞き手を多種多様な N の中から 1 つに限定することができない。そのため、N に対する修飾限定を付け加える必要もないのである。つまり、 « Espèce de N ! » という発話は、聞き手を「すべての特異な（変な）バリエーションを備えた N そのもの」として捉えている。つま

り、« Espèce de connard ! » であれば、聞き手を「完全なバカ」、「とんでもないバカ」して捉えており、話し手にとって、聞き手は「バカ」と評価される人物に他ならないのである。その結果、特異性が強調された発言となり、非常に強い罵倒効果をもたらすのである。

« Espèce de N ! » は、聞き手を N に属させるという点においては、espèce の分類機能が働いているが、発話においては、Rouayrenc（1998：100）が記述するように、« espèce de N » 全体を一つの発話単位として捉える方が適切である。« Espèce de N ! » は、人物や物事に対する評価を表しており、感嘆的に発話されることで聞き手の怒りの心情が現れる発話となる。このように、« Espèce de N ! » は話し手の主観的評価が表れている発話であり、聞き手以外を罵倒する際には用いられないという特徴を持つ。こうした強い罵倒表現は、浮気、修羅場、問い詰め、尋問のように、日常生活では遭遇し難い、特殊な場面で使用されることが多い。

これに対して、罵倒表現（N）のみが用いられる発話場面を以下に示す。

(20) Le jardinier : tu laisses entrer une clodo dans l'hôtel ?

Le maître d'hôtel : ta gueule, connard ! c'est la nana du frère du patron !

(*Les visiteurs*, 1993)

（あんな乞食をホテルに入れるのか？）

（黙れ、バカたれ！オーナーの弟の女だ！）

(21) Marianne : et la priorité à droite !

Chauffeur : oui mais t'as vu comment tu conduis, connasse !

Marianne : quoi ?! vas-y viens sors de ta case viens me dire ça ouais ! viens ! ah c'est ça ouais casse-toi ouais ! rentre chez ta mère, baltringue ! Connard !

(*Vive la France*, 2013)

（右側優先は！）

（あーけどてめぇ自分の運転技術を見たかよ、あばずれ！）

（なんですって！車から出てこっちに来て言ってみろ！来いよ！あっそう、あっち行け！家に帰れ！無能な奴ね！バカ野郎！）

(20) では、ホテルの管理人が仕方なく浮浪者をホテルに入館を許可し、そのことを庭師に指摘され、庭師に対してなされた発話である。(21) では、右側優先を守らなかった車と衝突しそうになり、相手の運転手を怒鳴る場面に見られる発話である。(20) では、connard（バカ）、(21) では、baltringue（役立たず）、connard（バカたれ）が用いられている。罵倒表現のみの使用は、聞き手を「バカ」として捉え、相手を呼びかける際に見られる呼称（vocatif）機能が働いていると考えることができる。呼びかけにはさまざまな機能が見られるが、川口（2015：363）によれば、salaud！（げす野郎）のような罵倒語彙は「相手を良い・悪いに関わる評価的表現を用いて評価することで、自分が相手をどのように思っているかを伝える」役割がある。話し手は、聞き手に対して「バカ」というレッテル与えることで聞き手とバカを直接に関係づける。聞き手を罵倒語彙で呼びかけているのと同じなのである。

罵倒語彙（N）のみが使用されるのは、« Espèce de N ! » の発話場面で見られたような修羅場、耐え難い苦痛、許せない裏切りなどの深刻な出来事が起こった場合よりも、話し手が苛立ったり、嫌悪感を持った際にその原因たる人物に対して心情を吐露するといったような日常的で深刻度の低い場合が多い。

罵倒表現（N）のみが使用される際に見られるもう 1 つの特徴として、いくつかの罵倒語彙を連続して発話することができるという点が挙げられる。

(22) Caroline：Tu veux que je vienne avec toi ?

Benoît：Mais non je veux pas y aller, laisse-moi

Caroline：Ecoute, on se mouille juste les genoux, si ça te plait pas on sort d'accord

Benoît：Mais j'ai dit non, fous-moi la paix à la fin

Caroline：Je te promets tu vas adorer hein, t'as ma parole d'accord, allez viens beignez pour me faire plaisir

Benoît：lâche-moi

Caroline：Ecoute Benoît, les piscines c'est pour les enfants, normalement tu devrais aimer aller à la piscine, tu comprends ? mais tu sais ce que t'es, t'es le roi des cons, au pays des emmerdeurs, un un petit un petit con, casse couilles qui prend la tête d'accord, hein hein espèce de petit d'enculé, de merde qui … voilà ce que t'es, connard, connard, connard, casses-toi

(*Nos jours heureux*, 2006)

(一緒に行こうか？)

(いやだ、行きたくない、かまわないで)

(ねぇ、膝を濡らす程度だから、もし嫌だと思ったら出よう、ねっ)

(なんだよ、いやだって言ったじゃない、もうほっといてくれよ)

(絶対好きになる、約束する、私の言うことを信じて、ほら、私を喜ばせるためにも泳ごうよ)

(放して)

(いい？ブノワ、プールは子供のためにあるの、好んでプールに行くのが普通なの、わかる？でもね、君はね、どんな子か知ってるか、バカの王様だよ、うんざり王国のね！バカ！ばか！うんざり野郎！厄介な奴！えい！えい！この間抜け野郎が！くそ野郎が！ほら見ろよ、バカ、バカ！バカ！消え失せろ！)

(22) は、colonie de vacances（バカンス合宿）において、プールに入りたがらない子供を説得する場面において、説得に動じない子供に対する罵り場面に見られる発話である。罵倒語彙のみの罵りの場合において、« connard, connard, connard » のように、いくつかの罵倒表現を連続的に発話することができる。それに対して、« Espèce de N ! » には文脈的制約があり、特殊な場面において特定の相手に向かって罵るという特徴を持つ。そのため、一回きりの発話である場合が多い。(22) のように、« Espèce de N ! » を他の罵倒表現の間に挿入することはできるが、« Espèce de N ! Espèce de N ! Espèce de N ! » のような繰り返し発話されること少ない。また、このように、« Espèce de N ! » は罵倒場面において、いきなり発話されることはなく、いくつかの罵倒表現のあとに用いられるという特徴がある。

続いて、« Espèce de N ! » の N が普通名詞である場合を見ていく。

6.3.3.2　N が普通名詞の場合

« une espèce de N » の考察において、発話対象は N の特徴を備えているが、完全な N（一般的に認識されている N そのもの）と比べたら、「変な性質」とか「一風変わった特徴」を持ち、N の雑種であることを述べた。この特徴は、« Espèce de + 普通名詞 ! » にも適応することができる。

« Espèce de + 普通名詞 ! » の形を取る用例は、以下の 2 種類が挙げられる。

(23)=(9) Espèce de chameau !（この売女め！）　(Rouayrenc 1998)

(24)=(10) Espèce de vétérinaire !（この獣医め！）　(Rouayrenc 1998)

(23) の N は、動物名詞であり、マイナス価値を内包的に持っている名詞である。chameau（ラクダ）は「品行が悪い尻軽女」や「売女」のような俗語的意味を内在的に持つため、人間に対して比喩的に使用した場合は、動物の「ラクダ類」ではなく、

俗語的意味で聞き手を「売女」として捉えることができ、相手に対する罵倒行為となる。(24) の N は職業名詞であり、名詞自体は侮辱や軽蔑の意を持たない。しかし、espèce de が前置することによって、雑種、悪質といった N というマイナス的解釈となり、聞き手に対する侮辱を表すことができる。

以下では、espèce de に後続する N の意味価値は常にマイナス価値になることについて考察する。

(23') une espèce de chameau !（ラクダのようなもの）

(24') une espèce de vétérinaire !（いわゆる獣医だ）

まずは、(23) と (24) の « Espèce de » を « une espèce de » に置き換えて考察する。すでに述べたように、une espèce de を用いる場合、言及対象の内在的特徴が判断基準となる。(23') では espèce の分類機能が関係し、「ラクダのような」という分類的解釈となり、言及対象をラクダの一種、または雑種として捉えられる。しかし、この分類は、ラクダであるか、馬であるかという種類の分類（外見的特徴）ではなく、言及対象が持っているラクダと呼ぶことのできる内在的特徴によって判断されたものである。例えば、荷物を運ぶ、暑さに強いといった機能から判断し、「ラクダ」に分類しているのである。この場合、言及対象はラクダのすべての特徴を備えているのではなく、完璧なラクダそのものとして捉えることができないため、雑種という解釈となる。(23') は、言及対象をラクダという種類の雑種の 1 つとして捉えることができるが、« Espèce de chameau ! » は une の脱落によって限定ができなくなるため、ラクダ雑種というカテゴリーとなる。そのため、聞き手に向かって評価的に発話された際は、マイナス価値（俗語的意味、ここでは売女の意）が現れるのである。

(24') も分類的解釈であり、言及対象を獣医という職業カテゴリーに属させているのではなく、医師としての振る舞いや動物の病気を治せるかどうかなどの特徴から判

断している。しかし、どことなく正式な獣医ではないという解釈となる。例えば、« Il est vétérinaire »（彼は獣医である）という表現は、言及対象を職業的に分類している。どのような獣医であるかという特徴付けや評価を伴わないが、少なくとも、動物の病気を治せる医者であり、仕事を問題なくこなし、一般的に見られる良い医師を意味する。しかし、(24') の vétérinaire というカテゴリーには、さまざまな特徴を持った獣医が含まれていると考えられる。獣医としての特徴をいくつか備わっていれば獣医として見なすことができるため、言い換えれば、多種多様な欠陥を持った獣医が含まれていることになる。このことから、言及対象はどこから見ても、どのように言及しても「正式的」な獣医になることはできず、欠陥がある獣医であると理解することができる。この特徴が（24）においてマイナス評価をとして現れているのである。このように、une espèce de で導入された獣医は標準的なものであるのに対しての変種という評価となる。医者の変種は「やぶ医者」である。(24) は、不定冠詞 une を伴わないため、分類的解釈はできない。Espèce de vétérinaire ! の場合、言及対象を 1 つに限定することができないが、多種多様な欠陥を持った獣医というカテゴリーの中で捉えていることは変わらないため、普通名詞の場合はマイナスの意味評価に傾くことが多い。

« Espèce de N ! » の発話は、人物に向かって発話する、また分類ではなく聞き手に対する評価を表す、という 2 つの特徴がある。このように分析することで、« *Sorte de connard » が不自然となるのは、« une sorte de N » が N を社会的分類に沿って分類を行っているため、評価を表さないからであると理解できる。つまり、espèce de が前置することによって、普通名詞 N は分類名詞としてではなく、N に結び付いている評価的解釈に変化するのである。このように、espèce de は意味的には一般的に認識されている普通の分類に対して、常軌を逸して分類ができないものが対象であるため、「普通ではない、一種独特な」という特徴が強調され、強い罵倒表現として捉えられるのである。

6.3.3.3　N を伴わない « Espèce de ! »

ここまで、espèce de に後続する名詞、または名詞句の特徴を観察し、« espèce de N ! » の罵倒表現としての意味機能を考察した。以下では、« Espèce de N ! » において N が省略された « Espèce de ! » の用例についても触れておく。

(25) Avocat：Mr. Simpson, votre fils prétend que vous êtes colérique voir même violent

Homer Simpson：ohh espèce de …

(*Les Simpsons*, Saison 14, L'épisode 11, Homer va le payer)

（シンプソンさん、あなたの息子さんが、あなたは怒りっぽくて、加えて暴力的であると主張しています）

（この…！）

(26) Perrine：C'est moi votre sauveuse ! C'est moi que vous devez embrasser. Elle, c'est une profiteuse, ou comme une prostituée si vous préférez…

Solène：Ça va pas la tête !?

Perrine：Pas une prostituée, mais pas loin, enfin vous comprenez quoi… Je l'ai payé pour ça. Elle, elle est nulle.

Fabrice：Non, je comprends pas…

Solène：Viens, elle est devenue complètement dingue !

Perrine attrape Solène par l'épaule et la tire violemment.

Perrine：Espèce de…

Elle la secoue comme un prunier. Lui tire les cheveux.

(*Les chaises musicales*, 2015)

（私があなたを助けた人よ！あなたは、私にキスをするべきよ！彼女は、あなたを利用して、言うならば、売春婦のようなことをしているのよ）

（頭おかしんじゃないの！？）

（売春婦じゃなくて、もっとひどいよ、わかるでしょ…私は彼女にお金を払ったのよ。彼女はバカげているわ！）

（待って、どうなっているんだ！）

（こっち来い、ほんとに気がおかしくなったんかない）

（ピエリーヌはソレーヌの肩に手をかけ思いっきり引いた）

（この、くそ…）

（ピエリーヌはソレーヌを強く揺さぶり、髪の毛を引っ張った）

（25）と（26）のように、« espèce de N » は N が欠けた形で用いても、罵倒行為として成立する。このような省略に関して、Rouayrenc（1998：109）は、省略された言葉を補うため、罵倒状況が必要不可欠であり、発話場面がさらに大事な役割を果たしている、と述べている[99]。これまでの考察において、espèce de が前置することによって、N の意味価値は常にマイナス価値になることを見てきた。N が省略された « Espèce de ! » は、N というカテゴリーが特定できないため、聞き手の特徴を特定するのも難しくなる。このように考えると、話し手は、聞き手を属させる N を決められないほどの酷い相手であると捉えて、発話しているといえる。« Espèce de ! » のもう 1 つの解釈としては、これまで見てきたように、« merde » や « putain » の省略において、« m… », « p… » と表記されるように、« espèce de… » の N を省略する行

[99] L'abrègement pouvait même aller jusqu'à la suppression totale. Le cotexte est alors indispensable pour la restitution du mot manquant (Rouayrenc 1998：109) （語彙の短縮は語彙の全体削除にまで及ぶことがある。欠落した語彙を復元させるためには文脈や発話場面が必要不可欠である。）

為は、« espèce de N » の婉曲表現としても捉えられる。

6.4　まとめ

本章では、« Espèce de N ! » が持つ意味構造と罵倒機能について考察を行った。考察手段としては、まず、「種」を意味する espèce が持つ分類機能に注目し、une espèce de との関連性を記述した。une espèce de の特徴を明らかにするために、同じく分類機能を持つ « une sorte de N » との比較を行った。その結果、« une espèce de N » の N には、性質を限定する修飾語句を伴うことが多く、une espèce de に導かれる N は「変わった性質」を伴うことが多いことが明らかになった。つまり、N というカテゴリーは、N と呼べるような完璧な N ではなく、どことなく特徴が欠けている N で構成されていると解釈できる。この N の性質が、不定冠詞 une を伴わない « Espèce de N ! » においても機能していると仮定し、N が罵倒表現の場合、N が普通名詞の場合、N を伴わない場合の 3 つの発話場面に分けて、« Espèce de N ! » の発話機能を考察した。

N が罵倒表現の場合において、N はさまざまな悪い特徴を持った N の集まりであると考えられる。しかし、« Espèce de N ! » は不定冠詞 une を伴わないため、言及対象を N の中のどのような N なのかを特定することができない。したがって、言及対象は「すべての悪い特徴を持った N」であるという解釈となるため、より強い罵倒表現となる。N が普通名詞である場合も、une espèce de が N に与える一風変わった性質が関係している。話し手は、聞き手を N の一種として捉える分類的解釈ではなく、聞き手の振る舞いや行動から特徴を判断し、聞き手に対する主観的評価をするのである。N が普通名詞の場合において、N が内包的に持つ俗語的意味が引き出され、espèce de が前置することによって、普通名詞 N は分類名詞としてではなく、N に結び付いている評価的解釈に変化することが明らかになった。さらに、N を伴わない « Espèce de N ! » では、N というカテゴリーを特定できない。話し手は、聞き手を言い表す N

というカテゴリーを決められないほど、聞き手を酷い相手であると捉えているといえる。また、N を伴わない « Espèce de… ! » 自体がすでに罵倒機能を有していると考えられることができる。この点については今後の研究で考察していきたい。

結論

本論文は、まず、フランス語の「罵倒表現」の言語表現形式や罵倒のタイプを観察し、次に、特定の罵倒表現が持つ意味的特徴を明らかにすることを目的に考察を進めた。

1 章～3 章では、罵倒表現の多様性を提示し、先行研究をもとに罵倒表現に用いられる表現形式や罵倒のタイプをまとめた。また、それぞれの罵倒タイプの特徴をまとめ、各罵倒タイプの意味的関係性を図式化した。この考察で、フランスの罵倒表現では、数多くの語彙や表現が用いられていること、また、罵倒タイプによって相手に与える罵倒効果が異なることを提示した。これらを踏まえて、4 章～6 章では、 merde（くそ）、putain（ちくしょう）、espèce de N (GN)！（この N 野郎！）の 3 つの表現に焦点を当て、実例をもとに、これらの語彙がどのような発話場面に用いられるのか、また、誰に対して発話をしているのか、それぞれの表現が持つ意味的特徴や発話機能を詳しく論じた。

以下では、本論文の内容について大まかにまとめてみることにする。フランス語における罵倒研究は、語彙や表現に注目した辞書的記述から、罵倒行為に関わる人物の関係性の中において、罵倒が相手にもたらす効果を論じた言語学的研究へと移り変わっていることを提示した。また、先行研究で挙げられていたように、多くの研究において、injure（罵倒）、insulte（侮辱）、juron（ののしり）、blasphème（冒涜）の 4 つの罵倒タイプを区別していた。本論文では、この 4 つの用語に焦点を当て、injure / insulte（聞き手に向かって発話される罵倒）と juron / blasphème（事態に対する反応を表す間投詞）に分けて考察を進めた。さらに、4 つのタイプに gros mots（下品な言葉）を加え、それぞれのタイプが持つ意味的特徴を確認した上で、5 つのタイプが互いにどのように関係しているのかを考察し図式化することを試みた。

このように、罵倒表現の種類や基本的な発話構造を明らかにした上で、4 章以降では特定の語彙に絞り、ぞれぞれの意味機能について考察を行った。

merde（糞）と putain（売春婦）は、共に「汚らしい」というイメージを持つ下品な言葉であるが、実際の会話においては、本来の名詞的意味で使用されることは少なく、間投詞として用いられ、事態に対する反応を表すことが明らかになった。

merde に関しては、1)「実現すべき事態」が「実現しなかった」場合、2)「回避すべき事態」が「実現してしまった」場合の 2 つ発話状況において用いられることが明らかになった。putain においても、話し手にとって困惑する事態が起きている際に見られる「話し手に関わる putain」と予想外の事態に直面した際に見られる「事態に関わる putain」の 2 つの発話パターンに区別することができた。

両語彙の特徴をより明確なものにするために、merde と putain の置き換え可能性を調査した。その結果、「merde の 2 つの発話パターン」は「話し手に関わる putain」に対応していることが明らかとなった。両者は共に話し手が困惑する事態に直面した際に用いられ、この場合は、merde と putain を置き換えることが可能であり、発話において同時に用いることができる。「事態に関わる putain」は、話し手にとって困惑する事態ではないため、予想外の事態に直面した際に発話されるものである。この場合、文の意味解釈が変化してしまうという点において、merde との置き換えが不可能であった。

また、事態の良し悪しの評価に関わる発話場面においては、merde は、話し手自身が持つ前提との食い違いから現実的状況を認識するのだが、話し手にとって困惑する事態であることから、merde によって表される事態はマイナスに傾くことが多い。それに対して、merde と置き換えられない「事態に関わる putain」では、事態に対する評価性が低く、単なる想定外の事態に対する驚きであると捉えることができる。このように考えると、予想外の事態に用いる putain は、話し手の損得に関わらないため、merde に比べて良い事態にも用いられやすく、プラスの用法にも拡張しやすいといえ

る。この点に関しては、merde と putain の特徴をさらに詳細に整理し、両者の違いをより明確に記述していく必要がある。

また、putain との置き換えが不可能であり、merde のみを用いることができる用例に関しては、話し手の不注意によって引き起こされた些細な出来事に対する反応を表しており、merde は単に感情を表す間投詞として使用されていると考えられる。この場合の merde と最初に挙げた merde の 2 つの発話パターンの関係性については、今後さらに考察する必要がある。

最後に、聞き手に向かって発話される injure として捉えられる « Espèce de N (GN) ! » の罵倒機能を考察した。N が罵倒語彙である場合、espèce de は N を強調し、N のみの発話に比べ、特定の場面において、特定の相手に向かって発話されるため、より強い罵倒表現となることが明らかになった。また、N が卑劣な語彙ではない名詞である場合において、espèce de が前置することによって、名詞 N は分類名詞としてではなく、N に結び付いている評価的解釈に変化することが明らかになった。つまり、« Espèce de N ! » は、聞き手を N というカテゴリーに属させる分類的解釈で捉えるのではなく、聞き手の特徴を捉えてマイナス的に評価をするのである。« Espèce de N ! » に関する考察において、N を 3 つのパターンに分けて考察を進めたが、それぞれのパターンにおいて、どのような語彙が用いられているか、また、卑劣的な意味を持たない名詞は他にどのようなものがあるのかを踏まえて今後さらに研究を進めていきたい。

本論文では、merde（くそ）、putain（ちくしょう）、espèce de N（この～）、の 3 つの表現のみの考察となった。今後の展望としては、前述した 3 つの表現に関して言えば、これまでの考察で不十分であった点を踏まえてさらに詳細に考察を進める。また、罵倒表現全体に関していえば、これらの語彙に限らず、例えば、Edouard (1967) が挙げている他の表現、またはフランス語の話し言葉において使用頻度が高い表現も考察対象としていきたい。さらに、日本語の罵倒表現、中国語の罵倒表現に関しても

同様に考察することができるため、言語間において罵倒表現が持つ共通点や相違点を考察することも今後の展望としていきたい。

参考文献

Anscombre, J.-C. (2009) Notes pour une théorie sémantique des jurons, insultes et autres exclamatives. Lagorgette, D. (ed) *Les Insultes en français : de la recherche fondamentale à ses applications (linguistique, littérature, histoire, droit)*, Université de Savoie. pp.9-30.

Bravo, F (2015) *L'insulte*. Presses Universitaires de Bordeaux.

Danon-Boileau, L & Morel, M. (1995) *L'exclamation*. Faits de langues. PUF.

Desmons, É & Paveau, M-A. (2008) *Outrages, insultes, blasphèmes et injures : violences du langage et polices du discours*. L'Harmattan.

Dufournet, J. (1986) *Farce de maistre Pierre Pathelin*. Paris. Garnier-Flammarion

Duplat, A. (1979) *Le Mystère de Saint Martin*. Droz. Genève. pp.127-130.

Edouard, R. (1967) *Dictionnaire des injures*. Paris. Tchou.

Fauré, L & Olivier, C. (2000) *L'interjection en français*. Cahiers de praxématique.

Fracchiolla, B. (2011) Article "injure". *Dictionnaire de la Violence*. PUF. pp.706-710.

Furetière, A. (1978) *Dictionnaire universel*. Le Robert.

Grevisse, M. (1975) *Le bon usage*. Gembloux. Duculot.

Guiraud, P. (1976) *Les gros mots*. PUF.

Holbrook, R.T. (1956) *Maistre Pierre Pathelin*. Librairie Ancienne Honoré Champion.

Kleiber, G. & Riegel, M. (1978) Les grammaires floues. *La notion de recevabilité en linguistique*. Paris. Klincksieck. pp.67-123.

Lagorgette, D. (1994) Termes d'adresse, acte perlocutoire et insultes : la violence verbale dans quelques textes des 14e, 15e et 16e siècles. *La violence dans le*

monde médiéval. Collection, Senefiance 36. Presses universitaires de Provence. pp.317-332.

Lagorgette, D. (2003) Les syntagmes nominaux d'insulte et de blasphème : analyse diachronique du discours marginalisé. *Thélème, Revista Complutense de Estudios Franceses*. pp.171-188.

Lagorgette, D. (2006) Insulte et conflit : de la provocation à la résolution – et retour ?. *Cahiers de l'Ecole Doctorale de Paris 10-Nanterre* 5, pp.26-44.

Lagorgette, D. (2009) *Les insultes en français : de la recherche fondamentale à ses applications (linguistique, littérature, histoire, droit)*. Collection, langages 5. Université de Savoie.

Lagorgette, D. (2012) Insulte, injure et diffamation : de la linguistique au code pénal ?. *Argumentation et Analyse du Discours* 8.

Lagorgette, D & Larrivée, P. (2004) Introduction. *Langue Française* 144. pp.3-12.

Larguèche, É. (1983) *L'effet injure, de la pragmatique à la psychanalyse*. Voix nouvelles en psychanalyse. PUF.

Larguèche, É. (1997) *Injure et sexualité, le corps du délit*. Sociologie d'aujourd'hui. PUF.

Larguèche, É. (2009) *Espèce de … ! Les lois de l'effet injure*. Université de Savoie.

Mateiu, I., Florea, M. (2014) Les injures et les jurons : agressions verbales vs. jeux de langage. The Proceedings of the International Conference "Communication, Context, Interdisciplinarity". Section : *Language and Discourse* 3, p.594-610.

Milner, Jean-Claude. (1978) *De la syntaxe à l'interprétation, Quantité, insultes, exclamations*, Seuil.

Planelle, G. (2018) *Les 1001 expressions préférées des Français*. Opportun.

Rey, A. (2001) *Le Grand Robert de la langue française.* 2ème édition. Le Robert.

Rey-Debove, J. (2008) *Le Nouveau Petit Robert de la langue française*. Le Robert.

Rey-Debove, J & Rey, A. (2003) *Le nouveau petit Robert：dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*. Dictionnaires Le Robert.

Riegel, M., Pellat, J-C., Rioul, R. (2015) *Grammaire méthodique du français*. PUF.

Rouayrenc, C. (1998) *Les gros mots*. que sais-je ?. PUF.

Tamba, I. (1991) Une clé pour différencier deux types d'interprétation figurée, métaphorique et métonymique. *Langue française* 101. pp.26-34.

Tissier, A. (1984) Le meunier dont le diable emporte l'âme en enfer. *Farces du Moyen Âge*. Paris. Garnier-Flammarion.

朝倉季雄（2002）『新フランス文法事典』白水社

田村毅、倉方秀憲、恒川邦夫（2005）『ロワイヤル仏和中辞典 第 2 版』旺文社

川口順二（2015）「呼びかけとモダリティ」『フランス語学の最前線 3【特集】モダリティ』 ひつじ書房

川崎洋（1997）『かがやく日本語の悪態』草思社

川那部和恵（2011）『ファルスの世界　一五~一六世紀フランスにおける「陽気な組合」の世俗劇』溪水社

髭郁彦、川島浩一郎、渡邊淳也、安西記世子、小倉博行、酒井智宏（2011）『フランス語学小事典』 駿河台出版社

楊鶴（2018）「« Merde ! » の間投詞的用法に関する研究」『ロマンス語研究』第 51 号 p.11-20.

楊鶴（2020）「フランス語における Putain の間投詞的意味機能に関する考察」『ロマンス語研究』第 53 号（印刷中）

渡辺一夫（1963）『ピエール・パトラン先生』岩波文庫

渡邊淳也（2010）「フランス語および日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究・言語篇』58, pp.55-74.

文学作品

Céline, L-F. (1932) *Voyage au bout de la nuit*. Folio.

Céline, L-F. (1936) *Mort à crédit*. Denoël et Steele.

San-antonio (1970) *Ça mange pas de pain*. Fleuve noir.

オンライン辞書

Dictionnaire français　（仏仏辞典）

https://www.lalanguefrancaise.com/dictionnaire/definition/blaspheme

Trésor de la langue française informatisé（オンライン）

http://atilf.atilf.fr/

コーパス

1　書き言葉コーパス（Frantext）

Frantext は 5430 部のフランス文学作品（約 2 億 5600 万語）が収集されているフランス語書き言葉コーパスである（2019 年 12 月時点）。

Breffort, A. (1951) *Mon taxi et moi*, la corne d'or.

Céline, L-F. (1936) *Mort à crédit*, Denoël.

Férey, C. (2012) *Mapuche*, Gallimard.

Hugo, V. (1881) *Les Misérables*, Facsimile Publisher.

Gavalda, A. (2004) *Ensemble, c'est tout*, Ud-Union Distribution.

Gavalda, A. (2000) *Ceux qui savent comprendront*, Le grand livre du mois.

Gavalda, A. (2008) *La Consolante*, Le dilettante.

Gide, A. (1925) Les Faux-monnayeurs, Gallimard.

Gide, A. (1927) *Voyage au Congo*, Gallimard.

Giono, J. (1931) *Le Grand troupeau*, Folio.

Guyard, A. (2011) *La Zonzon*, Le Dilettante.

2　話し言葉コーパス

コーパス 1：ESLO (Enquête Sociolinguistique à Orléans)

ESLO は、オルレアン大学がインターネット上に公開しているフランス語話し言葉コーパスである。1968 年から 1971 年までに収集された « ESLO1 » と 2008 年から現在までに収集された « ESLO2 » に分かれている。

コーパス 2：CLAPI (Corpus de Langue Parlée en Interaction)

CLAPI は、Université Lumière Lyon 2（リヨン第 2 大学、リュミエール）を拠点とし、CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique)（フランス国立科学研究センター）に属する、Laboratoire ICAR (Interactions, Corpus, Apprentissages, Représentations)（「相互行為、コーパス、学習、表現」研究所）によって作成されたものである。

3　テレビ番組

Cauchemar à l'hôtel（ホテルの悪夢）

Cauchemar en cuisine（厨房の悪夢）

Pascal Le Grand Frère（パスカル兄貴）

SOS Ma Famille a Besoin D'aide（SOS 私の家族を助けて）

Les Simpsons, Saison 14, L'épisode 11, *Homer va le payer*

（『ザ・シンプソンズ』シーズン 14、エピソード 11、『旅立てバード』フランス語版）

4　映画

Amours et Turbulences (2013)

Comme les autres (2008)

L'aile ou la cuisse (1976)

Les chaises musicales (2015)

Les visiteurs (1993)

Nos jours heureux (2006)

Parlez-moi de la pluie (2008)

The Matrix Reloaded (2003)

Vive la France (2013)

参考資料

参考資料 1　Edouard（1967 : 305-310）によるフランス語罵倒表現の分類 第 1 区分 « L'homme »（人類）

大区分	中区分	小区分
1. L'HOMME 人類	I. Injures anatomiques 人体に関する罵倒	a. Anales et intestinales (Anus - Excrétions - Exhalaisons - Fesses - Ventre) 肛門と腸（肛門、排泄物、発散物、臀部、腹部）
		b. Génito-Urinaires (Appareil sexuel féminin - Appareil sexuel masculin - Voies urinaires) 泌尿生殖器（男性器、女性器、尿道）
		c. Céphalo-Rhino-Ophtalmologiques (Crâne - Nez - Œil - Visage) 頭・鼻・目（頭、鼻、目、顔）
	II. Apparence physique 身体的外見	a. Aspect général (Grand - Petit - Gros - Maigre - Soigné - Négligé - Beau - Laid - Contrefait) 一般的外見（大きさ、小ささ、太さ、細さ、身だしなみの良さ、だらしなさ、美しさ、醜さ、奇形）
		b. Au-dessous de 25 ans (Naïf - Insolent) 25 歳以下（純粋、生意気）
		c. De 25 à 35 ans (Pas d'injures spécifiques. Se reporter aux listes générales.) 25 歳～35 歳（特有の罵倒表現はなく、全体リストを参照）
		d. Au-dessus de 35 ans (Démodé - Sénescent) 35 歳以上（時代遅れ、老衰）
	III. Maladies et infirmités 病気と身体障害	a. Troubles de la virilité (Déficient - Impuissant) 男性的特徴障害（性的欠陥、性的無力）
		b. Affections diverses (Convalescent - moribond) 各種疾患（病み上がり、瀕死）
	IV. Tares psychiques 精神疾患	a. Aliénation mentale (Dément précoce - Dément sénile) 精神異常（早発痴呆、老年痴呆）
		b. Atrophie des facultés intellectuelles (Abruti - Idiot congénital) 知的能力の衰退（愚かさ、先天性愚鈍）

参考資料 2　Edouard（1967 : 311-317）によるフランス語罵倒表現の分類 第 2 区分 « La nature »（自然）

大区分	中区分	小区分
2. LA NATURE 自然	I. Injures zoologiques 動物に関する罵倒	a. Vertébrés (Mammifères - Oiseaux - Reptiles - Batraciens - Poissons) 脊椎動物（哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類）
		b. Invertébrés (Insectes - Arachnides - Myriapodes - Crustacés - Annélides - Mollusques - Protozoaires) 無脊椎動物（昆虫類、節足動物、多足類、甲類、環形動物、軟体動物、原生動物）
		c. Faune antédiluvienne (Dinosauriens et ancêtres des espèces actuelles - Préhominidés) 太古の動物相（恐竜と現存種の祖先、化石人類）
		d. Faune mythique (Monstres antiques - Génies et démons du moyen âge) 神話の動物相（古代怪物、精霊と中世悪魔）
	II. Injures végétales (Arbres - Graines - Herbes - Fleurs - Fruits et primeurs) 植物に関する罵倒（木、種、草、花、果物と新鮮な青果）	
	III. Injures minérales (Combustibles - Métaux - Roches - Pierres précieuses - Sels) 鉱物に関する罵倒（燃料、金属、岩、宝石、塩）	
	IV. Injures liquides (Eau) 液体に関する罵倒（水）	
	V. Injures gazeuses (Air) ガスに関する罵倒（空気）	

参考資料 3　Edouard（1967 : 319-326）によるフランス語罵倒表現の分類 第 3 区分 « La société »（社会）

大区分	中区分
3. LA SOCIÉTÉ 社会	I. Injures familiales (Ascendants - Descendants -Alliés et Collatéraux) 家族に関する罵倒（祖先、子孫、傍系親族）
	II. Injures nobiliaires (Roi - Reine - Duc - Titres divers) 貴族に関する罵倒（王、王妃、公爵、各種名称）
	III. Injures gastronomiques (Potages - Hors-d'œuvre - Entrées et Plats garnis - Légumes - Salades - Fromages - Desserts et Entremets - Épices, Fines herbes et Condiments divers - Confiseries) 美食に関する罵倒（ポタージュ、オードブル、前菜と盛り合わせ料理、野菜、サラダ、チーズ、デザートとアントルメ、香辛料・ファインハーブと各種調味料、砂糖菓子）
	IV. Injures agricoles (Hommes - Matériel - Locaux - Produits de la terre - Produits de l'élevage - Produits résiduels) 農業に関する罵倒（人物、道具、場所、農産物、畜産物、残留物）
	V. Injures ménagères (Articles de cuisine - Linge de maison - Objets de toilette - Produits d'entretien - Outillage - Meubles et literie) 家事に関する罵倒（台所用品、家庭用布類、身繕い用品、手入れ用製品、道具一式、家具と寝具）
	VI. Injures nominatives (Dames - Messieurs - Messieurs-dames) 呼称に関する罵倒（婦人、紳士、皆様）
	VII. Injures religieuses (Ciel et salut - Enfer et damnation) 宗教に関する罵倒（天国と救済、地獄と罪）
	VIII. Injures professionnelles (Alimentation - Ameublement - Bâtiment et Travaux publics - Cuirs et Peaux - Sidérurgie - Vêtement - Agriculture - Eaux et forêts - Services publics - Médecine et pharmacie - Spectacle - Personnel de maison - Artisanats divers - Secteur tertiaire) 職業に関する罵倒（食料品店、調度品、建物と公共土木事業、皮革と粗皮、製鉄業、服飾業、農業、水と森、公共サービス、医学と薬学、興行業、奉公人、各種職人、第 3 次産業）

参考資料 4　Edouard（1967 : 327-332）によるフランス語罵倒表現の分類 第 4 区分 « Les mœurs / La morale publique »（風習・公衆道徳）

大区分	中区分
4. LES MŒURS LA MORALE PUBLIQUE 風習 公衆道徳	I. Les péchés capitaux (L'orgueil - L'envie - L'avarice - La luxure - La gourmandise - La colère - La paresse) 7 つの大罪（高慢、ねたみ、物欲、色欲、貧食、憤怒、怠惰）
	II. Injures stigmatisantes (La bêtise et la crédulité - La brutalité et la violence - Le bluff et le bavardage - La faiblesse et l'indigence - La grossièreté et la trivialité - L'indiscrétion et l'importunité - L'impudicité et la dépravation - L'impulsivité - La malpropreté - La tromperie et le mensonge - Le vol et la malhonnêteté - La vertu ostentatoire - La bassesse) 汚名に関する罵倒（愚鈍と軽信、乱暴と暴力、虚言と多弁、衰弱と貧困、卑猥と下品、無礼と執拗、卑猥と堕落、衝動、不潔、欺瞞と虚言、窃盗と不正、見栄、低劣）

参考資料 5　『ピエール・パトラン先生の喜劇』の罵倒用例

下記の用例は、中世フランスの喜劇である『ピエール・パトラン先生の喜劇』のシーン 5 に見られる発話である。パトラン先生は布屋の主人を騙し、わざと布の代金を家まで取りに来させるという場面で、パトラン先生は布の代金を払いたくないため、精神錯乱状態を装い、布屋の主人に意味不明の言葉を浴びせるのである。その節々で罵りの言葉だけははっきりと分かるように叫び、罵るのである。罵りを下線で示す。

Dont viens-tu, carême prenant,

Vuacarme, liefe gode man ;

etlbelic bed igluhe golan(..).

(Lagorgette 1994：§25, Dufournet (1986：862-864)より引用)

（どこからけつかったかいな、ちんどん野郎めが？）

（まんず！なっつかしやな、旦那っさや、）

（うめえこと、知っとるなは、何冊もの本を。）

日本語訳：渡辺（1963：104）より引用

この日本語訳は、渡辺（1963：12）によれば、「本訳書は、リチャード・T・ホルブルック Richard T. Holbrook の校訂本（シャンピョン書店刊）の再版（一九五六年）によって作られた」ものである。

Lagorgette（1994：§25）は、Dufournet（1986：862-864）を引用しており、日本語訳では、渡辺（1963：12）が Holbrook（1956）を翻訳したものである。フランス語版は異なったものになっている。

参考資料 6　『地獄の悪魔に魂をもっていかれた粉屋』の罵倒用例

下記の用例は、『地獄の悪魔に魂をもっていかれた粉屋』のひとシーンである。このシーンでは、瀕死状態で寝たきりの粉屋の主人が自分の妻とその愛人が家にいることに気づき、ぶつぶつ言いながら密かに彼らを罵る発話場面である。

MUNYER："Orde vielle, putain, truande,
En faictes-vous ainsi ! Non mye,
Vecy pour moy trop grant esclandre !
Par le sainct Sang !...
Il fait semblant de se lever, et la femme vient à luy, et
fait semblant de le batre."

(Lagorgette 1994：§27, Tissier, A. (1984：l.146-149) より引用)

（粉屋）：（この淫売ばばあ、裏切り者、ろくでなし、）
（そんなことまでやるのか！なんということだ、）
（わしへの侮辱がひどすぎる！）
（こん畜生（神の血にかけて）！）
（〔彼は身を起こそうとするが、妻がやってきて殴る〕）

日本語訳：川那部（2011：190）より引用

川那部（2011：213）によれば、この日本語訳は、写本 *Farce du Meunier de qui le diable emporte l'ame en enfer*, Bibliothèque nationale, fr. 24332 (La vallière, 51) を用いており、この写本は現在、『聖マルタンの聖史劇』、『盲人とびっこのモラリテ』、『地獄の悪魔に魂をもっていかれた粉屋』の順で並べられ、*Manuscrit La Vallière* (mss. Fr. No.21332) と題する一冊に束ねられて、フランス国立図書館に保管されている。

参考資料 7　ESLO2 コーパスにおける merde の用例内訳

用法	用例数
« merde ! »　（間投詞的用法） ex：merde j'ai oublié de boire mon thé (ESLO2_ENT_1261_C) （やばい、お茶を飲むのを忘れていた）	74 例
« de la merde »　（糞だ） ex：des jeunes en général qui disent que Orléans c'est de la merde (ESLO2_ENT_1038_C) （普通は、若者がオルレアンはくそみたいな場所だとと言う）	19 例
« c'est la merde »　（糞だ） ex：on voulait faire une mini enquête pour euh le dossier mais c'est la merde (ESLO2_24H_1249_C) （レポートのために簡単なアンケートをしたかったけど、厄介で複雑なの）	10 例
« dans la merde »　（糞の中にいる→面倒な状況に置かれている） ex：(en hiver) tu peux te réchauffer alors qu'en été quand tu as chaud tu es tu es dans la merde (ESLO2_REPAS_1260_C) （冬は体を温めることができるけど、夏は暑い時はどうしようもない、本当に困る）	8 例
« N de merde »　（名詞＋merde） ex：il y avait plein de Français qui voulaient pas faire ce les tafs de merde (ESLO2_ENT_1013_C) （多くのフランス人はこのクソ仕事をしようとはしない）	7 例
« je dis merde / j'ai dit merde » ex：je dis merde j'ai mon der- dernier yaourt (ESLO2_REPAS_1247_C) （私は、やばい、最後のヨーグルトだ、と思った）	6 例
« je me dis merde / on se dit merde »　（「クソ」と思う） ex：je me dis merde mais les gens dans les urnes ils entendent rien ils voyent rien (ESLO2_ENT_1012_C) （クソ！と思って、選挙の中にいる人は何にも聞こえないし、何も見えない）	4 例

« comme une merde » （糞（クソ）みないな） ex：je suis gelée comme une merde (ESLO2_ENT_1038_C) （くそのように凍る）	2 例
« être une grosse merde » （～はとんでもないクソだ） ex：ma carte de bus je crois que j'ai perdu je suis une grosse merde (ESLO2_REPAS_1270_C) （バスの定期を失くしたみたい、私はひどいくそだ）	2 例
ex：**il peut passez des heures pou- sur le petit truc qui qui merde là et** (ESLO2_ENT_1043_C) （彼は、面倒になるような小さなことに何時間もかけられる）	1 例
ex：**elle nous a donné beaucoup de merde** (ESLO2_REPAS_1247) （彼女は私たちにたくさん厄介なことをもたらした）	1 例
ex：**genre à une merde genre Babou un truc comme ça** (ESLO2_24H_1249) （くそみないな（店）、バブーみないな、そういう感じの（店））	1 例
ex：**ça veut dire merde ou zut ou crotte** (ESLO2_REPAS_1256) （「クソ」とか、「ちぇっ」とか、「クソ」）とかという意味だよ）	1 例
ex：**c'est quoi cette merde** (ESLO2_REPAS_1260) （なんだこのクソみないなものは！）	1 例
ex：**c'est pas pour moi cette merde** (ESLO2_REPAS_1270) （いらないわ、このクソのようなもの）	1 例
ex：**espèce de grosse merde** (ESLO2_ECOLE_1291) （大バカクソ野郎！）	1 例
	計 139 例

参考資料 8　Frantext と ESLO2 の putain の用例比較

putain の用例	Frantext	ESLO2
« une putain »　（売春婦） ex. On l'avait prise pour une putain et ça, c'était interdit. （私たちは彼女を売春婦として見ていたが、それは禁じられていた）	14 例	0 例
« putain ! »　（ちくしょう） ex. putain j'ai troué mes gants quoi (ESLO2_24H_1249_C) （やばっ、手袋に穴をあけちゃったよ）	96 例	151 例
« Déterminant (un/une/ce/cette/son/sa/quel etc.) putain de N » **（限定辞＋putain de＋名詞）** ex. Tu imagines le matin on fait un putain de repas comme ça (ESLO2_REPAS_1261_C) （想像してみて、朝からこのようなひどい食事を食べるの）	58 例	7 例
« Putain de N ! » N は罵倒語 ex. Putain de bordel ! (ESLO2_ENT_1061C) （売春宿の売春宿→こん畜生くそったれ！）	5 例	3 例
« Putain de N ! » N は普通名詞 ex. Putain de portable ! (ESLO2_REPAS_1260_C) （このクソ携帯！）	5 例	3 例
« Je dis putain / je fais putain »　（putain と言う） ex. je fais putain pourquoi y a plus de ya plus de connexion (ESLO2_REPAS_1261_C) （やばい、なんで接続が切れちゃったんだよ、と私は言った）	0 例	9 例
« Je me suis dit putain… »（ちくしょう！と思って…） ex. cet aprèm j'ai eu peur là je me suis dit putain on est où là ? (ESLO2_REPAS_1261_C) （午後ヒヤッとしたよ、やばい、私たちはどこにいるんだと思ったよ）	0 例	1 例
« Il me dit putain, il lui dit putain »　（彼は私 / 彼に putain と言った） ex. je te promets deux fois il me dit putain (ESLO2_ENTJEUN_1234_C) （信じて、彼は 2 回も私に putain と言っていた。）	0 例	2 例
« putain» という語彙として Alexis était accablé et grogna un putain tout pâteux. （アレクシはすっかり参ってしまって、歯切れの悪い putain をつぶやいた）	1 例	0 例
計	179 例	176 例

参考資料 9　« une sorte de N » と « une espèce de N » の置き換え結果

表 1　« une sorte de N » から « une espèce de N » への置き換え結果

« Une sorte de N » の用例

① une sorte de dictionnaire

② une sorte de petit saladier

③ une sorte de musée

④ une sorte de révolution

⑤ une sorte de biscotte

⑥ une sorte de stage obligatoire (14)

⑦ une sorte de clown magique

⑧ une sorte de sport (13)

⑨ une sorte de magnétophone (11)

⑩ une sorte de petit diplôme

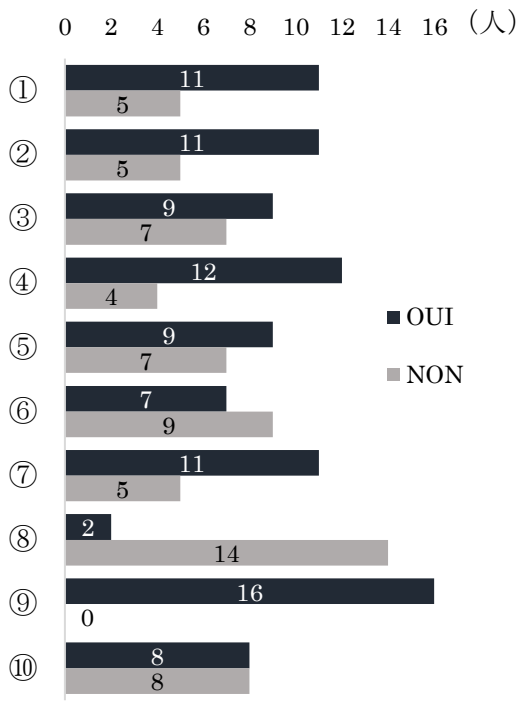


表 2　« une espèce de N » から « une sorte de N » への置き換え結果

« Une espèce de N » の用例

① une espèce de petit village artificiel (12)

② une espèce de feuille comme ça

③ une espèce de petite navette

④ une espèce de gros siège

⑤ une espèce de légende

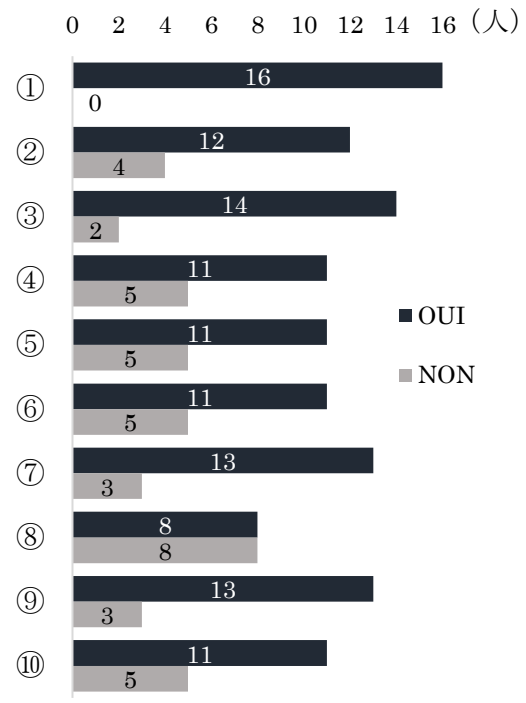
⑥ une espèce de petite place (16)

⑦ une espèce de concours

⑧ une espèce de magie (15)

⑨ une espèce de grande route

⑩ une espèce de vie commune



※　表 1、表 2 において、括弧内の数字は本文、第 6 章の用例番号を示したものである。